連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 7 No. 2

第26号

対人援助学会

NO. ２６　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	016-027
臨床社会学の方法	中村　正	028-039
ケアマネ　あの目　この目	木村　晃子	040-042
カウンセリングのお作法	中島　弘美	943-048
コミュニティ心理学を考える	藤　信子	049-051
蟷螂の斧 「次の一歩」	団　士郎	052-060
学校臨床の新展開	浦田　雅夫	061-063
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス	北村　真也	064-066
幼稚園の現場から	鶴谷　主一	067-073
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	074-078
境界あれこれ	河岸　由里子	079-082
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	083-086
日本のジェノグラム	早樫　一男	087-089
きもちは言葉をさがしている	水野　スウ	090-097
七日参り	竹中　尚文	098-102
ノーサイド　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	103-104
男は痛い！	國友　万裕	105-112
新連載　ひとこまマンガ	三嶋　あゆみ	113
援助職のリカバリー	袴田　洋子	114-116
周旋家日記	乾　明紀	117-119
トランスジェンダーをいきる	牛若　孝治	120-123
役場の対人援助論	岡崎　正明	124-128
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	129-131
電脳援助	浅田　英輔	132-137
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	138-144
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	145-150
周辺からの記憶	村本　邦子	151-168
病児保育奮闘記	大石仁美	169-172
ラホヤ通信	高垣　愉佳	173-174
知的発達障害の家族の日々	大谷　多加志	175-176
対人支援点描	小林　茂	177-179

「あ！萌え」の構造：序論	齋藤　清二	180–184
海の向こうに出てみれば	石田　佳子	185–189
清武システムズ	しすてむきよたけ	190–195
新連載二回目　SV–羅針盤のない航海	川崎　二三彦	196–199
新連載二回目　精神科医の思うこと	松村　奈奈子	200–202
新連載二回目　おくのほそみち	奥野　景子	203–209
新連載二回目　心理臨床と多文化共生	ガヴィニオ重利子	210–211
新連載二回目　今から、ここから	馬渡　徳子	212–215
東成区の昭和　思い出ほろほろメモ	柳　たかを	216–223
新連載　お坊さんとケアマネさん（書簡型連載）	木村vs竹中	224–229
編集後記	編集長＆編集員	230–231

ハチドリの器　9

見野　大介

Mino Daisuke









左上：工房前にて
右上：器いろいろ
左下：ほんのり四角のマグカップ
右下：楕円の皿

第26号 執筆者@短信

三嶋　あゆみ　新連載

はじめまして、風刺マンガの三嶋あゆみと申します。千葉晃央さんにお誘いいただき、参加させていただくことになりました。

「風刺」は、庶民のくらしの中にあると思い、共感を大事にして描いています。

経歴は、京都精華大学で風刺マンガを専攻し、現在は印刷デザインの仕事をしながら、年2回のグループ展で新作発表するペースで制作しています。

このような先端の場で学ばせていただけることをありがたく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ブログ：http://fooshi.exblog.jp/

松村奈奈子

総合病院に勤めていた頃は、時間に追われる毎日で、学会と言えば一般の精神科医が参加するものに参加するのがやっとでした。

退職後は嘱託医の仕事が中心で時間に余裕ができたので、勤務医時代に気になっていた精神科ではちょっと脇道的な分野の学会に出かけて、なるほどなるほど…を繰り返している日々です。

さらに、もともと旅がすきで、地方のまちを訪れて“まちの個性”を感じながらふらふら歩くのが楽しみです。小さいまちながら文化が豊かなまちもあれば、久しぶりに訪ねると立派な箱ものだけが残ったさみしくなったまちも…想像していたイメージとのギャップの発見も面白いのです。

学会を理由に、旅にでるのが楽しみです。先日の学会は福岡でした。博多の繁華街にある市営地下鉄“天神南駅”の広告看板のひとつに目が留まり、びっくりしました。

“里親”にはいろんな意見があるとは思います。でも、実親と生活できない子ども達からは“里親さんとこに住みたい”とよく聞きます。そして、里親さんが足りない…というのも事実です。

学会での話からも、福岡の“児童虐待”に対する多職種間の対応の手厚さに、驚きました。

そして！博多の繁華街、天神南の駅にこの駅看板…こんなの、我がまち京都にあってもいいかなと私は思いました。



ガヴィニオ重利子

休み明けブルーに見舞われているガヴィニオです。2ヶ月間という長い夏休みを経て、今週から子ども達の学校やら自分の仕事やらが再開しました。

この2ヶ月という長い夏休み。欧州では会社勤めの人も3週間ほどの休みをとることが一般的で、バカンスと呼ばれる長い旅行に出ることが習慣のようになっています。この時期、バスの中やスーパーの立ち話でも多くの人がバカンスの思い出話に花を咲かせていて、これから始まる仕事の日々に人々は憂鬱な顔を隠そうともしません。その話に耳を澄ましていると「（頭の中が）真っ白になれてよかった」とか「ちょっと（今の生活から）離れてみられてリフレッシュした」など、別世界へトリップしてきた的な感想が多いことに興味惹かれます。

普段の生活から少し離れる時間をつくることで、日常ではしないような考え事や普段は気にかけていなかった子どもの様子に気づく機会が増えるなーと、私自身この長期休暇を体験するようになって感じています。ちょっと別世界に行くことで自分の普段の生活を俯瞰するような体験をしているのかもしれません。

というわけで、今回は子ども達と過ごした長い夏休みを通して考えさせられたことを記事として投稿させていただきました。良かったらぜひ読んでみてください。

奥野景子

今回の短信では、小学生の時の七夕の思い出について書こうと思っていた。いや、その思い出を軸にずいぶん前に短信を書き終えていた。でも、それを書き終えてから色々なことがあった。面倒だなと思うこともあったが、そんなことでさえ私に大切なことを気が付かせてくれた。

七夕の思い出では、それについて書きたかった訳ではなく、その話を通して今まで伝えられなかったことを言いたかった。だから、それだけ書いておこうと思う。「〇〇〇ちゃん、七夕の少し前に笹の木を持ってきてくれるの嬉しかったよ。ありがとう。大人になってから七夕が近づくとあの頃のことを思い出します。ありがとう」

続いて、最近できた書きたかったことについて。ある研修会での出来事。「訪問するということは、患者さんの世界にゲストとして家に招かれることになります。また、その人の人となりにさらされ、どんな文脈で日々の生活を送っているのかに触れられる機会にもなります」と通訳の人が言った。訪問看護を行なう人の質問に対する回答の一部がこれだった。‘あぁーーーー、そーですよね！！’と思う一方で‘患者さんっていう言い方は、あんまり好きじゃな

いけど…’と思っていた。

色々な人やもの、ことが、色々な方向から、色々な姿、かたちで、思いもよらないことを私に伝えてくれている。今わからないことでも、いつかわかるのかもしれないし、気が付いたらわかるようになっているのかもしれない。今気になっていることでも、いつかどうでも良くなっていることもあるのだろう。まぁ、いろんなことがあり、いろんなことを考えた数か月だった。

馬渡徳子

「生きていると、良いことがあるなあ。」今年の夏は、そう、実感できる事がありました。

七月の全国的な「ソーシャルワーカーデイ」企画を、地元でも社会福祉士会、精神保健福祉士会、医療ソーシャルワーカー協会の三団体共催で実施することができたのです。企画では、各団体の会長よりの活動報告と、若手三人のソーシャルワーカーが、「意思決定支援」をテーマに実践を語り、たっぷりと交流しました。

ここ数年、地元でも多職種連携企画が進み、それはとても面白い出逢いが度々ありましたが、この度のソーシャルワーカーだけでの企画が、「逆に」新鮮で、 その日の朝夕に、ちょっとスピリチュアルな体験をしました。

季節外れの　アゲハ蝶
朝夕と、肩にとまりて
じっと我れを見る

一周忌を終えたばかりの義父が
「よしよし」と声をかけてくれている
ような気がした。

柳　たかを

「東成区の昭和・思い出ほろほろメモ」も 3 回の掲載で 42 話まで進みました。内容は作者の子供時代の記憶をふくらませ、いわゆるオチのある 4 コママンガとは違うストーリーマンガのような 4 コマ形式のマンガで綴ったものです。

誰もが持つ両親、兄弟、祖父母、おじさんおばさんらとの思い出、むかし上京した折、東京銀座の名画座で見た小津映画「東京物語」や「晩春」のしみじみした感動の記憶にも影響を受けていると思います。

この後も、少しずつシーンを変えて続くのですが、ここで突然ですが、別シリーズのコミックマンガを 8 回の予定ではさませていただきたく思います。

これは物のなかった昭和 30 年頃の子供遊びをテーマにしたもので、「トンボ釣り(捕り)」の話です。

トンボ捕りとは違いますが、昭和 32 年の 8 歳の時、夏休みに帰省した和歌山県の田舎で小魚やウナギを罠で捕る仕掛け漁を体験しました。

夜中に松明(たいまつ・初めて本物を見ました)の明かりで大人の膝下くらいの水深の川面を照らしながら、水中のコーナーに竹筒の罠を一本ずつ沈め大きめの川石を上から重しにのせます。

罠の竹筒は、一方にウナギが入れる竹串で編んだ入り口があり、奥に進むほど狭くなるロート状になっています。ウナギは一度入ると出れなくなる。

竹串の奥にウナギの好物(ミミズだったと思う)を団子にして仕掛けます。

罠を仕掛けてはジャブジャブ進むおじさん(父の兄)のあとをついて歩きました。

翌日、水から引き上げた何本かの竹筒から太いウナギがゾロゾロ出てきたのを見てビックリしたものです。当然、その晩はアツアツの蒲焼きを夕食にいただきました。



そんな自然を相手にした思い出を描いたマンガを掲載したいと思いました。

齋藤　清二

あっという間に前期が終わった。総合心理学部の一年生達は、それなりに自分自身がその中に住み込んでいるところの新しい世界を日々自分のまわりに創りだしている。部分的にとはいえ、その行程に付きそうことができることは楽しいことである。応用人間科学研究科のほうも私自身 2 年目に入り、ようやく全体の動きや自分自身の立ち位置が少し読めるようになってきた。公認心理師のカリキュラムも今年度中には公開されるだろう。色々なことが移り変わっていくが、だんだんに短期記憶能力が減退し、刹那刹那に明滅する今ここだけに住むようになっていくことは、限られた生命をやりくりしていく身にとってはたぶん良いことなのだろうと思う。

石田　佳子

今回は、海外に住む日本人には看過できない問題として迫ってくる、日本人“村”社会について考えてみました。マレーシアに限らず海外で暮らすことについては、そのポジティブな面ばかりが取り上げられて脚光を浴びがちであるため、まるで楽園であるかのような幻想を煽ってしまいかねません。しかし、何事にも光の面だけではなく影の面があり、その両方を知ってこそ全体像が見えて来るとの思いから、あえてその影の面について多く書きました。

今思うと、私自身も光の面を拡大視して都合の良い夢を想い描いていたのかもしれません。マレーシアで暮らし始める前には、(他国と比べて、退職後に移り住む夫婦が多い)日本人コミュニティの良い面しか目に入らず、多くの先輩(年長の)方と知り合うことでこれから直面する『老いること』についてのヒントや手本が得られるかもしれないと喜んでいたのですから。

もちろん、マレーシアに来たお陰で知り合うことができた日本人の中には、「素敵な年のとり方をしているなぁ」と感服させられる年長者もいました。その人たちはおしなべて、人間関係における境界の保ち方が見事でした。具体的には、助けを求めた時にはしっかり手を差し伸べてくれるけれど、そうでない時には余計な口出しをせず、放っておいてくれる余裕があります。そしてまた、「自分もここへ来た当初は多くの先輩方にお世話になった。その相手に恩を返すことはできなかったけれど、代わりに今、新しく来た人の役に立てれば良いと思う。感謝してくれるなら、いつか余力が持てた時、あなたも同じように(私にで

はなく別の助けが必要な人に）尽くして欲しい」と言うのでした。

一方、失礼ながら「反面教師にしよう」と感じてしまう年長者もいました。彼らは人間関係における境界が不確かか存在しないかのようで、相手にも意見や好みがあること、自らの（“～べき”という）規範が狭い集団内でしか通用しない偏ったものであるかもしれないことには、気づかないようでした。具体的には、「皆そうだから（同じくするのが当たり前）！」とか「それが（日本人の）常識でしょう？」などという決まり文句で強引に人を動かそうとします。また、最初のうちは親切ですが、いずれ必ず“お返し”を求めて来ます。「今までお世話をしてあげたのだから、今度はあなたが私のお世話をしてね！」と言われるのはまだ序の口で、「俺の子分になれ！」と言われた人さえいるという話です。（笑）

最近では、人から何かしてもらっても「当たり前」と捉えて“お返し”など考えもしない、ちゃっかりした人が増えているといった噂話も耳にします。私の感覚では、お世話になったら恩義を感じるのが「当たり前」ですが、そもそも“お返し”というのは自発的な感謝の表現であるはずで、強制されて行う義務ではないと思います。

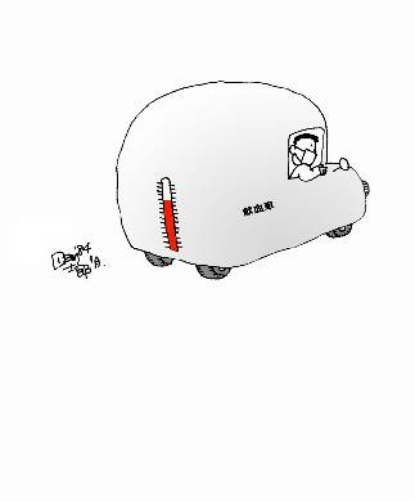
また、「空気を読む」とか「察する」ことを美徳のように考える日本人には、「言葉にしなくても、わかりあえる」関係が理想なのかもしれません。しかし実際には、相手の意思を確認せず（自分の意思を伝えず）に、「わかったつもり」になっているだけのことも多いと思います。結局、相手が日本人であろうとなかろうと、親しい間柄になっても、人の意思や自由を尊重すること、適切な自己主張をして被害者にならないことが、大切なのではないかと考える昨今であります。

しすてむ♪きよたけ

東京・江東区北砂!!僕が暮らしているアジト（シャアハウス）住人募集中！

東京に拠点が欲しい方、1 名様限定で入居可能！月々、初月 6 万、以降 4.5 万円/月（光熱費込）。

NG の方は、パーティー好きの方。その他、NG はございません。是非、080-4116-7443（清武）まで電話してネ！



最近、団遊さんにお時間頂き、清武システムズ（僕の会社？看板？）と他の組織・チームいわいる社会システムとの関与のあり方について、相談させていただきました。というのも、「僕はあちこちに行きたい」、「一つの機関に所属をしたくない」という性質があるのですが、その仕組みを考えることを 1 年ほど忘れていたのでした。

考える始まりは「失恋」。金沢で「ヒモ」をしていたのですが、ぷつりと切れ、今手元にある、仕事とネットワークを見つめ始めたのでした。失恋して慌てたってとこですね。

清武システムズは、今居るところと、そこから繋がっていくネットワークがあったり、無くなったりしていました。だから、今、ここに、あるを大切にしようと思ったのでした。これは、そもそも好んでいた動きだったと気付きました。

さらに、もう一つの気づきがありました。清武システムズが何を行っているのか。遊さんと話している最中のことでした。場においてもらい、何かに反応し動き始める。それを通して、現場で何が起きているのかを整理し、また、動き始めていました。

この 1 年数ヶ月を振り返ると、給与も上がりました。組織が、検討し何らか動いて下さった結果でした。下がったものもありましたが、他者の人生の分岐点により、僕が担わない仕事が出たというだけでした。

まだまだ、何をしているのかわかっていない、清シスですが、今あることから一歩ずつ進み、結果として何をしてきたのか、自分でわかる日が来るといいなーと思っています。が！清シス利用者の方の声も集めさせて頂きたい次第です。ご協力お願いします。

あ、失恋数ヶ月後の今、彼女ができました。タイミングが良かっただけだと思うけど、完全にコロコロ彼女が変わっていて遊び人的な印象が出てしまうかも？もう、恋愛や色恋ごとからコミュニケーションとコミュニティーについて話し始めるんじゃないかと思ってきた、今日この頃です。

主な所在は、金沢と東京。9 月から、東北 4 県へ。東日本・家族応援プロジェクトで行われる、家族漫画展のアテンドとして、行きます。パネルと冊子と場と仲良く戯れたいと思います。

小林茂

あくまで北海道基準ですが、まだまだ暑い日が続いております。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

私は、7月半ばから8月半ばまで過密スケジュールとなり、またもや車での移動が続きました。自宅でゆっくりする暇もなく毎日が過ぎました。ようやく一息ついたと思ったら、珍しく日高地方に大雨と台風が続き、こちらも過密気味。いろいろ物事は、続くときは続くものだなぁ、と感じています。

さて、『対人援助マガジン』の連載を始めて、どこか自分に満足できないでいました。何故かと自問したら、“遊び”がないことに気づきました。そんなこともあり、短信のコーナーで遊ぼうという考えになりました。次回から（もしかして、短信ではなく、いつか本論にしてしまいそうな誘惑にかられながら…）私の温泉訪問記をしようと思います。北海道を中心に温泉レポートに励みたいと思います。

水野スウ

ちょうど一週間前、パソコンが急に動かなくなりました。パソコンを入院させて、その翌日から私は、広島と岡山へ出前の旅。スマートフォンを持たない私なので、旅している間はいつもアナログな時間を過ごします。

石川に戻って、入院中のパソコンに会い

に行くと、いよいよもう二度と起きあがれないくらい弱ってるようだ、とお店の人。

だったらいっそこのままアナログな日々を送ろうか、なんてこと、マバタキの一瞬くらい脳裏をかすめはしたけど、いやいや、まだまだ手放せないなあ、伝えたいことたくさんあるし、広めたいこといっぱいあるし、メールやフェイスブックで知りあった人たちとも、この先おおいにつながっていきたいし、新聞やテレビがすでに報道しなくなったあれやこれやを、一人ひとりの市民メディアが知らせようとしてくれているのだし、と考えた挙句、この不思議な薄い板のようなものは、やっぱり今の私にとって必要な、暮らしの中の道具なのだ、と逆に実感しました。

とはいえ、私は機械にからきし弱くて、とりセツ読むのも超苦手。急遽、娘に SOS 出して助けにきてもらい、新しいパソコンを買うところから、立ちあげて動くようになるまで、すっかり子どものように面倒見てもらいました。

そもそもこんなことでもないとめったに帰らない、娘の 1 年ぶりの帰省。おかげでマガジン原稿も、ギリギリセーフで締め切りに間にあいましたっ！

高垣愉佳

2 年以上に渡ってお付き合いいただきました、ラホヤ村通信は今回が最終回です。丁度今月、アメリカでお世話になったチューターさんが日本へ遊びに来てくださいました。京都、奈良、広島、東京と一緒に観光してまわりました。

次号からは精神科訪問看護日記「おじゃまします」の連載をスタート予定です。次の連載も keep in touch! お付き合い願えれば幸いです。

浦田雅夫

京都三条にある児童養護施設退所者のための居場所。月に一度は昼食会。手作りの料理を食べて、またちょっと頑張れる。そんな人たちが集っています。詳しくは、facebook Minuet Kyotoaftercare まで。

早樫一男

今年の夏、京都の祇園祭の巡行に関与することになりました。袴を身に着けて、函谷鉾（かんこほこ）の前を歩くお供の役割です。出発は9時ですが2時間前ぐらいから袴の着付けが始まり、巡行が終わり、役割を終えたのは１３時前でした。4時間近く、京都市内を歩くので、熱中症や体力を心配していましたが、その点は大丈夫でした。しかし、初めて身に着けた袴の着付けがかなりしっかりしていたので、時間が経過するほど、腰の締め付けが辛くなり、とても堪えました。とはいえ、大役を果たしたという充実感や達成感があり、機会があれば、もう一度、歩いてもいいかと思っています。



中島弘美

家族カウンセリングをしている中島です。

批判的な発言をする子どもや、親代わりの行動をする(とと姉ちゃんのような)子どもは、しっかりしているように見られがちですが、やはり子どもは子どもなので、両親や周りにいる大人の手助けが必要です。と、いう内容の小文を児童心理 2016 年 10 月号臨時増刊「小学五六年生の家庭教育」金子書房『思春期の入り口にある子どもたち 親に批判的になる～家族カウンセリングの立場から～』の題で書かせていただきました。

ここでは、家族療法構造派のミニューチンが説明する、境界(バウンダリー)の概念についても触れました。バウンダリーの考え方は、家族全体の理解だけでなく、他者との適度な距離の在り方についても、認識を深めることができ、特に日本人に多いとされている対人恐怖症の治療に有効な視点と考えられています。今後、連載『カウンセリングのお作法』でも取り上げたいと思っています。

藤信子

今年が猛暑だということを誰かとの挨拶の度にしている。猛暑に加え、歳を取ったので、あまりたくさんの仕事は出来なくなったと、断っている。あと半年、集団精神療法学会の編集委員長としての仕事が結構あるが、その後は少し頼まれることを減らして、自分の楽しみに使いたいと思っている。やりたいことがいくつかあって、そのことを考えて一人でニコニコしている。したいことをするためには、ちょっと体を鍛えなければとも思う。だから、毎日自分の事で忙しい。

中村周平

先日、車いすごと後方に転倒するアクシデントが起きました。すぐに救急車で最寄りの病院に搬送してもらい、CT による撮影。幸いにも打撲ということで事なきを得ました。ただ、かなりの速度で転倒したために脳震盪を起こしていたようでして、めまいや PC 画面を見ると不快感が出るなどの症状に悩まされました。転倒から一か月ほど経とうとしていますが、完治には至っていないのが現状です。研究で脳震盪のことは人並み以上にはわかっていたつもりでしたが、本当に「つもり」だったみたいです。脳震盪の恐さを実感した今日この頃した。

浅田英輔

職場でいろいろな便利システムを作るのがすきです。主に Excel を使って、いくつかの必要項目を打ち込めば、勝手に計算したり入力したりしてくれるようにします。ウェクスラー式の知能検査は、数値を出すのがどんどん面倒になっていっている印象がありますね。毎回同じ本のデータを調べて書き込むという手間は、私は無駄だと思っています。その無駄を省き、生年月日と検査日と粗点を入れると結果が出るような便利システムです。一度使うと手放せなくなります。5 年も前でしょうか。

Twitter で知り合った人から「WAIS も作ってよ」と頼まれました。プログラム部分は大したことをしていないのですぐできるのですが、一番大変なのはデータ入力です。あのテキストに書かれている数値を全て打ち込まなければならないのです。「データ入力やるなら作ってもいいよ」と答えました。ファイルのやり取りをするのはもちろん簡単ですし、Twitter を介して、共同で WAIS 自動計算システムが出来上がってしまったのです！すごいね！インターネット！

中村正

この夏は刑務所からでた後のやり直しの人生を聞くという調査をしていた。主要には地域生活定着という概念で対人援助の重要な領域を成しつつあるので、そのニーズを探るために、まずは本人たちの出所後の生活の詳細を語ってもらい、そこにある社会臨床的なテーマを洗い出す計画である。それはとてもユニークなインタビューとなった。本人しかなし得ない犯罪からのやり直しの軌跡である。もちろん帰住先のある人はそこに帰るのだが、帰る先のないひとたちのその後の人生は確かに波瀾万丈であった。分かりやすいニーズは出所の曜日と時間である。できれば月曜の朝一番にして欲しいこと、連休の前や金曜日は止めてほしいこと、なぜなら出所後に公的機関にいく必要があり、生活と住居の段取りをとりたいからだという。何年か先の出所の日は決まっている。しかしその曜日まで教えてほしいという。さらに地方の刑務所から出る場合は、土地に詳しくないので、最寄りの駅までの地図や交通機関の案内くらいは欲しいという。こうして、当面の住まい探しや職をえるまでの苦労の話がたくさんだされた。こうした詳細に社会の様子が詰まっている。いろんなことがみえてくる。実に面白い。出所者にできれば刑務所のなかで配布したいと思って冊子をつくる予定である。社会でのやり直しがきかずに再び戻る人もいるし、そうなると刑務所が暮らしやすくなり、「自由はないけど不自由でもない」となっていく。語源からすると「しゃば」は苦界でもある。更生をどう支えるか、考えさせられる調査はまだまだ続く。

牛若孝治

自分の中の『残虐性』にも気づいてください。相模原市で起きた障害者大量殺傷事件。テレビの報道によれば、戦後最大で最悪の大量殺傷事件である、と言っている。そして、この手の事件が起きる度に、精神科医やその他の専門化と証する人たちが、いろいろとコメントしている。

一方、巷では、大量殺傷事件を起こした犯人に対する轟々たる批難を浴びせている。確かに、この犯人の起こした事件は、私にとってもショッキングであり、犯人への怒りと悲しみを禁じえない。その一方で私は、この手の事件が起きる度に、「自分の中の残虐性」にも気づかされる。つまり、「残虐性」というのは、この犯人だけではなく、人間であれば誰しもが多少とも持っている。その「自分の中の残虐性」が出たときに、いつだって殺人の加害者になりうる。だから、殺人事件と言うのは、決して人事ではなく、いつもいつも自分と関わっている。そういう意識が、この社会の人たちにどれだけ根付いているか。残念だが、こうした殺人事件が起きる度に、自分を被害者として位置づけ、ただただ加害者を批難したり、被害者に同情するだけで終わっているような気がしてならない。そこで私は言う。「今、この犯人を批難しているそこのあなた、自分の中の『残虐性』にも気づいてください」。

袴田洋子

先月に引き続き、「アラフィフ夫婦」のどうしようもない日々を綴りました。仕事は順調です。自分の事務所で忙しく、充実した日々を送っています。それと対照的に自分の私生活の幸福度はどうなのだろうとまじめに考えている日々です。あまり考えすぎるとよくないだろうことはわかっているので、「感謝の気持ちを忘れずに」を念仏のように唱えるわけです。ああ、本当に「家族で居るには努力が要る」って、すごい言語化です。

団遊

本稿に手が回らず、著者短信のみの参加となってしまいました。年々「書く」ことへの頭の切り替えができにくくなっているような気がします。

先日、年齢がばらばらなメンバー6 人ほどで話をしているときに、「最近の若い子はよく飲みに行く」という話になりました。仕事の後の「飲みに行こうぜ～」や、何がなくても「ちょっと一杯行こうぜ～」が増えたというのです。実際にぼくも自社の若いメンバーたちを見て同じ印象を持っていたので、それは何故かと考えました。

そして思ったのは、縦横のつながりを求める人が増えたから、煽りも含め社会不安を自分ごとに感じる人が増えたから、つまり、助け合って乗り切ろうと考える若い子が増えたからではないでしょうか。

ちなみに 40 歳過ぎのぼくは、周りも含め「飲み会なんて、社員会なんて、横のつながりなんて、いる？」という世代です。でも、もうひとつ上に行くと、「飲んでなんぼ」な世代があります。「互助」で乗り切る必要性があった時代から、やがて豊かさとともに、何でも自己完結（とアウトソース）できる時代が来て、また「互助」で乗り切るしかない時代に差し掛かっている。そう考えるのは、飛躍し過ぎでしょうか。

大石仁美



またまたワンちゃんのお話を。

ワンが一歳三か月になったある日、人間でいえば17～18 歳の生意気盛りの頃、突然反抗期らしきものが始まりました。お散歩から帰ると、雑巾で足を拭いてから室内に入るのですが、「足！」と言うと前足を交互に出し「うしろ！」と言うと、後ろ足をひょいと持ち上げて拭かせてくれていたのですが、濡れた雑巾を見た途端、「おれ、寝そべっているから、勝手にふけや！」とあられもない恰好で、面倒くさそうに足を出すのです。なんと横着な！同時にハンストもやり始めました。空腹のくせ

に食べないのです。理由は明らかです。ドッグフードの上のトッピングが気に入らないのです。

「なんだこりゃぁ。また生野菜か。おれは鳥じゃないんだから。肉か魚、卵焼きでもいいぜ。美味しいものをくれ！」彼は横目でチラリと茶碗をみて、「ふん」という顔をして無視します。「そっちがその気なら我慢比べだ。やらないぞ。今日はこれしかないんだ。我儘は許さないからな。」

そして一時間、二時間と過ぎていき、私は出勤。昼休みになって、さすがに彼も空腹に耐えられず、食べたであろうと家に帰ってのぞいてみると、出勤するときのままの状態でじっと座っているのです。「おい、いい加減にしろよ。」顔を覗き込むと、哀願するような目でコチラを見ます。「わかった、わかった。負けたよ」

肉を少しばかりフードに混ぜると、「かあちゃん、やっぱり話わかるぅ。」とにじり寄ってきて、食べ始め、生野菜もぺろりと完食。負けました。

「そういう時は取り上げなさい。一回二回食べなくてもどうってことありません。」と、トレーナー。分かっているけど、ああ、かあちゃんはダメだ。甘いなぁ～

でもね、可愛いでしょ！！

人も動物も、同じ時間を共に生きているっていうのがなんとも心地良いんです。

村本邦子

この夏ひと月を台湾で過ごした。出発前、かなりの数の台湾映画を観て、歴史の本を読んだ。興味津々で台湾を回ったが、いろいろありすぎて、とても語り尽くせない。

たとえば、私にとっての台湾は温泉であるとする。台北近くの北投温泉は、加賀屋を初め高級旅館が並んでいて、日帰り温泉でも結構高い。最初はその値段に馴れなくて、安いところを探したら、なんとびっくりコンビニに温泉があるのを見つけた。脱衣スペースもなく、ザブーンとお湯に浸かったら、あふれ出たお湯で、隅に置いてあった靴やら着替えやらがプカ～ンと浮いて流された（きっと想像できる人は誰もいないと思う・・・）。でも、コツをつかむと快適だ。

そうこうするうちに値段の高さにも少し慣れてきて、「少師禅園」という高台にある絶景温泉に行ってみた。看板の説明書きを見ると、第二次世界大戦末期、神風特攻隊の接待所として使用されていたとある。特攻隊については、そこそこ詳しいつもりでいたが、台湾に特攻隊があったことは知らなかった。調べてみると、台湾には4つの特攻隊基地があった。当時は日本人だった台湾人たちが逝ったのだ。もう少しで特攻隊の生き残りの方とも会えそうだったが、時間が足りず残念だった。

たとえば、私にとっての台湾はかき氷だとする。台南の有名なフルーツ氷屋さんを目指すと、クラッシックな洒落たビルディングがあって、近づいてみると、「愛国婦人会館」の看板がかかっている。一瞬ギョッとするが、戦時中、台湾に愛国婦人会の活動があったことは知っていた。台南の古跡に指定され、以前は図書館として使用されていたが、現在はイベントスペースになっているそうだ。ちなみに、氷屋さんのトイレを利用すべく2階に足を踏み入れると、「愛国婦人会館」の昔の写真がたくさんある。

台湾にいると、どこへ行ってもこういうことと出会う。「慰安婦」の支援をしている団体を訪問したが、レトロな問屋街で有名な迪化街におしゃれなミュージアムが間もなくオープンするそうだ。もうこれ以上書かないことにするが、私たちはもっともっと台湾のことを知る方がいいと思う。とりあえずのお勧め映画は、「セデック・バレ」「モンガに散る」「GF・BF」「海角7号/君想う国境の南」「言えない秘密」、歴史本では、周婉　窈『台湾の歴史』など。



セデック・バレ

國友万裕

原稿を提出してからすぐに、原稿の中に書いたかつての教え子から Instagram のリクエスト承認が届きました。しばらく返事がこなくて心配していたので、うれしかったです。

その後、彼と同じく1年半前に卒業した教え子から突然メッセージが来て、「だいぶ仕事が落ち着いてきたから一緒に飯行きませんか」というお誘いでした。さらに、もう一人、3年ほど前に教えていた子のFacebookを見つけて友達リクエストを送ったところ間髪を入れずに承認が来て、一緒に飯に行くことが決まりました。うれしいですよね。自分のお父さんくらいの年の人とつきあうのはウザいと思う若い人が多いと思うんだけど、こんなたくさんの若い男性がぼくと飯行ってもいいと思ってくれている。

このところ、ぼくは開き直って、Facebookの承認の幅も広げてしまったので、次々に誘いが来てお金が困るくらいです。しかし、若い頃に友達がいなくて、ぼっち君だったぼくにはいま遅れてきた青春が夢のようです。人間の人生って本当に不思議。運命の力っていうのは確実に存在するんだなあ。若いときの埋め合わせを運命の神様がしてくれているみたいです。運命に感謝したいと思います。

北村真也

認定フリースクール「アウラの森　知誠館」代表。（http://tiseikan.com）

今回から始めるのは、不登校経験を持った若者たちのキャリア形成をテーマにしたものです。みなさんさん、よろしくお願いします。

古川秀明

新しい CD ができて本当によかったです。是非大勢のみなさんに聴いて欲しいです。団先生のイラストも素敵ですよ。黒猫フィナンシェを白抜きで表現されるのには脱帽でした。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしつつ、いろんなかたちで学生支援をさせていただいています。

相模原の障害者施設での殺人事件。授業でも取り上げ、皆で話をしました。

こういう事を授業でとり上げる時にいつも気を付けたいなと思うのは「社会福祉的には不正解だけど、今の社会情勢的にはこっちの方が正解でしょ」「教科書ではこう書いてあるけど、本音では、そううまくいかないでしょ」という発言を大事にすることです。「こういうのは間違えている」「そういうのは福祉的におかしい」「社会の方を変えていかなきゃ」と言うのは簡単だけれど、ファーストインプレッションで感じたことを素直に言える雰囲気を大事にしたいと思っています。学生も、私の授業を半年も受ければ大体わかってきて、好き勝手に言い放題。特に今年の新入生は自己主張が激しくて、えらく授業時間を使ってしまいました。

こういうことをするから、予定通りに授業が進まず、期末に困ることになるのですが、伝えたい事は伝わっているので、まぁ、よしとします。

坂口伊都

8月20日に京都国際社会福祉センターの社会福祉講座「家族という発達の場を支える実践」の一つとして「子どもとの信頼関係の築き方～中途養育・養育里親の可能性～」というお題で話す機会をいただきました。これまでに児童虐待というような内容で話すことはありましたが、自分の家族の日常を2時間半も話したりしないですよね。時間が長いので、里親制度や社会的養護の現状についても話しましたが、実際に資料を作ったりする中で自分自身が何を語ろうとしているのか、どんな風に語り始めるのかを知るいい機会になりました。

里親委託からちょうど 1 年、まだまだ日常的に揺れている最中です。実際に話し始めると、自分がしんどいと感じている部分が表面上に現れる感じがしました。同じ話でも、もう少し違う視点、言い回しもできると感じました。きっと、これが半年後だったら、また違う語りになるのだと思います。話をしながら、第三者的に自身を振り返る作業をして、これからどうしていこうかアイデアが沸いてきました。これもなかなか不思議な体験です。確かに養育里親はしんどいことも沢山ありますが、知恵を持って取り組んでいけば、何かが見えてきそうな気がしています。どうせするなら、意地でも楽しみたいです(笑)そう言っている間はもがいているのですね、きっと。

河岸由里子

北海道　かうんせりんぐるうむ
かかし　主宰

北海道なのに、今年の夏はやけに蒸し暑い。家にクーラーがついているが、今まで殆どつける事は無かった。しかし今年は毎日つけている。ドライだけの時もあるが、冷房にしないと涼しくない。夜は流石に窓を開ければ涼しく眠れるので、夏バテする程ではない。早く涼しくなって欲しいが、北海道は涼しくなったと思ったらすぐ冬が来る。それもちょっと・・・と思う。



さて、前回まで書き続けていた「先人の知恵から」は、しばらくお休みし、今回から新しい連載にした。というのも、「先人の知恵から」は 13 回まで来ていてまだ、あ行しか終わっていないことに気付きこの調子で書いていたら、いつまでも終わらないことに思い至ったからである。ただ、中途半端は嫌いなので、又いずれ書き始めるとは思う。(笑)

今回から「境界」のことについて、あれこれ思うことを書いてみようと思う。興味があったら読んでみて欲しい。

岡崎正明

もともと涙が出ないタイプだ。

幼い頃はそのせいで「自分は冷たい人間なのでは」と気にしたことも。泣いている人が励まされるのを見て、羨ましく感じたことも 1 度ではない。感情を爆発させてオイオイと泣く。そんなことができたのは、いつが最後だったろうか。

そんな私もここ最近、明らかに以前と比べてウルウルしやすくなったと感じる。さすがに涙がほほを伝う…まではいかないが、感動の場面に出会うと鼻の奥から目頭にかけてヅーンとしたものが走り、目が潤うのを感じる。たいてい自分のことでは無い。テレビや映画などの出来事。リオ五輪なんて、分かりやすいほど反応してしまった。「あの愛ちゃんがねぇ～」とか。ほとんど親戚のおばちゃん状態。

歳を重ねると涙もろくなる、とは言うが、その理由としては「脳の機能変質・低下」とか「共感性の成熟」が有力らしい。個人的には後者により納得がいく。様々な経験を自らがすることで、人は相手の立場に立って考えることができるようになる。なるほど。経験がない子どもが恋愛小説を読んでも、ピンとこないのは当然。子どもの方が縛られない創造的な想像力(ややこしいな…)は豊かな気がするが、相手の気持ちに思いを馳せたり、共感・追体験したりする力は、経験を得て高まるのだろう。

そういえば以前から不思議だったのが、満開の桜や紅葉する山を見て「きれいだなあ」と感じる感覚。あれも幼い頃より、今の方が断然感動できる。「毎年見るのだから、年が経てば経つほど飽きてくるのが道理では」と思っていたが、ひとつの風景に様々な経験を重ね合わせて想いを馳せ、人は感動するのだろう。ただ景色を見ているだけではないのだ。

年を取ることは感動が増えること。そう思うと、なんだか楽しみな気もする。私の涙腺が決壊し、オイオイ泣ける日が来るのも、そう遠くない。

buimen0412@yahoo.co.jp

千葉晃央

車で秋田から京都へ帰省をした。片道830キロ。全行程を1日で完走。ドライバーは私一人。もう何度目かわからない。その行程を振り返る。

朝4:00出発。◆京都～敦賀インター◆:自宅から向かうのはまず大原。このあたりでの渋滞ポイントは名神高速の京都南インター、京都東インター、大津インターのあたり。帰省の時期では慢性の渋滞。だから乗らない。大原から途中峠を越えて、滋賀に入る。無料になった湖西道路に入り終点まで北上。地道に出ても更に北上で敦賀まで。敦賀手前のあたりには

大型トラックも多くカーブも多いので運転注意。さびれたスキー場が印象的な景色。湖西からみる琵琶湖、特に白髭神社の湖に浮かぶ鳥居の景色が日の出と重なり美しい。



◆敦賀インター～北陸道・新潟◆：北陸道で福井から石川には直線の箇所が多く、スピードの出しすぎ注意。アクセルの踏みっぱなしの足が負担なので、態勢をかえて足を休ませながら運転。左手に日本海が広がり美しい。時間があると徳光ハイウェイオアシスで休憩をして砂浜まで行き、波打ち際で遊ぶことができるが今回はスルー。金沢、富山のあたりでは交通量が増加することが多い。しかし北陸道は基本的に渋滞はめったに起こらない。起こるのは事故渋滞がほとんど。以前あった旧美川町の「美川　県一の町」の看板が印象的だったが現在はない。新潟に入ると大きな2つのスタジアム（新潟野球場 新潟スタジアム）がとてもきれい。ガソリンは満タンで京都をスタートし、ここのあたりまでで半分にはなるので給油。それで秋田まで持つ。高速のガソリンスタンドは黒崎サービスエリアがラスト。それ以降は次第に対向の2車線になり一直線になっていく。北陸道が終わり、日本海東北自動車道となる。現在は高速で新潟の村上地域の朝日まで行くことができる。このあたりは軒先に鮭が一本まるまる干してある景色にも出会う。朝日インターで高速を降りると急カーブとアップダウンが続く山道がある。そこを走ると運転している自分も車酔いをしそうになるほどダメージが大きい。山道で景色も単調でつらい。そのためそこを回避して、二つ手前で高速を降りて、「笹川流れ」のある日本海沿岸の国道345号道を走る。この季節はいくつもの海水浴場を通り過ぎていくことになった。このあたりの海は沖が青く、手前が水色でとても透明度も高くきれい。漁港あり、盆w）ヒ翳蠅僚煖u棺 ワ様子あり、大漁旗がはためくし、海水から塩をつくる施設も多数あり。冬には波の花が道路にも舞い、その中を走ることができる幻想的なポイントでもある。このあたりでスーパーマーケットで関西にはない「筋子おにぎり」を購入し、昼食。一服してスタート。◆山形　山形道～秋田◆：この区間はあつみ温泉～酒田間の高速を利用するのがはやいとされている。今回は酒田の土門拳記念館に行くのもあり、ひさしぶりに山形道は利用せず、海岸線を北上。クラゲ専門の加茂水族館をスルーして、庄内空港の地下をくぐって進む。冬の防風対策のための松の防風林がつづく。海岸線は地面が砂地で果物畑（メロンなど）が続く。左手に日本海をみながら進むために景色がよくつかれにくい。遠くで雨雲が雨を降らす様子が見えたり、雲間から海原に日差しがさしたり、非常に美しい。◆秋田～ゴール◆：山形の酒田から秋田方面に進むと右手に鳥海山が見えてくる。夏でも白い雪をたたえている。少しでも雲が出ると標高が高いのですぐ山が隠れてしまう。5月にこのルートを走ると鳥海山の姿が水をはった水田の水面に移り、逆さの鳥海山も観ることができる。秋田に入ると秋田も結構長い。新潟ももちろん長いけどこの道程では秋田も長いという実感がある。秋田の象潟（きさかた）のあたりから高速に。秋田市の手前の岩城までいくことができる。今回はその手前の亀田インターを降りて、映画「砂の器」ロケ地のJR羽後亀田駅による。このあたりは天鷺ワインが有名。「亀田うどん」というものがあることを今回は知る。小説「砂の器」にも描かれていた。そこから秋田市へ向かう。このころには夕陽が太平洋に沈むのを見ることができる。海岸の7号線は途中に何度も風力発電の風車をみながら進む。雄物川を渡り、トンネルがあり、右に折れて市内へ。到着である。今回は全行程14時間程度。燃費は17.2キロ（1500ccガソリン車　大人1名　子ども2名乗車）。まぁこんな感じ。18時過ぎに到着。数日後に復路。帰りはこの逆。新潟の黒崎サービスエリアにあるモスバーガーがたのしみ！

大谷多加志

ここ数ヵ月、珍しく出張続きです。出張など日常という職場の方もおられるでしょうけれど、私の職場では年に 1 度あるかどうかですので、それが続くというのはなかなかに珍しいことなのです。福岡県に 1 回、岐阜県に 3 回、神奈川県に 1 回の予定です。そのうちのいくつかは、K 式発達検査に関しての研修や講演を依頼されて、あちこちに伺っていたりします。研修の時には自己紹介がてら、必ず対人援助学マガジンの話もします。「対人援助学会という学会が出している定期刊行誌でして･･･」「インターネットで見られる Web マガジンで･･･」という辺りはみんなうなづきつつも少し距離がある感じで聞いておられます。最後に「無料で誰でも見られます」と続けると、戸惑いのような、感心しているような、何とも言えない反応が返ってきます。この反応を見るのが、結構好きです。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

先日、ひそかに贔屓していたハム屋が閉店した。なかなか美味いハムを作るので、知る人ぞ知るハム屋だった。一時はテレビ番組でも取り上げられたりして、食通や調理人の間では全国的に知られたハム屋だった。地元では近所の肉屋だと思っている人も多かった。街角の肉屋という店構えで、奥さんが切り盛りをしていた。店の奥に工場があってハムなどを作っていた。原料としての豚肉や牛肉の価格と製品の価格が合わなかったようだ。私も、めったに作らないがベーコンを年に1、2回程作る。趣味である。ハムやベーコンを一般的な価格で作れないのはよく知っている。ハム屋の夫婦はチャレンジャーだった。



◆自分の好きな事を仕事にしたら、それを成り立たせるのは相当の力量と運が必要だろう。困難だけれどそんな人がい

ないと、計算で成り立つ仕事ばかりになってしまう。面白くない社会になってしまう。◆今、団塊の世代が定年退職をしていく。面白い人が多かったように思う。後の世代は、自分の守備範囲を一歩も出ずに、計算できる仕事だけをする人が多いように思う。「それは自分の仕事の領域ではない」と言う人が多くなった。自分の仕事が面白いのだろうか、好きなのだろうかと思う。ところが、若い世代にこの仕事が好きで、この仕事をしていますという人を見かけるようになった。雇用形態の変化で割を食った若い世代が頑張っている。その変化に怯えて仕事をする先輩世代は哀れである。あなたは死ぬときに、「楽しい人生をおくれた」と思って死ねるだろうか？

川﨑二三彦

メイキング・オブ

動画版

「ジェノグラム、描き方のコツ」

この間、膨大な時間を費やして、ひたすら自宅 PC で作業していたのは、子どもの虹情報研修センターホームページで公開するための、動画版「手に取るように家族がわかるジェノグラム～描き方と活用のコツ～」。

動画でジェノグラムの描き方を説明している例は、知る限り見当たらないので、これまでの多くの解説より、絶対的にわかりやすいはずである（と、私は信じています）。

そもそも、なぜこのような動画を作成したのかというと、私が所属する子どもの虹情報研修センターでは、さまざまな形での情報発信を業務の一つとして位置づけていること、横浜のセンター研修に参加できない方も多いことから、動画によるミニ講座をつくろうという機運が高まっていたことなどが挙げられる。

こうした流れを受けて、早速思いついたテーマが「ジェノグラム」である。というのも、研修参加者が描くジェノグラムがあまりにも多様で（はっきり言えば、わかりにくいこと甚だしく）、多くの人が作図で苦慮していると考えられたからである。

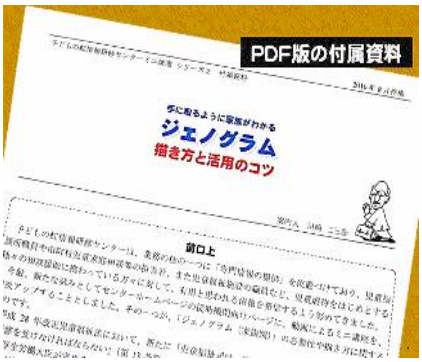
＊

私は、児相研（全国児童相談研究会）が主催する「新人児童福祉司研修ワークショップ」で、毎年ジェノグラムをテーマに演習を行ってきたのだけれど、こうした状況に鑑みて、新人児童福祉司に限らず、援助機関の多くの人にジェノグラム作図の基本を伝えなければならないと感じていた矢先、センターのミニ講座企画が持ち上がったのであった。

そこで、昨年の夏には早くも作成に取りかかったのだけれど、完成までには紆余曲折があった。

まずはスライドの作成である。講演依頼などがあって事例を紹介する場合、私はほぼ全て、スライド上でジェノグラムを描きながら解説している。これだと、文字や言葉だけで説明する場合に比べて圧倒的に理解を得やすい（と、私は感じている）。少なくとも説明する側は、（作成には時間がかかっても）講演当日、非常に楽に説明できることから、ジェノグラムの便利さ、わかりやすさを日々実感していた。

そんな経験もあって、スライド上で少しずつ描き進めることはお手の物だと思ってはいたものの、過不足なく完成させるようとして、大変苦労した。結果として、出来あがったスライドは、総枚数こそ、（タイトル画面なども含めて）約 80 枚程度におさまったものの、何しろ記号の１つ１つ、それらを繋ぐ線の１本１本を、その都度動かしていくのだから、1 枚のスライドで百回以上のアニメーション操作をするような場合も出現。これだけでも膨大な時間と大変な作業を強いられたのである。



なお、スライド作成に際しては、少しでも親しみやすいよう、当マガジン編集長、団士郎さんの好意で描いてもらった私の似顔絵も活用させていただいた。この場を借りて御礼申します。

それはさておき、もっと厄介だったのが音声の吹き込み。夜間、雑音の少ない時間帯を中心にマイクを握るのだけれど、何しろ原稿なし、自分でパワポをクリックしつつ、自分で喋るのだから、失敗続きで、その度に取り直し。試行錯誤を繰り返すうち、遅まきながらスライドごとに分けて吹き込みができることに気づき、多少の時間短縮ができたとはいえ、たった 1 枚のスライドを 10 回以上取り直したことも珍しくはなかったのである。

＊

さて、どうにかこうにか完成させたものの、視聴してみると不備が目立つと言わざるを得ない。すぐにでも修正したいのだけれど、ここまで苦労したのだから、とにかくセンターホームページにはアップした。

作品は 6 部 7 つのファイルに分かれていて、全体版だと 95 分。それに紙ベースで印刷可能な付属資料も PDF で添付した。

稚拙ではあるが、精一杯の作品。皆さん、是非ともご覧下さい。



スマホでも十分視聴できると思います。

なお、アップしている場所は、子どもの虹情報研修センターホームページの援助機関向けページ（「ミニ講座」欄）。ここに入るにはパスワードが必要です。援助機関の方々で関心のある方は、所属やお名前を明記して、私宛て（kawasaki@crc-japan.net）に問い合わせてください。

それはさておき、先にも述べたように、本作は試作品の域を出ていないとも言え、改善点が多々あるので、今後バージョンアップする予定です。ご覧になって、忌憚のないご意見をお寄せください。

連絡先は、info@crc-japan.net で OK です。　（2016/08/28 記）

荒木晃子

どうやら、この猛暑に「お盆休みがなか

った」というと、間違いなく同情されるようだ。当の本人は、新たな出会いと新しい取り組みへの第一歩を踏み出す好機をもたらしてくれたこの夏に休暇は不必要で、かえって感謝したいほどなのに。はるばる遠方から、盆休み＆夏休みを利用して来阪した、性別違和に悩むM母子への支援は、これから私がMの人生のサポーターになるための登竜門だったに違いない。今後のMの人生において、Mが必要とする教育現場、医療現場の援助者へ確実につなぐため、多くの専門家仲間のチカラを借りつつ継続した支援が続くだろう。私は、ここにその支援の足跡を残していこう。後に続く、Mのような子どもたちに。登竜門の先にある自分の人生の成功者に、彼らがなるために。

＜娘より：三回忌を終えて母に捧ぐ＞

見野 大介 みのだいすけ

9月・10月の出展のお知らせです

【 陶のかたち展 】

会期：2016.9.17－9.19　11：00－17：30（最終日17：00まで）

会場：京都文化博物館（京都市中京区三条高倉）

１２４人の若手作家・職人のアート作品を展示販売しております。

【 カフェとガンプラと私 】

会期：2016.9.18－9.24　11：00－23：00（土日18：00まで）

会場：cafe unlock function（奈良市法華寺町237-3）

ガンプラと陶器のまさかのコラボレーションが生まれます。

【 アートクラフトフェスティバルinたんば 】

会期：2016.10.1（10：00－17：00） 10.2（9：00－16：00）

会場：兵庫県立丹波年輪の里（兵庫県丹波市柏原町田路102－3）

１７０人の工芸家による巧みの技と心のこもった作品が集まります。

【 信楽セラミックアートマーケット 】

会期：2016.10.8－10.10　9：00－17：00

会場：陶芸の森（滋賀県甲賀市信楽町勅旨2188－7）

「作品に触れ作家に触れる」をテーマに県内に在住、在勤の陶芸をはじめとする作家が、自らが制作した質の高い作品の販売をおこなう、作り手と使い手の出会いの場です。

【 使って楽しむ器展 】

会期：2016.10.11－10.23　10：00－17：00（17日休廊）

会場：Gallery&Cafe AQUA（和歌山市満屋186－7）

長皿と飯碗をテーマに、展示と実際に作家の器を使ったカフェメニューを用意します。

【 見野大介陶展 in 東京 】

会期：2016.10.21－10.29　10：00－20：00（土曜19：00まで 最終日17：00まで）

会場：陶右衛門赤坂店（東京都港区赤坂1－3－5）

東京での初個展になります。

10月までは上記の通りで、11月は個展を含めて4つあります。

…詰め込みすぎたことを少々後悔しております。年内は必死のパッチで働きます。

鶴谷圭一

昨日 8/23 が始業式で、今日はその翌日2学期2日目の幼稚園だった。

毎年思うことだけど、「やっぱ夏休みっていい！」

久しぶりにクラスにやってきて友だちと会った子どもたちは、お喋りが止まらないそうだ。夏にどこ行った、ここ行ったという話や、何ができるようになったという話で年少から年長まで、もちろん年齢が上がるにつれてお喋りの盛り上がり方もアップしてくるのだが。

この夏に、グーンと成長した子どもたちを見てみると、家族が子どもたちのために何かしらの経験をさせたいと行動を起こしたり、田舎の祖父母に会ったりして人間関係が広がった経験、苦手だった水あそびをお父さんとプールに通って克服し、自信を持って2学期のプールに向かった話など、夏休み効果の話は尽きない。

反面幼稚園ではレアケースだが、おそらく夏休み中家の中に閉じこもって、母親や祖母に甘えてベッタリだったんだろうなあーと想像される年少児は、自立度が下がって、1学期にできていたことができなくなっていた（トイレでの排泄や着替えなど）。これは残念な話･･･2学期にもう一度取り戻さなくてはならない。

夏休みをいいものにするか否かは、家族の関わりによるよるんだと改めて感じさせられたところ。ところで、自分にとっても、教職員にとっても充電することのメリットは大きい。保育園やこども園が主流になってくると、子どもたちの大事な休暇が縮小されていってしまうだろう、ちょっと淋しい気がする。

原町幼稚園
http://www.haramachi-ki.jp
メール
osakana@haramachi-ki.jp
ツイッター
haramachikinder

木村晃子

北海道生まれ、北海道育ち。どこよりも、北海道が好きだ。北海道は広すぎて、自分の生まれ育った土地と言っても、知らないところはたくさんある。最近は、仕事で北海道内を回ることが多くなって、道中を楽しむこともできている。

先日は、亡き父の生まれ故郷に立ち寄ることができた。美幌峠。絶景だった。父がこの景色を気に入っていたことを思い出す。自然の力は大きい。この雄大な北海道で生きる人間らしく、大きな心を育てていきたいと感じた。



乾明紀

前回、前々回の短信に「肌の痒みが未だ治まりません。乾燥する季節はとっくに終わったのに･･･」と書きましたが、結局 8 月になっても治まりません。8 月後半に京都東山からより自然の多い箕面に引っ越しましたが、今のところ（引っ越して約 1 週間）変化はありません。しばらくは投薬と塗り薬を続けることになりそうです。

話は変わりますが、6 月に次男が誕生しました。上の子がまだ 2 歳なんで、なにか

と大変（この原稿を書いている途中も、次男を抱っこしたり、腹痛を訴える長男のお腹をさすったりして、何度も手を止めることになりました）ですが、手間がかかる時だからこそ、その時間を大切にしたいと思っています。

団士郎

急いで死にたいわけではないが、そろそろ人生の終点時刻を考えておいてもいい年齢にはなった。（と、こんなことを言ってる人に限って長生きする、というのも慣用句だから、どちらにも大した意味はない）。寿命のことなど分からない。ただ、生まれて初めて、自分がいなくなる時のことを最近は思う。

思春期、青年期に死を考えたことが、一度も記憶にないという、文学性も哲学性もない人間だった。だから今も、深く考えているとは、とても思えない。ただ、そうか、いつかは居なくなるんだ。そして、そう遠い話ではないかもしれなくなったのかと思うのである。

常々、近しい人とは、出会う機会を多くして仕事をしているから、突然いなくなっても、会っておけばよかったと悔やむことは少ない。いや、これは相手さんの方のことか。

それは、私の父母とがそうだった。

母が突然亡くなった日の朝も、私は仕事に出かける前、しばらく座って話し込んでいた。数年前、父を亡くし二所帯住宅の一階に住んでいたのだが、八十代半ばを過ぎた頃から、いつ居なくなってもおかしくない。だから、話せる時には話しておこうと思っていたのだ。

告別式も、その後も、ああしておけば良かった、もっとこう出来ていたら・・・と考えることはなかった。

むしろ、父が亡くなって母が一人になってから、次男（母には孫）の結婚式をハワイでするのに、一緒に行った時のことを思い出す。

滞在中、母を誘って二人でワイキキの衣料品店に出かけた。そこで、アロハを買ってあげるからと勧めた。「いつ着るかわからないし・・・」と躊躇するのを、「今着て帰ればいいよ」と試着室に押し込んで、赤い花柄のアロハ婆さんにした。それを着て、オープンテラスで朝食を食べたツーショット写真が良い感じだ。

両親とも、十分生きたし、楽しかったと思う。私の文春新書が出たとき母は、新刊書を、せっせと嬉しそうに親戚に郵送していた。

私もそんな風に、良い思い出をまき散らして、時が来たらスッと居なくなりたい。

＊

（A）東京・東小金井駅近くの店先でのこと。気に入ったラーメン屋にちょくちょく出かける彼女は、その道中の店先に「木陰の物語」（配布版）が置いてあるのを見つけた。「どうしてここにこれが？」と思わず店の人に声を掛けた。

（B）自分の働く会社の仕事で、数年関わってきた冊子の編集。毎年、夏前から取りかかって、出来上がったものを全国に届ける仕事もすっかり定着した。ダブルワークを推奨する会社なので、彼女は自分のお店を持っていて、たまたまその日、店番をしていた。

（A）は、中西万依さん。マガジン執筆者水野スウさんの娘で、本誌連載の原稿は彼女が編集して完成原稿として私の所に届けてくれる。ミニコミ「ほめ言葉のシャワー」は小さな巨人になって、全国の人々に読まれている。あの編集は万依さんの仕事だ。

（B）は、やまざき薫さん。ホンブロック勤務で、木陰の物語の制作・発送に携わっている。ホンブロックはkkアソブロックの出版セクションで、「家族の練習問題1～6」など、家族に関わる出版をおこなっている。

この面識のない二人が東小金井で冊子を間に遭遇した。「木陰の物語」の新たな物語の始まりである。

どこかで、誰かと誰かが思いがけない遭遇をし、その触媒に漫画作品がなってくれている。作家冥利である。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

26：　事件について

千葉　晃央

それは間違っている！

「千葉君、それは間違っていると思うで。ここでは、そういうのを求めているんではないわ。参加者とリーダーの立場は全く別！…でもなくて、全く同じ！…でもないねん。時にはリーダーとして動くべきところもあるからね。でも、参加者に任せ切って、自分はリーダーだから、かかわらない！…これではないわ。リーダーも一緒に経験するし、体験もする。それがこのキャンプ全体のグループ体験になっていく。そういうところがこのキャンプというグループワークの狙いやから、まぁゆっくり考えてみて…！」

22 歳の夏。大阪市青少年活動協会でキャンプリーダーをしていた私はこんな言葉をかけられた。ある青少年育成キャンプ実施後のスタッフによるふりかえりの場面である。キャンプの後半のキャンプファイアーでグループごとに出しもの（スタンツ）をすることがあった。その際に参加者が考え、参加者が決めて、参加者だけが発表するようにかかわった私の報告をしたときの指導者からの言葉である。参加者と共に私も考え、参加者とともに私も決めて、発表だけはリーダーである私は入らず、参加者だけで行うことにした。そのことに対する疑問を指導者から投げかけられたのである。

あの事件のことを考えていると、私はこんな若い日の一場面を思い出した。あの体験につながっているのではないかと。

早朝に 2000 字！

先日、対人援助学マガジン編集長の団先生と話す機会があった。話題は相模原の事件についてである。あの事件に関しては、思うことが多すぎて今もまとまらない。時間的制約から小さく切り取って、授業の中で話したことがあったが、うまく伝わらなかったし、全く不足を感じ、それを試みた自分に非常にがっかりもした。小さくは切り取れないのである。ある朝、思い立って感じるままにパソコンに打ち込んでみた。キーワードや短いセンテンスを入力して 2000 字ぐらいに一気になった。それを整理しようとしたが、なかなかあれもこれもつながりすぎていて、うまくいかない。難しいなら今回は触れずに、「追って取り上げる

つもりである！」とマガジンでいうのでもいいよ！と編集長には声をかけてもらったが今できる限りのことを書いてみようと思う。それが連載というものが持つ時代性であるだろうし、連載には次回もあるという特権も存在する。そして、この連載で書いていることは、あくまで私の周辺でのことである。これまでも、私の知っている範囲であることを断ってきたが、今回も同様である。

それにしても、あの事件から頭の中に浮かぶことはたくさんある。しかし、誰に伝えるのか？どこまで伝えるのか？どのぐらいの時間で伝えるのか？を考えてしまうテーマである。それでも少しずつ始めていきたいと思う。

私はものごとを「システム論」から考えることが多い人間である。この事件の背景にあるテーマは「境界（バウンダリー）」ではないかと思う。「境界の引き方」の問題であることが共通するテーマではないかと考えている。

「人を使い捨て」ながら「人を大切に！」

犯人は 3 年間の施設職員の経験があった。この 3 年間の実務とその際の職場でのトレーニングから、この仕事に就いているときにどんな経験をしたのだろうか？3 年あれば人材育成という面において一定の成果はもたらすことができるのではないかと思う。しかし、その結果はあの事件であった。

現在、労働市場全体は非正規雇用者が労働者全体の半分に迫る勢いであり、人を大切にすることができていないといえる。モノを使い捨てる消費社会を嘆きながらも、いよいよ人すら使い捨ての時代に入っている。これは福祉業界も同様である。急速な高齢者の増加。そこを皮切りに福祉事業への一般企業、NPO の参入が始まり、福祉業界は「急」拡大した。クルマの運転同様「急」がつくことには危険がつきもの。その危険が現実になったのが今回の事件ではないかと思う。

成人期の障害者の居場所問題として長く、生活の場、働く場が不足してきた障害者福祉領域でも大幅に事業所が増加した。私の勤めている事業所ができたころは、私の地域では 4 か所だった同じような施設が、現在は 104 か所という話しも聞く。コンサルまで参入し、「儲かるから」と事業所の準備から立ち上げまで一件 700 万で請け負います！という話しも聞いたのも少し前である。

それだけの福祉の職場がある。そのひとつひとつで「職場づくり」が意図的に、もしくは意図を持たずに行われている。利用者への支援の質も大切だけれども、その基礎となるスタッフ側の「職場づくり」も同時に大切である。しかしこのことはこれまで扱われることが多くはなかった。ある方に伺うと、「福祉事業所の経営者への研修」が不足しているという話しも聞こえてきている。これは福祉に関する資格制度養成のカリキュラムでも学ぶことはない。全国津々浦々にある福祉の職場（それは高齢、障害、児童等に専門細分化されているので）、その数は膨大であり、一方一つの事業所にいる職員の人数は多くない。その一カ所一カ所での職場づくりにノウハウが必要となっているという課題があるのではないか。こうした専門細分化した福祉現場は、職員

が小集団であることが多く、一定の経験を積むと先輩がいないという状況に陥る。そこから先は目標となる先輩の背中もなく仕事を重ねていくことになる。そこでのスキルアップやキャリアアップは難しいことが想像できる。そういう先輩に会う機会が限られるからである。そんな状況も踏まえた上での職場づくりには工夫がいる。福祉事業を行い、その職場をつくって行くというコツである。

今、そこに浸食し、存在するノウハウは一般企業の経営のノウハウである。施設長が集まる会議で「何人の職員の首を切ったか？」の自慢話にも聞こえるような話があったという。常勤正規雇用を非常勤に、定期雇用職員に、そして契約職員に、派遣に、アルバイトに…していくという一般企業と同じ流れが福祉業界全体にも起きている。

「福祉労働者の声」と「利用者の声」

選挙等で住民が望んだ結果として、行政側もコストを抑えた上での福祉政策を実現することに注力している。新しく施設ができるときも、施設側が建物の建設費を一定部分負担し、自前で施設をつくることが増えた。そもそも福祉事業は利益を目的にしていない。本来、利用者の支援に充てられるべき福祉制度の報酬のなかからも一部、それらの建物の先行投資分を回収していかなくてはならない。福祉現場が借金をして福祉事業を行うというのがほぼ当たり前になっている。これがコストを抑えた福祉政策の結果の一面である。結論として、どこで調整するかと言えば「人件費」となる。

福祉では「利用者さん個人を大切にする」「利用者さんが自己実現ができるように援助職は関わる」ことが仕事となっている。その価値観と技術を学び、実践として支援することを職員は求められる。勤務中に援助職はそれを業務とする。では、当の本人はそのように大切にされた経験があるのだろうか？これまで生きてきた経験で、そしてその福祉施設という職場で、従業員という一人の人間として、個人として、大切にされたことがあるのだろうか？8 時間の勤務の時間は他者の幸せのために「感情労働」をともなう援助職を行い、一方で自分自身は労働者として使い捨てられかねないという現実。このギャップや、支援者と労働者という「境界」が機能不全を起こしてはいないだろうか。「人を大切にする仕事」を貫くのであるならば、利用者にはもちろん、従業員にもその哲学は一定貫くことがないと整合性がとれない。また、やりがいも感じにくい。

当然、労働者のための施設ではない。しかし同時に、援助職も労働者である。障害者の権利を実現する職場で、労働者の生活の充実を叫ぶのがはばかられるムードの存在は根強い。これは児童領域、高齢者領域の職員と話していて感じることがよくある点である。このように解決できない問いはある。まずは、このようなムードについてここで触れていくところから始めたい。一人の人間、生活者（労働者）と援助職の境界の線引きの問題ではないか。

その結果もすでに出てはいないだろうか。福祉現場の人手不足が指摘されて久しい。特に介護職は「きつい」「汚い」「かっこ悪い」の「3K」と言われていた時代からも含

めて、なり手が少ない。私の世代より、以前には学歴、職歴にしても実に様々であった。私の時代以降は大卒も多いが現在の福祉職不足は、人材によほどの何かがない限り、ウエルカム状態である。その中に様々な人が混じってしまうのもまた現実である。なおさら、職場づくり、トレーニングが求められている。

今回の事件は、福祉哲学を忘れ、職場づくりを考えなかった結果ではないのか。福祉は急成長した領域である。経営運営ノウハウの未成熟は認めざるを得ないのではないか。結果、土着の権力構造そのままのところもあり、実際それに頼ってきた過去もある。そういう人にお願いするしか福祉を実現できなかったというのも事実である。

ある施設では、職員が休憩したり、ミーティングをしたりする部屋を壊して利用者が使う居室を作ろうという話しが持ち上がった。しかし、それは取りやめたそうである。職員が休憩してくつろげる部屋、話し合える部屋は大切にした方がいいとの理由だったそうだ。職員のいこいの場を大切にする。職員を大切にするという価値観の具現化のエピソードである。一事が万事である。やはり、その施設は職員も長く勤め、就職希望者が絶えない施設に今もなっている。

職員の出世競争！

知的障害者の就労施設で、職員がたくさん利益をあげるような働きをしても、利用者さんの給料は上がっても、職員の給料は上がらないことが多い。私にとってはこれが当たり前になっているが、一般的にみると労働者のやりがいとしては万人に受け入れられるとはいえない。しかしこれには理由がある。援助者同士が成果を競いあうような競争が起こると、援助職が利用者ではなく他の援助職をみて仕事をするようになりかねない。相手がその成果を出そうとしているとそれを面白くないと思う職員が足を引っ張る。人の命を扱い、職員一人一人が連携しチームとして集団で支援を行うのに、不必要な職員同士の競争はその前提の協力、連携などの関係を崩しかねない。「感動エピソードコンテスト」、「年間ＭＶＰ制度」を採用しているところもあるがごくごく一部である。それにはこうした理由がある。

ただ、職員ががんばっても成果が伴わないという仕事も、それでいいとは思えない。以前作業による売り上げが落ちたから、福祉施設利用者の給料が下がり、それにあわせて（本来は別会計なので）関係ない職員の給料も下げた施設の話も聞いたことがあったが、「それは違うんじゃないか！」というツッコミとセットになって逸話としてきいている。

結局のところ、福祉現場には哲学がいる。私たちはこの社会の中で、今何をしているのか？その問いの立て方が重要になってくる。その能力を持っている経営者はやはり地域でも注目されている。「カッツ曲線」が示しているように、トップに求められるものは現場職員とは違う。必要なのは理念であり、ヴィジョンであり、実行力である。いい現場職員がいいトップになるとは限らない。経営者が職場づくりのコツを学んだり、積み上げたりする機会は現在非常に限

られている。全て経営者自身の自助努力に委ねられている。

入所者が職員を救助！

『入所者が縛られた職員を救助　はさみで結束バンド切断　被害拡大を防ぐ　～相模原１９人刺殺。元施設職員である容疑者に結束バンドで縛られた施設職員を、難を逃れた入所者がバンドをはさみで切断して、助け出していたことが分かった。入所者による救助がなければ、被害がさらに拡大した恐れもあったとみている』と産経ニュースは 2016 年 7 月 27 日に報じている。事件の翌日である。このニュースは意外と知らない人が多い。

援助者が援助をしているだけで、利用者は援助を受けているだけ。そういうことに制度上も福祉職が学ぶ福祉職教育の教科書上でもなっている。しかし、この事件のエピソードも示すとおり、現実は異なる。昨今福祉職が学ぶ教科書ではソーシャルインクルージョンという概念が持ち出され、様々な社会的弱者を包摂した社会の実現をうたっている。では、援助職はインクルージョンできているのだろうか？援助職が労働者として、地域で暮らす住民として、どのように相互作用が行われながら暮らしていくのかに関しては触れられていない。福祉サービスを利用した際に、援助職が近所の知り合いの人で困ったという話しもあれば、クライエントさんから畑でできたナスもらったという話しも聞こえて来る。職員がするべきことを忘れているときに利用者さんが教えてくれた話もあるし、結婚式に利用者さんが出席した話もある。倫理綱領上ではこのようなことはよくないこととして整理されている。しかし、援助者が被援助者から助けてもらう、支えをもらう、地域で暮らす時間を重ねていく。そういった現実はどのようにインクルージョンするのだろうか。ソーシャルインクルージョンというならば福祉職も含まれていないといけないだろう。そうした社会福祉学から見落とされている福祉職が起こした事件であることを考えるべきだろう。

福祉かどうか？より大切なもの！

ある事業所が納品先から、自分たちが仕上げた商品の中から多数の不良が出たことを指摘されたそうである。そこではその事態を踏まえて、職員で対策を協議したそうである。その結果として、検品体制を強化することに決まった。元々検品も障害を持った利用者さんがする！というやり方をそこでは採用をしていた。2 回利用者さんが検品してきたのを 4 回利用者さんがすることにしたそうだ。倍の人員が検品にたずさわる分、生産量は下がる。それでも「障害者が、障害者自身で責任を持って行う作業」が障害者の自己実現や成長につながるとして、生産量の減少があっても、そのことで障害者の収入が減ることになっても、そちらを採用しているということであった。自分たちの給料が下がってもいいから、検品の人員を増やす…それを誰が決めるのか？それを望んでいるのは誰なのか？これらには前提がある。「事業所スタッフ」と「障害を持つ利用者」という二つの立場が明確に

あるということである。つまりこの「境界」を明確に引くことをよしとしているのである。

私の現場では職員も利用者さんと一緒に作業をする。一緒に汗をかかない人の話を利用者さんがきくはずもないと考えている。そして利用者さんが検品をしても、職員が検品をしてもどちらも間違わないというところを目指している。障害を持つ方がしても、職員である健常者がしても不良が出ない作業手順をできる限り追究する。そして、それが難しい場合には、職員が検品をすることも当然ある。人が集まり、何か仕事をしていくときに、健常者、障害者に関係はなく、それぞれができることを精いっぱい持ち寄る。それぞれができる限り協力して最大限の成果を上げられるよう取り組む。これが私の周辺での哲学である。

これが自然ではないのだろうか。「福祉かどうか？」よりも、人として、この社会でお互いに生きていくものとして、何が自然なのか？である。福祉という考え方、福祉制度ができる前から、人はお互いに助け合って生きてきた。現生人類である「現代人」以前のネアンデルタール人も障害を持った子を育てた形跡が化石から発見されている。「知的障害者の労働現場」である施設に見学に行っても、職員は職員の仕事だけを行い、作業自体は利用者さんのみが行う場面に出会うこともある。職員は観察、関与を後ろでしている。

きちんと目の前の人に会っているのか？

単純なこととして、人が集団で生活や仕事をして、長く同じところで時間を経過する時に援助者と被援助者という立場だけで、語ることはできない。常時出勤ではない職員に対して、その職員が出勤ではない時にあった出来事や仕事のやり方の変更に関して、職員はもちろん業務の中で引き継ぎとして伝える。しかし利用者さんも「こういうやり方になったし！」と伝えようとすることも日常的にある。私はそれによって助けられることも多く経験してきた。それは人として社会で相補的に暮らして生きていく上で当たり前ではないのか。「しんどいの？」「元気ないね」「たんじょうびおめでとう」「結婚おめでとう！」「千葉ちゃんお帰り～！おつかれさん！」「どこいってたんや？！遅れたらあかへんで！」「いないからどうしたんか？と思ったわ！」「待ってたで～！次、いつくんの？」「千葉ちゃん、土日なにしてたん？え、仕事～？！土よう も、日よう も？…そんなに大変なん？！俺がいうたろか？！」こんなたくさんの声を利用者さんからいただいてきて私は 20 年もこの仕事が継続できている。私が助けられているのである。

長くお互いに共に過ごすことは、どんな自分でも受け入れて欲しいという願いだけではない。長くお互いに必要とされる存在であり続けること、その努力を相互に求め合っている。それぞれが仕事の質を追究し、お互いにピンチの時は支え合う。職員から利用者という方向だけの作用ではなく、利用者から職員という方向でも作用が起こる。そこは扱われていることが少ないが、取り上げてみると利用者と職員という線を引き過ぎではないのか？というあたりが扱われず抜け落ちているのである。

そもそも、援助をする人も援助を受けてくれるという相手の行為がなければ成り立たない。仕事柄、スイスの施設での様子をきくことが多いが、利用者の義務も明確なのがスイスの福祉施設の特徴でもある。援助者と被援助者の行為が相互に成立して、初めて職場は成り立つ。こうしてみても、できることを持ち寄る、できることを持ち寄って、協力して仕事をする。これこそが「社会」というものである。自分たちは「援助者」で、障害者は「被援助者」であるという考え方だけで福祉が語られていることにどうしても不足を感じざるを得ない。

現在の福祉職養成カリキュラムで唯一、そのあたりに触れているのが「ヘルパーセラピーの原則」というキーワードである。助けている人が助けられるということを意味し、これをベースにした援助技術を支援の現場では使っているし、これまでも使ってきた。元お茶の先生にはお茶を教わるという設定を借りながら声をかけるとスムーズになるというような認知症支援の現場などで聞かれる話、作業になかなか長く取り組めない方に後輩に教えてあげる役割をお願いすると意欲を持って取り組み、仕事にもまた意欲的になったという話しなど、例は尽きない。「教わる」「教える役割を付与する」これらのことを今の制度では扱いにくい。職員が何をしたかは扱われるが職員が何かを教わった、そのことが支援となったということは理解されにくい。ヘタをすると、職員が何もしていないのではないかとみられるということになりかねないのである。

障害者問題を打破する糸口

一度、読者のみなさんも自分自身がどんな職員にお世話になりたいかを考えてみるとよい。ホテルマンのようなサービスを受けたいのか？それとも、ときには個人と個人の関係の側面もありながら長く過ごすのか？などである。私は後者である。人は誰でも誰かの役に立ちたいのである。どんな障害がある場面でも、歳を重ねた場面でも、小さな子どもでも同様である。畑でできたものをおすそ分けしたり、頂いたもらい物を分けたり、たくさん作ったものを届けたり、地域のイベントに時には一緒に行ったりするような人にも出会える「余地」。そういうところを福祉では「倫理」という視点で排除してきた。しかし、こうした人と人の触れ合いこそが援助職者のモチベーションや原動力になってきたのではないだろうか。

助けていると思っていたら助けられているんだ！助けてもらっていたのは自分達だ！つまりは、役に立たない人なんかいないんだ！それらを伝えたいと私の現場では考えている。そのために地域社会に具体的な経済活動、自治体運営活動の一部となり、多くの方が手にしているような商品の作業をしたり、リサイクルの仕事をしたりすることで社会に役に立っていること、貢献していることを示していく。このようなロジックが知的障害者の労働現場が担っている障害者問題を打破する糸口である。つまり労働を中心に据えることがたくさんのチャンスメイクをするのである。私の現場では重度といわれたりする重複障害の方もできる限り働く時間を持つ。その働いたお金を

こつこつ貯めて、自分で働いたお金で親に初めてプレゼントを買うエピソードも多い。家族から「ごくつぶし」と言われたり、一生面倒をみなくてはと思われたりしてきた家族の中での存在の意味、その転換である。家族の見方が変わる。そういう場面を何度も見てきた。

現在の細分化された施設で能力ごとに振り分けて支援をするというのは一件合理的なようで、不合理なこともある。富山方式にみられるように、高齢者と障害者、高齢者とこどもという福祉現場が存在していることがそれを物語っている。人は合理性だけで生きているのではなく、お互いに助け合いながら、生きている。そのなかで物語が生まれる。その中で成長をするし、物語ができていく。その原動力は、人は誰でも困っている人を助けたいという本能である。

「世界に一つだけの花」はさみしい

これまでこの連載でも触れてきたが、「集団をみる力」を養っていればよかったのではないかとこの事件を考えるときに思うのである。そのことによって見えることが増える。理解が深まるし、世界も広がる。しかし、現在の福祉制度がスタンダードとしているやり方は、援助者は「対象者（の変化）」と「それに関わっている自分」という 2 者関係がメインとなることが多い。そこでのうまくいかなさがたちまち自分の力不足、絶望のように思えることも多い。そうではない。そこには同時にグループという資源が存在しているのである。

支援の場面において、集団をみて、どのように解釈し、意識し、意図的に活用できるようにとらえるかに関しては最近の傾向はシステム論を用いた説明をソーシャルワークでは採用している。皮肉にも、それはもっと具体的な援助技術もノウハウも持っていたグループワークという技術を一方で削った結果でもある（本来はグループワークもシステム論も集団を扱うということで同じ方向性に存在する。マクロか、ミクロかの違いといえる）。集団をみる視点を捨てたといっていいと感じている。もともと科目として独立していたグループワーク。今は 2 冊ある教科書の 1 章分しかない。現在の「個別支援計画」全盛期ではグループワークの視点は消滅の危機である。ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークという 3 大ソーシャルワーク手法の一つを放棄したのである。その背景には、個別化なのか、時代背景の個人主義なのか、一人一人にあわせたプログラムを賛美する風潮もあったように思う。「みんなちがってみんないい」といわれるようにこのムードは社会に蔓延している。だから福祉の支援も一人一人違うでしょ！と、グループで一括りにするのはデリカシーにかけといいたげな空気がある。

スマップの「世界に一つだけの花」がはやった時も対人援助学マガジン執筆者で師匠の一人である中村正先生は「強者の論理です」と一蹴したのを強く覚えている。「違い」を強調しても自分を保ち生活できる人は強い人だけではないか。人は誰かと一緒であることをどこかで支えにして生きているものだと。そのことも忘れてはいけない！と仰っていた。そういう意味でもグループ内での相互作用を資源にするグループ

ワークは捨てられるべきものといえるのだろうか。援助職からの支援だけでなく、グループメンバーからの支援がある。お互いに助け合う、助けること・手伝ってもらうこと、それは自分が手伝ってもらえる能力も育む。ここでも人は誰かの役に立ちたいという本能がベースである。

今の福祉制度は、利用者個人が何ができるようになるかに焦点化している。しかし、個人が課題をできるようになったことや、個人が何かできるために行っていることが施設の集団にどのように作用しているか？という側面はなくならない。しかし、そこは制度的にはみられないし、大切にもされない。完全な欠落点である。扱えていない現実が存在するのである。

このグループワークの視点や技術が存在することを前提に集団処遇である福祉施設での支援を歴史的に行ってきたとはいえないだろうか。現在、その 100 年以上の成果は大幅に削減されている。それが福祉専門職教育の今である。ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークという 3 つの武器で福祉の歴史を作ってきたのに、その一つを放棄した。それでも現場では、集団処遇はこれまで通り継続されている。集団処遇、つまりグループワークのよさも、そこにある資源も今の福祉職は昔の福祉職に比べて知らないし、活用していないのである。

成果が出る前に離職、退職

そもそも、戦後の日本に民主主義を根付かせるためにも用いられてきたのがグループワークでもある。その退潮とリンクするように現在、日本の政治のファシズム化が指摘されるようになっている。無関係では済まされない話であろう。民主主義は時間がかかるし、プロセスが大事である。今は、それよりも効率や、成果、エビデンスが重視されているように見える。その移り変わりの潮目を私たちは経験したのかもしれない。本当の意味で、それがわかるのはずっと後になってからであろう。

そして「ソーシャルワークはプロセスである」もすっかり薄らいだ。結果を出すことが強調されているが、それはいつの時点での結果なのか？ずっと後に結果が出ることも人にはある。その頃には非常勤福祉職は交代していて、誰もその成果には気づかない。利用者は地域にずっと居続けるのでいわば「ベテラン」になっている。こうしたことに職員の方は新人だから気付かない。短期の結果ばかりが扱われ、長期的に関わること、ゆっくり生起する変化を導くことにも重きをおかなくなっていないだろうか。

障害を持った方の成長、発達を階段に例えると一段一段が大きいという例えもよく用いられる。大きな一段を上がるには時間もエネルギーもかかる。事件の犯人のような 3 年間という勤務経験では一段登る障害者の姿にも触れることはなかったのではないか。1 年毎の個別支援計画のふりかえりで、変化がない！とばかり思ったのではないか。そう思わせたのは誰なのか！制度の問題ではないか？

誰もやりたがらない「福祉」でいいの？

福祉の仕事はやりがいのある仕事になっていないのではないか？介護離職、人材不足という現状は、その仕事の業務の範囲のデザインの問題ではないのか。人材不足という状況は「誰もやりたがらない」、「誰も継続できない」ということである。相談はこの人、ケアはこの人、床の掃除はしてもいいけど、窓とかは別料金、もはや居場所ではないし、あくまで利用者が努力をして目標を達成してもらうようかかわるなど、支援の場面は変化を強いて、細分化、分業化して進めることへの反省も必要ではないか。

分業化のデメリットはすでに指摘されて改善策も示されている。工程ごとにその工程だけをする人をつくるのではなくて、作業チームをつくってそのチームで全工程を仕上げる。結果、自分の工程だけ知っている作業員ができるのではなくて、お互いに助け合い、教え合いながら作業をするので全行程ができる作業員が生まれる。技術も伝承することができる。現在、福祉領域ではジェネラリストという言葉で語られているところである、方法論だけのジェネラリストではなく、領域においてもジェネラリストが求められているのではないか。現在厚労省は各医療福祉専門職養成のカリキュラムに共通基礎科目の設定を模索しており、ちょうどこのような流れに呼応しているとよいのだが、対象領域をまたぐ形でのジェネラリストには及び腰であるように見える。各専門職団体の意向に押されているようにも見える。各資格の専門職団体も自分たちの利権を守る団体だけにはならないで欲しいと心から願っている。

様々な研究で、賃金の増収だけが労働者の満足度が上がるのではないというのは明らかになっている。そうなってくるとますます、仕事の業務分担、あるいは過剰な細分化、業務範囲のデザイン、仕事の切り取り方の問題ではないのか。

モノを売る、物を作る仕事とは、福祉は違うといいながら、PDCA サイクルは工場で使われてきたものである。それを支援プロセスに採用している。こうした計画を過剰に盲目的に立てることの義務化が業務の多忙、事務仕事の多忙を産み、利用者に向き合う時間を削り、パソコンに向き合う時間を増やした。

人とかかわることが好きでこの業界に入った人材も、パソコン能力、文章能力を問われ、利用者の日常の変化ややり取りではなく、目標達成だけに意識を割くよう強いられるのが今の制度である。

施設にも家族にも居場所がない

現在、障害者施策は能力別のステップアップ方式で、一番の目標は一般就労であり、その環境に少しずつ近くなっていくという形で施設が段階的に何種類かに分かれているといってよい。つまり、目標を立てて達成をして、次の施設に移っていくというのが前提となる。つまり、施設は「居場所」ではないのである。あくまで達成したら施設を移る。達成が難しい場合は、「移ることができなかったもの」としてその施設に残る存在となる。これはあたかも「落伍者」のような気分にさせられる。現実に施設に一般就労志望の利用者が何人いるか？実際に施設を退所しステップアップできた人は

何人いるか？ばかりを行政に報告をさせられている。職員も非常勤的雇用者が増えている状況をみると施設は誰の居場所でもなくなったのではないか。利用者とっても職員にとっても。つまり施設では数年たてばそこからいなくなる存在として利用者、職員ともに時間を重ねているのである。

1996 年優生保護法が世論の反対もあり、無くなった。しかし、現在は「新出生前診断　染色体異常、確定者の 97%が中絶」という状況である。国が施策を辞めても、個人が堕胎させている。今回の事件の匿名報道という結果については、親は自分たちが子どもの名前を隠したといっている。障害を持つことは堕胎されたり、名前も隠されるべきで、存在も隠されるべきであると捉えかねられないメッセージが世の中にはあふれている。家族のなかにすら、居場所がないのだろうか？

今回の事件の背景にあるテーマは「境界（バウンダリー）」ではないかと思う。「健常者と障害者の境界」「援助職と被援助職の境界」「職員と利用者の境界」「分業体制である福祉職の各職種ごとの境界」「生活者と労働者の境界」「利用者の幸せと自分の幸せの境界」など数えきれない。このたくさんの「境界」を再考することが必要だろう。

私たちも今回の事件で考える機会を新たに持つことになった。考えることを継続すること、それが何より重要といえる。

「千葉君、それは間違っていると思うで。ここでは、そういうのを求めているんではないわ。参加者とリーダーとは全く別、でもなくて、全く同じ、でもないねん。時にはリーダーとして動くべきところもあるからね。でも、参加者に任せ切って、自分はかかわらない！これではないわ。リーダーも一緒に経験するし、体験もする。それがこのキャンプ全体のグループ体験になっていく。そういうところが狙いやから、まぁゆっくり考えてみて…！」

…ここを語ろうとする努力が求められている。そのためにはあと数段掘り下げることが必要といえる。福祉実践も、社会福祉学も、社会福祉制度も。それなら、自分が今できることをそれぞれの持ち場でやっていこうじゃないか！

BACK ISSUES

クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月

施設が求める「障害者像」はあるのか？　24

2016 年 3 月

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

（14）男らしさのラビリンス（迷宮）

中村正

暴力の現在

夫婦・親子、友人・知人、指導・被指導の関係性に宿る虐待・暴力が問題となっている。背景はそれぞれ違うが、過激なイスラム原理主義者による暴力、憎悪・敵対のヘイトクライム、子ども、女性、障がいのある「弱者」にむかう暴力は、異なる者同士の関係性の結び方に関わる構造的な、ある傾向をもった暴力として現代社会の課題となっている。暴力の発生する頻度、場所も関心があるが、それだけでなく、この社会のもつ排除と敵対、過同調からなる危険の「質」がみえてくる。

加害者個人の異常さへの関心と注目ではなく、背景にある社会問題が事件には凝縮されていると考えるべきだろう。その社会問題の軸のひとつに男性性ジェンダー問題があり、以前にもマガジン連載の「社会臨床の視界」「臨床社会学の方法」で男性性ジェンダー臨床や加害者臨床として取り上げた。今回はその一環でもある「男らしさの病理」やその背後にある「男らしさの迷宮」について取り上げたい。

というのも世界で起こっている暴力事件をみるとこのテーマが見え隠れするからだ。たとえば、アメリカのフロリダ州オーランドの LGBT ナイトラウンジにて、2016 年 6 月 12 日、男がいきなり発砲し 50 人が死亡（内 1 人は犯人）し、53 人が負傷する事件が起こった。加害者は 29 歳男性（死亡）である。日本でも、19 人の命が奪われた相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」殺傷事件（2016 年 7 月 26 日）が起こった。優生思想や障害者の排除・差別の現実を映している。被疑者は 26 歳男性。さらに 8 年前の秋葉原通り魔事件（2008 年 6 月 8 日）。7 人死亡。加害者は 25 歳男性である。他にもこうした事件がある。

これらの暴力加害者は男性である。この点について、「無差別殺人は、弱い者をねらっているので無差別ではない。男性犯罪者の場合、『男の問題』としては捉えられてこなかった男性自身が、自分の立場と重ねるように考えるという姿勢・男の怒りや悔しさが暴力で発散されうるという問題を、男自身が考えるべき。」というまっとうな指摘がある。

しかし続けて、「男の犯罪を、社会問題を問う視点だけではなく『男ゆえの病』として考えること。」という結論には留保がいる（北原みのり「男の暴力ー

秋葉原無差別殺傷事件に思うこと」『世界』2008 年 8 月号、岩波書店)。なぜなら、「男ゆえの病」が生物学的な男性をすべて均質に扱うことにならないようにすべきだからである。そこで「男らしさ（男性性）の病理（＝男性問題)」として考えてみる（詳細は次の文献に記してある。中村正「男性性・男性問題をめぐる臨床社会学―親密な関係性研究に焦点づけて―」、第 50 巻第 1 号、『立命館産業社会論集』。タイトルから検索してもらうと自由にダウンロードできる)。

男性問題としての把握

筆者なりの男性問題についての説明はこうだ（『現代社会学辞典』、大澤真幸、吉見俊哉、鷲田清一編集、弘文堂、2012 年。2012 年版で社会学の辞典にはじめて「男性問題」という項目が加わることになった。以下のようにその項を執筆した)。

ジェンダーは性において非対称な関係性があることを指摘し、集団としては支配的な地位にあるジェンダーとして男性をとらえた。人格形成、対人関係やコミュニケーションの仕方、感情規則、行動様式等の総体に男性性のジェンダー作用がみられる。また、男性に期待されるライフスタイルとライフコースが編成され、社会的諸属性（階級・階層、学歴、職業的地位等）や家族的構成（出生順位、家族履歴、親族関係等）と相関して、個人としての男性の有り様が形成されていく。社会的役割として、ライフサイクルにおいて少年、夫、息子、父親という諸相があり、ここに家族関係、性・セクシャリティが関わり男性の多様な生活が構築される。男性役割は、弱くあることの否定、防衛機制としての虚勢（暴力)、逸脱行動と攻撃性の媒介、感情面での脆弱さ、ケアからの疎外等の動因となりやすく、全体としての人間性形成に困難をきたすように作用する。その結果、男性の生き辛さや行動上の諸問題が派生する。

男性問題、男性性・男らしさに関わる研究も徐々に進んでいるが、女性学やフェミニズムをもとにして女性運動・政策が進んだようには男性をジェンダー秩序から「解放」しようとする運動・政策は進んでいない。ジェンダー秩序のなかでは男性も抑圧されているはずであるにもかかわらず男性研究、男性問題対策は進まない。もちろん加害性と被害性の両面があることを男性学・男性研究は指摘してきた。

たとえばアメリカの男性問題研究者、ウォレン・ファレルは、「男性が三つの W（女性 women、戦争 war、仕事 work）をめぐって命をかけることを余儀なくされた男性史」の視点を提案している。一例として、低賃金の仕事に女性が割り振られていることと対になって、「さらされる職業」（警察、消防、除染、兵士という死のリスクのある職業のこと）に男性が多く従事せざるを得ない事態は同等に注目されるべきだという（『男性権力の神話』作品社、2015 年）。

この課題は、危険回避、安全確保、災害救助という領域の男性性とともに、国家の暴力性とそれに荷担している男性性との関連、秩序維持、征服・戦争にかかわる職業分担のリスクの話である。軍産複合体、戦争システム、家父長制、テロ対策、安全確保政策等が重なり合う現代社会を男性性が支えている。ファレルはその過程で、そのこと自体の内省はせずに男性被害を強調していることになる。ファレルの原書が刊行された 1993 年前後に筆者はそれなりに取り組みのあった米国の男性運動について調査をしていた（中村正『「男らしさ」からの自由』かもがわ出版、1996 年)。

その後米国は「9.11 体験」を経て、被害だけでないテロ対策という名の自らの加害に関わる暴力問題を抱えるに至った。もちろんテロそれ自体は男性問題ではないが、「戦争・紛争は男性的な顔をしている」といえる（ストーキングヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』岩波現代文庫 2016 との対比でいえばという例えとして)。男性性のもつ加害荷担とそれが被害性を招き寄せること、そしてその被害を被害と感じさせない物語が構成されていくことをみるべきであろう。戦争、暴力、正義、秩序、組織のために闘争する男性たちの物語は絶えず美化されてきた。そうしたことも統合して男性性がある。「さらされる職業」の幅は広いがファレルにはこうした視点は弱い。この延長に、女性兵士も男女平等の帰結として存在していくのだろう。男並み平等の典型である。

もちろん、ジェンダー論は、被害と加害という二分法、あるいは女性と男性という二分類ではなく、支配と抑圧の性としての面とジェンダー秩序によって抑圧される性でもある両面を視野に入れるべきだろう。そして、男性と男性の関係性も重視し、複数の男性性 masculinities を把握する。

フェミニズム・女性学は、確かに、男性学を始動させる刺激であったし、いまでもそうであるが、二項対立的な対女性への暴力を中心とした男性の加害性の強調になりがちな面もある。そして男性が男性をコントロールするという面をうまくすくいとれない。ジェンダー秩序による被害性が加害性へと展開していく様相も把握すべきだろう。

男性問題・男性性について把握すべき焦点のひとつが、暴力臨床、加害者臨床、司法臨床、非行臨床等の一連の取り組みである。さらに、他害の暴力問題行動だけではなく、自害とも重なるアルコールや薬物依存、性依存、ギャンブル問題等があり、嗜癖と嗜虐の問題を構成する。

筆者は、男らしさの病理のスペクトラムととらえている。嗜癖・嗜虐問題としての男性問題の側面は、それが物質であれ行為であれ、自己との関係性の失調に伴い、繰り返し反復する行動となり、問題に依存した生活となり、関係性の病理へと展開していくことになる。

男性性を語る言葉は少ない

さらに、ジェンダー秩序を個人の男性が内面化していくと、現実には理想的な男性性はなく、逆に実現できない期待値としての男らしさ像によって自らを縛る。自縄自縛という面があり、男性心理としては男らしさの迷宮（ラビリンス）に陥る。それを解消しようとする問題解決行動に取り組まざるを得なくなるが、そこに用意された選択肢それ自体もこのスペクトラムのどこかに位置づいていて、男らしさの秩序にまみれ、不健康さや逸脱性を強化していくことになる。これを偽問題解決行動という。

さらに、男らしさの病理という言い方は、どこか弁解じみていて、敗者の弁という性格をもつので、なかなか男性たちには受け入れがたい心的現実である。否認の病理ともいえる事態である。問題を語る言葉それ自体、自らの課題を語ること自体に男らしさの罠がみえてくる。

これはジェンダーやフェミニズムという言葉が女性に解放的なインパクト（エンパワーメント）を与え、定義されていない問題を次々と構築していったことに比べるとわかりやすい。しかし男性性やジェンダー論は男性には同じようには影響を与えない。それとは逆の否定的な印象をもたれる

ことになる。だからフェミニズムに対応するマスキュリニズムという言葉はない。

こうして考えてみると、男性性を語る言葉がないといえるだろう。女性性ジェンダー論とは非対称である。「ワード word がワールド world をつくる」という「社会構築主義（本マガジン 25 号)」からすれば、まだ言葉がなく、定義されない現実がまとまりなく漂流している段階である。男性性・男らしさを語ることは男性の行動と心理の考察につながる大切な領域となっているが、その動きは鈍い。当面は否定的なことと男性性の可視化をとおして男らしさの再考を促していくしかない。まさに暴力、アルコール、薬物、自傷・自殺、ひきこもり、ハイリスク行動、戦争トラウマ等のラビリンス（迷宮）のなかの彷徨と漂流を記述することが男性学研究となっていく。

その結果、男性にとってのジェンダー論は、エンパワーメントというよりはパワーダウンとして受け取られる。それは一種の去勢のようなのだろう。せめてパワーシフト程度には男性の生き方が展望でき、生き続けることができるような、男性の豊かな自己表現のテーマを拓くものとして男らしさの言葉があればと思う。この意味では、これまでのような加害と被害という単純な二分法を超え、男性のおかれた現状を具体的にとらえていくことのできる男を語る言葉がいる。

男らしさの被害の語り方−個人の心理問題としてはどう現れるのか

『男はプライドの生きものだから』（テレンス・リアル、講談社、吉田まりえ訳、2000 年）ではメンタルヘルスと男らしさの相関が「隠れたうつ病」として位置づけられ、豊富な臨床事例にもとづき記されている。身体の病気をはじめ、アルコールやドラック依存症、家庭内暴力、親密な関係性がもてない、職業を維持できない等である。

うつ病には二重の偏見がつきまっている。精神病に対する偏見と、女性的な感情の障害であるという偏見である（同書 26 頁。以下同じ)。うつ病の症状が男らしくないものに見える（26 頁）ので隠れていく。

たとえば、「無条件の肯定的配慮」が子育てには必要で、子どものありのままを受け取ることで健全な自尊心が育ち、愛着関係ができる。しかし、そのままを認めることに男らしさは邪魔をする。男らしさは自分が自分を痛めることのようにして克己心をつくり、うつ病を隠していく。それは精神医学でいう「失感情症」と等価である。

嗜癖はコントロールの利かない欲求である。物や人間関係や自滅的な行動を媒介にして自尊心を調整しようとすることが嗜癖とされる。それらは一時的な安らぎとなるがそれが終わると隠れたうつ病の禁断症状がでて、再発の繰り返しとなる。隠れたうつ病者は刺激的な行動により高揚を得て、自己愛を回復するが、それは何かへの耽溺となる。仕事、恋愛、性、賭け事、浪費、鍛錬である。

正常な域を越える嗜癖は、ありのままの自分を認められない。隠れたうつ病者にとって、これらは楽しみでなく苦痛からの解放となって嗜癖・嗜虐に至る。陶酔感、自己誇大化がある。その実行時には「大洋的至福」が訪れ、一種のパワー感を得る。アルコール、薬物、ヘロイン、過食、衝動買い、性、恋愛嗜癖は理想化した愛の対象者への一体化願望があり、自己の価値をその対象をとおして実行（72 頁）し、ストーキング的となる。権力を乱用する虐待行為は他者を支配して自己を誇

大化する。見捨てられる事への不安もあり、暴力は怒りという感情に嗜癖して発現する行動依存となる。

男らしさの病理をつくる「隠れたうつ病」は関係性の喪失に関連している。母親、自分、他者とのつながりが切れることを男の子の成長として観念する傾向がある。男の子に必要なことは男らしさではなく愛情であるにもかかわらず、成長が母親との関係遮断をとおして、つまり他者との幼児的なつながりから大人のつながりに転化することだと観念される。

そして、自分の気持ちとのつながりを断ち、自分の感情を自分に対して隠すことになる。失感情症は「嗜癖的防衛機制嗜癖」をもたらす。苦痛を麻痺させる自己治癒だけではなく、その麻痺した感情を蘇らせるための行動という面が嗜癖行動である。たとえば、危険を伴う行動、賭け事、人や物への陶酔、激しい怒りである。闘争と逃走を刺激する。

しかしこうした男らしさの病理に特効薬はない。あくまでも関係性の回復が大切となる。助けを求める行動それ自体が心を癒やす行動にもなる。女性と比べるとわかりやすい。「自らの弱点を曝したときに人と人との絆は強まるという智恵を女性はもっている。強くなろうと、弱点を認めまいとする男の姿勢は自分以外の人に対しても適用されて、弱者への同情心が薄く、思い上がりの強い人間をつくっていく。人間らしい感情を失い、表現力を失う」。だから、「他者とのつながりを学び直すことが回復への道（160 頁）」となる。

男の子への虐待には、子どもを無力化するような虐待があるが、もうひとつ、たとえばやればできるといいながらスパルタ教育のように、とりわけスポーツを教え込むようなタイプの虐待がある。グループワークの虐待父にもこのタイプが多い。これを「根拠のない有力化（エンパワーメント虐待)」という。そうなれない少年の場合、隠れたうつ病を宿す。

さらに、精神医学者リフトンのいう「自己疎外」も男らしさに関係する。これは、他者への人間らしい感情を遮断することは自己の感情にふたをすることになるという。これを「ダブリング」の過程という。男らしさの病理と重なる側面である。期待された像としての男らしさから程遠いという自己評価によって落ち込むが、それを言葉にできないというジレンマを抱える。戦場から帰った兵士たちのトラウマの一面を構成する。

また、DV が妻のうつを悪化させる場合もある（314 頁)。これは筆者の経験とも重なる。関係性の病理としての家庭内暴力という意味である。虐待親のグループワークでもその様子を語る参加者がいた。彼の妻がうつ病だという。これは「転倒」していて、だから自分が家計を維持し、子どもの面倒もみており、おまけに妻のケアまでしているという。だからそこでのストレスで暴力がでてもやむを得ないという。みずからの暴力の言い訳のように作用している。この「転倒した意識」をグループワークでは扱うことになる。

関係性の病理とは、たとえば女性が無力な人間を装い、隠れたうつ病にある男性を元気づけようとする等が該当する。暴力被害者が加害者のために努力するという関係となる。絆を維持しようとする女性性ジェンダー役割に根ざした親密な関係性における暴力の効果といえる。暴力加害を被害者が修正しようとする。隠れたうつ病の夫を強い男のままにしておくために自分がより弱くなろう

とする女性の被害は DV の結果なのである。

それでも変化を阻む男性的思考との対話

家庭の内外を問わず、暴力は男らしさの病理の典型である。特に家庭内の対人暴力は何らかの分離的な介入が要る。その後に、脱暴力をめざすグループワークやカウンセリングを行う。男性たちと対話していると、たくさんの正当化や抵抗・防衛がなされる。端的には言い訳であるが、少々扱いに工夫のいるものがある。

たとえば「そんなに褒めないでください。なんだか安っぽい男性のように聞こえます。」、「半年くらいグループワークに通ったので私はもう大丈夫です。」、「確かに家庭のなかでの暴力はよくないと反省しますが社会では通用しないのでグループワークでやっていることとバランスがとれません。」、「グループワークやカウンセリングに来るかどうかは自分で決めます。」、「グループワークの脱暴力の目標に向けた工程表のようなものをください。自己改造します。」「複雑な人間関係は嫌いです。妻や子どもとの関係はやっかいなのでシステム思考が働きません。コミュニケーションスタイルの違いでしょう。」等である。

そしてグループワークやカウンセリングが「内面」へ侵入してくるようなものとして受け取られている様子も語る。「（脱暴力が課題のカウンセリングのあとは）なんだか脱力していく感じがするので困惑します。生きていきにくくなります。」、「自分としてはこれまでよい環境や人間関係ではなく逆境のなかを生きてきたと思っています。親父からの暴力もありました。だから男らしく強くなれたのです。この社会を生きていくのに強さは要るでしょう。」という具合だ。

さらに別言すると、プログラムやカウンセリングに操作されている印象をもち、改心を強いられるように感じている。他律的になっていくことへの恐れとでもいえるだろう。暴力はだめであるという上から目線で、外部の力によって、思わず指示されていくことへの忌避感のようでもある。

グループワークやカウンセリングではこうした「男らしさの鎧」のような意識と「格闘」することになる。変容を促す際の障害物となっているようにみえるが、当人たちにとってはそうではない。変化する社会を生き抜く戦略として観念されている。社会のなかの暴力肯定性や男性のあり方を都合よく選択し、再構成し、取り込んでいるともいえる。こうした意識といきなり闘っても無理だ。その機能や役割を一緒に考えていくことになる。なぜなら社会のもつジェンダー意識と共軛関係にあり、それを否定して反省を迫ると空虚感がでてくるからである。代替的に活性化できるものを補填する必要があるからである。

これはもちろん自己中心的なものの見方や捉え方でしかない。妻や子どもや親族から指摘されても聞く耳を持たないどころか、公的機関が介入してもそれに反抗することがある。「私的なことに介入しないでほしい。」、「暴力を振るわれる方も問題がある。」という二つが共通している（これは別に記述した。「暴力臨床論」『立命館文学』646 号、2016 年。タイトル等から検索してもらうと自由にダウンロードできる）。

こうした男性たちのコミュニケーションは独特であり、いったんはこうしたスタイルに即して対話を進める必要がある。暴力や虐待は駄目であるというだけでは、彼らは脱暴力から遠のくばかりで、脱暴力への動機が形成されない。対話をとお

して気づいたことがたくさんある。

男らしい意味付与

第１は、男性たちにとっては褒めるという行為は上から目線と感じるようだ。確かに褒めるという行為は上下関係において効果がある。評価する者が常に褒めることになっている。だから、男性たちは褒められると上下関係に置かれたように感じるようだ。地位降格のコミュニケーションのシンボルのようになっている。こうした男性たちにとって、褒めることができる人は自分を押し上げてくれる信頼できる人に限定される。これは権力や地位という要素をもつ。しかもそう簡単に褒められることはないからこそ価値がある。こうした志向性をもつコミュニケーションが男性性には内包されている。

第２に、男性の自己愛がこうした態度や意識に相関している。「男性は自律性や個人的達成を重視する。・・不適応的自己愛の行動面での表れ方が男女によって異なることが示唆されている。たとえば、女性の場合は、より依存的で執着的な対人行動に、男性は、搾取・利用や権力への執着、リーダーシップ等の行動に表れるとされており、極端な場合、男性は、他者からの賞賛や愛情を得るために、虚言を繰り返し誇大的な自己をアピールしたり暴力をふるったりする傾向があるとされている。」（「自己愛に関する研究の概観―ナルシシズムとセルフラブ、および、質的な性差に焦点を当てて」松並知子『四天王寺大学紀要』第 56 号（2013 年 9 月）。

単にパーソナリティとしての自己愛型ということではなく、社会的役割としての男性性ジェンダーの内面化である。

第３に、男性性は、他者への操作性をコントロールとして発揮することを重視する。だから禁止的なメッセージが強くなる。しかしそれが自らに向けられた場合は操作性や他罰性と映り、防衛・抵抗となる。さらに反省を強いることにも強い抵抗が働く。権威に対しては面従腹背となる。

こうした男らしさの諸項目をリストアップすると、自律性・能動性の過剰さ、メンツ意識、有能感・万能感の確保、自惚れ的な自己愛、他罰性への傾斜等となる。これらは「男らしさの鎧」のように機能する。

自縄自縛する男らしさ

先のグループワークでの言葉をささえる男らしさ意識は、暴力と虐待、統制と支配、他罰的意識、ケア能力の弱さ、失感情症的、親密さ回避、関与の困難、去勢恐怖（脆弱さの否定）、自己顕示的な虚勢（暴力による俊立）等となる。

とはいえ、現実は期待どおりの男らしさではない。自己嫌悪へと至る現実をたくさん抱える。身体的な劣等感（ハゲ、デブ、チビ）、伝統的な男らしさ像である「呑む・打つ・買う」ことができない男性たち、冒険心のなさ、童貞男性へのさげすみ、ぼっち君（孤独が怖い）、非モテ系、「女々しさ」、おくて、感じない男、親密さ恐怖、関係性恐怖等を対象にしてみると、男らしさの苦悩や呻吟の一覧表ができあがる。

自己肯定・他者肯定から遠いところで

こうしてみてくると、「そのままでいい」「自分は自分であっていい」という自己肯定から程遠いところに男性性の意識がある。

いつも「ちきしょう！」といいながら、現在の自分を否定し、乗りこえようとする、野心的でも

あり挑戦的でもある独り言は、時に自傷的な努力を強いて克己心を煽ることにもなる。どちらかといえば男子学生に多く見られる。

それが男の子の発達にも現れる。母子関係や発達の性差を研究しているナンシー・チョドロー（『母親業の再生産 - 性差別の心理・社会的基盤』大塚光子・大内菅子訳、新曜社，1981 年）やキャロル・ギリガン（岩男寿美子訳『もうひとつの声–男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店、1986 年）らの指摘がある。男性的なライフスタイルのコアには男性的なアイデンティティ形成があり、それは男性が絶えざる自己否定の中を生きることをとおして可能となる。「男女いずれの子どもにとっても、母親は退行と自律の欠如を象徴している。男の子はこの問題を性の同一化と関連づけて考える。母親への依存、愛着そして女への同一化は、男性らしくないことを表象している。つまり、男の子は依存を拒絶し、愛着や同一化を否定せねばならない」、「男性の発達が女性よりも複雑なのは、男の子は期待される性の同一化と性役割とみなされるものを手に入れるためには、同一化の対象を変えねばならず、それがむずかしい」とチョドローはいう。

こうなると男の子はいつも自らの特質を否定的な形でしか定義できないことを意味する。女の子の同一化対象は母親にむかう。男の子は母親との親密な関係を否定して同一化対象を設定しなければならない。発達をとおして性別役割が再生産されていくこととなるが、その過程で男の子は独自の心的作業を試みていることになる。男の子の人生において、自立とは、女性的なものとの関係を絶ちきり、母性と異なるものへの自己同一化となる。なんらかの切断、飛翔、決別等の作業がおこなわれている。これも一種の関係切断を意味し、象徴的な暴力性を帯びる。男性的とされる生き方とかかわる競争をささえる克己心も耐えざる自己否定の連続だといえる。

また、男らしさは、一方では、強いことであるとされながら、他方では、やさしいことだという矛盾する中身を要請される。唯一の男らしさの定義は「女らしくない」というものでしかない。つまり、ここでも否定形でしか男の子の自己像が描けないことになる。無条件の自己肯定には係留しにくい男の子の心理的特性がある。それは絶えず進歩する意識をもつべきだという右肩上がり時代の男性の社会的役割に符合する心理でもある。

否定形のアイデンティティのシンボルは暴力である。他者を否定し、対話を拒絶するのが暴力である。女性や子どもに向う暴力だけではない。男性自身も被害者として襲われる暴力（男性同士の暴力）もある。性被害をうけた男の子（男性）は名乗りでにくい自己抑圧のなかを生きざるをえない。

暴力、逸脱行動、自殺、過労死等の社会病理現象とかかわって男性研究の主題がジェンダー論をとおして浮上すると考えるが、その背景には、ここでみたようなアイデンティティ形成という根幹に関わるテーマが存在している。その中心に否定形のコミュニケーションモードが入り込んでいる。これは男性性に課された心理社会的負荷といえる。文字通り、「男もつらいよ」的な状況である。

男らしさから遠いところにあるケア–上野千鶴子さんの指摘

自己肯定から遠いところにある男らしさがあるとすると、少子高齢社会の今後を考えたとき、ケアと男性性のテーマが課題となる。「育児・ケアは

非暴力を学ぶ実践」と上野千鶴子さんはいう（2014年5月14日付『中外日報（ほっとインタビュー）』）。

・・縁は弱さでつながります。強い人はつながる必要がありません。弱さでつながるためには、自分が弱いと認めなくてはなりません。・・女にはそれが何とかできますが、男にはできません。自分を弱いと認められないのが男の弱さです。「男らしさ」には三法則がある・・。第一は人生の窮地に陥った時の現状否認。現実を認めない。子どもが障害を持って生まれたり、不登校になったりしてもそれを認めない。第二は逃避。逃げ隠れする。妻の話を聞かない。家に帰らない。残業をやって遅くなる。第三が嗜癖。逃避した先にハマる。溺れる。そのメニューは酒、ギャンブル、女など、たくさんあります。それから第四法則として、キレる、と言う人もいます。

端的な指摘である。ケア行為は伝統的な男性性と対極にある。ケア行為に男性がどうかかわるのか、大介護時代を迎えて応答すべきであるが、しかし現実には、筆者なりに名づけている「ケアからの疎外」という事態がある。老老介護、息子介護、夫介護も比重が大きくなり、介護離職も喧伝される社会問題ともなっている。男性のケア力向上は虐待防止という意味でも重要である。さらに上野さんはこんなエールも送る。

子育ても介護も、する側とされる側の関係は非対称です。目を離したら死んでしまうという、絶対的な強者と弱者の関係。ケアする側にとっては、相手に振り回される、うっとうしい経験でもあります。「いっそベランダから投げ落とそうか」という気持ちを一度も持たずに子どもを育てる母親なんていないはずなんです。女の人たちは「よくもこの子を殺さずに育て上げたものだ」という感慨をどこかに持っていると思います。親を介護しながら「一日も早く死んでほしい」と思う家族介護者もいることでしょうし。そういう関係の中で嗜虐性や暴力性を抑え、自分の力を使わないでいる経験を積むことについて、「ケアは非暴力を学ぶ実践」と、私は言っています。自分の嗜虐性と暴力性をどう抑制するのかは経験と学習です。その経験の場を男から奪うなと思います。・・そこに男も関わり、非暴力を学んでいってほしい。

相模原の障害者殺傷事件に照らして考えると次の発言も鋭いと思う。

生きること自体は自然な本能だと皆どこかで思い込んでいる。だから、死ぬことに価値や意味を見いだすために、過去いろいろな人たちがいろいろなことを言ってきた。正義や真理、国家など、いのち以上の価値が世の中にあると言ってきたのがナショナリズムであり、軍国主義であり、全体主義であり、宗教もその片棒を担いできた。そのために営々と男たちが知恵を絞ってきた・・。重度の障害を持つ人などに対して「こんなになってまで生きていなくてはならないのか」と、生きる価値のあるいのちと、生きる価値のないいのちを選別する思想もあります。ということは生命以上の価値があれば、そのために生命を犠牲にしていいということになる。そして生命に価値の序列ができ、選別が起きる。障害者たちはずっとそういう目に遭ってきた。

（http://www.chugainippoh.co.jp/interviews/hot/20140514-001.html）

女性たちのレジリエンス–三度の翻身

柔軟な対応を求められるケア行為。それと男性性の関連は今後の大きなテーマとなるだろう。鶴見俊輔さんが熊本で絵本の会をやっていたときの

話を思いだした。

女性は嫁ぎ、名字を変える。自分を変えていかなければならない。そこで培われていく力強さがあるという。生まれた町と、子どもの手をひいて歩いた町、つまり子育てした町、自分が死んでいく町を転々としながら、自分の身を変容させていく。そこには男のレジリエンスと違う関係のなかでの育みがある。いじめがあったり、差別があったりしても、子どもの手を引いて歩くことによって何かが育つ。嫁いびりもあるかも知れないが、関係性のなかで意識が構成される。絵本の会で、関係性のもつ束縛も含めて女性たちが語る。そうした女性たちの力を鶴見俊輔さんが感じたらしい（鶴見俊輔『神話的時間』熊本子どもの本研究会、1995 年)。

筆者も小さな娘を連れて、単親赴任したことがある。単身赴任でない。それはサンフランシスコだった。普段、保育園に通って子育てしたところは京都の御室（おむろ)。子育てした町には独特の愛着があり、いまでも鮮明に記憶に残っている。自らの出生地とは異なる広がる関係性（子どもとの関係だけではなく、子育てにかかわるすべての人たちとの関係性）がある。そして、時間や空間の見え方も違う。速度も違うし、高さも違う。子どもの手をひいて歩くと時間かかるけど、いろんなものに眼がはいる。体験の構造が異なるものだった。子どもを育てて親になっていく。これを親子年齢という。

支配の心理をこえて

こうしたケア行為は常に「対関係」でもある。相手がそこにいる。具体的な他者として。非対称関係性のなかで成される行為である。しかしそこには苛立ちも相当にある。それをとおして培われる力がある。

関係性の理論と実践ともいえる対象関係論はこの視点をもっている。ウィニコットも「男ゆえの病」について、「支配者の心理」として記している（『子どもと家族とまわりの世界（上）赤ちゃんはなぜなくの−ウィニコット博士の育児講義』、D.W.ウィニコット著、猪股丈二訳、星和書店、1985 年)。

支配者配者の心理を研究すれば、とりわけ支配者自身の私的な闘争のなかに、今なお女性からの支配を無意識的に恐れ、女性に順応し、女性のために行動し、そしてそのかわりにあらゆる服従と「愛」を要求することにより女性を統制しようとしている心理のあることが分かるでしょう(4 頁)。・・・女性恐怖は、集団の中で外見的に非論理的な行動をとる人の主な原因なのですが・・。各個人の生活史のなかで恐怖の根源をたどってみると、この女性恐怖は依存ということ、つまり生まれたばかりの頃の絶対的依存を認めることの恐怖であることが分かります（5 頁)。

ケア行為は依存と自立の関係をめぐる行為である。セルフケアも含めて介護と育児の未来を考える上では欠かせない領域であり、男性性と関連が問われる課題となっている。現在では、せいぜい、「ワークライフバランス」という言い方で仕事と会社が中心の男性たちの生活を組み直すという点に関心が集まる程度である。

男性の生活や家族領域における課題は「ケアへの接近」といえる。そのためも社会的条件の整備が不可欠である。たとえば「イクメン」と「ケアメン」という言葉が流通している（こんな言葉はなくしたいが)。男性介護者は、夫が妻を介護する

場合と息子が親を介護する場合として増加し、2004 年には両者あわせ 25%をこえた。高齢者虐待の事件化と重なるリスクとともに語られるようになったがリスクばかりではなく家族介護者として期待もされていく。

育児については、男性が育休を取得する比率を高める努力が継続され、そのための条件整備はすすむ。直近では 2009 年に育児・介護休業法が改正され、父親が育児休業を取りやすくする改善となっている。たとえば妻が専業主婦であっても取得可能となり、産後 8 週間以内に育児休業を取った場合は再度取得可能なこと、両親双方が育児休業を取得した場合は育休可能期間を 2 ヶ月延長できる等である。

とはいえ、子どもをもつ予定の男性の 43.4%は取得を希望しているが実際の取得率は 1.23%に止まる現実はあまり変化していない。

また、現在第 10 回調査となる厚生労働省の「21 世紀出生児縦断調査」は子どもがゼロ歳時点での子育て調査となっているが、そのなかでは 1 週間の労働時間が 60 時間を超えると父親の育児参加の度合いが大きく低下する傾向が指摘されている。また、夫による妻介護の場合にみられる介護離職もある。

これらを一言で言えば、「ケアからの疎外」といえるだろう。男性が育児や介護に関与しにくい理由は社会的につくられているということである。

ケアへの接近とケアからの疎外

ケアへの接近は、家族的介護や育児の責任を家族にのみ押しつけることになるという点には留意しつつも、男らしさ再考にとっては重視したい。仕事の時間以外のボランタリーな活動領域や時間の確保、そうした活動がもつ仕事へのよい影響という点でも重要であり、仕事上の能力にも活きる。現代社会において求められる社会人力である「他者とともにある、多様性のなかを生き抜く、自分で決定できる能力」として定式化されているキー・コンピテンシーにも近い。

ワークライフバランスは脱会社人間的な人生の時間配分、余暇や趣味との両立、親しい関係や弱い者や弱くあることとの関係づけ、家族的責任とジェンダー平等、男性性の社会的基盤の解消という方向性で強調されるべき論議にまでの広がりが大切となる。公的には父親政策や男性問題対策、働き過ぎ対策とも重なる。

さらにケアする力の形成は男性の感情生活や生活自立を助ける。男性の生き方に幅を与えることとなる。社会的弱者への理解と行動は自らの人生の強弱の理解を助ける。自律的でない人への支援ということは仕事の価値観とは異なるテーマである。障老病苦との関係づけは無条件の自己肯定・他者肯定の典型的テーマである。

たとえば、受験失敗、リストラや失業、離婚、病気や中途障害にはじまる一連の「挫折体験」は、会社中心社会の階層構造の落伍者、家族中心社会における稼ぎ手役割からの落伍者という負の烙印となり、男性に心理的負荷をかける。うまくいかない出来事それ自体に直面し、なんとか努力する前に、男らしさという心的現実を再構成する必要がでてくる。いわゆる挫折を「受容」するという作業である。うまくいかないと、自暴自棄になり、ギャンブル、アルコール、暴力と怒り、孤立等という男らしさの病理にまみれることとなる。回復し、リハビリし、待ち、ふがいなくなることを受け入れるということはケア行為から学ぶことだろ

う。

無条件の他者肯定が求められるケア行為は伝統的な男性性とは程遠い。しかし生き延びていくには不可欠の活動でもある。男性にもそれが求められるようになっている。

男性たちがこうした事態を受け入れるためには、無条件の自己肯定の体験を経由するべきだろう。伝統的な男らしさに内在するケアからの疎外を懐疑しはじめる契機となる。ケアの領域に関与することのできる男らしさ像はこれまでの男らしさとは異なるからだ。

また、ケアすることの意識化は「ケアされること」の意識化にも通じる。依存することと男性性の関連である。「高学歴男性、家事遂行度の低い男性、夫婦愛意識が強い男性では妻への依存度が高くなる」という指摘がある（松田智子「高齢男性の依存性に関する一研究」（『社会学部論集』第 34 号、仏教大学、2001 年）。

これをケアとの関連でみると、女性への依存となり、自らケアする諸力や第三者にケアを託するという力、そして何よりもケアを受ける力という意味でのケアされる能力の形成を伝統的な男らしさ意識は疎外しているといえる。

男らしさの迷宮からのエクソダス（脱出と逃走）

無条件の肯定は、親密な対の関係性だけではなく、社会的な関係性においても男性性からみて課題となる。組織のマネジメントの場面、指導と被指導の場面等である。家庭内でも子どもが不登校やひきこもりになると父親はそれを認めがたい。強い自立の像があり、それが男らしさ意識と共振し、弱くあること、依存すること、病むこと、老いること、問題を抱えること等を否定する。肯定すべきことは無際限ではないにしろ、人が生きていく上で苦しくなること、脆弱になることはありうることなので、強い個人だけを想定せずに受け入れることが大切となる。他者との関係性と自己への配慮は男らしさの迷宮からの出口の契機となる。

脱暴力のための特別で万能なプログラムやカウンセリングがあるわけではなく、暴力を含んだ生き方そのものの変容への長い取り組みがあるだけである。

2016 年 8 月 31 日受理

中村正（なかむら ただし／臨床社会学、社会病理学、社会臨床論）

ケアマネ　あの目　この目

暮らしのそばに・・・

指定居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

ケアマネジャー　木村　晃子

初夏の出来事　要介護者のいる家族の小旅行

初夏、家族の介護をしている人が、小旅行にでかけたいという話しをしていた。要介護の家族は一緒に行くことを望んでいないし、一緒に行くというのも難しいらしい。介護保険サービスは利用していない。要介護と言っても、一人で留守番はできる状態で、「たぶん（数日間の留守番は）できるはず。」というのも、家族の見立てだ。結果として、この話しを聞いていた地域の人が、留守中に留守宅を訪問し、留守番をしている要介護家族の安否を確認していた。安否の確認と言っても、そこには、地域で暮らす者同士の交流があった。

家族が帰宅するまで、無事に過ごすことができた。



地域包括ケア？

この家族の小旅行のお話を聞いた時に、現在しきりに叫ばれている「地域包括ケア」という言葉が実現しているような気がした。「地域包括ケア」や「地域包括ケアシステム」とは、<u>住み慣れた地域で最期まで暮らし続けられること</u>、という意味合いだ。もっと平たく言うと、「地域まるごと支え合いのしくみ」、地域に暮らす全ての人の、居場所と出番がある暮らしのこと、と言っていた方もある。では、現実は、いかがなものか？相変わらず、資源整備に躍起になって、連携・連携と言いながら、当事者が置き去りにされている風潮はないだろうか？と感じることが多々ある。

話しを元に戻そう。前述した家族の初夏の数日間は、家族の希望が叶ったこと、本人が、介護サービスの利用も、家族との旅行も希望していず、自宅で留守番をしていたいという意向を持ち、それが地域の人に支えられて実現したこと。これは、まさしく、本人も家族も、地域に「まるごと支えられた」と言っても良いのではないだろうか。

ソーシャルケアマネジメント

ソーシャルケアマネジメントとは、長期にわたり、さまざまなケアを必要としている人々が自分のコミュニティの中で、安全で安心して暮せるように援助していく、多角的なソーシャルワークサービスのことです。[i]

私のような、日本の介護保険制度における介護支援専門員（ケアマネジャー）は、ともすると、地域に暮らし、ケアを必要とする人のニーズを、介護保険サービスのみに繋ぐという手法に偏っている印象もある。それは、介護支援専門員にソーシャルワークの力量がないという技術的な側面の話ではなく、介護保険制度における仕組みにも起因しているのではないか。介護支援専門員の報酬の発生は、介護保険サービス（給付が発生するサービス）を調整し、利用があった時にのみ算定することが可能なのだ。今、地域包括ケアの名のもとに、地域づくりや、介護を必要とする人のニーズに対応するのは、制度サービスのみならず、地域のインフォーマルな資源の活用が重要であると言いながら、インフォーマルサービスのみ調整した場合には、介護支援専門員の報酬は全く算定されないのだ。これは、一介護支援専門員が、どんなにやる気があっても、事業所（経営者）の理解がなければ、真のソーシャルケアマネジメントを実行することは難しい。

また、別の側面も考えてみよう。リスクマネジメントや、根拠というものが常に要求されている。誰からの要求なのか。それは、誰も責任をとりたくない社会からの要求ではないだろうか。私たちは、どのような状態においても、「絶対安全！」と言いきることができる状態の中で日々過ごしているわけではない。どんなに万全を期したつもりでも、予期せぬことが起こることもあるのだ。ある程度のリスクを覚悟しながら生きているのが人間だ。認知症患者が鉄道事故を起こした際に、責任の所在が追求されたことは記憶に新しい。結果として、同居の妻への責任は否定されたが、様々な条件下での課題は残されている。リスクマネジメントを徹底するとすれば、要介護高齢者のサポートを、制度サービスではないインフォーマル資源に結びつけることはかなりのハードルとなることは想像に難くない。しかし、何もかも、制度サービスに結びつけることをルーチンとしてしまうと、要介護者の意向は後回しにされ、その尊厳はどこへ行ってしまうのだろう。



互いを知る

冒頭で紹介した家族の話は、地域で３年目に突入した認知症カフェの場でのことだった。認知症の当事者や、介護者家族、認知症や、介護全般について興味関心のある地域の人たちが集まって、日頃の思いを語り合う場所である。カフェが始まった当初は、現役介護者の参加も少なかったが、やがて口コミで広がり、現在は、定期的に参加する方が増えている。その中で、参加者同士は、地域の中に、どのような困り事を持った人がいるのかを知ることができるようになった。また、それぞれの「ちょっとできること」も見つけられるようになってきた。自分の地域で、どのような人が、どのような暮らしをしているか、ということを知ることは、それぞれの活動が広がっていくきっかけに役立っている。地元に長く暮らす人は、私たち専門職よりもずっとネットワークを持っている。そのネットワークを紹介してもらうことで、地域の中の人と人とがつながっていくのだ。

私たちは、困り事が出来たとき、まずは身近なことから解決策を探すだろう。いきなり、あれこれ専門的資源の調達には走らないはずだ。まずは、自分のできること、自分たちのできること。そして、どこのだれに協力を求めるのか。常に、スタートは、本人のいるところから、と感じる。暮らしの主体者たちが、自分たちにできることを見つけられるようにというところを育んでいくことが、専門職に求められていることではないだろうか。

まずは、知り合うこと、ここが出発点である。

---

[i] １引用文献：ソーシャルケアマネジメントの基礎　ウィリアム G.ブルーグマン　著　発売（株）成美堂

カウンセリングのお作法　第八回

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

家族理解の手立て　家族ライフサイクルを知る

家族理解の手立て

前回は、家族カウンセリングを進めていくときの基本姿勢について、話しました。

実際に、ご家族とお会いしてカウンセリングをするまでに、学ぶことがいくつかあります。

大きく分けると、家族のことを理解する手立てを知ることつまり、どんな家族なのかをどうやって知るのかということです。そしてもうひとつは、家族を支援する具体的な技術スキルを身につけることです。

ここからは、家族理解の手立てについて話していきます。内容は、家族ライフサイクル、家族構成図＝ジェノグラムそして、家族評価＝どんな家族かを知るものさしについてです。

まず、家族ライフサイクルについて説明していきましょう。

支援を必要としているご家族は年齢もメンバーもまちまちです。それぞれの家族が、現在、家族周期のなかで、どのステージにあるのかについて確認をします。

家族の発達段階

家族療法家のJヘイリーは、婚約期・新婚期・子の出生・育児期・中年夫婦期・子離れ期・老人夫婦期・老年期の痛みに発達段階を分けています。

人は、個人のライフサイクルとともに家族ライフサイクルがあり、それぞれのステージで、発達課題があります。

家族ライフサイクルでは、とくに、ライフステージが移行する前後は、不安定さがともないます。

望んで結婚したもののふたりで波長をあわせてやっていけるのか、子どもの誕生の喜びともに、子育ての忙しさをどう乗り越えるのか、などの節目で、その変化に適応する必要があり、同居家族だけでなく、年齢に応じて、拡大家族として、新しいつながりをつくっていくことになります。

次のページで、それぞれのステージと、ステージに求められる第二次的な変化について、示しました。

どんな家族もライフステージの変化にすぐなじめるものではありません、試行錯誤を繰り返しながら、それぞれの家族のスタイルを築き上げていきます。

家族ライフサイクル　M.マクゴルドリックとB.カーター　1989

家族ライフサイクルの段階	移り変わりの情緒的プロセス	発達をすすめるのに要求される家族状況内での第二次的変化
1　自立した若者	両親･子どもの分離の受容	・出生家族からの分離 ・友人との親密な関係作り ・仕事面での自己の確立
2　新しく結婚した夫婦	新しいシステムへの献身	・夫婦システムの形成 ・配偶者を含んでの拡大家族や友人との関係の再編成
3　幼児のいる家族 	新しいメンバーを受け入れる	・子どもを含めた夫婦システムの調整 ・子育ての役割をする ・親の役割、拡大家族との関係の再調整
4　青年期の子どものいる家族	子どもの独立を認めていくため家族の世代間境界を柔軟性にする	・青年期の子どものシステムからの出入りを受容するため、親子関係をシフトする ・中年夫婦や仕事の問題に再焦点化 ・老年への関心を持ち始める
5　子どもたちの門出と移動	家族システムへの出入り口の増大の受容	・二者関係としての夫婦システムの再調整 ・親子関係を大人同士の関係に発展させる ・配偶者の親・きょうだいや孫を含めての関係の再編成 ・両親の老齢化や死に対処すること
6　老年期での家族 	世代的な役割の移行を受け入れる	・自分および夫婦の機能を維持し、身体的な衰えに目を向け、新しい家族や社会での役割選択を試みる ・中年世代が中心的な役割をとれるよう支援 ・配偶者、仲間の死に対処し、自らの死の準備をする ・生涯をふりかえり、統合する

家族理解の手立て

家族構成図ジェノグラムから読み解く

家族構成を知る

家族面接は、家族に関するさまざまな情報が必要です。

まずは、家族構成を知ることです。

父母は？きょうだいは何人か、祖父母やそのほかに同居人はいるかなど、家族のメンバーを知ることになります。

家族の情報は、面接の申し込みのときに、電話等で確認することが多く

「ご家族を教えください。何人家族ですか、どなたがおられますか？」

と、ききながらメモとります。

その記録が、家族構成図ジェノグラムです。

電話の時点では、家族のメンバーについて簡単にうかがいます。そして、初回に来られた受付で家族のそれぞれの名前、年齢、学年などを記入してもらい、初回面接がスタートする時点で、面接に来ている人だけでなく、来ていない人も含めて、家族全員の把握ができます。

おじいちゃんやおばあちゃんは？

一緒に住んでいないけれど近くに住んでいるおじいちゃんとおばあちゃんがいる、という話のなかで、暮らしている中でどのような登場人物がおられるのかも把握できます。

二年前に母が亡くなったとか、この間まで父は、単身赴任をしていたとか、実は長生きしているペットがいて、家族も同様だという話などがあり、家族の歴史が見えてきます。

たとえば、子どもさんが問題をかかえているとき、どのような人がこのことをご存知ですかとたずねることで、関係者などを確かめることができます。

家族構成から推察

また、名前、年齢、家族の人数の情報を得ることで、現在抱えている課題内容や、性格や心理的な話題に触れる前から、家族の特徴がわかります。

多人数の家族や、男兄弟の多い家族、ひとり親家族、名前や年齢差から推察されることがらなど、自然に感じ取れることがあります。

みな同じ文字が使われていたり、お父さんが全員の名前をつけていることがわかったり、きょうだいの年齢が離れていたりすることで家族構成から伝わることがあります。

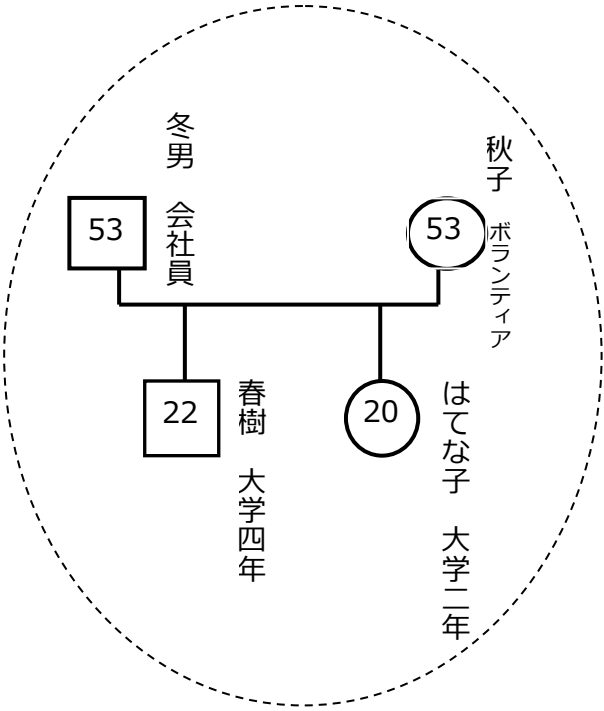
家族構成を知る はてな子さんの家族構成ジェノグラム


父　冬男　　53 歳　会社員


母　秋子　　53 歳　ボランティア活動


兄　春樹　　22 歳　大学 4 年生


私　はてな子　20 歳　大学 2 年生



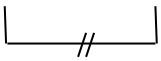
ジェノグラム家族構成図の書き方の例

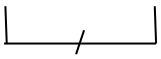
男＝□　女＝○

問題を抱えているとみなされる人　回　◎

死亡　□○に×印　または　■　●

婚姻関係　 

離婚　 

別居　 

子ども　出生順に左から右へ記入

同居　点線で囲む

氏名　年齢　学年　職業などを記入

ペット＝◇

家族理解の手立て

オルソン円環モデル　きずな　・　かじとり

どんな家族？

「あなたのお母さんは、どんなお母さんですか」

とたずねられると、返答しやすいけれど、

「あなたのご家族はどんなご家族ですか」

となると、なかなか答えづらいです。

日頃、家族をひとまとまりにする見方をしていないため、適切な表現はむずかしいです。

以前、家族カウンセリングは、家族の全体を見る必要があるということをお話しました。

今回は、家族全体を視野に入れて、理解するときに、手立てとなる家族評価、「家族をどのようにみるのか」のものさしの例について、オルソンの円環モデルを最初に紹介します。

家族評価

オルソンは、家族を理解する際に、「きずな」と「かじとり」の二つの尺度から家族を評価しました。

まず、きずなとは、家族がお互いに対して持つ情緒的結合です。その程度に応じて、バラバラ、サラリ、ピッタリ、ベッタリの四分類し、なかの二つをより健康度が高いとしました。

（次頁オレンジの矢印部分）

かじとりとは、状況的、発達的ストレスに応じて、家族システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力です。融通なし、キッチリ、柔軟、てんやわんやに四分類して、なかの二つをより健康度が高いとしました。

きずなについては、家族お互いが、離れ過ぎず、ひっつきすぎない、サラリ、ピッタリの中庸がより健康的であるとしました。

かじとりは、家族の行動するときのパターンが、厳格に固すぎず、かといって、いつも混乱しない、家族内の規範はある程度、キッチリあるいは、柔軟である家族が、より健康度が高いと評価しました。

たとえば、家族のきずなについて、考えてみると、子どもの年齢が小さければ、よりべったりの方向に向かいやすいです。そして、年齢が上がるとともに適度な距離が必要になると考えられます。また、かじとりについても、同様、子どもの年齢とともに家族の行動や状況に徐々に変化が必要であることは、家族ライフサイクルからも理解ができます。

家族評価



はてな子さん　カウンセリング初学者

家族ですか、四人家族で、えーっと、母は、父は、家族について何を言ったらいいかわからない



ＣＯＮ子さん　心理カウンセラー

はてな子さんの家族のことをうかがいますが、どんなご家族ですか？

表現がむずかしいですね、それでは、家族の尺度について紹介します

オルソン円環モデル

きずな **cohesion**	バラバラ disengagement	サラリ separated	ピッタリ connected	ベッタリ enmeshment
かじとり **adaptability**	融通なし rigid	キッチリ structured	柔軟 flexible	てんやわんや chaotic

きずな　➡　家族のお互いに対して持つ情緒的結合

夫婦関係　親子の連合　内的境界(時間・空間・意思決定)　外的境界(友人・趣味・余暇活動)

かじとり➡　状況的、発達的ストレスに応じて家族システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力

リーダーシップ　しつけ　問題解決の相談　役割関係　きまり

「家族システムの理論的・実証的研究　オルソンの円環モデル妥当性の検討」1999 年　立木茂雄より

コミュニティ心理学を考える

― Martin-Baro（1）―

藤 信子

7月下旬に横浜で開催された第31回ICP（International Congress of Psychology）に参加した。そこでのラテンアメリカの心理学に関するシンポジウムに出てみた。ラテンアメリカの心理学に関しては、解放の心理学の創始者であるMartin-Baroのことしか知らないけれど、ラテンアメリカの心理学のことがもう少し知りたいと思っていた。そうすると、最初の話題提供から、Martin-Baroの写真が出てきた。Columbiaから2名、Argentinaから1名、Spainから1名の話題提供があったが、その中の3名までが、Martin-Baroに触れたことに驚いたのだけれど、私がそのくらいラテンアメリカの心理学事情についてわかっていないということなのだろう。

ここまで前提無くMartin-Baroと書いてきたけれど、このマガジンでは、彼の唯一の英語版である“Liberation for Psychology”をここ数年大学院で読んでいることに触れている。ここで

Portillo(2012)を参照して、まとめてみたいと思う。Martin-Baro は 1942 年スペイン生まれで、イエズス会（カトリックの修道会、日本人によく知られているのは、フランシスコザビエルの名前だろうか）に入りエルサルバドルに派遣される。イエズス会での修練の教育の修了後、彼はエクアドルの大学で古典人文科学を 2 年間学んだ後、コロンビアの大学で哲学を学ぶ。そしてそこで心理学と出会う。最初の論文は、心理学的治療への Carl Rogers の非指示的アプローチの再検討だった。人間性心理学に加え、彼は実存心理学や精神分析精神療法にも関心を持った。特に Viktor Frankl に強い影響を受けた。その当時 EL Choco のジャングルの中でアフロコロンビアンの地域社会で聖職者として働いていた彼は、ロゴセラピーや実存主義の観点から、権利を奪われた人々の中にある運命論の社会的原因を理解しようとしていた。Frankl の助言で USA でまず実験心理学を学ぼうとしたが、修道会の慣行ではそれは許されなかった。そして 24 歳の時にエルサルヴバドルに帰り、イエズス会の学校で働いた。その後イエズス会の教育で要求される神学を学ぶためにフランクフルトに行く。ここでは彼は解放の神学の主な人物である Jon Sobrino と同時期を過ごしている。

UCA(University of Central Americ、エルサルヴァドルのイエズス会と支持者のよって建てられた大学)で神学を学びながら、彼は心理学を再び正式に学んだ。その時のメンターが、インスブルックで応用心理学と精神分析を学び、熱烈なマルクス主義的社会心理学者の Jesis Arroyo Lasa だった。1972 年に彼は Central American Studeis の編集委員長になった時には、26 編の論文を書いていた。UCA における心理学の学部教育を卒業してすぐに、合衆国での大学院教育のために、Fulbright 奨学金を取った。1977 年に社会科学の修士、1979 年に社会組織心理学の博士の学位を Chicago 大学から授与された。ここまで Portillo の記述に従って Martin-Baro が学んだことを追ったのは、彼を解放の心理学へと導いた一方の教育について見たかったからである。

彼がエルサルバドルに帰国した翌年 1980 年にオスカル・ロメロ大司教がミサの最中に極右に殺された。反政府ゲリラ各派は FMNL（ファブランド・マルティ民族解放戦線）を結成し、政府軍と内戦状態になった。この時 USA（レーガン政権）は、50 人規模の軍事顧問団をエルサルバドルに送り込み、政府を支持した。この USA の中南米を自国の裏庭（back yard）という考えで、キューバのように

社会主義国となることを防ぐために、いろんな干渉をすることに関しては、呆れるような感じを持つけれど、伊藤千尋の「反米大陸―中南米がアメリカにつきつける NO!」（2007）を読むと、合衆国政府の背後にある大資本の勝手さというか、凄さに触れて、この執拗な介入が一応わかる。わかると書いたのは、理解できるという意味ではない、資本主義の怖い面を見ることができるということである。そして余談ながら今の日本も危ないなと言う感じを持つ。

内戦の中で、彼は夜中に爆弾の音で目が覚める体験などを通してサルバドルの人々の苦しみと闘いを共にした。イエズス会の神父たちは、殺害の脅しを受けており、彼らの生命の安全の為に、国を離れることを命令された。彼らはオスカル・ロメロ大司教と数名の神父と修道女を殺害していた。Martin-Baro はエルサルバドルの社会的変化のために、彼の知識を活かそうと考えた。彼は大学のいくつもの仕事をこなし、一方で彼が神父として働く村の生活の中で幸せだった。彼は、貧しい人々を慰め、力づけ、彼らの物質的生活と精神的な状態を改善することを援助した。子どもたちは彼が毎週末来て甘いものを持ってきてくれるのを待っていた。

文　献

Portllio, N. (2012)　The Life of Ignacio Martin-Baro: A narrative Account of a Personal BiographicJournay. Jounel of Peace Psychology. 18(1), 77-87.

伊藤　千尋（2007）反米大陸－中南米がアメリカにつきつける NO!.集英社新書.

蟷螂の斧

次の一歩

社会システムを変える
第２回
『対人援助学マガジン』の発行

団　士郎

なぜ、「次の一歩」なのか。

仕事にはたくさんの人達が関わっている。誰が一番上手か、どれが一番効率的か等、気になる人も多いが実際はそんなことを競っているのではない。

あらゆる仕事には、それが成り立つ経過があり、現状という名の到達点がある。現状は決してないがしろにされるようなものではない。そこにたどり着くのに様々な試行錯誤、工夫や努力が重ねられているのが圧倒的である。

しかしここが最終到達点であるはずはなく、「現状」という名の課題含みの状態である。だから今を生きる者にとっての課題は、「次の一歩」なのである。

今、私が身近に感じてきた業界（児童相談所）で、少なからず働く者が離職、退職する現実がある。現状の厳しさに身体的にも精神的にも音を上げて、撤退するのである。新しく参入した人達は本来、先ず現状の正しい理解を自分のものにし、その後、次の一歩に踏み出すための思索を行う。これが進歩の道筋である。

ところがこれが起きずに、次々人が異動していったり、現任者が退職の道を選択するような事態に陥っている。こんな事では業界そのものが亡びてしまうだろう。

さらに、そういう現実を知った若い人達は、その業界を目指さなくなる。あるところでは、正規採用の公務員の募集に、応募がないという信じがたい事態が起きている。ここに、業態現状の毒性が社会に浸みだしてしまっているのを感じる。

実際は、各府県が同じ状況ではないのだから、改善の余地は限りなくあるのだが、世論という風評への迎合と、組織の自己防衛によって、人材の参入を妨げてしまっている。貧すりゃ鈍するの言葉通り、長時間かかって出現した事態を、速攻の浅知恵で片付けようなどと、経験の浅い使い捨て非正規専門職でしのごうとしたりする。

ここにあるのは根本的な不真面目、不誠実である。いくらスローガンとして子どもの権利を語ろうと、福祉を声高に叫ぼうと、手段化されたところに落ち着きのないものは皆、ボロが出て瓦解する。

簡単なことではない。だからこそ、遠回りだと言われようと、地道な取り組みを続けるしかない。肩書きは管理職だが、短期決算のつじつま合わせしかできない経営者が会社にとって害毒であるように、行政システムに、そんな管理職しか出てこないようでは、それこそポピュリズムの公務員バッシングに、何も反論できないことになってしまう。

「次の一歩」の確認と着手こそが、次世代の為の未来を切り開く道づくりなのだと私は思うのだが・・・。

第二回目の切り口は、この「対人援助学マガジン」である。第26号の現在を、社会システム変化への提案の一つとして解説してみる。

はじめに

対人援助学マガジンとは何モノなのか。その中味ではなく、形式が持つ意味を探す文章から書いてみる。

バックナンバーをいつでも読めるようにしてあるマガジンだから、創刊の思いについては、検索すれば読者はいつでも創刊号編集後記を読むことが出来る。

それ自体、初期の意図にあったことだから、２０１０年６月創刊を振り返りながら、「マガジン」によせた社会システム変化への思いを書いてみる。

以下、「赤文字」は創刊号編集後記から

学会スタート以前

2009年秋に発足した学会ですが、その前、二年余り、京都キャンパスプラザで月例の「対人援助学会準備会」を開催していました。

ここには毎月、ヒューマンサービス分野のいろいろな人にゲストスピーカーとして来ていただきました。そこで見えてきた地域社会のディテールの構築性をとても興味深く思っていました。マガジンでは、そこを更に掘り下げたものが生まれると良いと思っています。月例会も又、再開したいと準備中です。お楽しみに。

現在、この会合は年四回ペースで、マガジン執筆者でもある「千葉晃央」、「中島弘美」が世話人になって継続中である。

創刊

会員112名（2010／5／25現在）の小学会ではありますが、技術革新の恩恵を受けて、こんな形の雑誌が出せることになりました。まず連載を引き受けて下さり、締め切り日に原稿がいただけた執筆者の方々に感謝します。

ご覧の通り、様々なジャンルからの多彩（多才）な顔ぶれによる一冊に仕上がりました。まだまだ展開途上（完成形は全く考えていないので、ずっと展開途上誌です）ですので、学会員のみならず、読んでくださった方々から、幅広く感想やご意見を伺いたいと思っています。

編集長メールアドレス
danufufu@osk.3web.ne.jp

また、新規連載参入の意思表示もお受けしたいと思います。編集者として採否判断はさせていただきますが、多領域から広く捉えた「対人援助学」の花が咲き乱れるといいと思っています。

季刊誌の位置づけです。創刊第二号は三ヶ月後、9月中旬発行予定です。したがって8月末が原稿締め切りになります。連載を開始された方々、心に留めておいてください。

創刊号は執筆者20名、全 78頁のスタートだった。数頁のニュースレターのイメージからいきなり雑誌だったから、最初からなかなかのボリュームだったと思う。

それが現在7年目、2016 年 6 月発行の通巻25号では、執筆者 42 名、全256頁に成長している。編集長としてはますます増ページの一途をたどればいいと思っている。

ご承知の方も多いと思うが、この間、連載者による書籍刊行も複数生まれた。更に、対人援助学マガジンが舞台になって、いろいろな活動が花開いていっている。

それは連載を読んだ未知の読者の所から講演依頼やシンポジスト依頼がくるとか、連載記事を参考資料に指定して、講座の事前学習を求める。近接領域の研究者との交流が、新たに生まれる等である。

これらはいずれも、創刊時に意図したマガジンの役割である。偶然ではなく、こういう流れになっていくことを願って継続してきたのである。

プランド・ハプスタンスのことは中村正さんが連載で触れていた気がするが、私がマガジン創刊にこめた思いは全くそれである。

意図された準備と継続が、直線的因果として、何かをもたらすと考えているわけではない。むしろそれが、どんな幸運や出会いを誘ってくるかは決められない。しかし、必ず何か事前には予測できなかったモノがもたらされるに違いないのだ。

それは社会システムが常に流動、変化しているからである。私達の頭の中は、なかなか変

化しない。そこで立てるプランだから、当然のように硬直化するのである。動いているのは「社会」なのである。

マガジンへ

思いつきは瞬間でした。ニュースレター編集担当の千葉君と話している最中、最初に考えていた印刷物のNLから大きく展開してしまいました。そのことで負担は増えましたが、楽しみも増えました。この着想から考えはじめたら、話題の Free のことや、iPad がとてもしっくり来ました。

「Free」は文字通りタダと言うことである。クリス・アンダーソンの本が話題になった。無料であることでビジネスがどう成立するのかとか、どの業界にあろうと、「無料」との戦いは避けられないなど、刺激的な言葉が並んだ本だ。

「対人援助学マガジン」のコンセプトが、これにとても親和的なのが面白い。自分たちの着手したことが、世界の潮流と重なっていることに納得である。

でもこれは誰かが考え出した理論的なアイデアではなく、今の時代に整備されたインフラを駆使すれば当然、行き着くところである。

共時性（シンクロニシティ）などということをよく言うが、この流れはインフラの整備状況と連動した必然であって、誰か固有のオリジナルアイデアではない。

事態が展開していくところに、さしたるオリジナリティがあるとは思わないが、そうなっていかないところには、頑固な現状維持への無意識の欲望がある。それこそ流動的システムではなく、事実をものともしない個人の頑迷な主張である。

社会のインフラは、あきれるほど日進月歩している。しかし現実の社会では、その手段が十分に生かせているとは思えない。道具は生かした使い方をしてこその道具であって、道具愛が目的になってしまっているような人や話題には関心が持てない。

カラー写真も含む雑誌だというのに、総ページ数も印刷費も発送コストも考えなくていいのです。バックナンバーの在庫管理も、売れ行きも、収支決算も要らない刊行物になりました。

表紙のデザインや基本レイアウトのことを、あれこれ楽しみに考えているだけでした。校正が緩いかもしれないのはお許し下さい。まぁ、素人ですから。

「学会誌」（本マガジンとは別です）を完全にWEB 上の発行にすると言っていた望月さん、サトウさんの意図がやっと理解できました。

私は、学会誌、査読、論文掲載、業績という枠組みの面倒くささを避けていたい人間なので、そちらとは離れたところからエールを送ることにした。そして、このマガジンの発展が私の背負える学会のための、いやいや対人援助世界への貢献だと考えた。

ところで、世の中は、ますます短く、簡潔なものへの指向を強くしています。私の愛読誌「月刊クーリエ JAPON」も何度かのリニューアルを繰り返し、どんどん記事は短いコラム誌のように変身しています。

そんな中だからこそ、長く書かなければ伝わらないこともあるのだというマガジンにしたいと思いました。

専門的ではあるが、読者対象に排除的姿勢をとらない。どなたにも「今、私達の時代のヒューマンサービス世界では・・・」とお伝えできるもの満載になったのではないかと思っています。

雑誌（印刷物）として手にするのが馴染む方は、ご自身でプリントアウトして、ファイルしておいていただけると、雑誌らしさが出るかもしれません。（その場合、出来ればカラー印刷で）。

今後の課題は、会員を増やすための宣材として考えていたニュースレターの役割問題です。無料で誰でも読めるマガジンにしてしまったら、入会するメリットがないという意見。

私も長年そう思ってきましたが、ネット上の無料ソフト開発者のモチベーションの在り方のことを考えると、この思い込みはオールド世代のビジネスモデル発想かなと思うようになりました。

新しい学会を作った目的に見合う活動は何なのか。そこに向けてどう行動すべきなのかが問われています。

こんな事を書いている内にも時代はドンドン進み、今クーリエjaponは、完全 Web 雑誌になった。講談社という大手出版社の発行する、元は紙で刊行されていた月刊誌が、完全 Web 化される時代な

のである。
「調査報道」という言葉も時々聞く。取材をし、裏を取って、時間をかけた長文の記事に仕上がる。しかしそのようなモノを掲載する紙面、誌面はもはや紙媒体には残されていない。大衆は誰も読まないし、そんなモノが掲載された雑誌や新聞を購読しない。
その結果、短文のコラムのようなモノばかりが掲載される。「調査報道」はこれに対するジャーナリストの主張である。
近年目に付く、「この記事はデジタル版で」とかいうのは、そんな長文の掲載可能性が、そこにあるからだ。
分かりにくい現実や、巧妙に画策された悪事は、単純の露見することはない。隠蔽をかいくぐって真実に近づくジャーナリストの努力なしには、事実への接近すらあり得ない。
政府の発表や広報のデータを貰って、そのまま記事を書く記者など、書記以下だろう。調査報道はジャーナリズムに不可欠だが、取材費が出ない、コストに見合うインカムがないというので、簡単お手軽でキャッチーなゴシップが大衆版ニュース紙面を占める。

執筆者

雑誌の基本コンセプトが出来ると私の回りで、様々な対人援助世界で活動する人に、執筆を呼びかけてみたくなりました。
「出来るだけ自由に、何でもいいから書いてください。ただし連載です。最低でも一年、できればそれ以上延々と。季刊発行ですので、年4回。最低でも2頁、出来ればもっと長く」、こう書きました。
長く書いて下さいということは、その方の世界の一部がある程度の深さをもって提供されることを求めています。業界の専門用語や慣用概念で解説をして終了なんて原稿は登場する余地の少ないことになりました。
この要望に応えるものを書くためには、それなりのキャリアも必要かもしれません。でも、年配の人にしか書けないというものでもありません。いろんな年代の、いろんなジャンルの経験智が集まるといいと思っていました。
また、一分野から一本というコントロールをかけるのではなく、似通った実践が出てくるのも容認しようと思っています。細部に神宿るといいます。そんなディテールの差異こそが私たちが見るべきものなのかもしれません。
もっとも冗長がすぎれば読み手はうんざりして離れてしまうだろう事も戒めに、筆者、編集者共に、この営みを開始します。　（編集長　団士郎）

このあとがきを書いてから７年経った。自分への約束通り、遅れも欠番もなく７年目の今号、通巻２６号が出せている。
私達はこの世界に居るために、なにがしかの使命を持って配置されている（と、私は思う）。今いる場所は偶然のようで、偶然ではない。そこに至る道程を振り返ると、必然が見えてくるに違いない。七十才に近づいたから言うことかもしれないが、それこそ私達が自分を生きてゆく意味だろうと思う。

自著が出るまで

「いま、人間として」

これは10号で休刊になった雑誌の名前だ。そしてこの雑誌を通じて私は、読者から書く側への道筋が切り開かれたと思っている。
漫画は小学校高学年から描いていて、大学4年の時、ひょんなことから産経新聞で一コマ漫画の連載が開始した。しかし文章を書こうと思ったことはなかった。
読書は随分遅くに身についた習慣で、好きになってはいたが、文章が書きたいとも、書けるとも思ったことはなかった。児童、生徒時代を振り返っても、作文が得意であったとか、読書感想文が優れていたなどという記憶はない。むしろ、「女子は何であんないろんなことを考えるんだ？」と作文のたびに思っていた。
読書傾向として、漫画家目線の影響かジャーナリスティックなものは好みだった。筑摩書房刊「終末から」は書店で、印象的な味戸ミトが描くイラストの表紙を眺めるくらいで、好みの範疇から少しはずれていた。1973年に創刊され隔月官で9号、1974年10月に終巻を迎えた。大衆雑誌ではない。読者層は明らかにあの頃のインテリ層だった。
この編集長をしていたのが原田奈翁雄という人で、私は知らなかったが業界では有名な人らしい。

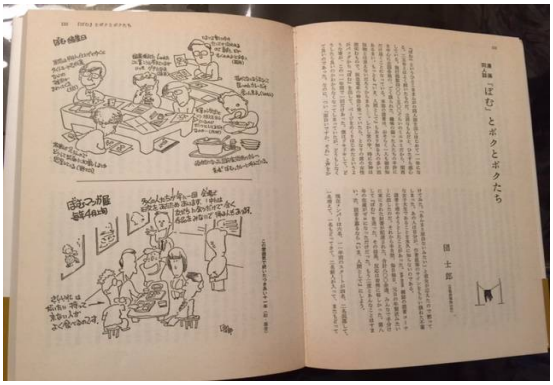
その人が筑摩書房を退職して立ちあげた出版社が径（こみち）書房。そこから刊行された季刊誌が「いま、人間として」である。創刊号の前に、準備号が刊行され、京都府福知山市に住んで、舞鶴市まで通勤していた私は、書店で見て購入していた。

当時そんな動機が高まっていたこともあって、愛読者カードに漫画と文章を絡ませた感想を送っていた。これはずっと愛読していた月刊「話の特集」誌にも同様で、手書き文字、漫画付きの愛読者カードは、そのまま読者欄に載った。

そんなある日、径書房編集部からの封書を受け取った。それは編集長から、第二号で特集するテーマ「つきあい」に寄稿してくれないかというものだった。驚き、喜び、そして不安が同時に起きた。既に漫画家としては原稿料も貰っていたが、文章でその経験はない。

そんな不安を支えてくれたのは、漫画だった。大きくイラストを添えて、仲間内のことを描けばよいと思うことにした。





業務レポート

児童相談所で心理職として働いている頃、自分たちの仕事を世の中に報告することも、仕事の一つだと思っていた。一般にはプライバシー保護の意見が大勢を占めていたが、私はそういう言い草は怠け者に属することだと思っていた。給料を貰って仕事をしていながら、その結果、効果について、誰からも吟味されない仕事など発展するはずがないと思っていた。

無論、冊子を作ったりするのが好きだったこともある。しかし、それを個人的楽しみにするつもりは余りなかった。漫画家であったことも影響しているかもしれないが、文学（文藝）志向はなかった。文字にするのはもっぱら、仕事の中味、現状であった。

それは最初、職場レポートとして形になった。毎年一冊、児相レポートを発行し始めたのは1980年代のことだった。既に他児相でも研究紀要や事例集は発行されていた。厚生省（当時）も全国の児相に募って「事例集」を発行していた。京都府からも何度か執筆した。しかしそこに共通した執筆者の偏りがあるのが気になって仕方なかった。



当時、心理職は公務員の中ではやや専門家気取りなところがあって、その人達が論文紛いの執筆をしている印象が拭えなかった。当然、一般行政職から児童福祉司になっている人達はなかなか手を出さなかった。

私はそういうやり方をよしとは思わなかったので、児童相談現場の一年間のレポートとして、全員執筆に拘って出しつづけた。

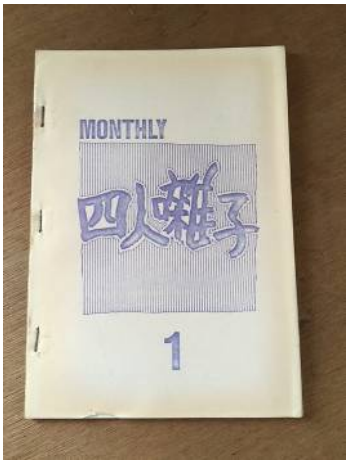


四人囃子

こういう動きとは別に、京都府北部の二カ所の児相で働いていた中年男性4人で、もっと自由に何でも書けるミニコミを出して遊んでいた。それが「四人囃子」。結構な号数を重ねた。まだゼロックスは高いから青焼きコピーで、という時代だった。

今の人からみたら、児相が気楽な良い時代だったのだなと思うに違いない。確かに結果はそうだった。そしてそこに仕事の厚味も人材も生まれた。

現状の大変さが、何を生み出し、誰を助けることが出来ているのか。ここは考えどころだと思う。



心理テストカンファレンス

月に一度、京都府の心理職全員が出張で集まって合同カンファレンスを開いていた。その成果をまとめる必要を唱えて、心理職従事者向けの「心理テストカンファレンス」を発行した。そこで出た意見や検討経過をまとめて、10頁程の冊子にまとめた。

これは事例提供者順で月刊発行にした。出来上がったものには、ローデーターも含まれていたので、関係者、研究者、諸先輩だけに通しナンバーを入れて郵送した。

業界の著名な先生方、大学関係者から礼状や、お褒めの言葉、カンパをいただいたりもした。

家族の居心地

これはミネルヴァ書房から出た、私（達）にとっての最初の本のシリーズタイトルだ。背表紙を見てもらいたい。５人の執筆者の名前が狭いところにひしめいている。こういう表示にして欲しいと言ったとき、編集者は「字が小さくなって見づらいし、ゴチャゴチャする」と反対した。

しかし私は最初から、本を棚に入れた時に読めるところに５人の名前が必須だと主張した。それが職場の同僚と本を出す目的だったからだ。そしてそのように造本して貰った。



それから三十年経って、今、ａｍａｚｏｎ

で検索して貰うとそれぞれの沢山の著書が登場する。でも、背表紙にクレジットされたのは、みんなこれが初めてだった。

将来、どうなるかは分からないが、そうなればいいなと思って、その時できる一歩を踏み出しておく私のスタイルの原点がここにある。そしてそれぞれの本が今、複数冊、刊行されて書店に並んでいる。

この本の刊行年１９９１年に京都府児童相談所の心理職だった背表紙の５人は２０１６年、以下のような肩書きでこの世界に居る。

川崎二三彦
子どもの虹研修センター理事長
早樫一男
同志社大学教授をへて、児童養護施設「大和の家」施設長
川畑隆
京都学園大学教授
柴田長生
京都文教大学教授
団士郎
立命館大学大学院教授

こんな結果になった理由の一部が、この背表紙だと思うのだ。私はそういう考え方をして、今日まで様々なことと関わってきた。この関わり方が社会システムへの小さな介入だと信じて。

＊

この後、私は季刊「発達」（ミネルヴァ書房）において、十数年の長きにわたって「家族パスワード」と題する、家族心理臨床系の４頁の連載を行うことになる。

そしてそれをまとめたものが二冊の文春新書「不登校の解法」「家族力×相談力」になって刊行された。残念ながら今では二冊とも絶版だが。

そもそも

そもそも公務員５人組が最初に、ミネルヴァ書房から本を出すことになったのには、こんな経緯がある。季刊「発達」の特集原稿が何かの事情で落ちてしまったらしい。

京都の重症発達障害児研究会で面識のあった編集者　寺内一郎さんからピンチヒッターに急遽依頼され、特集「児童虐待」を、児相心理職６人で分担執筆することにした。

当時の児相心理職仲間はみんな熱心だった。私が煽った部分があるかもしれないが、よく学び、あちこちに顔を出して、発言も発信もしていた。そのメンバーで相当なボリュームの原稿を書き上げて季刊「発達」に掲載された。

その展開がシリーズ「家族の居心地」と題した、児童相談所における家族療法の本、三冊「登校拒否と家族療法」、「非行と家族療法」、「父親と家族療法」の刊行だった。



児童相談所問題研究セミナー

現在、児童問題研究セミナーと名前が変わって、四十年も継続開催されている業界研究会がある。一年に一度、全国大会が開かれ、翌年にはその報告集が刊行される。地道に継続して現在に至る、歴史ある官製ではない研究会である。



このセミナーの報告集を私も京都府で開催を担当した時、翌年に製作した。しかしこの作業はなかなか面倒なものだった。原稿が集まらない、校正に時間を取られる。

そこそこの大部になるので印刷代も高くつき、販売価格は一冊１５００円とか２０００円近くなる。それでも全部売れなければ赤字になる。そして実際は在庫がどっさり残る。事務局が保管しておくことさえ負担な印刷物は、バックナンバーが細々売れるのを待つことになる。

ある大会ではこの印刷費を、大会実行委員のＳさんが、数十万円も引き受けた。全く不合理な報告集の製作、販売状況が繰り返されていた。

大会そのものは民主的な運営で、関係者の志を糧に継続開催されてきたものだった。しかし、報告集に関するこんな弱点が、開催担当する有志の気持ちを、少々引かせていた。

その後、この報告集は養護問題研究会（養問研）と合同で、明石書店から「日本の養護問題」のタイトルの季刊誌になった。

「児相とその近接領域における家族療法の実際」

家族療法に熱中していた頃、全国の児童相談所でも、もっと家族を扱える人が多くなればいいのにと思っていた。そんな志を同じくする広島の岡田隆介さんと二人で発起人になって家族療法の勉強会を開催した。この勉強会の大会冊子と大会後の報告集のことを書く。

全国から集まって、お互いに実践を報告するそのレジュメ集を考えると、すぐに学会で事前に送られてくる分厚い冊子が思い浮かぶ。見るからに金と手間がかかっていそうだ。

だからそうではないモノの製作を思案した。

分担印刷

そして採用したのが、各発表者に自分の所で完成させたレジュメを、参加者数分印刷して事務局に送ってもらうことだった。

200人の参加予定になったら、発表者の所で、頁ナンバーの所には京都１，京都２・・・のようにナンバリングして、200枚ずつコピーする。それを宅配分で事務局に送ってもらう。締め切りに集まったものを、製本だけの作業として業者に依頼した。



校正や編集が不要な分、時間短縮、労力軽減で発表冊子は完成した。

大会報告集も同じ事で、終了後、速やかに原稿締め切りを告知し、忘却しないうちに同じ要領で製作、発送を依頼した。そして届いたモノ製本して、速やかに大会報告集として全国の参加してない児童相談所も含めて送付した。

全く合理的な方法だと思うし、きちんと作成者に責任を持って貰っている。作家もどきに、いつまでも原稿の届かない人のモノを待ったり､督促するようなバカなことはしない。

報告集を出す意味の一つに、出席したいと思いながら、様々な事情で参加できなかった人に、当日の様子を伝えることがあった。参加した者だけで仲間になりたくなかった。そして来年は是非、来てもらいたいと思っていた。

だから、たいてい一年足らずかかって発行されると皆が思っていたことに挑戦したのだ。

誰にも簡単に、気の重い長期間の負担を抱えずとも、報告集の製作が可能になった。

しかしこの方法を次に引き継いだ人達がみな踏襲したかというと、そうではない。様々な工夫もされていったが、昔の負担の大きい製作過程がイメージから離れきれず、結局、事後報告集は製作しないのが、一番楽だという結果になった。

対人援助学マガジン

２００９年秋、立命館大学応用人間科学研究科が中心なって、対人援助学会が創設された。学会そのもののデザインは、それほど斬新でも革新的でもない。まだまだ新設の弱小学会として歩み始めたばかりだ。現在、会員二百人余り。年一度の大会を三年連続、立命館大学で行い、4回目は神奈川県立保健福祉大学で開催された。

学会誌編集長の意向でWEB発行が決定され、査読のフィードバックもWEB上で行うことになっている。そして、読者は学会員だけに限定されないことになった。

だから余計に、当初NLは会員向けに、印刷物として発行することがイメージにあった。そうでないと、会費を支払っている会員のメリットが余りにも少ないことになる。

しかし発足早々の弱小学会にとって、NL一枚だろうと、予算問題はクリアしなければならなかった。印刷費、郵送費、そしてその手間を分担する事務局費用など、何もないところから始めるのである。

そこで浮かんだアイデアが、NLもWEB版にし、閲覧フリーにすることだった。編集長（私は発足時、学会長でもあった）としては、印刷、発送の手間と経費から解放されて気楽になった。そして、更なる発展意欲が湧いた。

WEB版にするなら、ボリュームは基本的に自由である。執筆者には思う存分書いてもらえばよい。執筆してくれる人があるなら、ページ数にこだわることはない。経費を喰わないのなら、出したい方式で発行できる。

その結果、急遽、NLではなくマガジンとして発行することに決めた。さらに、内容の薄い短文エッセイを並べるのではなく、全記事を連載にすることにした。

こうすることで編集者は、毎回執筆依頼に苦労するパターンから解放された。この点も、大きな新たな一歩である。執筆依頼、そしてなかなか届かない原稿の督促が、NL編集のストレスなのだから。

そこで、連載を承諾してくれる執筆者を募って、基本的に全て長期連載にした。その結果、季刊発行で現在第２６号。創刊号７０頁からスタートした「対人援助学マガジン」は、現在２５０頁余、連載執筆者４０名の拡大ニュースレターとして継続発刊中である。

出版

専門書籍の販売不振。雑誌の休刊など、出版業界全般の不況に煽られて、連動しなくても良いところまでが沈滞する。

数多くの学会事務を代行していた会社の倒産で、学会の運営資金に多額の被害が出たのも数年前のことである。

そういう既存システムに組み込まれたアカデミズムの枠組みの閉塞にも、一石を投じる変化を処方できているのではないかと思う。コストや人的負担をかけ過ぎなくても、従来とは別のルートで、時代の資料として、現場からの記述をこの世界に蓄積できる。新しいインフラとの融合は、このように再構築されてゆく。

ここでの次の一歩

縷々述べてきたミニコミ刊行話から継続する「次の一歩」は、インフラの進化との連動である。

もうガリ版印刷こそ姿は消していたが、大枚かけたたいそうな印刷物、青焼きコピー、ゼロックス（と誰もが呼んだコピー）の時代、カラーコピー、そしてＰＣプリンターの印刷から、Web へのアップと、技術革新によって出来ることは大きく変化していった。

今、この形のマガジンが出せているのも、現在の到達技術との連動である。今後も技術は、更に変化してゆくだろう。

そして、ここが勘所だとも思うのだが、簡単には進歩しないコンテンツへの強力な推進役に、技術の進化が挙げられる。

私達の意見はしばしば、自分の馴染みの時代の技術に支えられることになる。そして、その技術革新によって、置き去りにされることにもなる。それを一概に駄目だとは言えないが、変化に対応するのを、いきなり内容ではなく道具的変化に寄り添ってみる所から始めるのは妥当性のあることだと思う。

学校臨床の新展開

― ㉕居場所なき子らの生活保障Ⅲ ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

お金が無かったら

お腹が減って、減ってどうしようもなくて、でも、お金がなかったらどうするだろうか。誰かに、頼んで何とかお金を借りたり、何かを食べさせてもらったりするのではないだろうか？　でも、頼る人がいなかったら？

チャーシューとメンマを盗む

26 歳の無職の青年は、空腹を満たすため、かつて 4 年間働いていたラーメン店に侵入し、倉庫のカギを壊してチャーシューやメンマなど 4000 円相当を盗んだ。その姿は店の防犯カメラに映っており、店主はすぐに警察に通報。翌々日に男性は建造物侵入の容疑で警察に逮捕された。

逮捕時、男性は家に、わずかな現金があっただけで、電気、ガスは止められていた。家の中は空のカップ麺やペットボトルが散乱していたという。

近所の人は、「ゴミ屋敷」状態だったともいう。

辞めたとはいえ、4 年間働いた店に窃盗に入るだろうか？　それも食べ物（現物）を盗るだろうか？

続かない仕事

彼は、仕事が長続きしない。高卒後、塗装会社に 8 か月、食品工場に 5 か月、建設

会社で 7 か月。一番長いのが侵入したラーメン店で約 4 年。その後、警備会社で数か月働いている。ラーメン店時代の月収は 16 万。正社員には登用されず、ずっとアルバイトの身分のままであった。店主によると、正社員希望だったが、能力的に仕事を任せることができず、「ほとんどしゃべらず、コミュニケーション下手。怒られたりすると、ぶつぶつ言って、仕事がいっぱい、いっぱいになるとパニックになって皿を割ったこともあった」という。

殺人容疑で逮捕

彼は、ラーメン店への侵入で逮捕された後、近隣で連続して 2 件発生していた高齢者を狙った強盗殺人事件の容疑者としても逮捕された。93 歳の女性Ａさん、81 歳の男性Ｂさんを殺害し、Ｂさんの妻 80 歳に重傷を負わせた罪で。

「食べ物と金がほしかった」
「仕事がうまくいかず、金に困っても相談する人がいなかった」
と語っている。

盗んだものは、93 歳のＡさん宅では、米、さきイカなどの食べ物と、現金 5000 円。
81 歳のＢさん宅では、りんごを 2 個。
何れも侵入時、居合わせたＡさん、Ｂさんを殺害し、Ｂさんの妻には重傷を負わせている。

わずかな食料と、わずかな現金を得るために人を殺すだろうか。

「高齢者が住んでいそうな平屋建ての家を狙った。高齢者なら抵抗されないし、そこそこのカネを持っているだろうと思った」
彼にとって、そこそこの金とは、どのくらいだったのだろうか。

消費者金融で、100 万円以上の借金があったということも考えると、そこそこの金とは、借金を返済するほどの金のことだったのだろうか。

「見つかったら刺そうと思っていた」とも語っているが、実際に、刺し殺さねばならないほどの内容なのだろうか。

死刑判決

2016 年 7 月 20 日、前橋地裁で裁判長は「高齢者を無差別的に狙い、悪質極まりない。犯行は執拗（しつよう）で残虐」「通り魔的な無差別犯行。命をもって罪を償わせるのもやむを得ない」と述べ検察側の求刑通り死刑の判決を彼に言い渡した。被告側は即日控訴している。

児童養護施設出身者

ここで、この事件を取り上げたのは、彼が児童養護施設出身者であるからだ。彼は２歳の頃に両親が離婚し、４歳から中学校

卒業まで児童養護施設に入所している。先輩や同級生からいじめを受けたという。 高校時代は福島県内で祖父母と伯母と暮らしたが、伯母と折り合いが悪かったようだ。関係者は、「同居の伯母と不仲だった。家の電話を使わせてもらえず、駅の公衆電話から仕事の電話をかけていた」と証言する。

高校時代の同級生は「いじめられていたわけではないのに常に一人でいた」という。

高卒後、一時期、自立援助ホームへ入所していたという。

いちばん長く働いたラーメン店の店主は、「手に職を付けて、食べていけるように」との思いで採用した。散髪代を渡したり、仕事を覚えられずに「辞めたい」と相談してきた際には、引き留めたりと、気に掛けてきたという。

彼は精神科医に「人生をやり直す気持ちはない。今までの人生がつらかったから」と漏らしたという。

彼の心には、誰もいなかったのだろう。

家庭がうまく機能しない時、学校や社会的養護は何ができるのだろうか。

（朝日新聞を中心に複数の記事を要約しています。）

不登校経験を持つ若者たちの
もう一つのキャリアパス（1）



はじめに
「希望の教育を求めて」

今から 9 年前に私たちが初めて出会った不登校の中学生は、今大学院で社会学を専攻しながら不登校研究をしています。「得体のしれない不安」に苛まれていた彼は、とうとうその不安を自分の研究対象にして、どこまでもそれを言語化しようと研究者への道を歩み出したのです。

次に出会った中学生は、小中あわせて 2 年間しか学校へ通っておらず、中学に入学してからもほとんど家でひきこもり状態になっていました。人前でなかなか緊張せずに話せなかった彼でしたが、高校そして専門学校と進学し、やがて自動車ディーラーへ就職、第一線で活躍するサービスマンとして働いています。

その他にも、過敏性腸症候群に苦しみ、教室に入ることができず高校を 3 つも中途退学せざるを得なかった女の子。彼女は今、歯科衛生士になるための専門学校に毎日元気に通っています。また、中学高校と不登校を繰り返し、リストカットを常習化させていた女の子。彼女は命の誕生の現場に立ち会いたいということから、助産師として病院で働いています。ADHD という診断のもと薬を服用しストレスのない生活を送るように指示されていた男の子もいました。彼は、「僕は病人として生きたいわけじゃない。一人の高校生として生きていきたい」というコトバと共に薬をストップすることをドクターに宣言し難関校の受験に見事合格、ADHD という診断から想定されるキャリアとは異なる、いわゆる普通の高校生になっていきました。あるいは学校という世界の閉塞感に耐えられなくなっていった女の子。彼女は不登校になってから、1 年で高認を取得し、その後予備校に通い、現役で難関大学へと進学、今年アメリカの大学に留学する予定なのです。

知誠館には、そんな不登校やひきこもりの経験を持つ若者たちが次々とやって来ます。私たちの前には、夢も希望も持てない状態、あらゆることを試してもうまくいかず、もうこれ以上自分自身の物語を描けなくなった状態で現れてくる若者たちや親たちの姿がありました。しかしそんな彼らも、やがて少しずつ変わり始めます。自分たちが安心できる場と共感してくれる仲間、そして能動的な学びと自信を手に入れ、自分のコトバを使って自分たちの辛く苦しい過

去を希望へと書き換えることを通し、自分の人生を再出発させるのです。彼らの中には、自分自身のことを「生まれ変わった」と表現する者が少なくありません。それはまさに変容のドラマでもあるのです。大きな変容は、感動を伴います。ましてやそこにコトバが媒介し、それが一つの物語となっていく時、その感動は親や家族、やがてはまわりの支援者たちも次々と包み込み、彼ら自身の変容も促していくのです。それはまさに変容の波が人から人へと伝わっていく瞬間でもあるのです。

私たちはそんな彼らの変容を、蝶の蛹（さなぎ）にたとえます。まるですべてが止まったかのように見える蛹の期間。それは今まで青虫の身体を作っていた細胞が次々と死に絶え、それに代わって新しく蝶の身体を作る細胞が次々と生まれていく期間なのです。まさにそれは、新しく生まれくるもののための死に行く過程であり、「死と再生」という学びの大きなテーマに向かうダイナミズムでもあります。そして私たちがこの知誠館で見届ける不登校やひきこもりの経験を持つ若者たち、彼らはこの蛹の期間を私たちとともに経験する仲間でもあるのです。

本稿のテーマは、不登校やひきこもり経験を持つ若者たちの「もう一つのキャリアパス」を明らかにしていこうというものです。そこには、従来の若者たちへのキャリアパス、受動的で間に合わせ的なキャリア支援やキャリア教育のあり方に対する疑問や反省が含まれています。この思いはやがて私たちに「キャリアとは何か？」という問いを突き付けることとなり、結果として私たち自身のキャリア観に再帰していったのです。つまり若者のキャリア形成に関する問題を突き詰めていくと、私たち一人一人が仕事にどういった意味を見出しているのか、あるいは働くということがいったいどういうことなのか、という私たちの労働観までもが問われることになっていったのです。

不登校やひきこもりといった若者の問題は、下手をすれば個人の問題としてだけ処理されてしまいます。例えば、発達上の課題や人格上の課題、あるいは精神病理の課題として、処理されていくのです。しかし個人は家族の中で形成され、家族は社会の中で形成されていきます。この前提に立てば、問題を持った個人の前に問題を持った家族があり、問題を持った社会があると考えられるのではないでしょうか？

私たちはあえて不登校やひきこもりという問題をひとつの窓として捉え、そこから家族や社会の抱える課題を見てみようと考えました。もちろんそこに個人の課題が存在しないとは考えていません。ただそこには、社会の課題も存在するのではないかと考えるのです。問題はいつも関係性の中に生じます。従って、個人の課題を考えるのと同じように、不登校やひきこもりといった問題を通して、家族や社会の課題に目を向けていくことが大切であると考えたのです。

本稿では不登校やひきこもりの経験を持った若者たちが、他者とのかかわりの中で

大きく変容する様子をさまざまな語りを介したエピソードとして紹介していきます。そしてその変容が、彼らのキャリアそのものを切り拓き、能動的なキャリア形成を可能にするといった事実を示すことができればと考えています。受動的なキャリア形成から能動的なキャリア形成へという移行が、この「もう一つのキャリアパス」というテーマに託された思いでもあるのです。

具体的に第 1 章では、現代社会におけるキャリア形成の難しさを構造的に説明すると共に、キャリアそのものへの問い直し、あるいはキャリア支援やキャリア教育そのものへの問い直しを試みつつ、その構造的課題の突破口となり得る語りの世界の可能性に触れてみたいと思います。続く第 2 章では、知誠館に学ぶ不登校やひきこもり経験を持つ若者たちが、「森の語り場」と呼ぶセッション場面で自分のライフヒストリーを書き換えていくというエピソードを取り上げ、若者たちの変容とその場における他者の役割について考えてみたいと思います。さらに第 3 章では、若者支援に関わる援助者たちの学びの場として組織された「南丹ラウンドテーブル」の記録をエピソードとして取り上げ、その場における援助者たちの揺らぎを捉えると共に、このラウンドテーブルに当事者である若者たちが参加することで、場全体に大きな変容が生じていくといった事実に注目してみたいと考えています。ここでは、援助－被援助という関係が問い直されることになっていきます。そして最後の第 4 章では、もう一つのキャリアパスとして「出会い」を取り上げ、若者たちが消費的な社会に巻き込まれていくのではなく、出会いを通してより能動的で生産的、あるいは文化的な社会へとつながっていくことの大事さを考えてみたいと思っています。

教育の場は、いつも限定的な場です。私たちは限られた時間軸の中で若者たちと出会い、互いに影響を及ぼし合い、そしていつかは離れ離れになっていきます。それはまさに「出会い」の関係であり、一過性の関係と言えるのかもしれません。私たちには、彼らの人生を決定づけるようなことはできませんし、その未来を描くことなんてなおさらできません。ただ、自分の人生の物語をもうこれ以上描けなくなった若者たちが、やがて「学び」ということを手掛かりにして再び希望に向かって歩き出すことについて、少しばかりのお手伝いができればと思うのです。ブラジルの教育者であったパウロ・フレイレが、かつて抑圧された人々に対しておこなった識字教育のように、それはささやかなかたちでの「希望の教育」なのかもしれません。



『幼稚園の現場から』
26・お話あそび会（その3）

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

お話あそび会（その１／マガジン24号）では、幼稚園・保育園における発表会の構造的な問題、（その２／25号）ではお話あそび会の具体的な取り組みについて書きましたが、今回はその活動を保護者に伝え、理解を得ていくための具体的なプロセスを見ていきます。

私立幼稚園の保育が経営と結びついている宿命的な運命については（その１）の冒頭で述べていますので繰り返しませんが、園で自分たちが考える良い保育をしようと思ったら、主旨を保護者に伝え理解を得ていくことは必ず必要なことです。とくに、今まで行ってきたことと違う方針や行事に切り替えるときは、必須となるでしょう。

私たちも、最初のころは試行錯誤しながらでしたが、一定の手がかりが持てるようになってからは、次のような手順で保護者の皆さんに活動のことを伝えています。

1.学期のはじめなどの保護者会でお話あそび会の概要を園長が話す。
2.クラスのお便りで、テーマや実際の子どもたちの取り組みについて随時お知らせしていく。
3.特集号という形で、園全体の取り組みをお知らせする。
4.当日開始前の前説で、オリジナルストーリーと舞台の構成、お話あそび会の特徴をふまえた観覧のポイントなどを具体的な“場”を見ながら園長・担任等が解説する。



お話あそび会当日（年少組）
子どもが入場してからの担任前説
この前に園長前説が既に終了している。
※観客はクラスの保護者と希望者のみ
※観客席、舞台設定はクラスごとに変えられる。今回はフロアーを存分に使う構成
※観客が次の舞台（クラス）を見るためには一旦退場してから再入場する

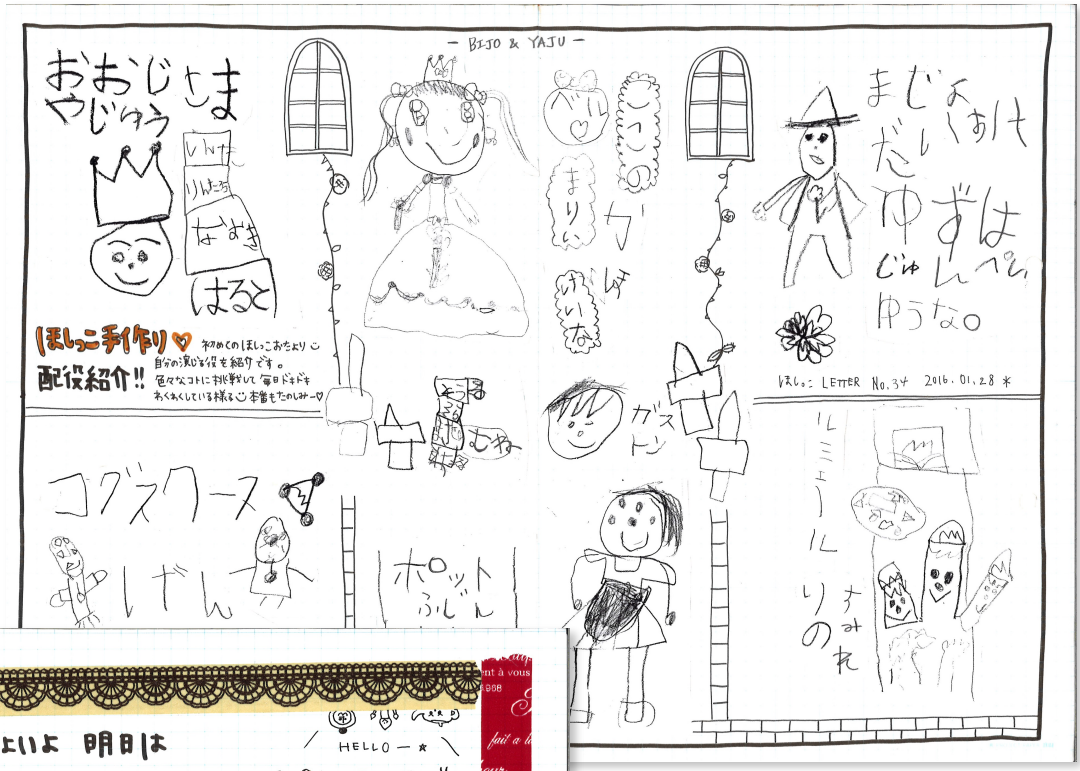
クラスだよりで伝える

クラスだよりは、日々の出来事や活動の紹介など、月に２～３通発行している担任が書くお便りです。お話あそび会の取り組みについては、取り組みの報告から、衣装のお願い、配役が決まった経緯など、年齢、時期によって必要な内容のお便りが発行されます。

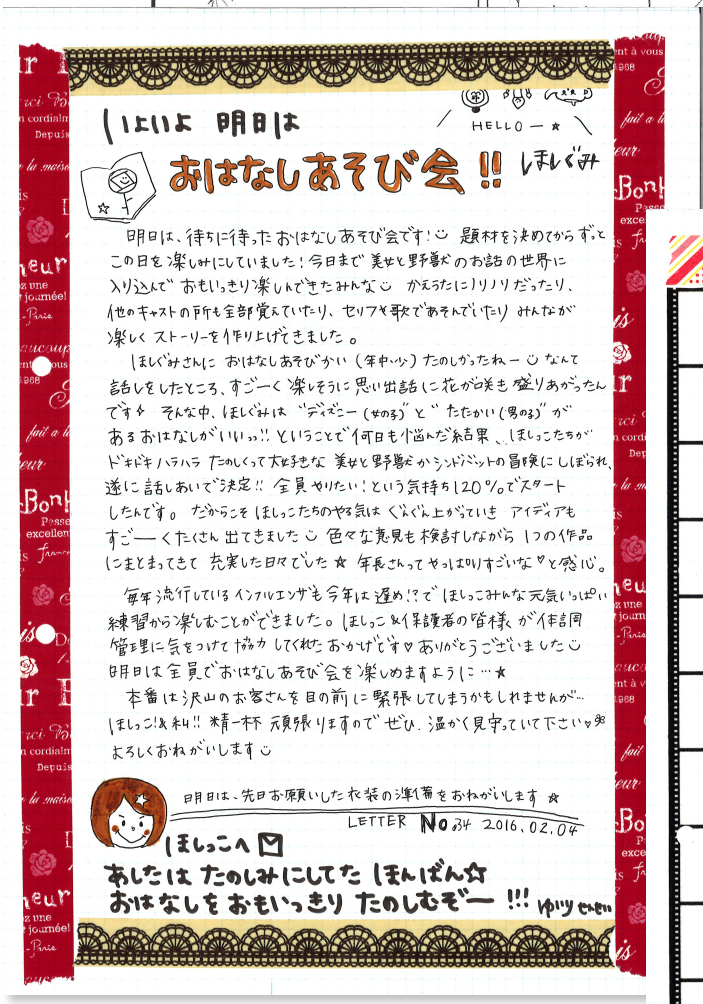


いよいよ明日号
（年中組）

衣装お願い号
（年中組）



こども参加号（年長組）



いよいよ明日号（年長組）

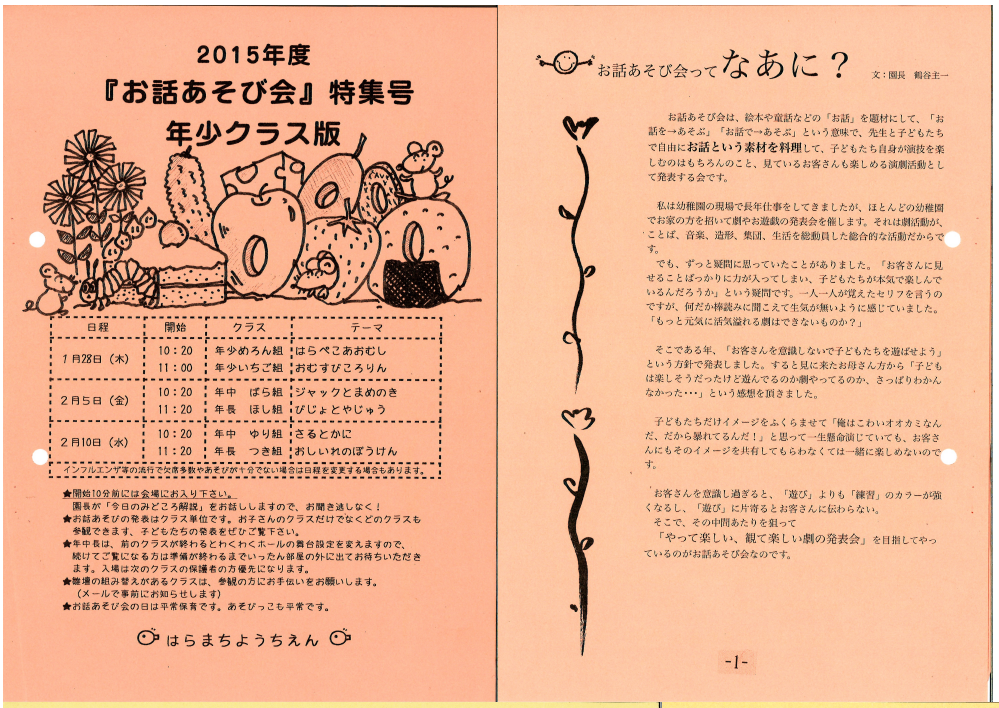


お礼号（年長組）

保護者と園を繋ぐ要となるのは
なんといってもクラス便りです。
子どもたちがイキイキと活動に取り組んでいる
姿、担任自身も一緒に楽しんでいる姿を伝えることが何より大切です！

特集号で伝える

クラス便りで、クラスの子どもたちのリアルな様子が伝えられるとともに、この活動で子どもの何が育つのかを園の方針として伝えます。「なんのためにどんなことをしているのか」が理解されないと活動のねらいも伝わりません。ただ、理屈を書き並べても伝わらないので、できる限り最小限のことばで、毎年ちょっとずつ角度を変えて３年間でより深められるような構成を狙っています。
この特集号という手法は運動会や音楽会という行事でも使われます。



2015年度
『お話あそび会』特集号
年少クラス版

日程	開始	クラス	テーマ
1月28日（木）	10：20 11：00	年少めろん組 年少いちご組	はらぺこあおむし おむすびころりん
2月5日（金）	10：20 11：20	年中　ばら組 年長　ほし組	ジャックとまめのき びじょとやじゅう
2月10日（水）	10：20 11：20	年中　ゆり組 年長　つき組	さるとかに おしいれのぼうけん

インフルエンザの流行で交流参観やあそびができない場合は日程を変更する場合もあります。

★開始10分前には会場にお入り下さい。
園長が「今日のみどころ解説」をお話ししますので、お聞き逃しなく！
★お話あそびの発表はクラス単位です。お子さんのクラスだけでなくどのクラスも参観できます、子どもたちの発表をぜひご覧下さい。
★年中音は、前のクラスが終わるとわくわくホールの舞台設定を変えますので、続けてご覧になる方は準備が終わるまでいったん部屋の外に出てお待ちいただきます。入場は次のクラスの保護者の方優先になります。
★幕場の組み替えがあるクラスは、参観の方にお手伝いをお願いします。
（メールで事前にお知らせします）
★お話あそび会の日は平常保育です。あそびっこも平常です。

はらまちようちえん

お話あそび会ってなあに？　文：園長　鶴谷圭一

お話あそび会は、絵本や童話などの「お話」を題材にして、「お話を→あそぶ」「お話で→あそぶ」という意味で、先生と子どもたちで自由に**お話という素材を料理**して、子どもたち自身が演技を楽しむのはもちろんのこと、見ているお客さんも楽しめる演劇活動として発表する会です。

私は幼稚園の現場で長年仕事をしてきましたが、ほとんどの幼稚園でお家の方を招いて劇やお遊戯の発表会を催します。それは劇活動が、ことば、音楽、造形、集団、生活を総動員した総合的な活動だからです。

でも、ずっと疑問に思っていたことがありました。「お客さんに見せることばっかりに力が入ってしまい、子どもたちが本気で楽しんでいるんだろうか」という疑問です。一人一人が覚えたセリフを言うのですが、何だか棒読みに聞こえて生気が無いように感じていました。「もっと元気に活気溢れる劇はできないものか？」

そこである年、「お客さんを意識しないで子どもたちを遊ばせよう」という方針で発表しました。すると見に来たお母さん方から「子どもは楽しそうだったけど遊んでるのか劇やってるのか、さっぱりわかんなかった…」という感想を頂きました。

子どもたちだけイメージをふくらませて「俺はこわいオオカミなんだ、だから暴れてるんだ！」と思って一生懸命演じていても、お客さんにもそのイメージを共有してもらわなくては一緒に楽しめないのです。

お客さんを意識し過ぎると、「遊び」よりも「練習」のカラーが強くなるし、「遊び」に片寄るとお客さんに伝わらない。
そこで、その中間あたりを狙って
「やって楽しい、観て楽しい劇の発表会」を目指してやっているのがお話あそび会なのです。

-1-

←片面Ｂ５サイズで
色上質紙にモノクロ印刷
した袋とじの冊子になり
ます

表紙と４ページまで
園長が主旨を書きます
↓



お話あそび会の特徴

★狭いステージの上から
舞台をフロアーに広げ、子どもたちがもっとのびのびと動けるようにしよう！
こうなるとお客さんはたくさん入れませんから、日にちを分けて１クラスずつの発表という形式にたどりつきました。

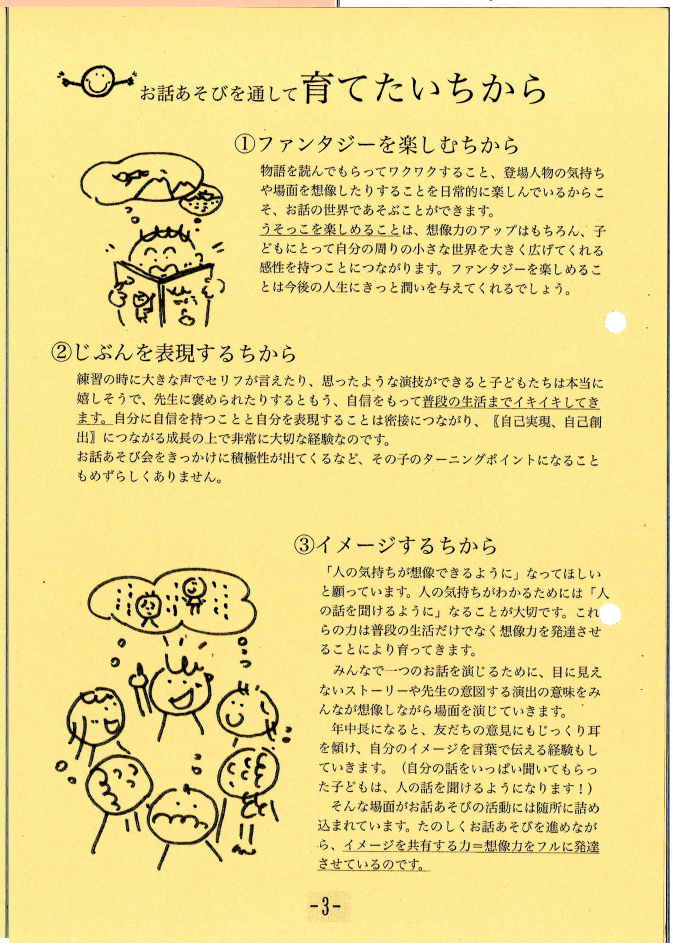
★音楽も
同じことになりました。
音楽に子どもが合わせるだけでなく、音楽も子どもの動きに合わせよう！
劇団やオペラ劇場のように生のオーケストラが舞台の前で演奏していますよね、あの雰囲気です。（オーケストラはいませんが…）

★シナリオに子どもを合わせるのではなく、子どもの動きとシナリオをお互いに歩み寄らせよう！
ということで、シナリオは練習しながら書きかえていく方法をとりました。「今日のここの場面は子どもがうまく動けなかった」と思ったら動きやすいように書きかえるのです。そのため、担任の先生は本番までに何回もシナリオを書き直します。

★観ていただきたいのは「上手にできた、間違えずにできた」ということよりも、子どもたちのイキイキした表情、子どもなりに役になり切っての表現です！もちろん、お話の内容も舞台も工夫がいっぱい!!ご覧になる皆さんもお話あそびの世界を、ぜひ満喫していただきたいと思います！

★普段引っ込み思案だった子どもや、クラスの中であまり主張をするタイプでは無い子どもも、お話あそび会では役になりきって意外な一面を見せたり、練習の過程で積極的にアイディアを発言したりします。そういうステキな表現が出てくるのも、子どもたちと一緒に作っていくお話あそび会だからこそだと思います。

-2-



お話あそびを通して育てたいちから

①ファンタジーを楽しむちから

物語を読んでもらってワクワクすること、登場人物の気持ちや場面を想像したりすることを日常的に楽しんでいるからこそ、お話の世界であそぶことができます。
うそっこを楽しめることは、想像力のアップはもちろん、子どもにとって自分の周りの小さな世界を大きく広げてくれる感性を持つことにつながります。ファンタジーを楽しめることは今後の人生にきっと潤いを与えてくれるでしょう。

②じぶんを表現するちから

練習の時に大きな声でセリフが言えたり、思ったような演技ができると子どもたちは本当に嬉しそうで、先生に褒められたりするともう、自信をもって普段の生活までイキイキしてきます。自分に自信を持つことと自分を表現することは密接につながり、《自己実現、自己創出》につながる成長の上で非常に大切な経験なのです。
お話あそび会をきっかけに積極性が出てくるなど、その子のターニングポイントになることもめずらしくありません。

③イメージするちから

「人の気持ちが想像できるように」なってほしいと願っています。人の気持ちがわかるためには「人の話を聞けるように」なることが大切です。これらの力は普段の生活だけでなく想像力を発達させることにより育ってきます。

みんなで一つのお話を演じるために、目に見えないストーリーや先生の意図する演出の意味をみんなが想像しながら場面を演じていきます。

年中長になると、友だちの意見にもじっくり耳を傾け、自分のイメージを言葉で伝える経験もしていきます。（自分の話をいっぱい聞いてもらった子どもは、人の話を聞けるようになります！）

そんな場面がお話あそびの活動には随所に詰め込まれています。たのしくお話あそびを進めながら、イメージを共有する力＝想像力をフルに発達させているのです。

-3-

年齢別のとりくみ

年齢に合った取り組みをすることで
子どもたちが無理なくお話あそびを楽しむことができるように心がけています。



年少児は、保育者のリードに乗っかってお話あそびを楽しみます。ストーリーのあるごっこ遊びといってもいいでしょう。舞台演出や小物、大人の演技に引っ張られて子どもたちはお話の世界に入り込みます。もともと、ごっこあそびの大好きな年齢ですから、ぶっつけ本番でも良いぐらいですが、一つは、きちんとストーリーを流すこと。もう一つは、雰囲気に飲まれやすい年少さんのために場慣れという意味で２～３回ほどわくわくホールを使い、お話あそびを行っていきます。



年中児は、年少さんよりはストーリーの理解も役柄の理解もできています。でも、子どもたちだけでお話を進めるのはちょっと難しいんです。そこで保育者が一部の役を演じることで子どもたちを参加させていきます。セリフはあまり重視せず、音楽をふんだんに使って、場面や動きのきっかけを作り、ストーリーを展開していきます。次の場面をドキドキして待つ、そんなワクワク感を大切にしたいです。ストーリーをみんなが理解して、「ここではほんとうはやられたくないんだけど、お話の筋だから仕方がない、やられてやろう」と、納得して自分の気持ちとは違う演技をできることも、成長の表れです。



年長児のお話あそび会は、年中少とは意識の持ち方がまず違います。お話の世界を自分たちも楽しみつつ、お客さんにも楽しんでもらおう！というように演技や演出を客観視しながら、保育者に頼らず劇を進行させていくことを目標とします。

先生は本番では補助にまわり、子ども同士で役割を演じ分けながら、子どもたちのギャグやアイディアも演出に盛り込まれ、歌あり、セリフあり、アクションありのダイナミックなお話あそびを行います。毎月の誕生会で先生たちと行う即興劇も、人前で演じることを経験しお話あそび会につながるように考えてきました。

演出によっては同じ役を交代で演じ分けたり、音響効果を担当したり、演技だけを楽しむのではなく、お話あそび会に向けて、お話あそび自体を作っていくことも楽しめるようになります。子どもたちのチームワークも見て頂きたいところです。

-4-

やさしい顔で

「さあ、ぼくの出番だ！」  と思ったその時に、客席のお母さんがなんだかこわい顔をしている  。実際はそんなことなくても、もうそう思っただけで、子どもの気持ちは縮んで『シュン･･･』  となっちゃいます。お母さんにしてみれば「しっかりやってるかな？」「おふざけしてないかな？」という気持ちで見ているだけなのに・・・。

客席から見ていただくみなさんの表情は、演技をする子どもたちには大きな影響を与えます。お客さんがたくさんいるだけで練習の時の雰囲気とはまったく異なる舞台･･･それだけで緊張  したり舞い上がったり  する子どももいます。練習の時に見せてくれたイキイキした表情  をできるだけそのまま皆さんに見ていただきたいのが私達の願いです。

お願いですから、
皆さんのとっておきの優しい笑顔で、
子どもたちを見てあげて下さい！

子どもたちは安心してお話の世界で
最高の演技をしてくれると思います。

-9-

↑２ページでこの行事の特徴、３ページでねらい、４ページで具体的な姿、そして間に各クラスの舞台設定やキャストを挟んで、裏表紙の９ページにお願いを書く。このお願いが観覧するお客さんを、傍観者から参加者という意識に立ってもらうのに大切だと思っています。

５～８ページは、
クラスごとのテーマとあらすじ、
舞台設定などを載せます。↓



お話あそび会は、おおむね１月下旬から１週ごとに２クラスずつ行われます。
１周目に年少組が２クラス、２週目と３週目に年中長が２クラスずつです。
３週間の時差があるため、年少組に特集号を配布する時期には３週目のクラスの内容、キャストも決まっていないことが多いのです。そのため、年少版を出した次の週に、特集号年中長版を改めて発行します。

お話あそび会スナップ















保護者の方から

最後に、この活動がどう保護者に伝わっていったか見ていきます。

こんなエピソードもあります。原町幼稚園を寿退職して愛知県に引っ越した先生が、幼稚園に再就職しました。年長の担任を担当したとき、年末の発表会に「お話あそびをやらせてほしい」と園長に直訴したそうです。その園では一般的な生活発表会を行っていたので、年長は劇を演じることが恒例だったそうです。通常の劇というと、市販のパック教材を使っての劇だったと思います。そこで初めてお話あそび会形式の発表を行ってみたところ、保護者にも園長にもとても喜ばれたと報告してくれました。柔軟に受け入れてくれた園長先生にも感謝ですが、「良い」と思ったことを実践する先生にも感心しました。

さて、長くなりましたが、2007年度に保護者の方から涙が出るほど嬉しかった感想を頂いたことがありますので、それを要約して紹介します。

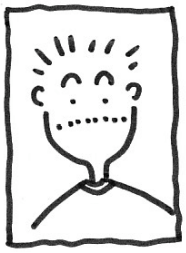
『なんという楽しい会でしょう！』というタイトルで始まり、もっともっと見ていたいと思いました。

先生と子どもたちが一生懸命作り上げた作品を、クラス全員が自信を持って楽しく取り組んでいることが伝わってきて、何度も胸が熱くなりました。･･･と書いてありました。

まさに、お話あそび会は、演劇活動を通して子どもたちのイキイキした姿や成長を見せる場であり、短いことばでそれを言い表してくれていることに感動いたしました。「楽しさ」は、「ハイやりますよ、つぎ覚えて！ほら言う通りにしっかりやって！」なんて姿勢の保育では生まれてきません。子どもの中に意欲の炎が燃えていないとダメなのです。そして意欲を燃やすためのエネルギーはこれまた「楽しさ」。

感想を頂いてから、もう10年も経っていますが、毎回毎回新しい課題に悩みつつ、この面倒で手間のかかる、とても楽しい活動を続けています。

面白そうだなあ！と思われた保育者の方、ぜひぜひやってみて下さい!!!



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
HP：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」マガジンラインナップ

第１号　エピソード
第2号　園児募集の時期
第3号　幼保一体化第
第4号　障害児の入園について
第5号　幼稚園の求活
第6号　幼稚園の夏休み
第7号　怪我の対応
第8号　どうする保護者会？
第9号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育
第21号　楽しく運動能力アップ
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く
第24号　お話あそび会（その１・発表会の意味）
第25号　お話あそび会（その２・取り組み実践）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

福祉系対人援助職養成の現場から㉖

西川 友理

Aさんの興味

専門学校の教員だった頃に、ある授業でちらっと学会の話をしました。
「今海外ではこんな事例があるらしくってね、その話がすっごく面白かったんだよ！」
「へー」
授業後、一人の学生Aさんが話しかけてきました。
「先生、学会って面白そうですね！」
「うん、面白かったですよー！」
「私も行ってみたい！」
あっ、と私は一瞬戸惑いました。
他の分野は知りませんが、社会福祉や心理の学会は、当時、専門学校の学生が参加することはあまり一般的ではありませんでした。今でもそうだと私は感じています。
大学院生なら普通に参加されていますが、大学の学部生となると、お手伝いのスタッフとして会場に入ることは時々あっても、お金を払って参加していると「へえ！」と驚かれるくらい珍しかったと思います。

ちょうどAさんの興味と合致した学会が、翌月に控えていました。ただ、確かに、内容的にちょっとまだ難しそう…でも、行ってはいけないなんてことはないだろう、と私は考えました
「こんなのがあるんだけど…一緒に行く？」
とチラシを見せると、Aさんは目を輝かせて、言いました。
「行く行く！行ってみたい！」
そこで翌月、私はAさんと共に学会に参加することになりました。
チラシを渡した翌日、Aさんは私に質問に来ました。

「あのー、私いくら払ったらいいんでしょう？」
申し込み時に、学会参加費の振り込みが必要なのですが、チラシの参加費一覧には「大学教員」「一般」「学部生・大学院生」という区分しかありませんでした。そこでＡさんに、目の前で学会事務局に電話をかけてもらいました。
「…事務局の方、ビックリされています。『上に聞きますね』って言うてはります。」
やがて保留音が止み、「学部生と同じでいいですよ」との返事を頂きました。
そして当日、受付の時にＡさんが名前を言うと、受付担当のお姉さんは笑顔で、「あー！Ａさん！はいはい！専門学校生の！」
とおっしゃいました。いかにも珍しげな扱いです。
「なんか…場違いなんですか、私？」
「そんなことないって！まあ多少珍しがられるやろうけど、大丈夫大丈夫！」
と…実は私も「あー、これは不適切な所に連れて来ちゃったかな」と、少し不安になりながら…励ましつつ、参加しました。
最初こそ行動を共にしていたＡさんですが、やがて私と別行動をし、自分の興味のある分科会に参加していきました。

一日が終わった帰り道、私はＡさんに感想を聞きました。
「うーん、全っ然解らない事もところどころありました。もうみんな、何喋ってるの？っていうくらいの。でも、すっごく面白かった！！あとね、褒められました！専門学校生でこんなとこに来てるんだね！って。あー、こういう勉強って、面白いっすねー！」
スキップしかねない勢いで、今日知ったことを嬉しそうに語ってくれました。
お互い、自分が参加していなかった分科会について、色々質問をし、また教え合いをしました。

学ぶ姿勢

この学会の帰り道、Ａさんには難しいのではないかとか、不適切なのではないかなどと心配していたのは、大変過保護だったよなぁと反省しました。難しいとか、どうも合わないといったことは、本人が判断すればいいことです。…と、頭ではわかっているのですが、せめて生まれて初めて出会う学会は「面白かった！」と思えるものであってほしい、と願ってしまい、ついつい要らぬお膳立てを画策してしまっていたのでした。
そもそも、大学生ならば学会のお手伝いをしたり、研究会に参加したりといった機会はあるかもしれませんが、短期大学や専門学校で学ぶ学生の多くは、専門知識を入れるだけで精いっぱいの日々を過ごしています。だからこそ、「学ぶことって面白い」と思える経験をさせたい、と思ってしまったのです。
確かに、Ａさんにとっては少し難しい内容だったのかもしれません。しかし実際に楽しいと感じたようでしたし、帰り道には私と議論をし、お互い学び合いが出来たのです。これのどこが「不適切な場所」だったと言えるでしょうか。

このAさんとの経験があってから、「出会いはご縁の物なのだから、出会って面白いと思えなければ仕方ない。ならば、そういったものに触れるチャンスを、沢山提供しよう」と考えるようになりました。学生に「ちょっと難しそうだから」「学生にはそぐわない場所だから」等という理由で情報を渡さない、という事がなくなりました。多少難しかろうが訳が分からなかろうが、受け取る方が学ぶ姿勢でいるならば、そこから得る物は大変多いと知ったためです。

大体、ちょっと難しいくらいが面白いというのは、私自身が子どもの頃に経験していたのでした。

森毅さんの言葉

中学生になりたての頃の私は、毎週末のように図書館で「ちくま日本文学全集」やら「思潮社現代詩文庫」やらを借りていました。正直言って何を言いたいのか、テーマは何か、わからない文章もたくさんありました。しかし、なにか文章の底にわくわくするもの、根拠はないけれど、次々と新しい世界を見せてくれるものを感じ、

「今の自分を満足させてくれるものはこれだな、だけどこれはなんだろう」

「何言ってるんだかさっぱりわからないけど何かいいんだよな」

と思いながら、次々と乱読していました。

そんな時、雑誌のインタビューで、数学者の森毅さん（故人）が「わかるけどつまらん本より、わからんけど面白い本を読む。その無駄が人を輝かせる」とおっしゃっているのを拝見しました。

「まさに私がやっていることじゃないか！これって、無駄なことなんだ！しかもいい無駄なんだ！」と衝撃を受けました。

それから幾年月。さてあの頃の本は私を輝かせてくれているのか、どうなのか。

ただ、「無駄な本」を読む数が極端に減った今の方よりも、中学生当時の方が、文章の「正しさ」はわからなくても、「美味しさ」は判断出来ていたように思うのです。

「わからないけど、面白そう」

今の自分より少し高いレベルに、自分を置いてみる。自分の興味のままに、面白いと思う物のあるところに行ってみる。精神的・知的・抽象的においてみるのではなくて、文字通り物理的に、自分をその場に持っていく、その実物に触れてみる。その意味は大変大きいと思います。

解らない、出来ない事があるからこそ、解りたい、出来るようになりたいと手を伸ばしたくなります。「解らない、出来ない」という事があるというのは大変素晴らしいことだと思います。

しかしその一方で、解らないから手を伸ばす気も起きないということもあります。むしろ、こちらのケースの方が多いかもしれません。

同じ「解らない」という状況なのに、何が違うのでしょうか。手を伸ばすには解らない事が多すぎて、諦めてしまうからでしょうか。解らない事をわかるため

の手段がなさすぎるからでしょうか。

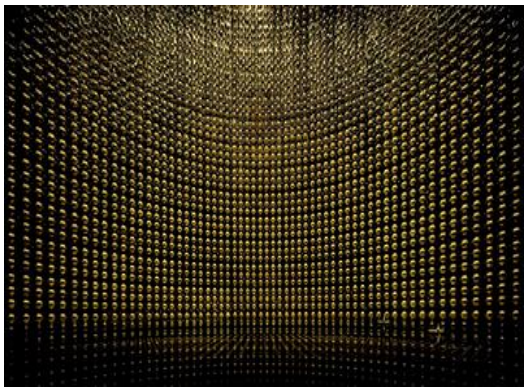
手を伸ばす気が起きるか起きないかの決め手は、大変主観的な言葉ですが、もっと根本的に「面白そうな匂いがする」かどうか、だと思うのです。「わからないけど、何か面白そう」と思えるかどうかです。

その面白そう、という嗅覚は本来誰もが持っていると思います。

何に対して面白さを感じるのかは人によって違いますが、面白そうと思える気持ちがあると、多少わからない事があっても、理解したくなるのではないかと思うのです。

勉強する意味

勉強する意欲がない、何で勉強せなあかんの？という中学生に、アンドレアス・グルスキーが撮った、スーパーカミオカンデの写真を見せました。



（アンドレアス・グルスキー　《カミオカンデ》2007 C・プリント 228.2×367.2×6.2cm(C)ANDREAS GURSKY / JASPAR, 2013/14 Courtesy SPRÜTH MAGERS BERLIN LONDON）

「…すげー！」

「すげーでしょ！めっちゃ綺麗やよな！この右下見て！このちっちゃいの、ボートやねん！人が乗ってるの！」

「…でけー！」

「でけーよね！これな、写真はアート作品やけど、写ってるのは観測装置やねん！」

そして、私の知っている（と言っても本当にほんの少しですが）カミオカンデやニュートリノに関する知識を、その中学生に話しました。

「ニュートリノっていうちっちゃいのをつかまえるのに、こんなでっかい水槽が要るらしい。」

「神岡町にあるからカミオカンデっていう名前やねんて。」

中学生は「へー！」「ふーん！」と言いながら写真をしげしげ見つめています。

「なんかな、私もよく知らんけれど、こういう面白いのやきれいなのが、世の中にはたくさんあるらしい。「あいうえお」を覚えないとマンガも読めないように、基本となる勉強をしておかないと、そういうのに触れる機会がガクンと減る。勉強するのは、そういう面白いのやきれいなのをたくさん見られるようになるためやと思うよ。」

「ふーん、面白いなー」

「うん、勉強ってわりと面白いねん、多分。」

「出来る」ための勉強と「わかる」ための勉強

受験を主眼に置いた勉強は「知っている」「覚えている」事をよしとしています。それは、「わからないけど、面白そう」とは全く別次元の話です。「正しい答えを知っている」「正解を答えられる」

つまり、「出来る」ようになるための、訓練のような勉強です。その勉強は「わからないけど面白い」ということを「わかる」ために使う道具のようなものだと思います。「受験勉強なんて意味がない」という批判は良く聞きますが、これは一概にそうも言えないと私は考えています。そこで知ったことは、そのまま「わかる」事に使えるからです。

専門学校や大学、短期大学で卒業研究のサポートをしていると、ある時点までは面倒臭そうだった学生が、ふとした瞬間からめきめきと自分で研究を進めていくようになる、というケースに、今まで何度も出会いました。「好きな事を研究していいよ」と言われても、何をしたらいいんだか…と、手法がわからずに困っていた学生が、調べ物をしている最中に「あれっ」という事実に気づき、それを確かめるためにさらに調べ…そうしているうちに、指導した私も全然知らない事実や論文を探し出し、楽しそうに私にプレゼンテーションしてくるのです。

「出来る」ための勉強から、「わかる」ための勉強にシフトすると、こんなに楽しそうに勉強するのか、と目を見張る事がよくあるのです。

わからないけど面白い

ですから私は、授業を構成する時に、「わからないけど面白い」という気持ちを想起させられるようなもの、あるいは授業の環境構成について、よく考えます。その気持ちが持てたら、自分で勝手に成長したり、探求したりする心の準備は出来たようなものだと思うからです。

その成長や探求は、教員にも刺激を与えます。教員と学生が、お互いの「わからないけど面白い」をやり取りすることで、学びはより一層深くなります。

知ることを欲する、タネと仕掛け

「全ての人間は生まれながらにして知ることを欲する」。これは、10 年ほど前にあった某雑学番組（「へぇ〜」ボタンがある、あの番組です）のオープニングにも使われた、アリストテレスの『形而上学』の一節です。「知りたい」という気持ちは、どんな人の心にもあります。何がその心を刺激するかはわかりませんが、様々なタネと仕掛けのうちのたとえ 1 つでも、学生の心に触れたらいいなぁと思い、ひとりほくそ笑みながら、ああでもないこうでもないと授業を作っています。色々とヒネったタネよりも、シンプルなものがすっと響いたり、仕掛けたつもりのないところで激しく反応が返って来ることがあります。私も日々刺激をもらい、学ばせていただいているのです。

冒頭に挙げた A さんは、数年後、大学に編入し、専門職になりました。今でも、さまざまな勉強会やイベントに参加、時には運営側に回って活動もしているようです。

先日久々に会いました。互いに共通する子ども家庭福祉分野について、時間を忘れて話をしたのでした。

境界あれこれ

1

子どもの発達における健常/異常の境界

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子

はじめに

人に関わる「境界」は数えきれないほどある。

大きなところで言えば、国境問題がある。日本のまわりでも、竹島や北方領土の問題がある。領海も境界の問題が含まれる。海の上に線が引かれている訳ではないが、地図上では線が引かれていて、領海や領土の侵犯は大きな問題となる。

もう少し小さい所では、隣の家との境界で、私道の問題で揉めたなどと度々ニュースでもみる。

更にもっと個人的なところで考えれば、物事に対し「許せる・許せない」の境界、或いは「許される・許されない」の境界等本当に沢山ある。そして境界の数だけ、問題が生ずる。

例えば国境で言えば、国そのものが出来た時代によっても異なるために、どちらが先かという問題が生じてしまう。竹島の問題で考えてみると、歴史をさかのぼり、その時代の記述の正確さを主張しつつ、韓国も日本もそれぞれ領土として主張すると言う事態になっている。捉えている時代が異なれば、その当時の境界も違ってしまう。

つまり境界に関し問題が生じる背景には、曖昧さがあるということだろう。

世の中にはさまざまな境界がある。そこで、日々の仕事を通じて経験した境界の問題を紹介していこうと思う。第一回目は子どもの発達に関わる境界について述べたい。

子どもの発達における健常/異常の境界

子どもの相談にのることが多いため、この「境界」については頻繁に話題になる。特に健診の場での境界と療育手帳の判断の二つの例を取り上げてみようと思う。

一つ目の健診についてであるが、そもそも健診の始まりは、昭和 40 年に施行された母子保健法に基づき、各市町村で行われるようになった。現在厚生労働省で勧奨している健診として、1 か月、3−4 か月、10 カ月、1 歳半、3 歳時の健診がある。更に最近では 5 歳児健診も行われるようになった。これだけ多くの健診が存在するのは、子どもの健やかな成長を確認し、異常に対し早期発見・早期治療或いは早期療育に結び付けるためである。

身体的な問題が無い限り、一般的に発達の問題が取りざたされるのは 1 歳半児健診以降になる。1 歳半児健診や 3 歳児健診の際に、身体の成長状態だけではなく、言葉の発達や精神の発達、栄養状態、生活の様子など様々ことが確認される。

目に見える異常については、保護者も分かりやすいが、精神面の発達の遅れについては中々理解して貰えない。特に発達のバラつきについては、さらに理解が難しくなる。

健診での発達確認の指標とされているものはある。それは、育児書などにも一部掲載されているが、例えば 1 歳半では、「言葉が 3 語程度ある」となる。しかし、喃語（言葉になる前の言葉の様な音のつながり）と「言葉」の境界を保護者が理解できるだろうか？保護者からは「言葉らしいものを話している」「3 語はある」「家では話している」などと我が子の健常をアピールされる。

健診の場面で言葉を話せる子もいるし、人見知りが強く全く話せない子もいる。健診を担当する保健師や心理士は、言葉の様子も見るが、それ以外の理解力や指さし行動等、多面的に捉えて発達を云々している訳である。発達の遅れについては、子どもはまだまだ成長するので直ぐに発達の遅れとして判断できるのは、相当に遅れが見られる場合のみで、健常とも異常ともつかない、グレーゾーンが多く存在する。そういう意味で、はっきりした境界線と言うものが引かれている訳ではない。

世の中にはネットなどで発達障がいのチェックリストなるものが流布しており、気になると自分でチェックする人も増えた。質問紙形式で、〇個以上該当すれば発達障がいの疑いありとなる。そんなことをしていれば、国民の大多数が「発達障がいの疑い」となりかねない。まして子どもの場合は、個々で発達曲線の違いも大きい。しかし、その事については、注意書きがあるものも、無いものもある。チェックリストだけで診断するものではないということも書かれていたり、いなかったりする。きちんと但し書きがあったとしても、チェックリストであてはまるところが多ければ、もう我が子を発達障がいと思い込み、相談に飛び込まれる保護者もいる。一般の保護者に、個別性が高いということを意識できるかと言えば疑問である。

一般の保護者の判断はともかく、健診の場における、専門家である保健師や心理士の判断は、顕著な発達の遅れがある場合を除き、基本的には様子をみていく必要があるという判断になる。グレーゾーンに属する子どもたちについては、1 ヵ月後、3 ヵ月後、半年後など、状態に応じて経過観察の時期を決める。勿論保護者の理解や受け入れの様子も勘案しての話である。顕著な遅れがあっても、保護者に拒否感が強かったり、理解が難しかったりする場合には一旦経過観察にすることもあるだろう。

このように健診の場では、明確な境界線は引かれていないというより、引けないと言った方が良いかもしれない。

次に、精神発達遅滞の子ども達に発行される療育手帳の判断について考えてみよう。

手帳には精神障害者保健福祉手帳、身体障害者

手帳、そして療育手帳の三種類がある。それぞれ障害の程度によって、年金支給の是非や金額についてもこの手帳と医師の診断書によって決まる。

療育手帳の歴史はさほど古くは無く、全国に手帳制度として広まったのは 1973 年のことである。それ以前にこの制度を持っていたのは、東京都が１９67 年に愛の手帳として独自に発行を始めていた。それでも身体障害者手帳の発行（1947 年）に比べれば 20 年も遅れての発行であった。この遅れの原因は、はっきりとした法律的根拠が無かったからといえよう。身体障害者手帳に対しては身体障害者福祉法（1949 年施行）が、そして精神障害者保健福祉手帳に対しては、精神障害者監護法という法律が 1900 年に施行されたものの、手帳制度が施行されたのは 1995 年とかなり遅い。その間に精神障害者保健福祉法が次々と改正され、発達障害が精神障害の範疇に入ることになったのは 2006 年の精神保健福祉法の改正においてである。しかし、発達障害では精神障害者保健福祉手帳だけではなく、療育手帳を取ることも可能となっている。此処にも曖昧さがある。しかも、精神障害者保健福祉手帳では、療育手帳や身体障害者手帳の様な交通費の助成などの支援が無い。

療育手帳取得のメリットは、年金や特別児童扶養手当、税金の控除や減免、交通費の補助、動物園などの入園料の補助など、付添人も含め様々な支援を受けられることである。軽度の方であれば運転免許も取れるが、就労の際に障がい者就労となると、賃金が低くなるというデメリットもある。また、障害を受容するという大きなハードルもあり、保護者にとって子どもに手帳を取らせるかどうかは中々難しい選択となる。

療育手帳の発行は各都道府県にその権限が委ねられており、明確な法律上の規定があるわけではない。従って、都道府県によって、手帳の判定基準が異なっているし、手帳の種類も、A と B の二つにしているところや、A1,A2,B1,B2 と細かく分けているところもある。手帳の名前も愛の手帳、みどりの手帳など色々ある。

療育手帳は基本的に精神発達遅滞児•者のためのものであり、主に IQ で判断されるが、IQ の境界も69以下とするところと74以下とするところなど区々になっている。加えて IQ75～84までを「境界知能」と呼び、療育手帳は非該当であるが、精神発達遅滞の問題が無いわけではないと言う曖昧な領域が存在する。

「境界」と言うと、とても単純なように思えるが、実際にはその狭間が多く存在し、境界域にいる人たちの問題は大きい。しかも最近では精神発達遅滞を伴わない発達障がいの児・者にとって、その生活力の低さやコミュニケーション能力の低さゆえに、通常の生活を営むことが困難な場合に、IQ が 80～85 と高くても療育手帳を発行する地域もある。時には IQ110 などと、平均以上であっても療育手帳が発行されているケースもある。

このように地域によってその発行はバラバラなのである。

そもそも IQ69 以下、とか’74 以下とかという線引きそのものの確実性自体が問題ではと思う。それを補うために「概ね」と言う言葉をつけているところもあるのだろう。

IQ は通常知能検査によって求められる。検査の種類はいくつかあるが、どの検査も検査者が行う。検査する側も検査される側も人間である。ということは、そもそも体調や捉え方が全く影響しないとは言えない。検査者は当然訓練を積んで、私情の影響や捉え方で差が出ないようにと最善の注意を払って検査を行っている。しかし、人が行う事に 100%と言うものは無い。更に、検査を受ける側は、緊張したり、情緒的に不安定になっていたり、或いは体調がいまいちということもあるだろう。それでも余程体調が悪くない限り、決められた日に検査を受けることになる。明らかに低い数値で出れば問題は無いのだろうが、例えば IQ70 とか 71 とかという数値が出たら、場所によっては療育手帳非該当になってしまう。

先日も IQ70 とされた方から相談があった。医師と話した時に、療育手帳が該当になるかどうか

尋ねたところ「70 だからね。69 なら該当だけど。」と言われたそうだ。1 しか違わないのにと憤慨していらした。療育手帳をもらえる事でのデメリットも勿論あるが、メリットもある。特に IQ が低く、就労が難しい状態である場合などはメリットの方が大きいかもしれない。

この 1 の違いで線が引かれることが本来の福祉の目的に沿っているのかと疑問に思う一方、どこかで線を引かねば、公的支援が広がりすぎてしまうだろうとも思う。難しい所ではあるが、この境界については誰もが納得するものに法律として定めるべきとの意見もある。全国均一にすべきという意見である。確かにその方が公平であろう。転居すると手帳が変わるのも不便な話であるし。全国或いは全世界共通にすべきなのかもしれない。どういう形にしろ、どこかで手帳が該当する境界を引かなければならないとするなら、誰もが納得する該当/非該当の境界はどの様なものであれば良いのだろう。

IQ が 70 前後であっても、生活力のある人もいるので、先ずは IQ だけではなく、生活力全般をその指標として、総合的に判断することが必要だろう。勿論今もそうした総合的判断が行なわれている。

そうなると、ある程度の幅が必要になるだろう。IQ は〇〇±幾つなどを基準とし、それに加えて生活能力、コミュニケーション能力、社会性も検査して、総合点で何点以下などと規定していくことになるのではないかと思う。手帳も、精神発達遅滞児・者対象ということではなく、発達障がい児・者手帳（ネーミングは考えるべきだが）とした方が現実に即しているのではないだろうか。これだけ発達障がいの問題が大きくなってきている今、仕事に就いても上手く行かず、ひきこもってしまう青年のためにも、発達障がいのための手帳も、幾つかの検査の結果と生活力全般を勘案して発行できると良いのかもしれない。きっと科学や医学が発達して行く中で、脳の研究が進み、脳の状態を厳密に査定して手帳交付を決める日がいつか来るだろう。その日まで、出来るだけ誰にも公平な形で交付されることが望ましい。

そもそも一人で自活して働き、生活して行くことが出来ない人を支援するのが福祉である。直ぐに生活保護ということではなく、障がいの程度によって、支援内容をもっと細かく変化させ、支援があれば働ける人にはどんどん働いてもらって、税金も払ってもらえれば、50 万とも 100 万人とも言われるひきこもり問題も少しは解決されるのではないだろうか？

今回、こどもの発達に関する境界を考えてみて、こんなことを思った。

対人援助学マガジン第 26 号
生殖医療と家族援助

例えば、卵子提供による家族形成について⑪

～ドナーは、いわば、代替当事者～

荒木晃子

当事者は誰？

D 夫：これまで二人で散々話し合ってきたけれど、なかなか答えが出ないまま時間だけが過ぎていく。僕は、この辺でいちど、卵子提供のことだけじゃなく、生殖補助医療に詳しい誰かに、僕たちの話を聞いてもらってはどうかと思うんだけど、君はどう思う？

D 子：そうね・・実は私も、不妊治療を経験した知り合いから、いちどカウンセラーに相談してみたらと助言を受けていたの。その人は、不妊治療が始まってからは、治療のことは施設のカウンセラーに相談していたらしいんだけれど、治療するかどうかを悩むのであれば、受診する以前に、生殖医療に詳しい心理カウンセラーに相談したほうがいいと薦めてくれた。治療中は、その施設のカウンセラーに話しづらいことがあったらしい。それに、私たちの場合、自分たちの不妊治療のことではないので、いろんな家族の相談を受け付けてくれるカウンセラーを選ぶほうがいいかもしれないわね。

D 夫：やはり、君も同じようなことを考えていたんだね。いくら二人で考えても答えが出ないときは、悩み事を客観的に捉えて、違う視点で助言を受けたほうがいい。ただし、今回は、不妊治療のこと、卵子提供のこと、ドナーの権利と保障のこと、そして、僕たちの子どもや、提供卵子で生まれる子どもの親子関係などに詳しいカウンセラーを見つけなきゃならない。でも、その前にひとつ、君に伝えたいことがある。僕から見ると、ドナーになるということに、君の自覚が少々足りないように感じる。ドナーになるということは、君も“治療を受ける当事者”に、つまり、“患者になる”ということ。もちろん、僕たちは不妊患者ではない。でも、少なくとも、君は卵子を提供するための医学的処置を受けるつもりでいるんだよね？（D 子：そうよ）ならば、なおさらだ。**本来ならば、不妊患者が受ける治療の一部を、代わりに受けるのだから、代替当事者であるといえる**はずだ。まずは、君自身がしっかりその自覚を持ってほしいと思う。**代替当事者であるという自覚をもって、カウンセラーに相談することが大事**だと思う。

D 子：そっか・・・確かに、そうよね。あなたの言う通り、私には少し自覚が足りなかったかもしれない。誰かが子どもを産むために、本来ならばその人に実施されるはずの不妊治療の一部を、私が引き受けることになる、その意識を持つことは大切だと改めてそう思った。私の中にある、もやもやした不安は、その辺りに原因があったのかもしれない。あなたに言われて、気づいた気がする・・・うん、

カウンセリングを受ける際にも、その自覚があるのとないのとでは、相談内容も変わってくるかもしれない。そういう点も、理解している人を探さなきゃね。

D 夫：でも、どうやって見つけるかが問題だね。

D 子：以前、生殖医療施設のホームページをネットで検索し、何軒かに電話で確認してみたことがあるの。すると、「卵子提供のことで相談がある」と言った時点で、「当院では実施していません」とか、「そういう相談は受け付けておりません」という返事が返ってきた。なかには、電話を替わった男性医師から、なぜか怒られたこともあったの。まるで自分が悪いことをしているみたいに感じて、悲しくなった。でもね、その時思ったの。『自分は何も悪いことをするんじゃない。切に子どもを迎えたいと願っているご夫婦のために、協力したいだけなんだ』ってね。そのことがあってからは、実際に卵子提供を実施している（らしい）いくつかのクリニックに電話したんだけれど、いずれの施設からも「卵子ドナーになるには、〇〇へ登録してください」という返事。私は、ドナーになる/ならないについて相談したいだけだったのに。医療施設からは、「ドナーの登録を受け付ける団体に問い合わせてください」といわれるし、実際、その団体に心理カウンセラーは不在らしいし・・・いったい何処で誰に相談したらいいのかわからなくて困ったことがあるの。

D 夫：そうか、君は君なりに、できることをやってきたんだね。もしかすると、君が試したことは、ほかの誰かも試したことかもしれないよ。「自分の卵子を他人に提供する」という重大なことを、そのことをよく知る専門家に相談したいと思うのは当然のような気がする。確か、昨年の新聞紙面には、その団体に問い合わせた卵子ドナー希望者は約 200 人と記憶にある。その時は何とも思わなかったんだけれど、最近それをふと思い出して、僕たちのようなカップルや身近に不妊で悩む知り合いがいて、何か力になってあげたいと考えている人達がそんなにいるんだと、改めて驚いたんだよ。

D 子：そうなの。私たちだけじゃないのよ、卵子ドナーになろうと考える人は。

D 夫：うん、そのようだね。家族の在り方はもっと多様であっていい、という考えを持つ人が、以前に比べて増えてきているのかもしれない。できれば、僕たちが相談する心理カウンセラーも、そんな考えを持つ人だといいのだけれど。

D 子：私もそう思う。さらに、親子や家族の法的関係や、今の日本で卵子提供がどのように位置づけられているかなど、生殖医療の専門性以外にも、社会的な見識を広く持つ人がいいな。

D 夫：そうだね。でも、どうやって探せばいいのかな・・・。あ！そういえば、以前、知り合いの法律関係の知人に話を聞いたと、君に話したことがあったよね？（D 子：ええ）確か、彼の知り合いで、生殖医療に詳しい心理カウンセラーがいるといっていたはずだ。どうかな、彼に頼んで、その人を紹介してもらってはどうだろう。

D 子：賛成！ぜひお願いしたいわ。よければ、あなたから頼んでくださる？

D 夫：了解！明日にでも連絡するよ。

「家族の問題」を家族の外へ

例えそれが個人的なことであっても、カップル/家族に端を発することであっても、こ

れまで解決できなかった問題を、これまで解決できなかった人たちの間でいくら悩み続けても、結果として、解決できないことはまれではない。ましてや、「子どもが関係する問題」となると、すでに**家族の問題だけでは済まされない**ことも少なくない。子どもが関係する家族の問題は、**家族の外へ出すこと**が、すなわち問題解決への第一歩であり、解決への近道との説もある。

先の会話で D 夫妻は、結果を二人で出すことを選ばず、専門家に相談する手段を選択した。卵子ドナーになるか否かという悩みは、心理学領域においても、生殖医学や精神医学領域においても、過去に前例のない相談となるだろう。生殖補助医療の進化により、「第三者から提供された卵子で、不妊当事者カップルが妊娠/出産し、子どもを家族として迎える」という医療技術で不妊問題の解決をはかることが可能になった結果、あらたに派生した家族の問題である。

本来、どんな家族にも、その家族に起きた問題を解決するチカラがある。そのチカラに気づく/見つける/強める援助が、家族援助者の基本スタンスかもしれない。家族の誰かの病には医療が、また、障害への対処には社会福祉が必要なように、家族が社会的な支援を得ることが必然な家族問題も、時には避けることはできないだろう。しかし、D 夫妻の問題は、(筆者の知る限り)これまで、国内の、どの家族にも起きたことがなかった家族の問題である。どの学術領域においても、解明されていない家族の課題であり、生殖医療技術に端を発する、二つの家族をつなぐ、子どもの問題ともいえる。

次号は、D 夫妻が相談に訪れたカウンセリングルームでの対話から始まる。その前に、一般に、不妊カウンセリングと呼ばれる、生殖医療を視野に入れた生殖医療現場における心理カウンセリングの基本スタンスを記述したい。これらは、D 夫妻が提供することを検討している、レシピエントに至るまでに実施するカウンセリングの一例である。

＜基本的な不妊カウンセリング＞

一般に、不妊カウンセリングとは、生殖医療に関する専門知識を持ち、且つ、不妊心理に精通する心理カウンセラーによる面接をいう。個人面接では、男性/女性それぞれの不妊心理に沿った支援に対応するも、結果として、「カップルの二者関係では自然に妊娠/出産に至らない」という不妊現象を理解したうえで、今後カップルがどのような家族をつくるかの意思決定をうながす支援が求められる。対象の大半は、法的婚姻関係、または、事実婚関係にあるカップルである。カップが一年間、性的関係を持っても自然に妊娠/出産に至らないことを確認したうえで、①生殖医療施設を受診するか否か、②里親・養親となるか否か、③現状を維持しつつ二人の生活を受け入れるかなど、不妊現象の先にある 3 つの選択肢を提示し、カウンセラーを交えた三者間の対話により検討する。

＜生殖医療現場のカウンセリング＞

このうち、①を選択したカップルには、生殖医療の初診から基本検査、一般不妊治療(タイミング法、人工授精等)更には高度生殖補助医療(体外受精、顕微授精等)の概要など生殖医療技術の全体像と費用の概算、及び主なリスクなどを説明する。基本的に、生殖医療は自費診療のため、高額な

医療費が必要となり、同時に、頻回の通院、服薬、注射など毎月ごとに繰り返す、妊娠を目的とした様々な負荷と時間がカップル、特に女性にかかることの説明は不可欠である。

また、受診後、検査または治療過程を経たうえで、二者関係のみでは妊娠/出産に至らないという医学的所見がでたカップルの要望があれば、第三者からの配偶子(精子、卵子)提供の選択肢情報を提供する場合がある。なお、**配偶子提供、代理懐胎、子宮移植等、「第三者を代替当事者とする生殖補助医療行為**は、国内では認められていない(2016 年 8 月時点)。したがって、クライエントカップルが代替当事者を必要とする生殖医療を望んだ際には、**国内の現行法で認められていない情報を提供することの説明は必須である**。また、代替当事者を必要とする生殖補助医療の多くは海外の医療施設で実施されているため、安易に情報提供することは極力回避することが望ましい。やむをえず情報の提供を求められた際には、提供情報の出典及び考えられるリスク等を補てんすべきであろう。国内法で認められていない医療情報を提供する際には、それを必要とするクライエントの動機、カップルと家族の関係性、カップル双方の意思等を確認したうえで、カップルに有益と判断した場合にのみ、国内外における「代替当事者を必要とする生殖補助医療に関する情報」を提供することが望ましい。なお、医療現場における心理カウンセラーの独立性の観点から、情報を提供することの見立ては、カウンセラーの自己責任において決定されるべきであろう。

【注】 2016 年 8 月現在、国内には統一した生殖医療の心理カウンセリングに関するガイドラインは存在しない。したがって、記述した内容は、ある生殖医療施設内で実施しているカウンセリング内容であり、すべてのカウンセリングルームに共通するものではない。

(次号に続く)

日本のジェノグラム

早樫　一男

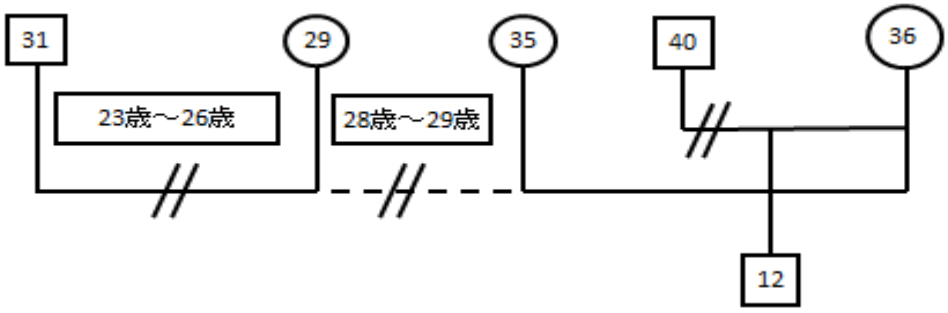
13

はじめに

最近、芸能人を始め、話題になっている「不倫」。婚姻関係にある男女が配偶者以外の異性との親密な関係を持つことを不倫関係とすると、そこには夫婦サブシステムやバウンダリーの課題が伺われます。

ジェノグラムの表記では、入籍していない場合（内縁関係）や同居の表記は以下のようになります。男女の間は点線で結びます。

以下は、31 歳の男性のジェノグラムです。23 歳の時に結婚し、３年後離婚。28 歳から約一年間、ある女性と内縁関係にありました（同居していました）。ある事情から別れた後、最近、離婚経験のある 36 歳の女性と再婚しました。男性の結婚歴（内縁も含む）を実線や点線を横に広げていくことによって、時間の流れ（歴史）が分かり、家族や個人の歴史に思いを巡らせることができます。



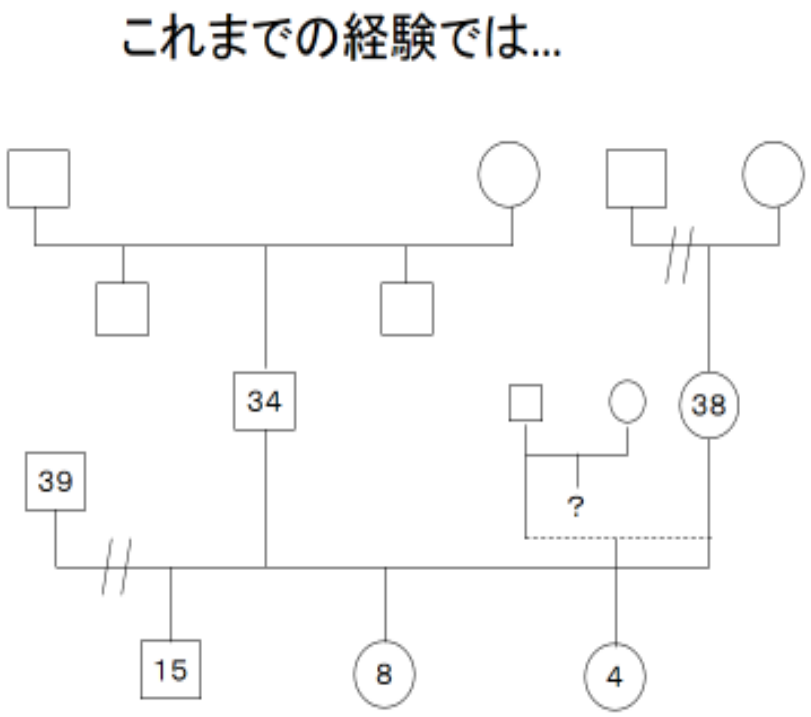
不倫関係の表記は？

ところで、婚姻関係と平行して、配偶者以外の異性との関係がある場合の表記をどのようにしますか？

あれこれ考えていると、以前、紹介したジェノグラム（「日本のジェノグラム　３　これまで経験したのは」より）が思い浮かびましたので、改めて、紹介します。

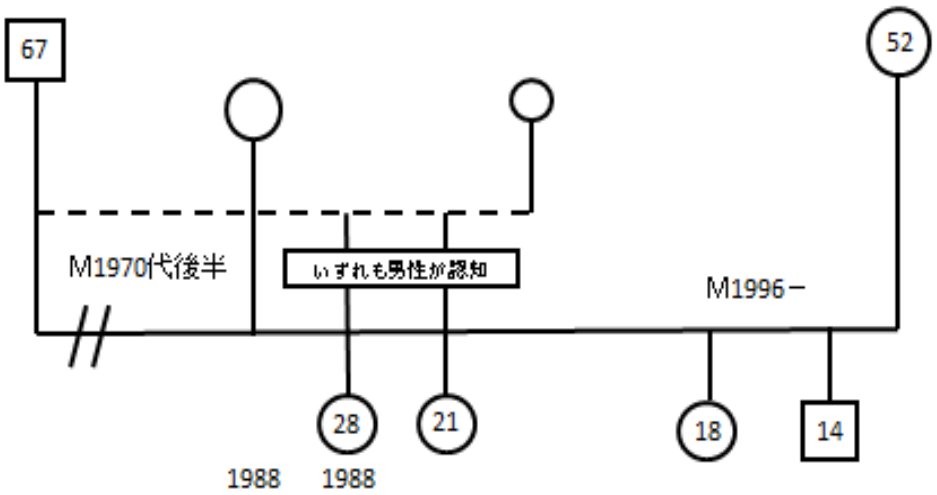
『これまでの経験では…』として紹介した以下の事例は妻の不倫でした。４歳の女児の生物学的な父親は３８歳の女性が付き合っていた男性（年齢不詳）ですが、３４歳の男性と３８歳の女性は婚姻中ですので、現在の民法では戸籍上の父親は３４歳男性となります。

なお、３８歳女性は不倫関係にあった男性の家族関係については、詳しくわからないため、「？」としています。



上記のジェノグラムを妻の不倫の表記の一例とすれば、以下のジェノグラムは男性の不倫の表記の一例です。

男性の不倫：認知の有無を表記



なお、男性の不倫の場合、相手との間に生まれた子どもを認知しているなら、ジェノグラム上のどこかに表記しておきましょう。

婚姻中の夫の不倫、妻の不倫の基本形としては、夫婦つなぐ線の上に、点線で不倫関係（相手の家族状況）を描くこととしました。

ひとこと…

さまざまな話題から家族関係に関心を持つことができます。今回は「不倫関係」を話題にしました。

ジェノグラムを作成することを通して、日本の家族が抱えている課題や家族の多様性など、さまざまな視点から考えることができるのではないかと改めて強く感じています。

今後もさまざまな家族の形態にあわせたジェノグラムの表記について、取り組み、家族理解を深めていきたいと考えています。

「日本のジェノグラム」としての連載は今回で一区切りとします。読者のみなさまに感謝申し上げます、

今後は不定期な掲載を考えています。引き続きよろしくお願いします。

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第25話

水野　ス ウ

2016年の参院選、その歴史的な意味

2016年7月10日、参院選がおわりました。選挙期間中、街頭演説では「今回の選挙の争点は経済政策。アベノミクスのギヤをもっとふかすかどうかを国民にはかる」、党首討論では「改憲は争点ではない」と何度も繰り返してきた安倍首相。ところが、ふたを開けてみると、開票速報で真っ先に流れたのも、朝刊の1面を飾ったのも、「改憲派3分の2」の文字でした。

そもそも、この「3分の2」っていう数字、いったいなんのこと？　その答えは、憲法96条の中にちゃんと書かれています。

憲法第96条
この憲法の改正は、各議院の総議員の三分の二以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならない。この承認には、特別の国民投票又は国会の定める選挙の際行われる投票において、その過半数の賛成を必要とする。

つまり、憲法を変えるためには　①衆議院で3分の2の賛成　②参議院で3分の2の賛成　③国民投票で過半数の賛成　という3つのステップがあって、3分の2という数字は、1つ目と2つ目のステップのことを指しているのです。

今の憲法が誕生した1947年以来、衆議院と参議院の両方で、改憲に前向きな勢力が3分の2議席を占めたことは一度もありませんでした。ところが、2014年に行われた衆院選で、自民党と公明党の議席が3分の2を超えたことで、今回の参院選は、改憲の国民投票まで一気に進むかどうか？が、戦後はじめて問われることになった選挙だった、というわけです。

隠れていた争点

こうした今回の選挙の意味を、いったいどれくらいの人が知っていたのでしょう？　このことについて、高知新聞の記者が参院選直前の7月2日～4日に高知市内の100人に街頭インタビューをした記事が話題になりました（2016.7.5【参院選土佐から】改憲への「3分の2」高知で83％意味知らず http://www.kochinews.co.jp/article/32968）

「今回の参院選は『3分の2』という数字が注目されています。さて何のことでしょうか？」記者がこの質問を携えて街を歩いた。返った答えのほとんどが「？」。「知らない」「さっぱり」「見当もつかない」の声が続いた。「合区のこと？」（21歳男性）、「えっ憲法改正のことって？　そんな大事なことは新聞が大見出しで書かなきゃだめでしょ。全然知らなかった」（74歳男性）の声も。

3分の2の意味を分かっていた人は、100人中17人。5分の4にあたる83人がわからないと答えたそうです。

記事の中では、自民党の改憲草案を読んだことがありますか？という質問もしています。自民党はもともと、自主憲法をつくろう、ということから生まれた党なので、これまで党内で何度も、憲法をこうかえよう、ああかえよう、という議論を重ねてきています。2005年の草案づくりに続いて、2012年にも、前回とはまた違う「自民党改憲草案」を発表していて、インターネットで読むことができます。

（自由民主党「日本国憲法改正草案」https://www.jimin.jp/policy/policy_topics/pdf/seisaku-109.pdf）

だけど、読んだことがあると答えた人は100名中10名だけ。その人たちも、新聞やテレビで概要を聞いただけで、内容を熟読したわけではないということでした。街頭に立った記者さんはこんな感想を綴っています。

関心の薄さを象徴するかのような争点、憲法。自民党は経済政策を争点の中心に置き、対抗する野党は憲法の争点化を試みている。「見事に隠れている――」。各所を歩いた記者たちの感想だ。

この記事は参院選の前に書かれたものだったけれど、記者さんの印象の通り、本当の争点が注目されないまま投票日をむかえ、選挙が終わってから多くの人が、「改憲」「日本憲法」といったワードで、その意味を検索したそうです。

あれ、こんな現象、最近どこかでも聞いたような……そうだ、イギリスの国民投票！　EU離脱を決めた国民投票が決まった直後に、「EUってなに」とインターネットで検索する数が跳ね上がったイギリスの光景と重なって、怖いぐらいのデジャブを感じてしまいました。

そう遠くはない未来　国民投票のこと

もし実際の国民投票の時にも、これと同じようなことが起こったとしたらどうだろう。2006年、第1次安倍内閣のもとでつくられた国民投票法によると、改憲が発議されてから国民投票が行われるまでの日程は、最短で60日、長くても180日以内。さらに、どれだけ低い投票率であっても、有効投票数の過半数の賛成があれば、それで憲法を変えることができると定められています。

たとえるなら、この国がもし100人の村だとして、村びとの多くが、憲法なんて知らないよ、自分に関係ないさ、って思っていて、村の20人しか投票に行かなかったとします。そのうちの10人が賛成したら、もうそれで憲法は現実に書きかえられてしまう、ということです。

草案の中味を知っていて今回改憲派に投票した人も、もちろんいるでしょう。だけど大半の人がよく意味がわからないまま、改憲派に3分の2議

席を与え、日本が戦後一度も進んだことのなかった道へと一歩を踏み出した、それが今私たちのいるところなのです。

もしも、今の憲法について知らず、それがどう変えられようとしているかも知らず、国民投票にも行かなくて、かえられたあとで、憲法はこうなったんだよ、と知らされるとしたら、それって、この国の主権者としてちょっとさびしくないですか。

たとえそれがどうかえられるにせよ、憲法は国のかたち、国の行くべき方向性を指し示す、とてもとても重要なもの。なので、せめて国民投票にはかられる前から、今の憲法がなんのためにあるのか、草案がどういうものか、多くの人が知ったうえで、さて自分はどうしたいだろうか？と、一人ひとりにちゃんと選択をしてもらえたらいいな。

EU離脱が決まった後で、その意味するところが、「他の27カ国で、学び、住み、恋愛し、働く権利を、失う」ということだったんだ、と知って後悔しているイギリスの人たちを見ていると、よけいにそう思わずにはいられません。

改憲派といわれるいくつかの党も、憲法のどこをどうかえるのか、またはあらたに加えるのか、それぞれの主張には相当へだたりがあるので、数だけを見て、すわ改憲！とおおざっぱにくくるのはちと乱暴かもしれません。

それでも、衆参ともに単独過半数という自民党の議席数を考えると、自民党の公開している改憲草案が、発議される案としてもっとも近い可能性があると思うのです。自民党の意向が大きく影響することは間違いないでしょう。

なんといっても、昨年の安保国会で、違憲といわれる集団的自衛権を含む平和安全保障法制を無理やり成立させた現政権のこと。

改憲発議から実際の国民投票まで、賛成する人、反対する人、双方がメディアを使ってその中味を知らせる期間は、最短で2ヶ月、長くても半年しかありません。いきなりその日がやってきてあわてふためかないように、今から心構えをして、周りの人とも語り合えるような準備をしておくことが大切なんじゃないかな、と私は思っています。

ふだんの言葉で

先に紹介した高知新聞のインタビューの中で一番私の心に残っているのは、この言葉。

「興味ない。もう毎日のことでいっぱいいっぱい。憲法っていっても生活から遠い存在。それどころじゃないです」（37歳女性、大橋通商店街で）

そうだよね。毎日の生活に大変だったら、新聞やニュースを追いかけるだけでも大変だよね。まして、見えにくい所に争点が隠れていたら、気がつかなくって当たり前だと思います。それに、必死に駆け抜けている毎日の中では、「憲法」っていうワードだけでも、なんだか難しそう、自分には関係なさそうって感じるかも。

でもね、私は憲法のことを知れば知るほど、私が今こうして過ごしている日々が、この憲法の上に成り立っているんだっていうことを感じずにいられないのです。私の暮らしも、あなたの暮らしも、憲法の上に成り立っている。

だから、先に知ったものの責任として、私がどれだけふだんの言葉で、憲法を語れるだろう、それがまさに大事って思っているのです。メディアやマスコミやどこかの偉い先生がいつかなんとかしてくれるってお任せしていたら、とてもじゃないけど間に合わない、という気がしています。

去年から、あちらの街こちらの町、と憲法メインディッシュ＋草案サイドディッシュというメニューでたくさんの出前けんぽうかふぇに行きました。それをきっかけに、その人その人のできることで、すきま12条———大きなことでなくても、普段から心がける、不断の努力のささやかな12

条をする人がふえた、その手応えは確かにあるのです。それでも、7月の参院選の結果を見れば明らかなように、その道はまだまだまだ遥か。そして、私にしても出かけていける場所や出逢える人は限られています。だからこそ、あなたにもあなたの言葉で憲法を語ってもらえたらいいな、と選挙後、ますます思うようになりました。

憲法、って言われてもねぇ、なんか難しそうだし、とか、憲法に関心あるなんてえらいわねぇ、とか、いう人がもしあなたの隣りにいて、そんなつぶやきを耳にしたら、その時はあなたがあなたのふだんの言葉で、憲法って、ほんとはね、と、あなたの憲法をその人に伝えてくださったら、私はどんなにうれしいか。もちろん私もせいいっぱい伝えますから、どうかあなたもあなたの持ち場でそうしていただけたら。

今の私の願いは、発議のずっと前から、国会で改憲論議の始まる前から、まずはそういう「あなた」を、いっぱいいっぱいふやしたい、ということです。

どう伝えよう

な〜んて、偉そうなことを言っているけど、私もどうやって伝えたらいいんだろう？って、選挙後、実は試行錯誤の毎日でした。

特に、てはじめの“おためし改憲”として、自民党がまずとりくみたいと思っている「緊急事態条項」。これなら意見の違う他の党の賛成を得やすく、国民にも理解してもらいやすいだろう、と改憲したい派さんは考えているようだけど、なんのなんの！　わかりやすいお試しどころか、実はすんごくややこしいってこと、マガジン25号の24話でくわしく書きました。

（関心がおありの方は、こちらからご覧ください→http://humanservices.jp/magazine/vol25/20.pdf）

それは同時に、ひとに伝えるのが、超難しい！ということでもあるのです。はてさて、さぁこれから、どう伝えよう、どう届けよう。毎日いそがしくて憲法なんて構ってる暇ないよ、って人が、ふ〜ん、これならちょっと話聞いてみてもいいかなって耳を傾けてくれるように、これまでよりもっとわかりやすく、具体的な言葉で、ていねいに手渡していかなきゃなりません。う〜んと頭をひねってみたけれど、一人で考えていても、なかなかいい答えが出てこなさそう。

ところで、私はこれまで、たくさんのけんぽうかふぇをしてきたけれど、はじめから今みたいにしっくりくる言葉で話せていたわけじゃありません。自分が知ったことをほかの人にも伝えたい、伝えてみよう、とトライしていく中で、どんどん憲法が私の身体の中にしみこんでいって、少しずつ自分らしく話せるようになってきたのでした。

そう言えば、私の話を聞いてくれた人たちから、よくこんなことを言われます。「スウさんの話を聞いてわかったつもりでいても、いざ人に説明しようとすると全然話せないんです……」

そうだよね、自分が理解するっていうことと、人に伝えらえるってことは、全くべつの話なんだよね。

あぁ、そうか、みんなにはなかなか練習できる場所がないのかもしれない。それなら、2人とでも3人とでも、憲法や改憲草案について、自分の目で確認して、自分の頭で考えて、自分なりの言葉にしてみる、そんなDIY（Do It Yourself）の時間があってもいいよね。それに、何より私自身が、一緒に考える仲間がほしいな。……と考えて思いついたのがこれ、そうだ、草かふぇをはじめよう！

草（くさ）かふぇ、はじめました

毎水曜日午後1時から6時までわが家でしている、紅茶の時間内で、毎週1時間だけ、「草かふぇ」＝改憲草案のこと、何気に話したり聞いたり教えあいっこしながら少しずつ自分で学んでいく、け

んぽうおしゃべりタイムをはじめよう。

たった1時間、されど1時間。そんな草かふぇでも回を重ねるうち、緊急事態条項や草案の中味について知る人がふえて、またその人がまだ知らない人に伝えてく、またその人が……そんなサイクルを、紅茶の場から発信していきたいと思ったのです。

これって、はやっていない紅茶の時間だからこそできる、私の「12条する」です。そうとは知らずにたまたま来ちゃった人も、1時間そこにいたら、少なくとも「草かふぇ」という単語は知ってもらえるし、ほんのちょびっとでも「いま憲」と「くさ案」にふれられるかもしれないし。何より、今の憲法が近い将来変えられるかもしれないことも知ってもらえます。

政治の話ってなんとなく話題にしにくい、そこに段差があるようで、と多くの人が感じています。その段差をなんとかスロープにかえていきたい。草かふぇは、そんな私の願いの実験室でもあるのです。

というわけで7月の最終週から、毎週3時から4時までの1時間、「草かふぇ」をはじめました。他のとくべつ企画がはいらないかぎり、当分続ける予定です。

「第1回の記念すべき草かふぇに、ようこそ！」という言葉からはじまった初の草かふぇには、5人の人が来てくれました。予想通りのいい人数です。初回なので、まずはこの場の「お約束」を全員できめることにしました。

・キャッチボールを大切にする場
・ワンマンショーにならないように
・相手を否定しない場。意見は自由に
・知らないことははずかしいことじゃない
・質問しやすい雰囲気で、わからないことはその場ですぐ訊く
・その日のテーマのプリントがあるといい
・よくばらないで、一回に少しずつ
・大事なことは何度も何度もくり返し学んでいこう

この日は、「けんぽうって○○○」の、「○○○」の中に、あなたなら何をいれますか、という問いからスタート。それぞれが出した一つ一つの言葉の意味を、全員で考え、意見をいいながら、キャッチボールしながら、すすめました。憲法とはそもそも何か、を自分の言葉にしてみる、それをみんなで共有する、そんな基本の「き」の時間。これなしに一足飛びに「草」にいくわけにいかないですもんね。もちろんところどころで、「草案」についても語りつつ。

2回目は、緊急事態条項について。3回目は、いま憲とくさ案の、前文くらべ。以後のテーマは、その時その場に居る人たちと相談しあいながら、進めていくつもりです。

草かふぇは、とてもゆっくりでこじんまり、なんだか一見効率が悪いように思えるけれど、いえいえ、ゆっくりでこじんまりだからこそ、そこにいる一人ひとりが憲法を自分のものにしていっているのを感じます。

けんぽうかふぇの時は、私、話す人、あなたは聞く人、という一方通行なことが多いけど、草かふぇでは、そこにいるみんなが平らな時間。1週間の中のたった1時間だけど、自分で考えて、自分で言葉にして、それが行ったり来たり。こんな時間の貴重さを、はじめてからひしひしと感じています。

草かふぇに参加した紅茶の常連さんが、こんなことを言ってくれました。

——草かふぇのはじまる時間まで、ふつうに紅茶して、お茶飲んで。草かふぇが終わると、またいつものふつうの紅茶にもどって、個人的な話をしたり、聴いたり。前にスウさんが言ってた、「社会のこと、ふつうに話そう、暮らしのことだもの」っていうのが、まさにこのことって感じたよ。

ああ、本当にそうです。私もあなたも、この社会をつくっている一人ひとりで、そして政治は社会のシステムのことで、それについて語りあうのはまさしく、日々の暮らしと地続きのことで。ふつうの紅茶と、草かふぇとで、声の大きさも、使う言葉も、互いの関係性にも、何の変化もなく。

こういった感覚が、政治の話につい退いてしまう、その段差をスロープにかえていくヒントかもしれない。そんな予感を彼女の言葉から聞きとりました。

守るに足るもの

暮らし、というワードで、今真っ先に思い浮かぶのは、雑誌『暮しの手帖』の編集長をしておられた花森安治さんの言葉です。

昭和20年10月、お茶の水のニコライ堂の下のちいさな喫茶店で花森さんの語った言葉が、大橋鎮子著『「暮しの手帖」とわたし』(暮しの手帖社、2010年)に、このように記されています。

> 君はどんな本を作りたいか、まだ、ぼくは知らないが、一つ約束してほしいことがある。それはもう二度とこんな恐ろしい戦争をしないような世の中にしていくためのものを作りたいということだ。
>
> 戦争は恐ろしい。なんでもない人たちを巻き込んで、末は死までに追い込んでしまう。戦争を反対しなくてはいけない。君はそのことがわかるか……。
>
> 君も知ってのとおり、国は軍国主義一色になり、誰もかれもが、なだれをうって戦争に突っこんでいったのは、ひとりひとりが、自分の暮らしを大切にしなかったからだと思う。もしみんなに、あったかい家庭があったなら、戦争にならなかったと思う……。

2016年4月から始まった、NHK朝の連続ドラマ「とと姉ちゃん」。主人公のモデルになっているのが、暮しの手帖社の大橋鎮子さんです。ある日の朝ドラの後の番組が、『暮しの手帖』の特集でした。

「戦争中の暮しの記録」という特別号を出そうとした時の、大橋さんと花森さんのきもちが、「暮らしをほかのどのことよりも一番大切なものと考え、少しでも暮らしをよくしていく」ことにあったこと。

花森さんの言葉です。

> 戦争に反対すべきだったのに反対しきれなかった。何か守るに足るものが我々にあったら、これを壊されてたまるか！という気持ちになったんじゃないかと。毎日我々が生きておるということ、これが暮らしじゃないかと。

これは決して遠い過去の話ではなく、今とぴったり重なることのように思えます。毎日のわたしたちのなにげない暮らしこそ、何にもまさる大切なもの。自分の暮らし、毎日の暮らしを何よりも大切にすること。それこそが、守るに足るものなのです。

一人ひとりの生きる、を大事にする。国や公よりも、個人の、ひととしてどう生きるかを大切にする。それを奪われて、壊されて、たまるか！というきもちを抱きながら、日々生きること、暮らすことが、戦争へつながる道に反対するちからになっていく、と私も思います。

花森さんのこの言葉は、やがて、私のなかでしぜんと、憲法13条に重なっていきます。「わたし／あなたの存在は、ほかの誰ともとりかえることができない」。これを日々の暮らしの中で自覚して生きることも、やっぱり戦争に抗う大きなちからになる。そう信じて私は生きていきたいんだな、とあらためて自分に問うて、確認しました。

13条がある、ということ

このマガジンの原稿を書きかけていた2016年7月26日、相模原の障がい者福祉施設で、元職員の男性が入所者を次々に襲う事件が起こりました。言葉にできないようなこの事件を知って、真っ先に私の頭に浮かんできたのは、昨年放映されたNHKのETV特集「それはホロコーストのリハーサルだった～障害者虐殺70年目の真実」（2015年11月17日放送）という番組で知った「T4作戦」のこと。

ナチス政権下のドイツで、一部の精神科医たちの提案とヒトラーの主導のもと、非生産的な人々は安楽死させてよい、それが国のためだ、といまこうして書くのもおぞましい法律ができ、実際に実行されてしまったのです。対象になったのは、精神の病気の人、遺伝病の人、障がいのある人たち、同性愛の人たち、それ以外の人たちも。

この時に、病院内にガス室がつくられるようになったこと。そして、その時の行動が、実質的にホロコーストのリハーサルになってしまったこと……。番組の中ではじめてその詳細を知り、70年以上も前に、こんなおそろしい発想があったのか、と戦慄する思いでした。

テレビで詳細を知ったT4作戦は、70年以上も前の歴史の中の出来事だったけれど、2016年の日本で、その優生思想に同調して実行にまで移してしまう人があらわれたこと、さらにインターネット上ではその容疑者に共感する声が少なくなかったという事実に、私の心は重たく重たくなりました。もしかしたら人間には、いつの時代にも、効率や合理化の名のもとに、一人ひとりの違いに優劣をつけ、選別し、排除しようとする者が出てくるのかもしれない。そんな愚かさを人間は持っているのかもしれない。

けれども今一度、胸に確かに刻みたい言葉があります。NHKの特集の中で紹介されていた、T4作戦に決然と反対して意見をのべた司教さんの言葉です。

> 貧しい人、病人、非生産的な人、いてあたりまえだ。私たちは、他者から生産的であると認められたときだけ、生きる権利があるというのか。非生産的な市民を殺してもいいという原則ができ、実行されるならば、我々が老いて弱ったとき、我々も殺されるだろう。非生産的な市民を殺してもよいとするならば、いま弱者として標的にされている精神病者だけでなく、非生産的な人、病人、傷病兵、仕事で体が不自由になった人すべて、老いて弱ったときの、私たちすべてを、殺すことが許されるだろう。
>
> （クレメンス・アウグスト・フォン・ガーレン）

彼のお説教は、人の手から手へと書き写され、ドイツ全土に広がっていき、それからひと月もたたないうちに、この法律は廃止されたのだそうです。

このガーレン司教の言葉、私には日本の憲法13条の理念と繋がっているように感じられます。

> 憲法第13条
> すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

自民党の改憲草案では、この13条から個人の「個」が消され、「公共の福祉」は「公益と公の秩序」という言葉に置き換えられています。

> 自民党憲法改正草案　第13条
> 全て国民は、人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公益及び公の秩序に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大限に尊重されなければならない。

効率、合理化、国益……役に立つとか立たないとか、生産的であるとかないとか、国の利益になるとかならないとか、そんな物差しで人間がはかられそうになったとき、絶対に忘れてはいけないことがある。捨て去ってはいけないものがある。それぞれにいろんな違いを抱えながら、存在している、その“be”を尊重する、ということ。

このことをはっきりと言葉として残し、未来に手渡していこうとしてくれたのが、今の憲法13条の条文なのではないかと、私には思えてなりません。何が本当に大切なのか未来の人間が迷ったとき、決して同じ過ちを繰り返さないよう、立ち戻るための確かな道標を残してくれたのではないか、と。

2016.8.25

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

五　七　日

1. なんまんだぶ

七日参りの帰り際、ある少年から「なんまんだぶ、ってどんな意味なの？」と尋ねられました。同席した大人も、尋ねてみたい質問であったと思います。

私たちは、仏壇に向かってお参りが始まるとき、合掌をして「なまんだーぶ。なまんだーぶ」と言います。お経が終わると、また「なまんだーぶ。なまんだーぶ」と言って合掌します。お勤めも「南無阿弥陀仏」という言葉が繰り返されます。

少年の疑問は当然のことで、あんなにたくさん言っている言葉はどんな意味だろう、と思ったのでしょう。

2. 南無阿弥陀仏とは

南無阿弥陀仏は漢字六文字ですが、漢語ではありません。中国の人がこの漢字を読んで、直ぐに意味の分かる言葉ではありません。古代インドのサンスクリット語の音写な

のです。サンスクリット語は、古代インドで哲学や宗教を記すための言語としてパーニーニによって作られたと言われています。だから、日常的な会話で使われることがほとんどなかった言語です。

「南無」というのは、サンスクリット語の「ナマス」の音写です。「帰命」とか「帰敬」「敬礼」などと意訳されています。インドでの挨拶で、「ナマステ」と言うのは、この「ナマス」からきた言葉です。

「阿弥陀」というのは、やはりサンスクリット語の「アミタ」の音写です。サンスクリット語の「アミターバ」と「アミターユス」の共通部分の「アミタ」という言葉で、この二語を包括した言葉です。「アミターバ」と言うのは「無量光仏」と訳されます。「アミターユス」は「無量寿仏」と訳されます。つまり、「無量光仏」は空間的に無限の仏であり、「無量寿仏」は時間的に無限の仏であるので、それゆえ「阿弥陀」というのは無限の仏を意味します。

「仏」というのは、サンスクリット語「ブッダ」を「仏陀」と音訳して「陀」が落ちたものです。「仏陀」と「仏」は同義語として使われます。

3. 南無阿弥陀仏の意味

この説明で、南無阿弥陀仏の意味が分かったかというと、そんなことはないだろうと思います。この説明は言語的な説明で、意味の説明ではありません。では、どんな意味でしょうか。

その意味は、宗派によって異なります。日本の主な仏教宗派の内、南無阿弥陀仏という言葉を使うのは真言宗、天台宗、浄土宗、浄土真宗だと思います。

真言宗では、「呪文の南無阿弥陀仏」だと思います。呪文というと叱られそうですが、真言なのです。真言とは、まことの言葉です。よく真言宗のお坊さんが、お勤めの中で聞き取れない言葉を唱えています。いくら耳を凝らしても聞き取れません。それは、サンスクリット語を唱えているからです。インドの尊い言葉をそのまま唱えることによって、その言葉に力があると考えたのです。その言葉こそが、真言なのです。音としての言葉だけでなく、文字もそのまま伝えようとしたのです。それが梵字です。

こうした行為は、非科学的に思え

るかもしれませんが、そんなことはありません。かつてサンスクリット語の解読は、18.世紀イギリスで植民地研究の中で、解読されたと云われていました。しかし、日本では独自に真言の整理をする中で、サンスクリット語の単語をまとめるようになり、鎖国をしていた江戸時代には飲光（おんこう）というお坊さんがサンスクリット語の文法を解明し、解読に成功しました。『仏説阿弥陀経』のサンスクリット原典を発見したのも、飲光でした。

天台宗の南無阿弥陀仏は、「修行の南無阿弥陀仏」と言えるでしょう。天台宗には常行三昧という修行があります。比叡山延暦寺には常行三昧堂というお堂があります。上から見ると正方形のお堂で、中心に阿弥陀仏像が安置されています。このお堂を締め切って、90 日間、阿弥陀様の周りを歩きながら「南無阿弥陀仏」と唱え続けるのです。不眠不休で唱え続けねばならないという、とてつもない修行です。つらいどころか、とても不可能に思える修行です。

私は学生時代、天台学の碩学である佐藤哲英先生に連れられて常行三昧堂に行きました。ちょうど酒井雄哉師がこの修行を終えたところでした。酒井師は、私たちにお堂を開いて見せてくれました。柱から柱へ太い孟宗の青竹が手すりのように括りつけられていました。酒井師は南無阿弥陀仏と唱えながら歩いていて、どうしようもなく眠くなるとその青竹に寄りかかったそうです。眠るとその青竹から滑り落ちて床にたたきつけられて、目を覚ましたそうです。誰かが何のためにこの修行をするのかと尋ねました。酒井師は阿弥陀仏に会うためにするのです、と答えられました。つづけて、修行の 3 分の 2 を過ぎたあたりで阿弥陀仏に会えたとおっしゃいました。その偉容はこのお堂の倍程の背丈だったそうです。酒井師の体験を幻覚ではないかという人もいるそうですが、私は酒井師の言葉が信じられました。後になって、私が出会った酒井師は数百年にひとり出るか出ないかの優れた行者であることを知りました。

次に浄土宗の南無阿弥陀仏は、「お願いの南無阿弥陀仏」だと言えます。少し正確にいうと、浄土宗の鎮西派の解釈で、西山派の解釈は「よろこびの南無阿弥陀仏」という

そうです。前回の『阿弥陀経』の話しで、臨終に際して阿弥陀様が私を迎えに来てくれると言いました。そして、極楽浄土に連れて帰ってくれるのです。だから「私が死ぬときに、どうか迎えに来てください」と阿弥陀仏にお願いをするのです。「修行の南無阿弥陀仏」は、出家者にしかできません。しかし、“お願いします”という気持ちで南無阿弥陀仏と言うのは、普通の暮らしをしている人にもできます。誰にでもできますが、お願いをした人のところにしか迎えに来てもらえません。だから、しっかりとお願いをした方がいいという百万遍念仏という考えも出てきます。京都の人は京都大学があるところを「百万遍」と呼びますが、百万遍念仏で有名な浄土宗の知恩寺があるところです。

浄土真宗の南無阿弥陀仏は、「ありがとうの南無阿弥陀仏」と言えるでしょう。浄土宗の説くように阿弥陀仏が我々を救済してくれるというところは変わらないのですが、阿弥陀仏は我々人間をすくい取ると決心したのです。その決心を本願といいます。私は、本願によって救われるとすでに定まっているのです。だから、阿弥陀仏が必ず救ってやると言っているのだから、ありがとうと言えばいいのです。

4. 『竹取物語』

「ありがとう」という言葉は、日本社会の中で大切にされてきた言葉だと思います。それは、『竹取物語』に表されていると思います。誰がどのように作ったか分かりませんが、昔から『かぐや姫のお話』として受け継がれてきました。

このストーリーを語る必要はないと思います。かぐや姫の月に帰る場面は、とても悲しいです。かぐや姫が月に帰らねばならないと、お爺さんとお婆さんに告白しますが、老夫婦は受け入れることはできません。月に帰るというのはかぐや姫の死でありましょう。

老夫婦は最愛の娘の死を受け入れることはできません。死がすべての人に訪れることは、誰もが知っていることです。知っていることと受け入れることは異なります。彼らは、娘の死を阻止するためにあらゆる手段を使います。竹取の翁（おきな）は帝（みかど）の力を借りてでも、月からの迎えを阻止しようとします。月に去ろうとす

るかぐや姫の衣(ころも)の裾(すそ)にすがる老夫婦の姿に涙が流れます。命のはかなさ、命が消えていくことの悲しさを語っています。

一方で、竹藪で竹取の翁がかぐや姫を見つけて、翁と嫗(おうな)が育てる場面は明るく華やいだものです。命の出会いです。人類の何万年にもわたる限りない命のいとなみがあり、またこの地球上で何十億という命のいとなみがあります。その中で、私たちはほんのわずかな命にしか出会えません。私の意思で出会えた命ではありません。それだけに尊くありがたいことです。私たちは、自分の命を含めて、はかなくて尊い命に出会っているのです。そのことに“ありがとう”と言ってきた物語が『竹取物語』だと思います。

5. 阿弥陀仏の力

私たちが出会った命は、消えてゆきます。送る命と送られる命があります。その命が、また再び出会うのが、極楽浄土です。そんなことはどうでもいいと言う人もいるでしょうが、私はまた会いたいと思います。会えるものならどうしても会いたいものです。それが阿弥陀仏の力によるものであるなら、「ありがとう」の一語しかないと思います。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（２２）

中村周平

Wheelchair Football というスポーツとの出会いは、同時に「糸賀亨弥さん」というスポーツの指導者の方との出会いでもありました。頸髄損傷者連絡会という組織の新年会で糸賀さんと初めてお会いしたとき、天理大学体育会アメリカンフットボール部でＧM(ゼネラルマネージャー)をされていることは教えてもらいましたが、それ以外のことはまったくわかっていませんでした。

「どうして、大学スポーツのＧMが車いすスポーツに関心を持つようになったんだろう？」

正直興味はありましたが、出会った当初は聴くことに躊躇してしまう自分がいました。糸賀さんご自身は非常にフランクで気さくな方でしたが、自分自身が上下関係を厳守していた頃の癖が抜けておらず、何か聞くにも緊張してばかりでした。それでも、Wheelchair Football を通して糸賀さんと関係性を築いていく中で、これまでのエピソードについても徐々に話を聞くことができました。

糸賀さんが天理大学体育会アメリカンフットボール部で指導者として活動されていたとき、公式戦で天理大学の選手が事故に遭いました。私と同じ、頸髄を損傷する大きな事故だったそうです。選手は、車いすでの生活を余儀なくされました。事故後、糸賀さんは病院で選手のご両親から「息子がアメリカンフットボールをプレーしているところを見ることは叶わなかった」というお話を聞いたそうです。「もう一度、彼(事故に遭った選手)にアメリカンフットボールをやってほしい」・・・そのような願いから、実現できる方法を模索されていきました。そして、少ない情報の中からアメリカに車いすでアメリカンフットボールをプレーするスポーツがあることがわかったのです。単身アメリカに渡り、そこで Wheelchair Football の基礎を学び、日本に持ち帰りました。そして、Wheelchair Football Japan という組織を立ち上げ、「障害の有無に関係なく、誰もが楽しむことのできる『車いすスポーツ』」として国内での普及に取り組まれていくことになりました。大学スポーツのＧMと車いすスポーツとの接点が、そこで初めて理解することができました。おそらく、糸賀さんには確証も当てにできるものも無かったと思います。ただ、選手に対する糸賀さんの想いが、アメリカでしかおこなわれていない Wheelchair Football というスポーツとの接点を作り出したのではないかと、私は話を聞いていく中で感じていました。

また、怪我をした選手についても少し話をしてくれました。そして、話を聞いていくうちに、その公式戦で事故に遭った方のことは、実は以前から知っていたことがわかってきました。同じ障がいのある方々のコミュニティや新聞などで幾度も話題に挙がっていた方でした。事故後、かつてのチームに復帰し、コーチという指導者の立場で現役の選手たちと向き合われていると。その方の現状を知ったとき、私は驚きを隠せませんでした。「スポーツで怪我をした人間が、このような形(指導者という立場)で再びチームに戻ることができるなんて・・・」。スポーツでの事故、とくに学校スポーツで事故に遭えば、原因の究明や経済的支援を模索していくうえで相手側との話し合いが持たれます。(残念ながら、持たれなかったケースもありますが)しかし、多くのケースで話し合いにおける折り合いはつかず、事故被災者がすべてを引き受ける(被害を抱え込む)か、裁判という手段しか残されていない現状を何度も耳にしてきました。前者の場合、重篤な障害を被った事故であったとしても十分な経済的支援もおこなわれないことが多く、事故被災者やその家族にとっては非常に厳しい現実が待ち構えています。また、原因の究明についても課題はあります。映像が残されていない場合、調査は聞き取りが中心となりますが、その多くはチーム関係者によっておこなわれます。そうなれば、自分の発言が誰かを加害者にしてしまうのではないかという危機感から客観的な調査が困難になる傾向があります。後者であれば、裁判に勝訴すれば学校側に賠償責任が生じるため損害は補填されますが、それによってチームとの関係性は崩壊してしまいます。何より、避けることが難しい事故の場合、過失責任を立証すること自体が困難であるにもかかわらず、損害を補填するためには「事故を起こした責任」を誰かが負う必要があり、それによって裁判で勝訴するしかありません。

前者、後者ともに多くの課題がある中で、このようにチームに戻り指導者の立場で活躍されていることは、驚きを越えて、ある意味うらやましくも感じていました。その方と糸賀さんが選手と指導者の関係であることは、さらに驚くべき事実でした。

「こんなことってあるんやなぁ。ラグビー以外のスポーツはやらないって言ってた自分に、Wheelchair Football というスポーツを教えてくれた方の教え子が、まさか自分と同じ怪我をしていたなんて。」

きっかけは Wheelchair Football でした。だから、このような気持ちになるのは不謹慎だったかもしれません。ただ、同じ事故被災者ということもあり、お二人の関係性に強い関心を持たずにはいられませんでした。

「事故後の対応はどうやったんやろう？お二人の関係性は？事故に遭った彼はどうやってチームにもどったの？」

そして、お二人の今の関係性を知ることが、スポーツ事故における禍害と被害を越えた関係性を構築していくうえで、その一助となってくれるのではないかという希望もどこかに感じていたのだと思います。しかし、それは糸賀さんにとっても辛く、思い返したくない事実ではないかとも思いました。

「糸賀さんは指導者として事故を目の当たりにした。事故に遭った方も、もちろん大変やったやろうけど、たぶん、糸賀さんもいろんなことを抱えているんじゃ」

糸賀さんにとって辛い過去である事故のことやこれまでのこと。今は聞けないと思いました。それを聞くために Wheelchair Football をやっているというというような誤解も与えたくありませんでしたし。でもいつか、そんな話を聴かせてもらえるぐらいの関係を Wheelchair Football を通して作っていきたい・・・当時は、そんなことを頭の片隅で感じていました。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第20回

『ハッピーアワー』

１．専門学校のトラウマ

ある週末。突然 Facebook でつながっていたかつての教え子からメッセージが届いていた。「今、京都に来ているんです。よかったら食事でもいきませんか」というメールだった。俺が彼に教えていたのはある専門学校で非常勤講師をしていた頃だった。彼は専門学校から大学に編入し、卒業後は東京で仕事をしていた。大学時代は映画の自主制作もやっていて、俺は先生役で短編映画に出してもらったりもしたものだ。映画の撮影現場の雰囲気がわかって、いい経験だった。

三条で待ち合わせをし、カツの定食を食べながら話をした。彼は仕事をやめたとのことで、これから新たな道を模索中である。今は専門学校の頃一緒だった京都在住の子の家に泊まっていて、この後しばらくは親元に帰り、それから先のことを考えると言っていた。「また京都に戻ってきたいとは思っています」と話していた。こういうパターンの子はたくさんいる。今の子は昔に比べるとかわいそうだ。将来に希望が持てないし、おそらく職場でも安月給で割の合わない仕事をやらされてきたのだろう。仕事のことはあまり根掘り葉掘り訊かないようにしようと思った。仕事に満足していたらやめたりはしないだろう。やめるにはそれなりに他人には言いたくない理由があるはずなのだ。

「昨日、あの当時、専門学校で一緒だ

った連中と飲んだんです。先生、マッチョ君（仮名）とプール行ったんですってね」

どうやら、彼は前日同級生とあって、マッチョ君から俺の名前が出たから、突然誘おうという気持ちになったみたいだった。マッチョ君は、このところ何故か俺のことを慕ってくれていて、Facebookにもしょっちゅう「いいね！」を入れてくる。

「あの子はいい子になったよね」

「前からいい子ですよ」

「そういえば、マッチョ君と付き合った時はお金がかかったんだよねー。海鮮料理食べまくったから笑」

今日の彼とは普通のかつ屋さんなので、一人2000円くらいで済んだ。彼らは社会人とは言っても、まだ給料安くて苦労しているだろう。せっかく会ってくれたんだからご馳走しなくてはならない。

「俺は専門学校は、あの後やめたからね。あそこは先生にとってはしんどい学校だよ。９年も務めたけど。」

「へえ、そうなんですか」

専門学校出身の子たちは、俺が専門学校の苦労を話すとあまりピンとこないような顔をする。大概の子たちは専門学校の時の方が大学よりも楽しかったという思い出をもっている。

前に編入して大学生となったスリム君（仮名）とバスで一緒になった時のことだ。彼は大学生活がつまらないとぼやいていた。

「専門学校が結構楽しかったんで」

「そりゃ、専門学校の感覚でいたらうまくいかないよ。これで専門学校の先生たちのありがた味がわかっただろう？」

「それはわかりましたけど、編入するまでは、大学のことなんてわからないじゃないですか」

専門学校は学生数が少なく、先生たちが一人一人の学生に目が届くように配慮されている。専門学校の子たちは、編入や就職、留学というプレッシャーが目の前にあるし、入れてもらったのではなく、入ってあげたのだという気持ちでいるから、文句は言い放題。専門学校は学生のわがままもすべて受け入れてくれる。その分、先生たちはしんどいのだけれど、学生の前ではあくまでも学生のご機嫌を損ねないように接してくれる。だから、彼らは先生たちの苦労に気づいていないのである。

専門学校で教えることは、大学よりも数倍難しい。大学の場合は、わかっていない学生がいても、わかったものとして先へと進めていく。わからないところは学生が自分で調べるなり、友達に訊くなりするだろうという前提のもとに授業している。しかし、専門学校の場合は、学生がわかるまで教えなければ文句が来る。

また大学生の場合は、単位をもらえればそれでいいと割り切っている。したがって、パワハラ、セクハラ、アカハラ、極端に不本意な点数をつけるようなことでもしない限りは、学生から文句を言われることはない。文句を言ってもどうにもならないのだということは学生の

方もわかっている。どうしてもその先生が気に食わなければ、落として来年他の先生でとればいい、というのが大学生たちの考え方だと思う。それは俺たちの頃からそうだったし、今でも基本的には変わっていない。

ところが専門学校は勝手が違ってくる。大学生だったら基本的に放任していればそれですむが、専門学校生を放任したりすると大変なことになる。とりわけ、やんちゃな学生と真面目系の学生が一緒になると後者の学生たちが文句を言い始める。俺の目から見れば、やんちゃであっても根は悪い子じゃないし、やんちゃ系の子の方がなついてくれるから可愛い。しかし、やんちゃな子をほっておくと、真面目系の子達は先生が教師としての職務を果たしていないという悪意的な解釈をしてしまう。そして、それを教務や上司の先生にすぐに告げ口に行く。さらに専門学校は規模が小さいため、悪口が流れると学校全体に瞬く間に広がっていくのだ。

俺が遭遇した最大のトラブルは、学生からクレームが来て、途中でクラスを変えられたことだ。確かに、この時は俺が選んだテキストが難し過ぎた。俺としては１番上のクラスは毎年物足りない顔をするので、多少難しめのを選んだほうが頑張ってくれるかという思いがあった。しかし、それが裏目に出た。おとなしい子ばかりのクラスだったので、直接には文句を言わない。だから俺は彼らの不満に気づいていなかった。ところが、授業評価のアンケートの結果が悪く、「わかりづらい、先生を変えてください」とひどく感情的な言い方で書かれたのだった。「うわあ、僕だったらそんなこと言われたら、落ち込んで鬱になっちゃうなあ」と同僚の先生から言われた。他の同僚の先生も、「どの先生だって教師生活の間には、一度や二度はそういうことがあるんだよ」と同情してくれた。学生の言っていることに筋は通っている。しかし、大学だったら、これくらいのことでクラスを変えるなんてことはしないだろう。おそらく学生たちは先生は傷つかないと思っている。先生は大人なのだから、自分たちみたいな若い子から文句言われたくらいのことで凹むような小さな器ではないと思っているのだろうけれど、俺たちだって人間なんだよ！！！ 落ち込みに落ち込んだ俺は、この後知り合いのカウンセラーの先生に電話で話を聞いてもらった。「おそらく親分肌の子がいて、その子が他の子を巻き込んだのかもしれませんね」とその先生からは言われた。そのとおりなのだろう。クラスを変えられてすぐに、先のクラスの男の子のひとりが「先生、缶コーヒーおごって」と職員室までやってきた。「あなたたち、俺のことが嫌だったわけだろう。よく、あんなことをしといて、おごってくれなんて言えるよね」と俺は彼に言った。彼は、「ぼくはそんなこと言っていないですよ。アンケートだって、そんな悪い点数はつけていない。ただ、あの人たちは……」。彼は俺のことを嫌っていないので、悪びれていなかった。おそらく文句を書いた学生も深い

意味はなくしたこと。若い子は残酷。しばしば自分のイライラを先生にぶつけてくる。先生に対するある種の甘えなのだろう。そのことがわかっていても、この事件は俺の心に深いトラウマを残すことになったのだった。

その１年半後、大学の非常勤の仕事が増えたため、ついに俺は専門学校とおさらばすることになった。時間的に行くゆとりがなくなったからなのだが、やはりクラスを変えられたショックが大きかったのである。

２．専門学校の贈り物

今思い出すと専門学校時代は本当につらいことがたくさんだった。よく９年も勤めたものだ。乗り越えることができたのは、一方で「先生、先生」と慕ってくれる子がいたからだった。今でも俺に連絡をとってくるのは専門学校の子たちだ。とりわけマッチョ君は俺のことを好きでいてくれて、春にはプールに一緒に行き、この後、夏は琵琶湖に泳ぎに行こうかという話にもなっている。彼からしてみれば、親父みたいな感覚なのだろうか。彼も仕事のことでは悩んでいるとラインで漏らしていて、俺に話を聞いて欲しいと思っているのかもしれない。俺としても、先生として、人生の先輩として、メンターになってあげたいところなのだが、世代の違っている俺にはどう相談にのっていいのかわからない。結局人生は自分に正直に生きるのが一番いいんだよ。自分をだましていると後で悔いることになる。誰がどう思おうと好きなように生きること、それが幸せなんだということしか俺には言ってあげられないのだ。

学生とつきあうのは楽しくて、俺は、大学での教え子も含めて、学生と一緒にいるときの写真を Facebook にアップしている。ある日、Facebook で繋がっている東京のある男の先生とメッセンジャーでやりとりをしていたら、「國友さんは、学生さんに対する面倒見もいいし、いいですよねー」と書かれた。「ぼくが面倒見ているんじゃないですよ。ぼくが学生たちに遊んでもらっているんですよ」とレスすると、「それが素晴らしいじゃないですか。若い人たちとそういう関係を構築できるところが素晴らしいですよ」と返事が来た。

確かに普通の大学の先生は元教え子とプールや風呂に入るなんてことはないだろう。しかし、俺は一緒に裸の付き合いをしてくれる元教え子が何人もいるのだ。俺がこうやって、元教え子や現教え子と仲良くやっていけるのは、専門学校で学んだことが大きかったからである。専門学校は学生と友達になれるような先生でなければやっていかれない。俺は学生たちと生のふれあいを重ねる中で、若い子の心をつかむ方法も徐々に習得して行ったのだった。そのことが大学の教え子とつきあう際にもプラスとなっている。そう考えれば、理不尽なトラウマも、不可欠なものだったのかもしれない。ここに来て、また新たな Facebook の友達が増えて、沢山の子とこ

れから会って食事をすることになっている。このためにお金もためておいた。今年の夏休みは旅行もしないつもりだから、その分学生との飲食代に使おうと思ったのだった。

ただこの頃、仕事で東京に行った元教え子からレスがこないのが気がかりだ。Facebook のメッセンジャーから何度もメッセージして既読にはなっているんだけど、ずっと返事はないままだ。彼は去年の春卒業したのだが、彼は俺のベスト教え子だった。何よりも俺の行きつけのジムのインストラクターのバイトをしていたので、親しくなり、卒業の前に一緒に先斗町の寿司屋と船岡温泉に行った。あの時は楽しかった。彼は本当に話すのがうまく、気のおけない話し方をしてくれる。

彼のような子が息子ならなあと思った。湯船の中で話した時は本当に父と息子みたいで嬉しかった。しかし、仕事を始めてしまうと、彼には彼の新しい世界が出来ていったのだろう。徐々に返事はこなくなった。まあ仕方がないのかもしれない。こんなものなのだろう。若い彼らにとっては１年といえば、結構長い。その間には様々な新しい出会いや経験があっただろうし、もう大学時代に親しかった人のことを考えることもなくなっていくはずなのである。人間の人生なんてそんなものだ。友達はやってきては去っていく。

いつかまた懐かしい気持ちになって、俺に連絡とってくれればいいなあ。Facebook でつながっておけば、しばらくたってからそういう日も来るだろう。わずかな時間でも親父の気分を味わせてくれた彼に感謝したいと思う。

３．女性との関係を断捨離

俺がやりとりをしている（元・現）教え子はほとんど全部男の子である。女の子とはほとんど付き合っていない。といっても誤解しないでほしい。俺は決して、女性と友達になれない男ではない。むしろ友達になるのは得意である。もう 10 年くらい前のことだが、「先生は控え室で一番女の先生と話しているものねーうらやましいなあ」とある年配の男の先生から言われたことがあった。普通の男の人は女性と話したいという欲求はあっても、女性の会話のペースについていかれない。女性の場合はどうでもいいことをあれこれ話すから、それにどういう合いの手をいれるのか、それがつかめない男性は多いのだ。その点俺は女性と渡り合えるだけの言語能力をもっている。女性の方も、普通の男の人だととっつきにくい。だけど、俺は男か女かわからんような男だから気楽に話せる。そんなわけで、女性と話すこと自体は俺は得意だという自信がある。

しかし、俺は女性との深い付き合いは避けてきた。かつては付き合う努力をしなかったわけじゃないが、俺の女性恐怖はカウンセリングを受けても治らなず、もうとっくにあきらめてしまったのだ。なぜ、俺は女性が恐怖なのか？

前に中島みゆきの歌でこういうフレ

ーズがあった。♪崩れそうな強がりは、男たちの流行♪　そうなのだ。男は女の前だと強がろうとする。かっこつけようとする。虚勢を張ろうとする。

大学の頃だ。友人にガールフレンドができて、俺の下宿に連れてきたことがある。そのときの彼はいつもの彼とは違っていた。変に俺のことをバカにしたような態度をとったり、ワルっぽい態度をとったり、強がっていた。なぜ、こんなことをするのか、俺には理解できなかった。一旦強がったら、その後も強がり続けなくてはならなくなる。他の男をバカにしたようなことを言ったり、無理に強がったりするような男が女は好きなのだろうか。

それに俺はやはり女性を憎んでいる。理不尽な感情であるとはわかっていながら、憎しみは終わらない。女がいなかったら、俺は不登校にはならなかった。スポーツが下手なのを見られるのも、上半身裸を見られるのも、男の子だったらそれほど抵抗はない。しかし、女の子から見られるのは耐えられなかった。ローラ・マルヴィは視線の担い手は男だと主張する。確かに性的なポルノとして異性を見るのは男だろう。とは言っても、女も男を見ているのだ。むしろ、一般に女性は瑣末主義だから、細かいことは女性の方が見ているのではないか。女は異性を見てプライバシーを詮索する。女同士で男の悪口をいう。陰口をいう。噂話をする。

俺は女に心理的虐待をされながら、誰にも打ち明けられず、一人で抱え込んだ結果、取り返しのつかないトラウマを背負うことになった。まだ不登校という言葉もない頃、不登校になり、３年も一人で過ごし、その後大学に入っても、３年のブランクは埋めることができなかった。俺が男の友達と普通に付き合えるようになったのは 40 くらいになってからで、まだ俺は女性と付き合う前の小学生の心理にとどまっている。そして、その長い苦しみの中で俺の女性恐怖は固着してしまい、もうおそらく一生女性と付き合うことはできないのである。

この頃「断捨離」という言葉が流行っているが、女性と深い関係になることの断捨離を世間は認めてくれるだろうか。女性が男を断捨離して生きるのは言い訳が立つ。「私は仕事が面白いし、結婚したら、両立が難しくなるから」。しかし、男はゲイでもない限り、結婚を拒む理由がないと世間は思っている。

今の社会では女性被害は認知されているが、男性被害は認知されていないため、男は傷ついても訴えることができない。男性差別や男性被害は女性差別や女性被害に比べればマイノリティだと言われるかもしれない。しかし、マイノリティであればこそ、傷ついた当事者にとっては大きな問題となる。誰もわかってくれない、誰も同情してくれない、だから、誰にも打ち明けることすらできない。

でも、まあいいか。これも考えようである。女の教え子とは付き合わないほうが無難だ。大勢だったらいいが、一対一でつきあうのは変な誤解を招く。男の教え子だったら、仮に俺がゲイだったとし

ても、大きな問題になることは考え難い。むしろプライベートにつきあうのは男のほうがいいのだ。

４.『ハッピーアワー』
（濱口竜介監督・2015）

今年の７月の芥川賞受賞作、村田沙耶香さんの『コンビニ人間』は傑作だった。新しい男女のジェンダーとセクシャリティを思わせるものだった。主役の女性は 30 代後半になって男性経験もなく、ずっとコンビニのバイトの経験しかないという設定。俺と似ている。俺も女性とほとんど深い関わりにならずに生きてきて、仕事も非常勤のままで、正社員になったことがない。

この彼女が男と同居することになるのだが、それがセックスのない、恋愛というのでもない、奇妙な同居生活。しかし、そこに不自然さはなく、むしろ人間的に感じられる。まさに新たな男女関係の創造であると俺は考えた。これは、いい！！！　こういう考えが社会にもっと広がればいいなあー。人間は多様。恋愛しない人がいても、どういう男女関係があっても、他人を傷つけなければ、何の問題もないはずなのだ。

そのうち、この小説、映画になるだろう。この頃日本映画は原作もの以外はなかなか映画にしづらいという話を聞いている。そういえば、この頃、大きな劇場でかかる日本映画は漫画の映画化ばかりだ。でも逆にいえば、原作ものは確実に映像化される可能性が高いということにもなる。

先日、久々に Netflix で故相米慎二監督の『お引越し』(1993)という映画を再見した。もう 23 年前の映画だ。京都を舞台に、両親の離婚で葛藤する少女の心理を描いている。当時、作品の評価は極めて高く、キネマ旬報のベストテン２位である。

最初に見たときはよくできてはいるけれど、俺にとっては大して関心の持てない話。それほど夢中になることもできなかった。それが、およそ四半世紀ぶりに見直して、面白さに浸った。人間関係の機微の描写が巧いということを思った。俺も年をとって、人間洞察力が増したのだろうか。

またそれにも増して、京都でロケが行われているので、風景のあちこちに親しみがあって、そこが何よりも楽しかった。最初に見たときはそうは思わなかったと記憶している。あの頃の俺はまだ引きこもり、京都でもう 10 年くらい暮らしていたとはいっても、京都のことは何も知らず、過ごしていたのだ。それが今となっては、すべての風景に既視感がある。俺は確実に京都という土地に根をはってきたのだという思いにさせられた。

この映画では、主人公が両親の離婚を乗り越えて、精神的なお引越しを果たす。でも、これは若いからこそできるんだよね。50 代の俺が果たしてこれから変われるだろうか。でも、変われなくてもかまわないか。1 日 1 日を懸命に生きよう。あとは神様にお任せである。

『お引越し』もオススメなのだが、こ

れは古い映画なので、今回の推薦映画としは『ハッピーアワー』をあげておこうと思う。これは神戸が舞台になっていて、『お引越し』同様に、関西の匂いが満喫できる。５時間にわたる長尺だが、これを俺は立誠シネマという京都の小学校を改造してできた映画館で見た。まさに京都を堪能しつつ、５時間たっぷり映画の世界に浸った。

神戸の４人の女性たちのドラマなのだが、印象に残っているのは、中学生の息子がガールフレンドを妊娠させてしまい、中絶のための費用と慰謝料をもって、少年の母親と祖母が相手の父親のところに頭を下げに行く。父親は終始偉そうにむっつり顔。少年の母と祖母はひたすら平謝り。帰り道に、祖母が言う。「二人で遊んだ結果、子供ができたのに、なぜ、私たちだけが謝らなきゃいけないのかしらねー」

これは我が意を得たりのセリフだった。昔から妊娠したりすると男のほうが責任をとらされるけれど、なぜ、男が責任とらなきゃいけないの？　二人でしたことなのに。こういう台詞が映画にで始めたことは一歩前進だ。昔は二人で遊んだ結果、妊娠して泣くのは女性だと言われていた。しかし、今は泣くのは男なのだ。

妊娠と限らない。教え子たちが苦労している姿を見ると、どこがどう男のほうが特権なのか、あらためて問いかけたくなる。幸せなのは女、痛いのは男なのでは！？

男は痛い！です。



二人は WinWin

「WinWin(うぃんうぃん)」とは
――関係する両者ともにメリットのある状態であること。

三嶋あゆみ

援助職のリカバリー

《19》

～「生活能力」と「愛情」と「感謝」～

袴田　洋子

今年の 6 月、3 度目の開業をして、自分の事務所で仕事を始めました。開業して３ヶ月目で、事務所を手伝ってくれる人が 2 人も来てくれて、賑やかに仕事をしています。こんな時が来るとは、思ってもみませんでした。本当にありがたいことです。私の事務所で、仲間と仕事をしている。私が思うように、望むように、やりたいように、一人ではなく、思いが同じ仲間と一緒に仕事をしている。夢のようです。ここまで来るのに、遠回りをして遠回りをして、ようやくたどり着きました。地域に根差した役に立つ相談業務ができるように、仲間と共にやっていきたいです。

《残るは、「我が家」の課題》

幸せに感じる職場で働けて、嬉しくて仕方ないのですが、浮かれて失敗をしやすい時期だなぁとも思っております。もともと器用ではないので（本当のもともとは、けっこう器用な方かと自分で思っていた時期もあるのですが、ある時、自分を客観視したときに、「自分は不器用な人間だ」と自覚）、自分が浮かれて幸福感という「感情」に浸っていると、利用者さんの「辛さ」「痛み」に対する想像が不十分になり、イケテナイコミュニケーションをしてしまうような気がしています。どうにも不器用です。この不器用が原因なのかわかりませんが、前回の記事で書いた「夫婦関係」について、なんだかまだ、くすぶっているものがあるように感じます。

《「家事」って、すごい仕事 orz》

私は、看護大学を卒業し、結婚したのちも、医療であれ、福祉であれ、働いていることが「通常」でした。夫婦ともにフルタイムで働いている場合、

「家事」というのは、本当にやっかいなものになります。「仕事」は、やるべきことをやり、課題や目標が明確、あるいは、言われたことをやればそれでよい、というものだったり、「今はこれをすればいい」とピンポイントで優先順位をつけることが可能なものだと思います。これに対して、「家事」は、キリがありません。「自宅」を居心地のよい空間にするために、掃除、洗濯、片付け、整理、ゴミ捨て、などなど、際限がないのです。ある時、男性の利用者さんと、「娘さんが仕事に出るようになったら、家事はどうしようね、掃除とか、洗濯とか、あ、ゴミ捨て、どうしようね」とあれやこれや「生活」の中に出てくることを話していたら、利用者さんが「いやー、生活するって大変だね、仕事してる方がよっぽど楽だね」と言いました。まさにそのとおりで、私にしてみても、「家事」より、「仕事」の方が、よっぽど楽なのです。これに「子育て」が入るというのは、すごいことです。とある本で読んだ記憶ですが、「日本では、スーパーウーマンしか、働きながら子育てなんてできない」とありました。そう考えると、看護師なんかより、ヘルパーさんの方が、断然にすごい職業だと思います。自分の家事能力を武器に仕事をしているのですから。

《「片付けられない夫」》

そういう我が家は、本当にイケテナイとちょっと個人的には思っていて、なんとかキレイにしたいのですが、夫が恐ろしいほどに、無頓着です。掃除機をかけてくれたかと思えば、寝室はやっていない、クローゼットの扉は開けっぱなし、使った布団は出しっぱなし、どこの小学生かと思うほどです。男性ってこんなにも片付けない人間なんでしょうか。「片付けられない夫」でネット検索すると、出るわ出るわ、すごい量です。

我が家では、猫を飼っているので、猫の抜け毛が部屋に舞っており、これに対処するには、毎日掃除機をかけるしかありません。お掃除ロボットのルンバが世に出た時、我が家の救世主はこれだー！！と早速購入しました。が、あれは、部屋が片付いていないと、役に立たないのです。お掃除ロボットの前に、お片づけロボットが必要な状態の家では、さらなる邪魔なモノになってしまいました。

《どうしたら夫に「感謝」できる？》

「片付けられない女」という言葉が広まってきて、聞くたびに、自分のことかもなぁと思っていました。自己肯定感がマイナスだった頃、仕事も私生活も「最低限」で乗り切ることしかできず、生活の「彩り」を考えることな

どできませんでした。そんな自分が断捨離をして、今の自分に要らないものを捨て、医学モデルの「自分探し（死語ですか？（笑））」を手放して、「日々の暮らしを居心地よいものにする」ことに、ようやく着手できるようになってきたと思うところで、「夫」が立ちはだかります。片付けない夫が、ゴジラのように襲ってくるわけです。

と表現する自分は、なぜ、夫に優しくできないのだろうと思い、自分を責めてしまいます。他人には優しくできるのに、夫には優しくできない。こんな話をすると、「みんな、そんなものだ」とよく聞きます。「離婚しないのは、経済的にやっていけないからよ」とも大変によく聞きます。大学院でお世話になっている先生からは、「夫婦で一緒に出来ることをやらないとダメだ。旅行とか、互いに時間を作って、一緒にやることをしなさい」といつも私に言います。４０代も終わりに近づいて、来年は５０歳になるところで、熟年離婚が他人事ではないように感じることも多いです。団先生の言う「家族でいるには、努力が要る」が、身にしみる日々です。夫への感謝が足りないのだろうと思いますが、感謝って、「感謝しなくちゃ」と思って出てくる感情なのか、そのあたりで、また自分を責めるわけです。

「感謝　足りない」というキーワードでネット検索したところ、「ありがとう、が日常から減っていくと、感謝より欲の方が大きくなる」と出て来ました。なるほど、思い当たる節があります。

自分が、今、こうしていられるのも多くの人の支えや励ましがあったからです。多くの人には、もちろん夫も入るはずですが、なぜ、「家族」には、感謝の気持ちが、薄くなってしまうのでしょうか。「生活を営む」というのは、きっと、世の中で考えられている以上に、ものすごく大変なことなのだろうと思います。

周旋家日記 19「キャリア形成について考える⑧ーシチズンシップ教育②

乾明紀

１.「シチズンシップ」科目の実践

前稿でシチズンシップ教育について述べたので、今回は筆者の実践事例を簡単に紹介したいと思う。筆者は、京都の女子大学に奉職しているが、そこで全学必修の初年次教養科目（半期 15 回）として「シチズンシップ」を計画・実施している。

この「シチズンシップ」の主な狙いは、社会で自立するために必要な批判的思考力（例えば、探究する力、情報を収集し評価・判断する力、政党や候補者を選択できる力など）を身につけることである。

日本経済が右肩上がりだった頃、キャリア形成には大きな枠組みがあった。男性には“卒業＝正社員に採用（就職）”であり、その後“定年まで会社中心の生活（社会人＝職業的自立）＝親からの自立（大人）”が始まるというレールがあった。また、女性はしばらく働いた後に結婚して専業主婦（夫の収入で経済的安定＝親から自立）となるレールがあった。

しかし、バブル崩壊以降、このキャリア形成の大きな枠組みは変容した。企業は新規採用を抑制[1]し、終身雇用と年功序列制度をも見直すようになった。このため、“卒業＝社会人＝安定した職業的自立”、“結婚＝経済的安定”という枠組みが崩れ、若者がニートやフリーターになることが社会問題化した。また、晩婚化もこの影響によるとされている[2]。

このように社会の枠組みが大きく変化する時代において、“卒業後に大人になる（卒業後に社会のことを知る）”という考え方はリスクが高い。自分自身で情報を集め評価し、責任ある判断を下していかなければならない。そして、その判断は職業に関するものにとどまらない。選挙権年齢も 18 歳に引き下げられ、日本の将来を左右する政策や争点を理解し、政治的判断を下す必要性も生じた。

イギリスの社会学者ジョーンズとウォーレス（2002）[3]は青年期から成人期への移行する過程は「シチズンシップを獲得するプロセス」として捉えるべきだと主張したが、在学中にシチズンとしての権利とその行使の方法を学ぶことは非常に重要である。

２．授業の方法

主権者になることも含めて社会で自立するために必要な力を身につけるために「シチズンシップ」では、「論争的問題（論争上にある問題）」（controversial issues）を取り上げた「論争的問題」とは、価値判断を伴い論争が事実や根拠だけでは決着がつかない問題を指す。この論争的問題を導入することの教育的効果について、先行研究では、①議論に必要な能力の育成、②政治参加への関心の向上、③政治的な知識についての理解の深化の 3 点が挙げられている

---

1 少子高齢化に伴う労働人口の減少により人手不足が深刻化している業界もある。

2 宮本みち子『若者が＜[社会的]弱者＞に転落する』洋泉社、2002

3 ジル・ジョーンズ、クレア・ウォーレス（著）、宮本みち子（監訳）、鈴木宏（訳）『若者はなぜ大人になれないのか―家族・国家・シティズンシップ（第 2 版）』(新評論、2002

（志田ら，2014）[4]。また、筆者は学生の姿を見ていて「真剣に考えたい」と思う気持ちに火をつけていると感じることが何度もあった。

本科目では「出生前診断の是非」、「消費税増税の是非」、「原発再稼働の是非」を取り上げ、学生にはこれらの問題に対する自分なりの意見を導きだすことを求めた。

なお、「出生前診断の是非」の検討については、授業のオリエンテーション機能を持たせていたため 1 回の授業で完結したが、「消費税増税の是非」と「原発再稼働の是非」については、図 1 に示したように情報の提供と意見表出（クリッカー[5]とペアﾜｰｸ）を何度か繰り返すという授業運営スタイルで各 4 回の授業をおこなった。

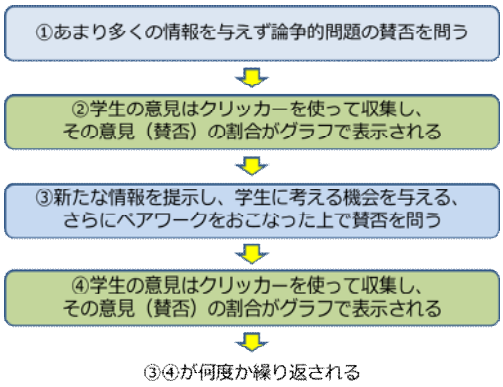


図 1　論争的問題の提示と意見表出の方法

[4]志田絵里子，山口恭平，宮地和樹，村松灯田中智輝，鈴木康弘，永井領児．シティズンシップ教育における論争的問題の検討：目的・選択基準・方法・効果の観点から.社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション」研究プロジェクト 平成 25 年報告書，　2014.3，pp. 21-50

[5] クリッカーとは、オーディエンス・レスポンス・システムと呼ばれる装置で、教員が作成した問いに対して学生はリモコン操作で回答することができ、その結果はグラフ等でリアルタイムに表示することが可能。

情報提供の方法については、例えば池上彰氏の「日本がもし１００人の村だったら」（マガジンハウス）を参考に数値データをわかりやすく表現したり、イラストや図で現在社会の問題点を整理したりしながら、増税のメリットとデメリットを伝えた。

３．授業の結果とまとめ

授業の結果、「消費税増税への賛否」については、以下のように変化した（数値はすべてクリッカーの集計によるもの）。筆者が担当した３つのクラス(受講生はａが 60 名、ｄが 102 名、ｅが 47 名）では、授業回数を重ねることで賛成が増加した。

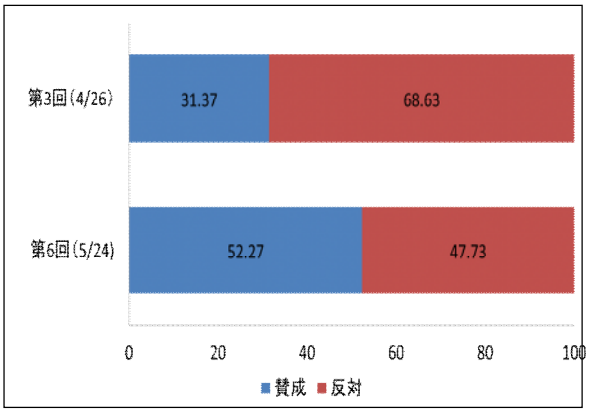


図２　消費税増税への賛否についての意見変化（a クラス）

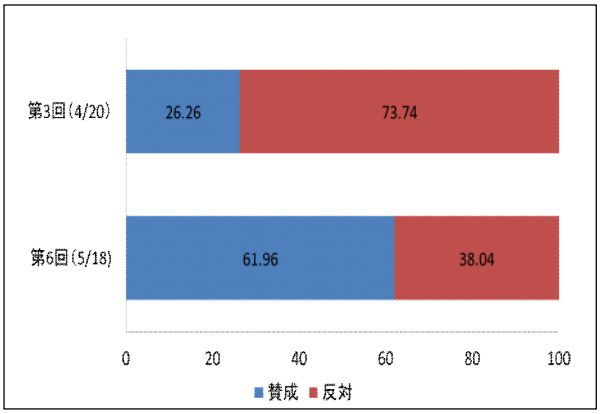


図３　消費税増税への賛否についての意見変化（d クラス）

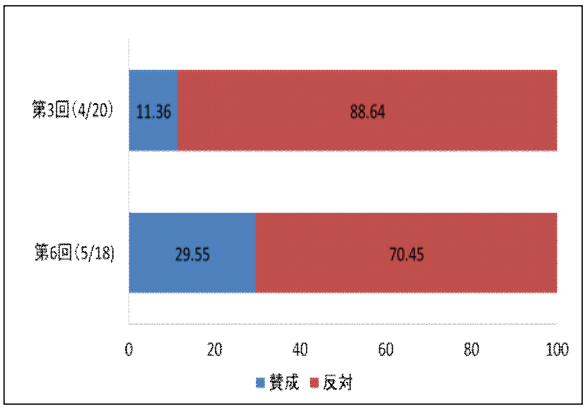


図４　消費税増税への賛否についての意見変化（e クラス）

このような変化は、消費税の問題を「私の生活」「私の体験」レベルで留まらず、学生たちが「シチズン（市民）」として、社会全体のことを見据えて税と社会保障について考えた結果の表れであろう。

また、授業期間中に第 24 回参議院選挙が行われたため、納税者の視点から政治参加の必要性を伝えた。そして、候補者を選択するために必要な争点と政策（公約）についての情報を収集するための方法を示し、重要な争点と各政党か候補者の公約を調べることを授業の課題とした（ただし、投票したかどうかや誰に投票したかなどは、当然ながら評価の対象外とした）。

本科目の受講学生の投票率は表 4 のとおりとなった。全国の投票率の平均は、54.70%であったが、全てのクラスが平均を上回った。また、選挙権年齢が 18 歳に引き下げられて初めての選挙であり、その投票率が注目されていたが、全国平均の 51.17%よりも 10 ポイント以上上回った。

表４　受講生の第 24 回参議院選挙投票率

クラス	7/10に投票	期日前投票	不在者投票	合計
a	45%	17.5%	0%	62.5%
d	61.22%	9.18%	0%	70.4%
e	46.67%	15.56%	0%	62.23%

投票の合理選択モデルによれば、有権者が投票によって得られる期待効果が、投票コストを上回ると投票し、そうでない場合は棄権することが合理的であるとされているが、「論争的問題」を導入した本科目は、学生に投票コストに勝るほどの政治的関心を抱かせることができたといえよう。

また、表 5 にあるように、授業アンケートの結果においても、授業を通じて興味関心が広がったり、役立ったと回答した学生が多く存在した。詳細な分析はこれからであるが、本科目の取組みは、社会で自立するために必要な批判的思考を鍛える機会を提供できたのではないかと考えている。

表５　授業アンケートによる授業評価

クラス	a	d	e
授業への積極性	88.2%	87.1%	95.6%
レポートへの積極性	84.3%	80.2%	86.7%
興味関心への広がり	80.4%	78.2%	91.1%
役立ち	86.3%	89.1%	95.6%
満足度	82.3%	86.1%	91.1%

トランスジェンダーをいきる（１８）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

リアルライフの構築に向けて（２）

名前と自称詞（前編）

１　始めに

ここでいう「自称詞」とは、他者に対して自己のことをなんと言うか、である。たとえば、一般的に女性であれば「私」、男性であれば「僕」、もしくは「俺」、「わし」、「わい」などなど。

体の性別とジェンダーの性別が不一致であり、しかも自分の名前が、自他共に男女いずれかの性別とはっきり認識される場合、堂々と自己の名前を名乗ることができない、というのは苦痛である。その苦痛は、堂々と名前を名乗ることができない自己に対する恥ずかしさや、親からもらった名前を人前で堂々と名乗ることができない恥ずかしさの２重う大別することができるだろう。

また、日本語には、男女によって自称詞を使い分ける特性がある。この特性によって、筆者のように、体の性別とジェンダーの性別が不一致であると、多くの場合、体の性別に基づいた自称詞を選ばされてしまう。

体・書類上の性別は女性、ジェンダーの性別は男性の筆者は、子どものころから「私」と言っていた。いや、本当はジェンダーの性別を優先して、「僕」もしくは「俺」と言いたかったが、両親や周囲の大人たちから、体・書類上の性別に基づいて、「私」ということを強制された、と言った方が正確だろう。

今回は、リアルライフ構築の２つ目のテーマの前編として、「名前と自称詞」について、子どものころから抱いていた女性名に対する激しい嫌悪・一般的に女性の自称詞として使用されている「私」という自称詞への違和感・男性名にして、一般的に使用されている男性の自称詞である「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用するまでの過程について詳述する。

２　女性名に対する激しい嫌悪と、「私」という自称詞への違和感

①女性名に対する激しい嫌悪

当然と言えば当然であるが、女性として出生した筆者は、両親から女性名を付けられ、牛若家の長女として位置づけられて育った。将来結婚して、牛若家から出て行くことを想像して、父の名前を１字付したということを、筆者は後になって知った。

ところが筆者は、、子供のころから、視覚障害と共に、身体・書類上の性別（女性）に対して、常に違和感を持っていた。つまり、体、書類上の性別は女性であるにも関わらず、心理的には男性であると認識していた。両親や盲学校の先生や友達から女性名で呼ばれたり、女性名を省略した愛称で呼ばれたりする度、恥ずかしくてまともに返事をすることができなかった。また、女性名で呼ばれることで、体や書類の性別だけで女性と判断され、ジェンダーの性別が軽視されていることへの苛立ちや悲哀缶を覚えていた。そこで筆者は、友達に手紙や年賀状を書くときは、「牛若」という苗字だけを書いて、下の女性名は書かずに投函した。

家業が美容院と理髪店という職業柄か、両親はそのような筆者に対して、特に服装や身だしなみの面で「女らしさ」を強制してきたので、そのたびに喧嘩が絶えなかった。その喧嘩の際、両親から、女性名で叱責されたときは、「名前で呼ぶな！」と大声を張り上げて怒ったものである。また、当時は父方の祖母と同居していた。明治生まれの祖母は、男尊女卑の考え方が寝ずよく残っていた人であった。そこで、筆者のさまざまな「女らしくない態度」に対して「あなたは、眼が見えない女性であることを意識しながら生きていかなければならないんだよ」と説教していた。祖母もよく、筆者の女性名を呼んで叱っていたが、「祖母の言うことには口答えをしないこと」という、牛若家の家訓に逆らうことができなかったので、ぐっと耐えるしかなかった。

②「私」という自称詞への違和感

女性名を付けられたことに伴い、両親や周囲の大人たちからは、他者に対して自分のことを「私」と言うように強制された。筆者はこの「私」という自称詞に対しても、違和感があった。

2歳年上の兄は、筆者からみて男らしい名前であったので、自分のことを「僕」、もしくは「俺」と言っていた。筆者は子どものころから、言葉の響き方や音に対して興味があったので、この「僕」、もしくは「俺」と言う自称詞に対して密かに憧れを抱いていた。兄は、男らしい名前を付けられたことで、このどこか自由で力強い「僕」、もしくは「俺」という自称詞を自由に使えるんだな、その反面、女性名を付けられたことに伴って筆者に強制された「私」という自称詞には、どこか重苦しく自由さがないなあ、というのが、筆者の自称詞に対する率直な感想だった。

ところがあるとき、ひょんなことから、ある男性が「私」という自称詞を使用していることに気づいた。それまで、「私」という自称詞は、一般的に女性が使用するもの、と思っていた筆者は、ある男性が「私」という自称詞を使用していることに、最初は違和感を覚えた。しかし、「私」という自称詞を使用していたのは、その男性だけではなく、複数の男性、それも、テレビ番組や講演などの公的な場で「私」という自称詞を使用していたことに気づいたとき、筆者はほっとすると同時に、それでも、筆者自身が「私」という自称詞を使用することに対しては、根強い違和感

を覚えずにはいられなかった。

３　男性名にして、「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用する

① 男性名にするまでの経緯

鍼灸マッサージ師の資格を取り、就職してから一人暮らしをして数年経ったころ、祖母が亡くなった。そのことをきっかけに、筆者はひそかに、次のような計画を立てるようになった。それは、「両親のどちらかが亡くなったら、男性として生きていくために男性名にすること」である。視覚に障害があるため、書類などの名前の記入欄に女性名を代筆していただくときの恥ずかしさは、今思い出してもぞっとするほどであった。

２００５年１１月、立命館大学の社会人入試に合格したことを母に知らせる電話をしたとき、母に大腸癌が見つかったことを、母自身から告げられた。そのとき、（いよいよ、男性として生きていくための決心を固めて、男性名を決めなくては）と考えた。そして、このころから、性同一性障害に関する手記を読み、名前を男性名にするには、まず、病院で性同一性障害の診断書をもらって、それを申立書と一緒に家庭裁判所に提出する、という手順を知った。

２００７年５月、母が亡くなった。実家に帰り、母の遺体と対面し、通夜・葬儀に参列したとき、近いうちに病院で性同一性障害の診断書をもらって、男性名にすることを決意した。

２００８年２月、ぼう大学病院のジェンダークリニックに通い始めた。そこで真っ先に聞かれたのは、「通称名は決まっていますか？」ということであった。そこで筆者ははっと気づかされる。男性名にしたいという気持ちはあっても、子供のころから視覚に障害があり、点字を使用していたので、視覚に障害のない人たちより、漢字の知識が乏しいことを理由に、今まで具体的にどんな男性名にするかを決めていなかった。そこで、筆者の女性名に由来した名前で、とっさに出てきた１時名で、その日１日診察を受けたが、どうもしっくりこなかった。ちょうどそのころ、ある授業で、「儒教文化」について学んだ。その儒教文化にヒントを得て、考え出した 1 時名をしばらく使っていたが、これもしっくりこなかった。そこで今度はパソコンで、ジェンダークリニックで診察を受けた際の男性名と、儒教文化にヒントを得た男性名が一緒に使われている男性名があるかどうかを調べてみると、「孝治」という名前が出てきた。最初は、この名前に対して、あまり乗り気ではなかったし、なんだか古めかしくてどうなのか？と疑問を抱いていたのだが、その一方で、なんだかこの「孝治」という名前が気になって仕方がなかった。そこで、点字の感じの辞書で調べてみると、女性名を逆にして、その上に冠を付けて完成させたシンプルな名前であることが分かり、ぱっと電流が走ったようなショックを覚えてびっくりした。（この名前なら、家族を納得させることができる）と確信した筆者は、その日から通称名として、「孝治」という名を使用することにした。

②「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用する

やっと決めた男性名を使用して 2・3 日経過したころ、ある集会で筆者は、通称名で参加した。そして、集会の場で、次のように言ってみた。「私はこれから、「孝治」という名で生きていきま

す。そこで、「私」とは言わずに、「僕」、もしくは「俺」と言ってもいいですか？」。すると、ものすごい拍手の嵐。

だが、実際に「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用してみると、最初はやはりなんだかしっくりこないような気がした。まるで、新しくかぶせた歯が、なかなか他の歯となじまないような感覚であった。特に、「俺」というのは、「僕」より強くてかっこいい印象がある分、なんとなく気後れがしそうだった。(自分のジェンダーの性別は男なのに、そして男性名を通称名として使用しているのに、なぜ「僕」、もしくは「俺」と言ったとき、こんなにも気後れがするのか) と少々悩みながらも、いつしかこの「僕」、もしくは「俺」という自称詞が、筆者の自称詞として自然に使用することができるようになっていった。

4　終わりに

次回は、「名前と自称詞（後編)」として、戸籍上男性名にしてからの自己の変革について詳述する。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（１８）

岡崎　正明

（広島市）

役場の服装について想うアレコレ

正しい身だしなみって？

すっかり一般化したクールビズ。

私の勤務する役場でも、５月から１０月末までが対象期間だ（考えたら１年の半分もやっている！）。最近の日本は、暑いか寒いかの二極化が進んでいる。根拠のない持論だが、日本が少しずつ南国化していることは、間違いない。だって昔はこんなにマンゴーなんて食べなかった。

役場の男性の服装はスーツが基本だ。

ジャケットにネクタイ、Ｙシャツにスラックス。これが夏なら、半袖のＹシャツやポロシャツに、スラックスがもっとも定番だろう。

他にも、防災や建設関係の業務では上が作業服になったり（東国原元宮崎県知事がよく着ていたアレ）、寒い時期にはカーディガンやベストの出番もある。最近は少しラフなものも許容されるようになってきたが、よほど特殊な職場でなければ、ジーパンやＴシャツなどは不適当。まあ、いわゆる一般的なホワイトカラーの世界といっていいだろう。

新人研修のとき、マナー講習の時間があった。

講師の、上品だけどなかなか圧のあるオバサマが、
「服装の乱れは市民の方を不愉快にさせます！」
「お辞儀の角度は〇〇度が美しく見えます！」
など、熱く語っておられた。あふれる熱意は感じたが、正直あまりピンとこないことのほうが多かった（ごめんなさい）。
もちろん最低限の身だしなみはマナーとして必要だと思う。だが時代や地域が変われば、正しさなんて変化する。
あまりきっちりし過ぎたら「固すぎる」「冷たい」となるし、親しみやすい恰好にすれば、「だらしない」と思う人も出てくる。価値観は人それぞれだ。どんな完璧な服装を目指しても、万人が賞賛するものなんてないんじゃ？というのが私の根本にあるからだろう。

ルール化の功罪

身だしなみで思い出すのが中学時代の制服だ。
当時学ランだったうちの学校では、裏ボタンを学校指定のモノ以外にしたり、ズボンを幅の広いボンタンにしたり、肌着を色柄物のＴシャツにしたりするのが流行っていた。もちろん生徒指導の先生の目を盗んで。
今思えば、なぜあれがオシャレだったのか…と思わないでもないが、まあオシャレというのはそういうもんである。
生徒会役員だった私は、あまり激しく逸脱はできなかったが、そんな私ですら、内緒でもらった裏ボタンをつけてドキドキしたり、友人がボンタンを買いに行くのに付き合ったりしたもんだ。
大人側からすれば「だらしない身だしなみ」。だが、子どもからすれば、大人の作った意味不明なルールに真っ向から「ＮＯ！」を主張する。そんな“レジスタンスの証”があのオシャレであり、あの年頃のカッコよさなのだろう。

本マガジンで「１工程１円＠知的障害者の労働現場」を連載されている千葉晃央さんも、その第２４号でルールについて以下のように触れている。
「ルールが細かく設定されているという環境では、自分の頭で様々なことを考える機会が減ります。そして、ルールにしたがっていると衝突やトラブルを回避できるという結果を手に入れます。逆に言いますと、自分の頭で考える機会、そして人との衝突をすることから学ぶ機会を失っていることになります。これはある側面では損失ともいえます」

最近やたら気の利いた対策や、細かいルール、先回りの支援が増えた気がするが、それが「ある側面では損失」であるという視点は、まさしく目からウロコ。援助職として、わきまえておきたい着眼点と発想力だ。

校則違反のオシャレというのは、まさしくこの考えないでいい「ルール」の中から逃れ、自分の頭で考えようともがいている姿なのかもしれない。青春だなあ。
ただ今考えると、本気で制服にＮＯをいう気なら、オシャレな私服で登校するのが

１番てっとり早い。制服にアレンジを加えて抵抗を示すのは、結局制服の存在自体は肯定していることになる気がする。まあそんなこといったら元も子もないが。

スーツ禁止の職場

服装のルールでいえば、「スーツはダメ」とされた職場にいたこともある。
そこは公立の精神科通所施設。統合失調症や発達障害などを持つ、２０代～５０代くらいの方が通ってこられ、集団活動を通して社会復帰を目指す場所だった。
毎日利用者の方と料理を作ったり、スポーツをしたり、書道や木工などの作業をすることもあった。ときにはグループで映画を観に行ったり、外食へ行ったりすることも。
真面目で、知的能力は私なんかより断然高い人も多かった。英字新聞スラスラ読むとか。ただ、みなさん病気や障害のためもあって、集団行動が苦手だったり、社会経験がすごく不足していたり、偏っていたりする。
職員は様々な活動を通して、利用者が色々な経験を積み、無理のない対人関係作りや、適切なコミュニケーションの練習をするお手伝いをしていくのだ。

そんな職場なので、スーツでいることは仕事の内容からもフィットしない。休日のような普段着スタイルが最適とされた。ジーパンにＴシャツで通勤を始めた頃は、なんだか妙に解放された気分になったものだ。

また利用者の中には就労したが上手くいかず、病気が悪化した方や、就労したくてもできないでいる方も多くいた。そういう人の前で、職員がスーツやＹシャツ姿で働く姿を見せるというのは、相手に様々な感情を呼び起こすきっかけになりかねない。普段着での勤務には、そうした配慮もあったように聞いている。

役場の対人援助〝服〟

そんな経験から、数年後にまた地域の役場に戻った際、私はあらためて役場の対人援助職がスーツを着る意味を考えさせられた。「当り前だ」と考えないでいたことが、ルールの外に出たことで、客観的な視点を得たのだ。

なぜ男性職員はスーツを着るのか？社会の常識だから？「きちんとした格好」が望ましいから？「きちんとした格好」って、スーツ以外で表現できないの？考えたら女性職員はスーツじゃないぞ。華美になり過ぎないようにはしているが、基本的には自由だ。この差はなんだ？
とくに福祉関係の職員がスーツを着てネクタイをするメリットって、何かあるんだろうか？

「当り前だから」で終わらず、改めて考えてみると、なんだか着る理由があまり見当たらない。とくにネクタイについては、通常でもクールビズで半年間勤務している

こともあり、「これって本当にいるんだろうか？」「逆にデメリットもあるんじゃ？」と思い至った。

福祉関係の部署には、いわゆる社会的弱者と呼ばれる方が来る割合が高い。失業中の人、重い病気で働けない人、障害のある人、独居高齢者、ひとり親などなど。
そんな方々に、スーツにネクタイで働く職員は、どんなふうに見えるのだろう。もちろん「きちんとした格好の信頼できる人」となるかもしれない。しかし一方「自分とは違う恵まれた世界にいる人」という見方も、確かに存在する。
「高学歴」「事務的」「敷居が高い」。見方によっては、そんな印象を抱く人もいるかもしれない。

いろいろと考えたすえに、私はネクタイつけて仕事することを止めた。
自主的に「１人ノーネクタイ運動」をすることにした。
もちろん式典など、ＴＰＯに合わせて必要なときはする。しかし普段の業務時は、あまりかっちりフォーマルになり過ぎないよう、心がけている。

テーマは
「人は良さそうだけど、ちょっとすきのある役所のおにいちゃん（おじさん）」
これである。

どっちかというとオシャレではない。ややダサ目なくらい。かっこいいスーツは着てないが、清潔感はまあ及第点。そのかわり声がかけやすい。敷居が低い。そんな見た目を目標にしている。

この習慣を始めてかれこれ６年以上経つが、今まで上司から注意をされることも、市民から「だらしがない」とクレームを言われたこともない。
まあ、かといって「親しみやすくて好感がもてるねえ」と褒められたこともないが。
役場の職員の服装なんて、圧倒的多数の人にとってただの背景だ。それくらいでちょうどいいと思っている。目立たず・立派過ぎず・くだけ過ぎず。そのあたりが、いい塩梅なのではないかと思う。

相談援助も見た目から？

服装で思い出した話がもう１つ。
ひと口に公務員といっても、その仕事は事務職だけではない。様々な役割の職員がおり、それぞれ仕事に合った服装をしている。
例えば児童相談所には、白衣を着た医師、Ｙシャツ姿のケースワーカー、ジャージやジーパンで働く、一時保護所の保育士などがいる。私の所では違ったが、心理職が白衣を着る職場もあると聞く。

「ジョイニング」という言葉がある。家族療法の業界で「仲間入り」といった意味だが、福祉の世界で言われる「ラポール」とか「信頼関係作り」とかいったものと、

ほぼ同義語である。
　ジョイニングには言葉による方法（例えば相手の解決努力をねぎらうなど）もあるが、他にも様々な要素がある。非言語コミュニケーションである身振り・手振りはもちろん、見た目の印象に大きな影響を及ぼす「服装」もその１つ。例えば専門性や権威を求めている相談者にとって、「白衣」はその信頼感を高めるのに一定の効果があるというのは、納得できるところだろう。

　十数年前。児童相談の仕事を始めたばかりの頃。相談場面で親御さんから「あなた子育ての経験は？」「お前みたいな若造に何が分かる！」と言われることがよくあった。
　「若い＝頼りない」。見た目でのジョイニングにハンデを感じた私は、「お医者さんはいいよなあ。若くても白衣着てれば信頼されて…」と、八つ当たり気味に愚痴っていた。

　自分の未熟さを棚に上げて羨ましがっていたわけだが、先輩方や、師と仰ぐＲ医師から「頼りないのを武器にしたらええねん」と言われ、ハッとした。
　「若い＝頼りない」は、「若い＝頼りない＝親しみやすい、話しやすい」にもつながる。ワンダウンポジションで、親御さんから「どうして今回は前よりうまくできたんです？すごいなあ！」と教わる。そんな関わり方もできるのだ。
　また子どもたちとは、白衣の専門家やベテラン職員より、敷居がなくて話がしやすいという「若さゆえの武器」も使える。まったく子どもというやつは、その場にいる人の中で１番自分に近い人を見つけ出す、天才なのである。

　だから対人援助の現場では「白衣が有利でジャージが不利」なんて画一的な価値観は成り立たない。
　それぞれの見た目やポジションが、時と場合によって長所になったり、短所になったり。ようは工夫次第。それが身に沁みて分かってからは、ないものねだりは止め、数少ない自分の持っているものをどう活かすか？そのことに知恵を絞るようになった。

　「人は見た目が９割」。たしかそんな題名の本もあった。
　９割は言い過ぎかもしれないが、確かに話の中身よりも、どんな人が、どんな関係性の中で語るのか。その方がコミュニケーションの世界では大事なことがよくある。
　相手の目に自分がどう映るのか。
　そんなことも冷静に意識して仕事ができたらと思う。

検査不能？そのとき検査者は

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その⑯

大谷　多加志

今年度になってから、大学院での授業や職場外での研修等で、K 式について紹介したり、自分の体験を話したりする機会が増えました。それに合わせて、色々な方から質問を受けたり、話したことへの感想を聞いたりすることも増えました。その中で、とくに検査経験が少ない人が、「検査不能」という事態に対して、思った以上に強い恐怖心を持っているように感じました。

今回は、この「検査不能」をテーマにしてみたいと思います。なお、一言に「検査不能」と書きましたが、検査自体がスタートしないこともあれば途中で止まってしまうこともあり、背景に子どもの要因もあれば検査者の要因もあったりで、実質的には「検査不能」という表現が適当ではないようにも思うのですが、ひとまず「検査が完了しない」という事態の総称として、本稿ではこの言葉を用いることにします。ご了承ください。

「検査不能」が怖いワケ

思い起こせば、自分自身も「検査不能」という事態が起こることに恐怖心を持っていました。とくに初心者の頃、検査に対する構えがとりにくそうな子どもに対して、ベテランの検査者があの手この手を繰り出していつの間にか検査完了まで持っていってしまうのを目にしたりすると、それがとても参考になると同時に『自分にできるのだろうか』というプレッシャーにもなっていました。検査者の力量によって検査がとりきれるかどうかが左右されると感じ、「検査不能＝検査者として無能」であるように思い、「検査不能」という事態に陥ることをとても恐れていました。

私自身は、数例目の検査で「検査不能」を経験しました。今から考えても、検査者としての力量不足が、1 番の要因だったように思います。対象となった子どもや親御さんへの申し訳のない気持ちや、打つ手なくただただ狼狽えていた当時の感情は、今も鮮明に覚えています。私自身にとっては、忘れてはいけない教訓を含んだ経験でした。

ただ、その場面に今の自分がいたとしたら検査完了までできるのかと言われれば、やっぱり 100%できます！とは言い切れないようにも思います。それはやはり『相手があることなので』という点に尽きるのだろうと思います。

「検査不能」？その時検査者は

一言で「検査不能」と言っても、そこに至るまでの経過は様々です。そこで、まず

「検査不能」について状況による分類を行い、「検査不能」に至る要因や考えられる対応について整理してみたいと思います。

①導入

14 号でも書きましたが、「導入」は最初のヤマ場です。泣きながら入室して来られたりしたら、いきなりクライマックスの感があります。導入時点で「検査不能」になってしまうと、検査に関する情報は全く得られなくなってしまうので、なんだかんだ言っても検査者としては一番避けたいと思う状況かもしれません。

とくに低年齢の子どもの場合、慣れない場所や相手というだけで、固まったり、泣き出してしまうことも少なくありません。ただ、泣いている時でも子どもの反応は様々です。その場で立ち尽くして泣く子、お母さんや先生にしがみつく子、そうしながらもチラチラと検査者の方も伺う子、時にはお母さんにしがみついて泣きながらそのまま眠ってしまう子もいました。このような反応を、その子の新奇場面で振る舞い方を見る、１つのよい機会だと思うようにすると、検査者としては気が楽です。

病院で検査をする場合、個室に連れて来られた時点で「注射！」と思って泣く子もいるようです。積木などで誘いかけるうちに、『どうやら、そういう部屋ではないらしい…』とわかって、徐々に警戒を緩めてくれる場合もあります。

一方で、場所ではなく「人」への慣れが大事な子もいます。チラチラと検査者の方をうかがっている子どもには、何とか『検査者は危険人物ではなく、何なら関わったらちょっと面白いかもよ？』くらいに思ってもらえるように関わりたいものです。人に対してどのように馴染んでいくのか、どんな人に安心感や興味を示すのかは、子どもによって全く違いますので、この辺りはその場その場で検査者が感じ取り、関わりを工夫するしかないように思います。

反対に、最初からフレンドリー過ぎる子や、「今日はよろしくお願いします」と妙にかしこまった挨拶からスタートする子もいます。検査自体はスムーズに進む場合が多いですが、新奇な他者との関係の作り方としては、少し特徴的かなと心に留めておいた方がいいかもしれません。

②中盤

導入はできたものの、中盤で行き詰り、検査が続けられなくなる場合もあります。検査序盤から堅い表情で一言も発せず必死に場に合わせていた子どもが、ついに思いがあふれてぽろぽろ涙をこぼすこともあります。また何かの課題で『失敗した…』と感じたのをきっかけに全く課題に手を出さなくなり、検査に対する構え自体が取れなくなる場合もあります。こんな場合は、日常生活での姿にも思いを巡らせてしまいます。『我慢し過ぎたり、溜め込みすぎたりしてないかな…』『失敗しそうだったり、苦手なことをする時、普段はどうしてるのかな…』などです。そのため、こういった状況から、気持ちを立てなおすことができるのか、できるとしたらどんな関わりや要素が支えになるのか、といったことを探っていくと、後の助言や支援に役立つ情報が得られるかもしれません。

子どもの気持ちに添った声かけや励ましなど、情緒的関わりや気持ちの支えが大切

な子どももいます。また、『後〇個やったら終わり』など具体的な見通しが持てることで、切り替えができる子もいます。シンプルに、新しい検査用具が出てくると気持ちが切り替わったり、集中力が回復する場合もあります。

また、気持ちの切り替えや立て直しには、「時間」の要素もあります。何らかの関わりで比較的短時間で気持ちが変わる子どももいますが、言葉や関わりは届いていても行動が変化するまで、じわじわと気持ちが浮き上がってくるのを待つことが必要な場合もあります。この辺りも、子どもによって様々で、検査者の感覚が問われるところです。

③終盤

いよいよ終盤。後はどの項目をすればいいか…と検査者が検査全体の終了を考え始める時間帯に、「検査不能」の危機が訪れる場合もあります。一番目に見えやすいのは、「疲れ」です。K 式の実施に要する時間は、低年齢の子どもほど短く、年齢が高くなるにしたがって長くなる傾向があります。目安として、2 歳未満なら 20～30 分、4～5 歳なら 30～40 分、6 歳になると 40～50 分というところでしょうか。もちろん、検査者の手際や、子どもの反応のペースにも左右されますが、およそこのくらいだとは思います。

2 歳児なら検査開始 30 分頃、4～5 歳児なら検査開始 40 分くらい経ったころには、徐々に「疲れ」や「集中が切れた」様子が見えてきます。そんな中でも、多くの子どもは新しい検査用具が出てくると、一度は気持ちをそちらに向けることができたりするので、率直に『すごいなぁ』と感心します。しかし、一方で、疲れや集中困難が顕在化し、検査の実施が危ぶまれる事態になることもあります。

中盤と同じく、励ましや『後〇個だけ』という見通しが支えになる場合もあります。『後 1 個だけやってくれたら嬉しいなぁ…』という検査者の泣き落としに、『しゃーないな…』という様子で付き合ってくれる子どももいます。口では堅いことを言っていた子が、情に訴えられると思いがけず素のやさしさを見せてくれたりして、こちらも思わずジーンときたりします。

検査場面での行動観察を考える

ここまで述べてきたように「検査不能」は検査者にとっては難しい問題ですし、なるべく回避したいという気持ちも働きます。そのため、『検査を複数回に分けて実施してもよいか』『ワークシステムにのせて、カゴに 1 つ 1 つ課題が出てくる形で実施しているが、構わないか』と、検査不能を先回りして回避しようと工夫する人もいます。

ただ、このような方法で 1 つ 1 つの課題の通過・不通過をかき集めて、「検査完了」を整えることと、検査序盤から終盤までの子どもの気持ちの動きとそこに関わる検査者とのやりとりからみえてくるものを天秤にかけた時、私はただただ「検査完了」を目指すのは何となく『もったいないなぁ…』と思ってしまいます。検査場面における行動観察の目的は、何も検査課題に関連する情報だけを収集することではないのですから。

電脳援助 ver.16

浅田 英輔

Twitterってなにがおもしろいの？

友人の一人の言葉である。
その人はネットはみるし、フェイスブックも登録して時々投稿もしている。
コメントをつけられるとうれしいようだ。
昔はミクシィもやっていたが、それほど見ていなかったようだ。
でも、Twitterは何が面白いのかわからないそうである。
「Twitterに熱心な人って、リアルで話す相手いないのかな」だそうである。

○Twitterってなに？

140文字までの投稿を共有するサービス。
説明はこれに尽きる。誰でも無料で始められて、すぐに使うことができる。

よく知りもしない他人のつぶやきをだらだらと眺めることができるサービス。くだらない自分の日常をたれ流すことも可能。

世界中のいろいろな人の様々な話をいくらでも読むことができるサービス。自分から情報発信して意見交換などをすることも可能。

○Twitterのよいところ



・気楽
まずは、匿名、無料でできることが挙げられる。気になったら始めてみればいいし、つまらなかったらやめればよい。
「呼び名」「メールアドレス」「パスワード」だけで始めることができる。個人特定されるものは何もいらない。ここでケータイメールのアドレスなどを使うと、友達のTwitterに「Twitterはじめました」の通知が行ったりするようだ。リアルの友人とは別のつながりを求める人は、webメールアドレスを取得するなど、ケータイメールとは別のアドレスを使うとよい。
「炎上」したり、個人を特定されたりすることが起きているが、何もつぶやかず、メールアドレスもケータイなどを使用しなければ特定しようがないのだ。とりあえず登録してみるといいと思

う。誰もなにも損はしない。（Twitter経由で広まるパソコンウィルスも存在するが、URLをクリックしなければ概ね問題ない。）
　もちろん、長くやっていてそれなりのつながりもできてくると、簡単にやめるのはもったいない気が起きてくることはある。

・速い
　Twitterアカウントの中には、「bot」と呼ばれる自動システムアカウントや、ニュースサイトアカウントなどもある。地震を感じた時などは、何よりもTwitterでの情報が速いように思える。自宅住所を載せている人はほぼいないと思うが、都道府県や市町村程度の居住地を載せている人は多い。それを載せていなくても、普段のツイートで「東京は晴れています」とか「札幌雪すごい」とかいうことで、だいたいどの辺の人かはわかっていたりする。北海道で地震があったときに「ゆれた」「大きい」などとツイートしているのはやはり北海道民であろう。ニュースアカウントの反応も速いし、地元民の反応も合わせると、緊急情報ははやく得られるのだ。
　これを書いている8月だと、オリンピックや甲子園のこともすぐに流れてくる。
　また、フォロワー数が増えてくると「これこれってなんなの？誰か教えて！」とつぶやくと答えてくれる人がいたりする。まさに集合知である。ただし、ググればわかることには「自分で調べろ」なんて返答がくることもあるかもしれない。

・情報量が多い
　Twitterは「フォロー数」（自分がみれる相手）と「フォロワー数」（自分をみている人たち）がある。
　フォロー数が多ければ多いだけ情報は多くみられる。ただし、スマホを触っている時間が長い人であっても、すべて見ることができるのは100人程度ではないだろうか。これは人によるが、「少数の楽しめるアカウントのみフォローする」のと、「興味のありそうなアカウントを片っ端からフォローして、気が向いたときに見る」といったタイプがあるだろう。あるいは、「たくさんフォローするけど、本当にみたい人だけリストにする」といった使い方もある。



　情報量は非常に多い。それはもうほぼ無限といってもいいくらいである。アカウントを複数使って、「アカウント１は真面目なことをつぶやき、フォローしている人も真面目系」「アカウント２はアホなことをつぶやき、フォローしている人もネタ系」と使い分ける人もいるようだ。
　その情報をどう仕分けていくのかといったこともTwitterの使い方で大事なことかと思う。

・広げやすい
　よいこともわるいことも、非常に広がりやすい。コンビニバイトの人が、冷蔵庫に入って撮った写真などが広まって大問題になったことがあった。本人はちょっとした笑いのネタのつもりでも、全世界の人にみられるのである。そして返信も短文であるため、「（仲間内で笑ってるくらいなら許せるけど、世の中に発信しちゃ）これはダメでしょ。」といった部分が広がっていく。度が過ぎた悪ふざけを擁護する気は全くないが、内輪でやっていれば「まずいってそれ。やめと



けよ。」で済む問題が、本部や世間を巻き込んだおおごとになってしまうのがTwitterの怖さである。

もちろん、よいことも広がりやすい。宣伝に使ってもよいし、いい考えを広めるのもいいだろう。我々が仕事でかかわる問題には、世の中で誤解されていることが非常に多いことと思う。それらの正しい（と思われる）情報や知識を広めていくことも立派な「普及啓発」になると思う。

編集長も「拡散希望」している。対人援助額マガジンの宣伝はどんどん広めましょう！

・知らない人からの反応

気になった人をフォローするので、知らない人からフォローされることもある。そのため、誰にでもなく発したツイートに、知らない人から反応がくることもある。

プロフィールに「臨床心理士」にして心理系の人を多くフォローしていると、フォローされることも増える。そうするとタイムラインが心理の話が増えてくる。誰かの発言に返信してみてもいいかもしれない。そうしているうちにつながりができてきて楽しいかもしれない。

全くツイートしない人（つながっても面白くない）、プロフィールに何も書いていない人（とっかかりがない）、プロフィール画像が初期のまま（おぼえにくい）などの人はフォローされないことが多い。ちょっと世界を広げたいなら、興味あることなどをプロフィールに書いてみるといいだろう。

返信や反応がなくとも、「面白いことをツイートする人」が数人見つかると、少し楽しくなってくる。いつも見ていると「知っている人」な気がしてくるのが面白いところかもしれない。

◯何から始めればいいの？

始めるのは無料。PCでもiPhoneでもなんでも、登録してみるのがよい。ただし、Twitterを始めてすぐのときにはフォローしている人もフォロワーもゼロである。いくらつぶやいても誰もみていないし、リツイートするものもない。タイムラインには自分のつぶやきが流れるのみ。くっそつまらん。

自分の好きなもの、人はなんでしょうか。その人がTwitterをやっているか調べてみよう。



我らが編集長はすぐ検索でででてくる。関連があるとわかるのか、すぐ下には団遊さんも表示される。

ページを開いてフォローするだけ。「フォローしていいのか」なんてのは全く気にする必要がない。著名な人であればあるほど「フォロワーが1人増えること」は何も気にしていない。フォローはあくまでも一方通行の片思いなのだ。

例えば、椎名林檎さん本人はTwitterをしていないようだ。検索するとオフィシャルアカウントがヒットする。

人でなくともよい。新幹線が好きなら、運行情報がツイートされているのをフォローすると良い。また、一番上に「#新幹線」が表示されているが、ハッシュタグと呼ばれるもので、これをつけてツイートしたものを抽出して表示させることもできる。SNSに興味なさそうだった特撮好きな友人はTwitterにはまり、毎週日曜午前はツイートしまくっている。



フォローすることに気兼ねはいらないので、ちょっと気になったユーザーをどんどんフォローしていってみよう。「気になる人がフォローしている人」をフォローしてもいいだろう。

ちなみに、自分の登録情報にたいした個人情報が含まれていないなら、この時点で問題が起きることは全く心配しなくてよい。流出する情報がないのだから。



100人くらいフォローすると、タイムラインが次々と流れていき、Twitterをやっている感じになると思う。フォローした人が「思ったよりも面白くない」「発言が不快だった」などと思ったら、これまた遠慮なく「リムーブ」すればいいと思う。気が変わったらまたフォローすればいいのだ。嫌だと思うことを見続ける必要がないことも、Twitterの気軽さの一つだと思う。



フォロワーが増えてきたら少し注意である。フォローされたら「◯◯さんにフォローされました」という通知は来るものの、その中身が誰だかはもちろんわからないのだ。意外な人にフォローされているかもしれない。誰に見られていようが発言に注意することは必要だが、「あの人にみられていたとは」と思うこともあるかもしれない。有名人などは「あなたの発言は不快です。やめてください」などと言われることがあるようだ。自分の勝手だから何を言ってもいいということはないが、不快ならば見なければいいのだ。フォロー、リムーブは好きにやればいい。

◯何をつぶやけばいいの？

ここまでは「見る側」であったが、自分で何を発信したらいいかわからないかもしれない。何をつぶやいたっていいのだが、とりあえずはリツイートしてみるといいと思う。「面白いと思ったツイートを言いふらす」のがリツイートである。いい情報や面白い情報はどんどん広めよう。



自分で発言する場合は、完全な独り言でよい。もちろん、ネットリテラシーに配慮する必要はあるが、思ったことを打ち込んでみるとよいのだ。「ラーメン美味しかった」でもいいし、「今日もがんばった！乾杯！」でもいい。なんでも構わないのだが、愚痴ばかり書くのはあまりいただけない。グダグダな愚痴ばっかりっていうのは、誰であっても楽しくないものだ。ただし、逆に「このアカウントは愚痴しかいいません」とプロフィールに書いておいて、絶対に愚痴しかツイートしない！っていうアカウントも面白いかもしれない。「愚痴が出てこなくなったのでこのアカウントは消します」なんてことが起きたりして。心理療法チックである。

私は真面目なツイートもたまにしているし、面白いと思ったものをリツイートしたりしているのに、残念ながら8月前半で一番反応があったツイートはこれである。かなしい。

ちなみに、もっと反応があったのはこれ。みんな好きだな。

2016年8月 · 19日間

ツイートの概要

トップツイート 130件のインプレッションを獲得しました

おしっこ
したい

2016年1月 · 31日間

ツイートの概要

トップツイート 690件のインプレッションを獲得しました

雪を溶かせる火炎放射器ってないもんかな、と思ってアマゾンに聞いてみたのだが、それ以降、火炎放射器ばっかりオススメしてくる。

結局何が面白いのかというと、玉石混交なところだと思う。

Facebookは「知っている人」だけとつながっていることが多い。実名が基本なのでそれほど過激なことは載せないし、ある程度まとまった言葉を載せることが多いように思う。（もちろん、その人の使い方次第。）

Twitterは、上の私の発言のように、本当にどうでもいいこともたくさん流れてくる。興味深い話題も流れてくる。知っている有名人もいれば、「なんでこの人をフォローしたんだっけか」という人もいる。フォローしている人のリツイートにより、フォローしていない人のツイートも流れてくる。読んだツイートに疑問があれば返信してもいいし、少し飽きたなと思ったらほったらかしておけばいい。

日々ちらちらとタイムラインを眺めながら面白そうな人をフォローしていくと、自分の好みの人が並ぶタイムラインになる。興味深い話が並ぶタイムラインになる。この人の言葉はすきだなあとか、実際会うとどんな人だろうなあとか考えているのは楽しいものである。

Twitterに限らず、インターネットのよいところは「普段やりとりすることはないはずの人たち」とつながれることではないだろうか。これは知らない人、出会うことのない人はもちろん、出会ったけれど遠くに住んでいたりでなかなか会えない人も身近に感じることができる。



何度かTwitterからつながりを持った方に会ったことがあるが、ツイートを見ている相手なので初めて会った気がしないというか、興味のあるものがなんとなくわかるというか、初対面な感じもそれほどせずに楽しい時間を過ごすことができた。

直接やりとりをしていなくても、その人の興味関心が見えやすいというのがTwitterのいいところではないだろうか。

始めるのはとても簡単である。最初はつまらないと思う。だらだら続けてみると、少し楽しくなってくるかもしれない。まあ、はじめてみましょう。

Let's ツイート！

講演会＆ライブな日々⑦

古川　秀明

熊本震災復興支援ライブ

兵庫県、宮城県、熊本県と、地震や津波の被災地でがんばっている教師を応援するスポーツ活動に参加させてもらっている。

各県の参加チームがバスケットボールの親善試合をして汗を流し、お互いの苦労を分かち合う。

私はバスケットボールではなく、音楽で参加させてもらっている。

大会歌に曲をつけたり、試合中に音楽の生演奏で盛り上げたりしている。

音楽で参加するチームも各県から何名かおられて、試合終了後はその人達を一緒に歌のライブを披露する。

今回のバスケット会場は旧和泉（なごみ）町立緑小学校の体育館。

知らなかったが、熊本はバスケットボールがとても盛んな土地柄らしい。

大人から子供までバスケットに夢中になる人が多いと聞いた。

緑小学校は数年前に廃校になった小学校だが、立派な体育館が残されており、

ここでもバスケットボールが盛んだったことが伺われる。

今回は教師だけではなく、地元の小学生や中学生も参加してくれた。

みんなバスケットボールが大好きなのだろう。

子供が参加すると、とても盛り上がる。

われわれ音楽隊はバスケをしないのでさぞかし楽だろうと思われるかもしれないが、これがなかなか大変なのだ。

廃校になった小学校なので、なんとかピアノは確保してもらったが、他の機材は何もない。

つまり、音響機材は全部持ち込まなければならない。

楽器、スピーカー、ミキサー、マイクなど、数十点に及ぶ機材を車に乗せ、大阪から九州まで運ばなければならない。

何百キロにもなる機材に、バンドメンバーを車に乗せると、当然燃費は悪くなる。

お盆の大渋滞の時期と重なるので、夜中の出発になる。

片道１０時間以上かかる。

その機材の荷揚げ、荷降ろし作業は結構大変で、まるで運送屋さんみたいな労働となる。

１０時間高速道路を走り、会場では荷降ろし、そして機材のセッティングをしなければならない。

体育館での音響は他の会場よりも手間がかかる。

音の回りがなかなか読めないので、調整にひどく手間取る。

普通はPAと呼ばれる音響専門の人がセッティングするのだが、そんな人を雇える余裕などない。

全て自前でこなさなければならない。

体育館の中の温度は３５度近い。

まるでサウナ風呂のなかで機材をセッティングするのだが、５分も作業をすれば大量の汗がしたたり落ちてくる。

それを１時間くらい続けるのだから、ダイエットには有効だろう。
しかし、熱中症寸前になり、ふらふらしてくる。

そしてライブは一番最期に催される。

観客はついさっきまでバスケをしていた人達だ。

きっとくたくたで、歌など聴く余裕などないと思われる。

しかし、みなさん本当に熱心に聴いてくださる。

踊りだす人や涙を浮かべる人もいる。

そんな光景をみると、ここまでの苦労が全部吹き飛んでしまう。

ボランティアをしながら、こちらが援助されているような気持ちになる。



このボランティアに参加する数日まえに新しいアルバム「家族の歌」が完成した。

熊本でもさっそく購入してくれた人がいてうれしかった。



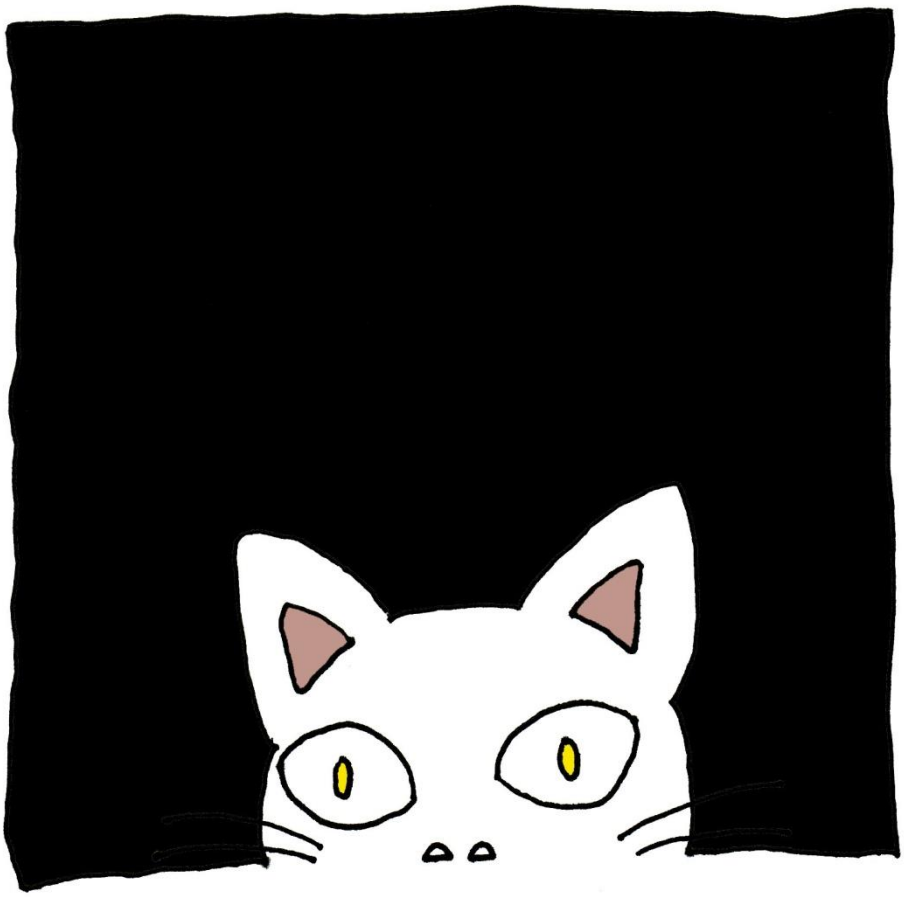
ジャケットのイラストは、４作連続で団 士郎先生にお願いしました。

歌がヒットするまでイラスト料金は要らないという温かいお言葉に涙しながら、貧しい私の音楽活動を支えて下さる御恩にいつか応えたいと思います。

たぶん死ぬまで私の歌が世に出ることはないでしょうから、たいへん心苦しいのですが、次のアルバムのジャケットイラストもお願いします。

なお、このアルバムの一番最後に、過疎に苦しむ笠置町の町おこしに日夜奮闘努力している坂本夫妻の長男長女による「おばあちゃん」という歌が収録されています。

笠置にある坂本家に出向き、笠置の空気も歌といっしょに録音しました。子供たちの歌声と共にセミの声やウグイスの鳴き声も入ってますよ。



アルバムの購入方法

ふるかわひであき講演会＆ライブの会場にてお買い求めください。 通信販売もしています。講演会＆ライブの情報や、通信販売の詳細は HP（tantant.net）をご覧くださいませ。

こころを込めて作ったこのアルバムを一人でも多くの皆様に聴いていただきたいと思います。どうぞみなさまの温かいご厚情を賜りまして、CD ご購入のほどよろしくお願いいたします。

CD に参加していただいたみなさんです。
b. 水田 十夢　木村 健
dr. 田中 良太
v 阿部 京子
vc. 本 勇ニ
ｵｶﾘﾅ 児玉 小枝
15.おばぁちゃん　vo. 坂本 慶榮　坂本 和心
per. vo. cho. 諏訪 和奈
p. vo. cho. 木﨑 香織
ｼﾞｬｹｯﾄｲﾗｽﾄ 団 士郎
ｼﾞｬｹｯﾄ協力 野村 大史
mixing & recording engineer 木村 健
gt. cho. 古川 秀明

全 15 曲入り　定価２５００円（税込）

養育里親

～もうひとつの家族～

14

坂口　伊都

ちょうど１年

我が家が里親委託を受け、ちょうど１年になります。この対人援助学マガジンでは、里子と生活をし始めた頃の気持ち、半年が経ち、子どもと上手くいかないと感じた頃の気持ち等を後から思い出すのではなく、ダイレクトに書いてきました。そして、１年を迎えた今、新たな感覚を味わっています。家族を一人迎えることで、いろいろなところに影響が出ました。もし、この子と暮らしていなかったらこの問題はどうなっていたのだろうと感じますが、里親を受ける、受けないに関わらず、眠っていた問題はいつか浮上しますし、日常生活の中に様々なトラブルはつきもので、それを避けようとしてできるものでもなし、人生なんて上手くいかなくて当たり前。そう考えると、少し楽しめるようになってきます。

里子が我が家に来てくれてから、一番変化した人は誰かと考えると、意外なのですが高校生の息子になります。息子は、里親の話をしても、「ふーん」と言うだけで暖簾に腕押し、マイペースで何を考えているのか全くわかりません。もともと、自分からあまり話をする方ではなかったので、何を考えているのかわからないのは今に始まったことではありませんが、自分の世界を守りながら、里親のことは横目で見ているような印象です。

その息子も、この子と出会った頃は、一緒に出かけたり、この子とお風呂に入ったりしてくれていました。里親会のデイキャンプにもついて来てくれ、小さな子どもたちと一緒に虫取りをして、里親の皆さんにいい子やと褒められて

いました。委託から数か月経った頃から、家族との接触を嫌がるようになっていきました。高校1年生ですから、思春期の表れとして当たり前のことだと感じていましたが、改めてこの生活の変化を息子はどう感じているのでしょうか。

私が3月に手術をして1週間ほど入院した時も、全く何を考えているのかわかりませんでした。入院中の土曜日にこの子を見る人がいないので、病院まで連れてきてくれるように息子に頼み、それをしてくれましたが、息子からは「大丈夫？」の一言もなく、さっさと帰っていきました。後日、息子と言い合いになった時、「どうせ母ちゃんなんて、死んだっていいと思っているのでしょ」と言うと、「そんなこと言ってないだろ」と返ってきました。はい、大人気ないです私。母も身体が弱って寂しくなるのです。少しは息子に優しくしてもらいたいと夢見てしまう生き物なのです。母親って、辛い役回りですね。

夫からは、私と息子は似た者同士、息子は母親を敬遠する時期はあると言われました。ここでも「忍耐」の文字が重くのしかかります。そして、息子を信じ続けること。

息子の変化は、養育里親をしても、しなくても同じだったかも知れません。でも、多かれ少なかれ、何かの影響を受けているのでしょう。もしかしたら、里子と距離を取ることで息子なりに関係を保っているのかも知れません。あくまでも推測なので間違っているかも知れませんが、言葉にしない分、家族に見えにくく、息子なりに感じているところはあるのだろうと考えると、息子をもっと優しい眼差しで見られるようになれそうです。改めて、この1年を振り返ることで、思いもしなかった息子の心情を勝手に思い巡らすことができました。それでも、息子との意見したいのをこらえて、この先を案じ、葛藤し続けています。

養育里親だけでも、大きな事柄ですが、それ以外にも今までのバランスが崩れた結果、浮上した課題に対応をしていかなければなりません。大きな変化がある時は体調にも異変が起きると言われますが、我が家も例外ではありませんでした。

養育里親をすることを周りから好き勝手している、自分勝手だとも言われました。不安を感じ、悩み、迷い、それでも勇気をだして一歩を家族と踏み出したつもりでいるので、そんな風に映るのかと唖然としました。余裕もなく、ただやるしかないと頑張っていた時期だったので、社会はかなりの割合で里親について無理解で、どんな状態で私達夫婦がいるのか想像すらしてもらえない現実を知りました。傷口に塩を塗り込められる感覚です。養育里親のワークショップで話をさせていただいた時、会場から「とてもいい里親さんなのですが、何故かお盆の時にショートステイを頼まれる方があって、皆が集まって人手もあるのに何故だろうと思っていたのですが、お話を聞いてよくわかりました。周りに理解してもらうことは、私達が思っている以上に難しいのですね。支援者もそこを知っておくことが大切だと感じました」と話してくださいました。

変化に伴う軋轢を感じながら、1年が経ちました。これからも、いろいろなトラブルが起き続けるでしょうが、人生なんてそんなもんと思いながら対応していこうと思います。まだまだ、この生活の変化を楽しむところまで辿りつけていませんが、気持ちが穏やかでいられる時間が増える日はきっとくると信じます。

家から外へ

1年が経つ中での変化としては、外からの連絡が増えたことがあげられます。学校や障害児サービス放課後等デイサービスでのこの子の行い

についてです。「こんな事を言ってお友達が･･･」や「手が出ました、足が出ました」という内容です。今までは、家の中でバトルがありましたが、それが外に出てきているイメージです。外との関係ができてきたからこその行動なのかも知れません。

この子が我が家に来てから、何回となく学校にもデイサービスでも、「生活環境が全て変わった中で、今は嫌がらずに通えていることがこの子の頑張りだと思う。これから、いろいろな行動が出てくると思います。家では、言葉で伝えて、少し待つことをしている」と伝えていたので、先生も支援者も出来事を淡々と報告してくれ、この子自身にもゆっくり言葉で伝えてくれています。報告を受けて、「家でも話し合います」と伝え、里父が中心になって「何か言うことあるのと違う？」と尋ねながら話をしています。できるだけわかりやすく話しているつもりですが、学校で言われたことは学校でしなくなったが、次はデイサービスで同じようなことをし、また電話が入って話し合い後、デイサービスで落ち着いてきたかなと思うと、次は林間学校でする。場所を変えて続く見事な時間差攻撃です。林間学校のお迎えに行き、帰ってくることを楽しみに迎ええに行きましたが、先生から思ってもいなかった話を聞かされ、相手の方に平謝り。隣で笑うこの子に「ここは笑うところではない」と怒りながら、冷や汗をかいていました。相手の方が寛大な方で有難かったのですが、もっと怒っても不思議ではない出来事でした。

今まで、話し合ってきているつもりの里親は、次から次へと続く行動にがっかりします。伝え方が悪かったのか、伝わっていないのか、そこはこの子がわかるように話し方に変えていく必要があるとわかります。

この子も以前は、話を早く終わらせようと違う話題を切り出したり、「次からはちゃんとする」とこの場を終わらせるための枕詞を出してきていました。「ちゃんとするって、具体的に何をするの」と私からの突っ込みが入り、「えっ？･･･」となるので、「ちゃんとするは要らない、次の時にお友達から嫌なことを言われたらどうする？」と続きます。「嫌なことを言われたら、そんなこと言わないでと言ってその子から離れてみる」等を一緒にイメージしています。どこまで理解し、覚えているかは定かではありませんが、いつかこの子なりのやり方を見つけられればと思います。

真剣な話をしている時、へらへら笑って聞いていることが多く、それも気分も害する行動でした。「真剣な話をしている時は、相手に失礼になるから笑わないの」と教え、何かを触ったり、違うことをしようとする行動も同じように伝えていくと、じっとしようとするように変わっていきました。そして、困った表情が出るようになりました。どうしようと思いながら目が潤んできます。どんな顔をして人の話を聞いたらいいかもわからないのだと思います。この場を終わらせることだけを考えてきたのでしょう。

この子にどう伝えたらいいのだろうと迷いながらいつも話をしていますが、あまりにも、こんなことがありましたという連絡が続くので、「お父ちゃんとお母ちゃん、いつもあなたのこと言われて何してる？謝っているよね。その時、どんな気持ちだと思う？」と聞くと、「またかと思う」と答えました。これは、出てくる会話から拾った言葉だと思います。「違うよ。悲しい」と伝えると、この子がハッとしました。予想もしていなかった言葉なのでしょう。

少しきつい言い方ですが、暴力を続けるとそれは犯罪につながること、それがひどくなれば一緒に暮らせなくなることも起きうることだという話もしました。里親との関係は、この子との関係を培いながらも、同時に関係性が崩れてった時にいつまでも一緒にいられなくなる脆さも感じています。一緒に暮らし続けられるかど

うかを決定する機関は、児童相談所ですから、我が家が適切ではないと判断されれば委託解除になります。ここは、決定的に実子とは違う部分です。

ただそれだけではなく、「お父ちゃんもお母ちゃんもあなたが大人になるまで一緒に暮らしたいと思っているからね、だから誰かを叩いたり、蹴ったり、ひどい言い方をしないで欲しい。嫌なことがあったり、しんどかったりしたら言っていいのだよ」とも伝えました。小学 5 年生のこの子と私は一緒にお風呂に入ることもできません、よしよしと抱っこするわけにもいきません、今の私にできることは言葉で伝え続けることだと思います。気をつけないと口やかましくなりますけど、「したるわではなくて、するよでいいよ」や「しょんべんたれって言わない。そんな言い方している子、他にいる？」「プル（犬の名前）はいらない、あっち行ってて言わない。そんな風に自分も言われたい？」等と誰よりも言っているからでしょうか、本屋で『かあちゃん取扱説明書』という本を見つけた時、爆笑していました。この原稿に『かあちゃんの取扱説明書』の写真を見つけて、「何であるの？」と興味津々で聞いてきます。「あなたがこの本を見つけた時にいっぱい笑ったことをかいているのだよ」と伝えると、それから何回もこの原稿を確認に来ています。

この本は、小学 4 年生の男の子が母に小言を言われ、母の悪口を作文に書いたつもりが先生から花丸をもらう場面から始まります。そこに家族にも読んでもらい感想を書いてもらってくるように言われ、父にこっそり見せます。すると、父が母の機嫌を取るにはほめるのが一番と話し、それをきっかけに「かあちゃん取扱説明書」を作るために母を観察するというお話です。自分は起こされているから、母が何時に起きているかもわからない。寝室の目覚まし時計を見て、6 時だとわかる。母の職場のスーパーに行ってみる。そこで、自分の知らない母を知ります。

我が家でも、私をほめてくれればかなり機嫌が良くなると思うのですが、夫も息子 2 人も全くほめてくれません。特に、里子は人を貶す言葉ばかり覚えているようなので、ほめる言葉を覚えて欲しいと思います。覚えても、私には言ってくれないような気がしますけど。



体験すること

この夏休みにこの子、娘、夫、犬 2 匹と一緒にキャンプに行ってきました。久しぶりにテントを張って、夫とこの子はテントで寝て、娘と私と犬はエアコン、ベッド、トイレ付きのコテージに泊まりました。

この時はテントを張るのも手伝い、ペグ打ちもさせてもらい、だんだんと完成するテントに夢中。出来たテントで遊んで、汗だくになっていました。エアコンもない、鍵もかからないテントで寝る体験は初めてのようで、「寝れるかな」と心配しつつも父と一晩過ごすことができました。キャンプは、テント張りも火おこしも、

食事の用意も全て遊びのようなものです。近くの川に行ってエビを捕まえたり、蝉の多さに驚いたりしていました。

夕食用の火おこし、歩いていく風呂場、何をするにも里父の後を追っています。夕食時は、辺りも暗く、ランタンの灯りを頼りに作りますから、肉が焼けているかどうかもわかりません。灯りを近づけると、今度は虫が多く集まってきます。虫嫌いな娘は、嫌だとギャーギャー叫び、暗闇の中で何を食べているのかよくわからない不自由さがありますが、それも体験です。

やりたがっていた花火もし、この子が花火をしている姿を見ていると、「母ちゃんも一緒にやろう」と誘ってきます。一人ではつまらないのだなと思うのと、珍しく誘われたなという思いが起きました。後、「見て」も増えました。今まで、あまりそんな言葉が出てこなかったので、そんなことを言わない子なのかなと感じていましたが、改めて言うようになるのだと知りました。花火を手に取ってやり始めると、「こっちもいいよ」と別の花火を持ってきます。「きれいだねぇ」と言いながら、この子と笑いあえます。そんな時間がもっと増えてくれるといいのですけど。



私の身体にちょこっと触ってくる回数も増えました。甘え方を知らないのか、求めてないのかわかりませんが、大人を頼るということが少なく、何か伝えに来ても、なかなか伝わらないと「もういい」とすぐに諦めてしまうところはそのままですが、少しずつ変化は出始めました。やはり変化が出始めるまで 1 年かかりました。それも、出たり、引っ込んだりの繰り返しです。

相変わらず私とは、争いのようになることが多く、私の言うことは聞かないという悪循環になる事があります。例えば、お茶を取ってきてと頼むと、里父の時は何も言わずにそれをしますが、里母がすると聞こえないふりをしたり、「えー」や「後でね」と言ったりします。ことごとくこれが続くので、大人気ない私はイライラします。宿題も見せてと言うと「パパに見てもらう」と言うので、「それは、母ちゃんの言うことは聞かないということだね」と翻訳します。そうすると、「あっ」となり「違う」と言ったりしています。具体的に自分が今言っていることがどういう意味になるのかを伝えていく作業がいるのだろうと思っていますが、毎回この繰り返しだと疲れます。言っていく頻度も悩みどころです。一線を通そうと思うと、ずっと言い続けなければなりません。それは、関係を悪化させることになるかと感じますし、片方で伝え続ける必要性も感じ、板挟み状態で悩みます。伝え方は、本当に難しいです。

この前も犬が嫌がっているのに構いに行くので、「もう止めてあげて」と言っても止みません。その内、犬も苛立ってくるのが伝わってくるので「もう、止めなさいと言っているでしょう‼」となります。それまでのイライラも手伝って、怒っていますという状態になりますが、この子には何を叱られているかわからないようでした。「何で怒っているかわかる？」と聞くと、「洗濯物を片付けなかったから」と言います。いいえ、そこではありませんと説明します。誰かを殴った、蹴った、泣かせたという状況ではなかったので、何で怒られるか、わかりにくかったよう

です。私との仲直りの握手もしたがりません。私は、「自分が悪いって思っていないでしょう。わからないと思っていても、わかるんだよ」と魔女みたいなことを言いながら、先は長いなと思います。

次の日から、チロッチロッと私を見ては、いろいろ試してきます。その行動が、頭が痛くなる方法を選んでくるので、少しお地蔵さんのように静かにしておこう作戦をしています。イライラさせられる行動に反応しない。聞こえない、聞こえないと呪文のように自分に言い聞かせます。まずは、平和協定を結んでいくのが先です。落ち着かないと、何を伝えても伝わらないでしょうし、この子が困った時に頼ってみようと思えなくなりますから。

人はいつから叱られるようになるのでしょう。赤ちゃんの時は、泣いてもぐずっても叱られません。笑えば周りも笑顔になり、座った、立った、歩いたと何をしても褒められます。「何でそんなこともできないの」「これをしたらダメ」と言われるようになっていくのは、自分でできることが増える頃でしょうか。子どもって、身体が小さいとそれだけで幼く見えますが、身体の発育がいい子だと中身の成長よりも外身の大きさで判断してしまうところがあります。変な話ですが、身体の成長が遅い方がかわいがりやすいと感じています。もっとゆっくり大きくなればいいのに、5年生ですが6年生よりも身体が大きいですし、我が家に来てからの身長の伸びも大きく、身体を触れ合わすような遊びになりません。ちょっとくすぐって暴れると、手足が長く、力も強いので一瞬で終わります。物理的に身体が大きくなり、大人に近くなればなるほど、かわいがりにくくなるように感じます。かわいがられた経験が根付いていると、その子ども自身からかわいらしさがにじみ出てきますが、暴力を受けた経験があり、それを慰めてもらえない環境下にあった子は、可愛げがないように見えます。かわいがられやすい時代にしっかりとかわいがられることの大切さを感じます。

この子もゆっくりですが、甘えようとし始めています。大きくなっているこの子に対して、どのような方法でかわいがればいいのかを悩みつつ、この子をよく見て、自分のイライラも少し減らしていけるようになればと思います。今のところ、私は家を出て人と会い、仕事をし、話をし、刺激を受けて、自分を見つめ直しながら帰宅することが気分転換になっています。そろそろ私の気持ちの仕切り直しの時期のようです。自分の視点を意識してずらしています。例えば、夏休みの宿題は夫に任せ、私は言わない役回りをする。夫はこの子に宿題をやらせることで疲れるので、宿題の中身のチェックは娘が担当する。そうすることで、家族の生活が回りやすくなりました。

だんだんと、家族の役割分担のようなものが見え始めていますが、まだまだ過渡期です。またすぐに負のスパイラルに足を突っ込んでしまう日々が来るのでしょう。まずは、その陥っている状況に私自身が気づけるかどうかです。そのために外に出て、いろいろな人と出会っていこうと思います。養育里親だけに専念していくことは、私には難しいと感じている今日この頃です。

周辺からの記憶 12

座談会：災害とコミュニティ
～物語、記憶、レジリエンス～

村本邦子（立命館大学）

十年プロジェクトも 5 年がすぎ、いよいよ後半期に入る。このあたりで、再度、プロジェクト理論化に向けた座談会をしようということで、2016 年 7 月 11 日、一緒にプロジェクトを進めてきた団士郎、中村正、鵜野祐介と 4 人で語り合った。仕事の合間の 3 時間ほどだったが、テープ起こしをし、少しだけ編集を加えたものを提示する。

この後、7 月 15 日、再び熊本へ行った。今回は、厚労省からの派遣で、熊本県の婦人相談員研修と熊本地震に関するヒアリングを行うという役割だった。熊本には十年来、研修を続けてきた婦人相談員のグループがあって、前回、訪問した時に、彼女たちから、「災害に際して婦人相談がどんな影響を受け、どうしたらいいのか、記録を探したが、見つからなかった。自分たちのためにも、是非、振り返りをして、今後のために記録を残したい」という声が上がった。私には、これが格別に嬉しく、誇らしく、自分にも何かお手伝いができたらと思ったことが実現したものである。

研修に際して、自分自身が阪神淡路大震災の時に経験したことをどんなふうに記録したのだろうかと、二十年以上前に発行した『女性ライフサイクル研究第 5 号：阪神大震災～女の視点から捉え直す』（女性ライフサイクル研究所）を書棚の奥から引っ張り出した。自分が書いた「『こころのケア』と人権と･･･」という序文には、

> この時、初めて「こころのケア」という言葉が生まれたが、「こころの」は心を対象にするという意味ではなく、「心のこもった」「真心からでた」「心に響く」などの意味でなければならない。「こころのケア」は相互的なものであり、ボランティアに馳せ参じた者たちは、自らの疼きを癒しに行ったのだと考えれば合点がいく。かくして、心のケアを専門とするものは、その存在自体が矛盾を孕んでいることを自覚しつつ、それでもなおかつそこに留まろうとする意味を考え続けなければならない。

などと書いている。「震災と女たち」の章では、震災を生き抜く女たち、震災と女性の人権、

震災と性に関する論考が集められている。「震災と子どもたち」「コミュニティと救援サービス」という章もある。コラムも合わせると 50 人以上もの執筆者が原稿を寄せてくれていて、全体として多声的な記録となっている。20 年経った今なお新鮮で、これを震災発生後、半年間で発行したとは、なんてすごかったんだと感嘆した。逆に言えば、二十年以上経って、自分はいったいどれだけ賢くなったのだろうと考えた時、もしかするとたいして変わっていないのかもしれないとちょっとがっかりもした。（この冊子、若干の残部があったので、関心のある方はお問合せください。）

あらためて記録を残すことの重要さを再認識する機会になった。この冊子がなかったら、ここに集められたたくさんの声はなかったことになっていただろう。現在、熊本での婦人相談員ヒアリング結果をまとめているところである。そんな作業をしながら、座談会の記録を読み返していると、また新たに見えてくることもある。



さらに、その後、7 月 24 日～8 月 25 日、台湾に滞在した。小さな島に津波のように繰り返しやってくる外部からの侵入と災難。その記憶と歴史の残し方は時代とともに刻一刻と変化してきたこと、今なお変化しつつあることが感じられる。

レジリエンスは物語を生み出す力のなかにあるが、生み出された物語によってもまた、レジリエンスが生み出される。コミュニティを支える力を持つ物語を束ね、ボトムアップに多声的歴史を構築していく力が、今、求められているような気がする。別の言い方をすれば、それによってコミュニティが新たに浮き彫りにされ、記憶されていくのである。それには、それを可能とする仕組みが必要だ。私たちのプロジェクトが、ささやかながらもそんな仕組みを生み出すことに寄与していれば嬉しい。

そして、もちろん、このマガジンもそんな役割を果たしているのだろう。

1．災害とコミュニティ

村本：東日本大震災によってコミュニティが受けた影響とレジリエンス、復興のプロセスを記述するというのが私たちの研究テーマなのだけど、コミュニティをどんなふうに定義して、レジリエンスの発動を語るといいのかな。

アルドリッチは、レジリエンスを「連携した働きかけと協力し合って行う活動を通じて、災害などの危機を切り抜け、効果的で効率的な復興に取り組むための地域が持つ潜在力」と定義し、行政区で区切って、ソーシャル・キャピトルをボランティア組織の数、投票率、地域のイベントへの参加などで測り、その変化を比較している（アルドリッチ, D. P.『災害復興におけるソーシャル・キャピトルの役割とは何か～地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房, 2015）。

私たちの研究では、おそらくそんな切り取り方にはならないよね。

中村：社会学的関心から言うと、場としてのコミュニティと関心としてのコミュニティがある。後者の方は、場がなくてもあっても、関心があればつながるので、ネット社会もそうだし、関係性ですよね。場というのは、もっと土着的なものも含むというか。

村本：コミュニティ心理学の言葉で言うと、地域コミュニティと機能的コミュニティとなる。

中村：それに近いかもしれない。言葉の話だけど。また別に、関心としてのコミュニティ、機能的コミュニティはアソシエーションという言い方もあって、契約的というか近代的というか、土着的なコミュニティをコミュニティと、あえて分けることもあります。二元的な対置という感じはしますけどね。哲学的というか、現象学的社会学的に言うと、生活世界は私たちの感情とか身体とか集合的記憶とかいうものを取り込んで、かならずしも分節化されずに前言語的なものと混然一体となってそこにあるという把握も大切です。機能的コミュニティに近い概念は、システムといい、それが分化・分業しあって近代社会になっていく。

村本：現代社会はどちらかと言えば機能的コミュニティに力点が移っていったけど、災害となると、あらためて原初的というか、地域コミュニティというものにもう一度立ち返る。とくに直後。時間経過とともに、ネットなどを通じて機能的コミュニティも活性化していくのだけど。私たちが「臨地」と置いたように、地域というか、古めかしい土着のコミュニティの話に戻りたくなる。

中村：災害ユートピア論もそうですよね。48 時間以内のつながりで賦活させられていくものは、そういう感じがしますよね。二項対立的なものでなくていいんだけど。東北はやっぱり広かったからね。

村本：とくに東北の人たちにとって、「地」との結びつきがどんなに重要か。身体をそこに置く土地があって、土地と共に生きてきた。

中村：そうだよね。防波堤なんか作って、近

代社会の防災システムっぽく入り込んでくるときに、ものすごく批判があったものね。

村本：気仙沼の復興計画は「海とともに生きる」。熊本もそうかもしれないけど、人々が土地と結びついて生きてきた場所。

中村：新潟中越地震の時もそうかもしれない。都市型とはまた違った問題。高い防波堤だと海が見えないから、アクリル板で真ん中に穴開けたり。

村本：岩手では、アクリル板の窓をつけた防波堤がひとつあったんだけど、それは抜けちゃったらしい。そういう意味では、コミュニティが受けた影響って、その「地」に住めなくなった。放射線被害を受けた地域や沿岸部。土地を離れざるをなくなったというのは大きな痛手だったと思う。

2．土地の物語と言葉

鵜野：ひとつ思い出したのは、今、スコットランドで、それぞれの地方にストーリーテラー、語り部を育てるっていう活動をしている。別にプロの語り部を養成するというわけではなくて、月 1 回の日曜日とか定期的に子どもたちを集めてやっている。そこで重視しているのは、場所と関係する話。ここでこんなことがあったんだよとか、この石にはこんないわれがあるんだよとか、ここに河童が住んでいたとか、武将がここで討ち死にしたんだとかいった話を、その場所に行って、語って聞かせる。

そこには、子どもたちだけでなく、いろんな世代の人たちに集まってもらう。そうすると、20 代、30 代の人たちが最初は聞き手として、それから今度は語り手として参加していく。そうしていくと、そこに伝承ができていく。最初は都会から呼ばれた歴史家とかプロとして活躍しているストーリーテラーが話したとしても、二回目、三回目からは、その地域の人たちに主導権を手渡していく。それによって、地域独自のレジリエンスみたいなものを引き出すことができる。

震災プロジェクトに参加して考えていたのは、最初はこちらでアレンジして伝説や昔話を語っていただく場を設けて、こういう活動に関心を持っていただく。次に地元の方が主体となって語りの場を作っていってもらう。それも一年に一回ではなく、月一回とかに移行していく。そういうノウハウを地元の方と一緒に構築していけたらいいなと。

村本：そうなんだよね。そういうことになればいいなと思ってやっているけど、多賀城にしても福島にしても、参加者が多くないんだよね。その人たちがやっている集まりの方が一定の固定客が集まっているというか。外部者が関わることで、新しい結びつきが生まれたらいいなと思うけど、まだそういうふうに実現していない。

鵜野：それと、昔話や伝説よりも、方言やその土地の言葉の方がもっととっつきやすい。子どもたちにとっても、自分は使わないけど、ばあちゃんが使っている食べ物の名前なんかを教わると、自分の住んでいる土地に愛着が出てくる。そしてそれが物語につ

ながっていく。そういう方言、ダイアレクトにもっと注目してもいい。

村本：そういう意味でも、全国に散り散りになってしまった人たちは、土地とともに言葉も失ってしまっている。

鵜野：だからこそ、今は住んでないけど、生活と密着していた言葉として、それぞれの土地の言葉を大事にする必要がある。





3．危機に瀕して覚醒するものと外からのまなざし

村本：外から仕掛けるというより、内側から生み出されていくものに注目したいなと思うのだけど、宮城民話の会の小野和子さんたちの活動はその後、どんなふうに展開しているのかな。

鵜野：震災前と後とではずいぶん違って、市民の関心が強まったと。

村本：それはプラスの面だよね。どんな要因がその変化を引き出したのかな。

鵜野：今まで当たり前だと思っていたことが、そうじゃないんだと気づかされたことが大きい。

団：そやけど、地域社会はずっとじわじわと意識しないで、失われ続けていたということがあるじゃないですか。それが、今回みたいに被災によって大きく失われた、奪われたと思うと、覚醒するところがあるよね。

鵜野：そう、実感した。それまでもずっと失われていくものはあった。ローカリティというか、地域のつながりみたいなもの。それが震災によってあからさまに劇的に失われたことで、その大切さにいや応なく気づかされた。大事にしようという意識の覚醒が起きた。

村本：そうだねぇ。一緒に丸森の民話の学校に行って、たくさん被災の話を聞いたけど、何もかも失くしたところで、自分には民話があったという原点に戻って、それを大事にしたいと思い、立ち上がっていく。生きていく力になったという物語があった。それを東北のレジリエンス、資源だとすると、外部にできることは何だったんだろう。たと

えば、関心を持って耳を傾ける、訪ねるということをすごく喜んでくれた方々がいましたね。

中村：ナラティブの力だよね、関心持つ方も何か別のベクトルを持っている。

団：スポットライトって、よそからあたるから意識されるのであって、そこにいる人がそこに照準してライトあてるっていうのはやりにくいと思う。外の声とかいうのは、ある意味、そのことを目覚めさせるのに有効に働く。今回のことだけでなく、そういうことって一般的にありますやろ。歴史でもそうやな、そこにいる人はなんとも思わんけど、ちょっと離れた人、遠くの人が「それは大事なもんですよ」という、そういうことがあることやと思う。

中村：小野さんは、聞く立場で民話の採取を始められた。外からのまなざし。小野さんに重ねてさらに思い出したんだけど、鶴見俊輔さんが熊本時代に絵本の会をやっていたときの話があって、私、感銘を受けたんだけど、女性の方が嫁いでいく。で、自分を変えていく、名字を替えることが女性に多い。そのことの良し悪しは別として、自分を変えていかなければならない。そこで培われていく力強さがあって、それは、生まれた町と、子どもの手をひいて歩いた町、つまり子育てした町、自分が死んでいく町を転々としながら、自分の身をメタモルフォーゼさせていく、男のレジリエンスと違う。いじめがあったり、差別があったりしても、子どもの手を引いて歩くことによって愛着がわいていく。嫁いびりも含めて。絵本の会でそういうことを女性たちが語り始めて、女性たちの力を鶴見俊輔さんが感じたっていう本を書いていらっしゃった。外から入ったのかな、だから我々にもよく伝わるようなものに（鶴見俊輔『神話的時間』熊本子どもの本研究会、1995 年）。

4．子育てした町で紡がれていく物語

村本：そう言えば、飯館村で聞いたんだけど、女性たちは「ここに戻るのは無理」ときっぱりあきらめたのに、男性たちが未練たらたらであきらめきれない。土地に根差す力について話題が出たけど、それを奪われても、女性の方が新しくまた根差していけるってことなんだよね。

団：そやけど、その時に、生活の糧をどのように確保するかということを、思い込みも含めて考えたときに、女の人は強いなと思うんだけど、男の人は何にもないところで一から自分で始めることって少ないと思うんやな。転勤族だって、行った所で迎えてくれる人がある。それがあるのとないのと大きく違う。飯館から出て新しいところで始めるっていうのは、難しいと思う。単身赴任がこんだけおるけれども、単身赴任先で花開かせてるのではなくて、男はまた戻ってきたいと思っている。そういうのはおもしろいなと聞いてて今、思った。

中村：私は娘連れて、単親赴任したんです。

サンフランシスコ。そして子育てしたところは京都の御室（おむろ）。子育てした町っていうのは独特の愛着がある。

村本：子育てした町ってどういう意味を持つのかな？

中村：子ども目線。

団：速度が違うでしょ。

中村：速度も違うし、高さも違う。子どもの手をひいて歩くと時間かかるからね。いろんなものに眼が留まるの。

村本：そういう意味では、東北で生まれ育った人と、嫁いでとか、仕事とかで大人になってから東北に行った人とで何か違いがあるのかな。

鵜野：おもしろいなと思っているのは、小学校の元先生が語り部になっているということが多い。地元で生まれ育って、そこの話という方もあるけど、外から入って話を聞いて、それでおもしろいなあっていうので、最初は聞き手で、退職と同時にトレーニングを受けて、語り手になっていく。ほぼ全員女性だけど。それは東北だけじゃなくて、一昨日も日本昔話学会で秋田と喜界島と栃木出身の人に民話の語りをしていただいたんだけど、三人とも先生だった。

団：それな、教え子がおるということが関係あると思うわ。自分の行動や行為へのフィードバックだけでなく、自分の行為の目の前に、そこで生まれたり育ったりしている人があるというのは、どんな物語であるかは別にして、それぞれに物語があって、それを束ねているのが学校だから、そのことがこの人の中にもたらしていることは大きいと思う。この前もちょっと書いたんだけど、退職した地域の公務員や教員がその後、どんなふうに地域と関わるのかなと思ったときに、今の話はなるほどなと。

鵜野：教え子の親とかおばあちゃんとか、コミュニティの人とかとのつきあいがあるんですよ。聞き手としていろんな相談の窓口として何十年も話を聞いてきて、そのなかに世間話もあれば昔話もあるっていうのか。それを今度は地域の人に返していきたいというのかな。

村本：やっぱりつなげていきたいと思うんだよね。歴史とともにある時間軸をつなげていくことで、そこに自分も含みこまれていくというか。もらった感じ、受け取った感じがあるんだよね、きっと。でも、それって女性の発想じゃない？男たちはどうなの？

団：基本的にサラリーマンやってたら、自分の家に寝に帰るっていう感じやから。

5．共同体によって生み出される文化と歴史

鵜野：セカンドライフとしては、文化財や自然の保護活動とかのボランティアやったりしている男性が多い。女の人は昔話が好き

で、男の人は伝説が好きだと言われている。

村本：伝説？

鵜野：男の人は、実際にあったとされる話が好きなの。昔話は、昔々あるところに、という架空の話なんですよ。それに対して伝説は、昔、明智光秀がここで殺されたとか。

中村：歴史愛好家になっていく。

村本：ふ～ん。やっぱり人類が達成してきたことに誇りを持ってるんだよね。故郷をあきらめきれない話みたいに、土地や家、先祖が守ってきたものを捨てられない。沿岸部の漁師たちがふんばっている話をたくさん聞いたけど、仕事を通じてつながった話だった。

団：そやけど、漁師なんかは、一人で海に出て自分の腕ひとつという仕事の仕方してるやろ。

村本：長い時間経過のなかで、さまざまな協働の知恵が文化として成立していることがあるらしい。漁村には、「水揚げは個人のもの」という平時の論理と、「水揚げはみんなのもの」という災禍の論理が共存することで、その土地で暮らすことを可能にしてきた。金菱さんは、「内なるショック・ドクトリン」を活性化させることで、新自由主義の台頭という外からのショック・ドクトリンを未然に防いでいる漁村の例を４つ紹介している（金菱清『震災メメントモリ～第二の津波に抗して』新曜社）。

中村：私の父方の家系は網元なんですよ。伊勢志摩鳥羽の。浜辺は農地改革されなかった。漁場は農地じゃないってことで。それで古いタイプの共同体が残っていて、網元はそこの浜を支配するから、責任を持ってて、誰かが海で亡くなると、残された家族の面倒を見る。良し悪しなんだけど。支配する・されるという関係があって。

そういう男たちと、あと海女さんというのがいて、海女さんは海女さんでまた力を持っていて、網元も口出しできないような組織があるんですよ。

村本：水俣でもそんな話聞いた。網元を中心とした共同体。そういう共同体が残っていたところでは、それを手掛かりに前に進めたっていうのがあったのかな。民話の会の話は、外からの関心が引き出したということだったけど。

鵜野：みやぎ民話の会の場合は、震災後 20 代、30 代が関心を向けてくれた。メディアテークとかがつなぎ役になって。

中村：きれいな映画でしたね、三部作。だから、それは、関心としてのコミュニティとして存在感をもっていました。そしてなんといっても場としてのコミュニティが活き活きとしています。場と関心は重なり合うんですよ。震災をいくつか社会が体験してきた（東北記録映画三部作濱口竜介監督『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』）。

アイルランドのダブリンのから 2 時間程のところに、タラの丘というのがあって、記念碑があるんです。そこに古本屋があって、書物がたくさん乱雑につまれた小屋のなか

で読書会を開いている。その店主である小説家がいました。アイルランドの古い基層にある土着の文化とキリスト教との出会いの葛藤が文化を産んでいる様子でした。



タラの丘（中村提供）



小説家が営むテリング・キャビン（中村提供）

6．多声的な物語と記憶の継承

村本：どんな形で成果を表現していけばいいのかな。

中村:いろいろなコンテンツを並べたら、それぞれに関心を持ってもらえると思う。レジリエンスというのをあえて日本語で言ってみるとか。水俣の「もやい」「もやいなおし」みたいな。

ハンセン病のことをやってる院生がいて、あちこち話を聞きまわっているんだけど、裁判で得た賠償金をどう使うか。人生残り少ないし、家族とも関係切られているから。「社会復帰」って言っても、「社会復帰」できるか。そもそも「復帰」って概念自体を再考すべきではないのかということをインタビューから感じ取っていくのです。やって欲しいことは記憶だと。忘れないで欲しいということが共通にでてきます。国立の記念館を作ろうとしてる。記憶が社会復帰であって、そのためにお金を使って欲しい。そうした語りをする。それを聞く人がいる。ひめゆりみたいに語り部がいればいいけど、また別のカタチでの記憶の継承が課題です。どういうふうに語ったらいいのか。聞く人をどんな具合に増やしていけばいいのか。そんな話を聞いた院生が感銘を受けて帰ってきた。

小野さんなんか、聴く力があるなって思う。外からできることっていうのは聴くこと。

村本:東北には、語り継がなければ、語り継ぎたいという強い意志を持ってる人たちがたくさんいるけど、需要と供給から言うとどうなんだろう。

鵜野:今、聴くことへの関心が強くなっているのも確かだと思う。「みやぎ民話の会」もそうだし、東京で野村敬子さんが主宰している「聴き耳の会」もそう。どちらの会も、昔話や伝説といったいわゆる民話だけではなくて、戦争体験や子育て体験なども含めた「自分史」や「一人称語り」も積極的に聴

いていこうとしている。

中村：風化させないというのはみんなの願いでしょう。行けば相互作用が出てくる。

団：あのさ、今、話題になってて割合おもしろいなと思っているのが、「ファミリーヒストリー」っていうNHKの番組なのよ。これは、たとえば中村正さんという人について、ルーツを探るっていうんで、自分の親のもうひとつ上くらい、つまりおじいさんとかおばあさんまではわかっているんだけど、そのもうひとつ上になると、圧倒的多数の人がほとんど情報を持っていない。番組の調査隊が掘り返してくると、日本という国がどのくらい、侵略だけじゃなく、交易であったり、災害であったり、災害で村の人がそのままどっかに移動したり、江戸時代だったら人材を他の大名のところへやったりとか、移動は基本的に家族が単位で、中国も出てくるし、台湾も出てくるし、もちろん韓国も出てくるし、南洋諸島も出てくるしで、語り継ぐで言うなら、実は我々の持っている語り継がれるべき個人や家族の歴史について、ずっとフェードアウトを基本にしてきたところがあるなと思うと、それは何でやったんやろなというのと、今、そのことをやっぱり語り継ぐべきじゃないかというのは何でやろなと。

水に流す、なかったことにして次にという日本的意識は、やはり辛く苦しいことも多かった人々の知恵なのではなかったのかな。

何年か前にイギリスの公文書館に行ったら、たくさんの人たちがルーツ探しをしていて、ブームなんですって言ってたやん。あういうことって、被災問題に関わってというより、我々の社会の時代とかがそういうことに向かわせるのは何なんやろなって最近思ってることがあって。

我々はたまたまこういうことやってるから、被災地に行って、漫画展やって、漫画展の場には、そこにいる人たちではない人たちの家族の物語があふれているわけやんか。それを見て感想を言う人はただの読者なわけやけど、あれを見て、自分のことを語りたくなる人がおるわけやんか。実際に語るわけや。そこで何が行われているんかっていうことはそう簡単に定義できへんけど、でも、そういうことを普通、人は突然語ったりはしないからさ。東北でやってるあの漫画展の場では、それによって、そこに来る人たちが自分の持ってる家族というものの歴史や記憶を言葉にするってことがちょっと促進されることがあるわけでしょ。ってことは、その人が意識しているかどうかに関わらず、そうしたくなるってことは何か目的があるよね。そうすることは、さっきから言っているように、自分の力で自分を回復させていったり、今いるところから次に向けてスタートさせるってことかなと思ったときに、そういうことを促進させることができてるってことは、やっぱり資源なのよね。それがあっちこちでちょこちょこエピソードとして見えてきてるよね。

村本：ひとつ確認しておきたいんだけど、漫画展で語られたエピソードについてデータとして使用するということの倫理的問題についてはどう整理したらいいかな？京阪でやった時は、あえてそれを統制して、インフォームドコンセントとともにエピソードを

集めたわけだけど、東北の漫画展では偶発的に語られたエピソードだから、そんなことはやっていない。もちろん、名前とか年齢とかそういった個人的なことは何ひとつ聞いてないわけなんだけど。それはエピソードとして公表してもいいものだろうか。

中村：いいんじゃないの。必要だから、それは社会に役立つんだから堂々と。NHK がね、「クローズアップ現代」とか、E テレで、ものすごくステレオタイプ化した切り口で物語化していくじゃない。物語構造が画一的で、主流の物語として、公認されてインプリンティングされてしまう。たとえばこの前、E テレが介護殺人の番組やったんだけど、あれすごく反響あったそうです。でも、決定的に足りない視点がある。それは男性介護者問題です。死亡事例の加害となっている息子や夫介護者、介護殺人の場合。そのことがオミットされていく。それで、「母さん悪かった」っていうお涙頂戴式の物語になっていく。構造変わっちゃうわけ。減刑理由にもなっていきます。これは共軛関係といいます。そうした生きている者の罪を軽くする物語となっていく危険もあります。もうひとつは、殺めたくて踏みとどまった人たちが圧倒的に多いことをきちんと把握すべきことです。つまり殺人になってない。そのことの報道が何もないところで、衝撃的な殺人という報道がある。自殺もそうだけど。そうなると、結局、介護殺人は懲役つけるけど、執行猶予ですよっていう、一種の社会の共犯関係を強めている点を無視できません。福祉に向かわずに。そういうふうに、違うストーリーテリングになっていく。我々の頭も洗脳されていく。語られていないことをきちんと見つめる力がメディアリテラシーです。沈黙という語りがある。だから、多声的にナラティブを再構築していかないとね。ポリフォニーです。小さくて個別的だし何も力は持っていないように見えるけど、日常生活的には大事な声としてあるという。こういう文脈がいいんじゃないかな。それをスピリチュアルと名付けるかどうかは別だけど、その複数の声を採取していく。

7. 復興の陰で

団：阪神淡路の時に、労働の場の喪失、破壊みたいな理解っていうか自覚っていうのはどのくらいあったの？客観的にはもちろんあるわけだけど。

村本：東北とは違うんじゃないかな。もちろん会社が壊れたり仕事がなくなったりはしてるわけだけど、漁業とか農業とか自然とか土地との結びつきとかとは違う。

中村：第一次産業だよね。

団：そうすると、ずいぶん意味の違う被災やんか。基本的な産業構造のダイレクトなダメージと、会社なんかは約束事やからな。建物がつぶれたら、別のビル借りるとか。仕事として働いている人にとってはどっちも第一義的なことなんやけど。さっき男と女の違いが出てたけど、労働の場所が被災地であるってことによって、そこに男の人が前面に出ざるを得ない状況があるのかと。

村本：逆に言うと、福島なんかでは、男の人が働かないといけないから、家族だけ避難させるということもあった。

中村：それを周辺と中心と考えれば、周辺がものすごく力を持ってるわけだよね。第一次産業だからさ、そしてそこに原発を持って行ったわけだから、そこが破壊されたっていうのは大きいよね。

村本：一方で原発労働には全国からいっぱい行ってるわけだよね。

中村：そうそう、いびつな形で。そこはまた周辺化された労働で。

団：安全を考える家族は子どもを連れて避難しているわけだよね。被災は被災だけど、それを家族がどう意味づけて、次の一歩を作るかっていうと、それは個別というのか。

村本：福島の優秀な若手フリー・ジャーナリスト藍原寛子さんが自主避難のことで論文を書かれた。また、立命館にお招きして話を聞けたらと思っているんだけど、難民の話。インタビューできた人の特徴ともいえるだろうけど、そうやって全国にバラバラになってしまったけど、それぞれが何らかの社会活動につながっていって、新しい公共圏が生まれているという。面白かったのは、戊辰戦争でサンフランシスコに避難した人たちがいたらしい。さっきの団さんの話じゃないけど、長く葬り去られていたけれど、ある時に日本名の書かれた墓石が見つかって何だろうと掘り起こしていって明らかになったとか。

団：ものすごくおおざっぱなことを言うけど、自然に置いておけば消えていくようなものを、何か大きな力で揺さぶって復活させたりするとか、そういうメカニズムなんじゃないのか。

中村：原発は新しいことだからね。

団：原発って扱いに困るよな。誰にもどうにもできてへんや。片づけてもいないし、福井も古なったのまた動かしたりしてるやんか。函館が揺れてたな。ちょうど大間の向かい側やんか。

村本：漫画展が呼び起こすものもあるけど、それだけじゃなくて、支援にいってるっていう名目が作る文脈もあるよね。ただ単に来たというだけじゃなく。一年目はあふれ出る話っていうか、外から来て、関係性がないからあふれ出るように話すということが起こった。タクシーでもレストランでも。時間経過とともに、関係性が深まる中で生み出される語りになっていったかな。

それから、東北でも福島でも、いろんな人が行くということ自体がレジリエンスを引き出してるって側面がある。とにかく、全国からボランティアが来てくれたということで、自分たちも頑張ろうと。みな口々に言うことのひとつ。応援されているということで引き出される力がある。一方で、自衛隊の株が上がったという側面もあるんだけど。

中村：他方、安保法案で自衛隊が世界でものすごく実地練習してるよね。同時に進行してる。

村本：鎌田慧・斉藤光政『ルポ下北核半島～原発と基地と人々』（岩波）の中に出てくるけど、トモダチ作戦は有事の動きの予行練習だった。

団：風化させないというのがベースでしょ。

中村：いろんな人が行くのがいいんだろね。院生たちも毎年変わって。

村本：学生が行くと喜ぶよね。人生の先輩として教えてあげるポジションになる。

団：逆に、訳知りそうな人に視察に来られるのってなんだかちょっと嫌な感じがあるんじゃない。反発とか自動的に出てきそうだよね。

中村：むつの支援者支援でも、我々がやることに院生たちが黒板書いてっていうのがセットとしてあるのがいいんだよね。

鵜野：さっき紹介した仙台のメディアテークでやっている「てつがくカフェ」の面白いところは、いろいろな発言をボードに板書する役の若いスタッフがいること。この板書がイラスト入りで実に分かりやすい。小難しい「哲学」を、柔らかい、ひらがなの「てつがく」に変えてくれる。うちでもこういうのを取り入れるといい。

村本：あと多声的なものとしてどんなものがあるかな。物語、漫画展、院生の存在。周辺にあるエピソードをもう少し聞き集めたらいいのかな。民話の会の人たちとか、頑張ってるNPOとか。

団：亘理町の保育園に花火大会をし続けている人がいて、BSで紹介されてたけどな。

村本：外から行った人たちより、そのことが中の人たちにどんな影響を与えたのかみたいなことが知りたいな。中で芽生えつつあるものを外からどんなふうに支えられたのか。そういう意味では、民話の会の話では、メディアテークの映像化がそれを支えたんだよね。

鵜野：民話の会の活動でもうひとつ特筆すべきなのは、2～3年に1回開いている「民話の学校」。宮城県内のある会場に、全国から大勢の人が集まってくる。そして昼間は宮城の民話を聴くんだけど、夜はそれぞれ自分の知っている民話を語ったりわらべうたを歌ったりする。語り手と聴き手に分かれてしまうのではなくて、語りの場を共有する。この間イギリスでインタビューしたスコティッシュ・ストーリーテリング・センターの所長さんが、「ナチュラル・シェアリング」、語りを自然な形で共有することの大切さを話しておられたけど、「民話の学校」にはこれがある。そういう、シェアリングというところから対話が生まれ、新たな絆やつながりが育っていくんじゃないか。

団：東北大学の長谷川啓三が地元やから、結構いろんなことやってるな。川柳とかペットとか。細かいことは知らんけど。

村本：コミュニティが破壊されただけでなく、揺れたことで生まれた波動がつないで

いくわけだよね。阪大の渥美さんがボランティア論で最近、出版したけど（渥美公秀『災害ボランティア』東京大学出版）、災害ボランティアによってつながれていく人間関係がある。私たちもそうだよね。これをきっかけに出会った大事な関係がある。

中村：やっぱり「レジリエンス」って言葉を日本語にしていくことが必要だね。その「てつがく」みたいに。

村本：今のところ日本語としてあるのは、しなやかな力、逆境を跳ね飛ばす力、回復力、復元力。

団：割合に表通りを行く言葉ばかりがよく出てくるからあえて聞いてみるけど、たとえばさ、ずる賢さとか、たくらみとかさ、戦略的なことで、被災地で活性化したことってないのかな。

村本：復興風俗嬢だったっけ。本出たよね（小野一光『復興風俗嬢』太田出版）。読んだよ。それは本当にしたたかさっていうのか。被災直後からすごく流行っていたらしい。そこに人間的な出会いが描かれていて。

中村：欲望産業に眼をつければそうなる。復興産業に手を出す。でもハイエナみたいにたかってという面もある。肯定するかどうか別にして、日本社会の縮図のようにして復興もかたどられていくのでしょう。復興過程の災害っていう本がある。阪神淡路と東北について。一部の権力者たちたけが利益を得ていく（塩崎賢明、『復興〈災害〉―阪神・淡路大震災と東日本大震災 』岩波新書、2014 年）。

村本：防潮堤とか復興道路なんていうのも、そういう面があるかもしれない。便利になる一方で失うものがある。遠野は一年目私たちがプロジェクトをやったけど、沿岸部のどの町にも遠野を通って行かなければならなかったために、歴史的に遠野が後方支援する伝統があった。でもバイパスができて、遠野を通らなくても行けるようになったことが未来に何をもたらすのかとか。

8．共同体感覚と時間の蓄積

団：コミュニティなんていうのも具体的な形をもたないもんやんか。形を持たないものが失われたり壊されたりした時に、それを復旧するっていうには、そこにどんなものがあればいいのかな。形あるものが復活、復旧するには、コストやなんかもわかりやすいやんか。ある種、加速度つくよな。防潮堤やらなんやらにしても。そやけど、機能としてあったものを回復、復元するっていうときに、何が大事で、何が気遣われていなかったりするんやろ。

村本：少し話が変わるけど、コミュニティってことで言えば、昔から京都文教の集中講義でずっとグループワークやりながら、コミュニティを考えることをやってる。そうすると、最初は、コミュニティって言葉を知らなかった、自分はコミュニティなんて関係ないと言っていた学生たちが、仲間たちと一緒に活動するなかで、意識してなかっ

たけど実は自分にもコミュニティがあったんだと目覚めていく。そんななかで、コミュニティの一員として貢献したいという気持ちが生まれていくんだよね。それは感動的でもあるんだけど、昔の人たちは強くコミュニティ感覚を持っていた。復元というより、意識していくプロセスというか。

団：それで言ったら、昔、まさにそういう世代間のギャップを考えさせられることに直面したことがある。私の住んでた地域に公民館を建てるという話が出てきて、建設費がいくらかかるって分かるから、負担額について住民みんなで民主的に話し合いをした。そして、賃貸の人と持ち家の人とは差をつけて、一世帯いくらずつ分担しましょうと、延々と議論を続けたのよ。そして結論が出たところで蓋を開けてみたら、昔の庄屋さんの○○さんが、「ほなワシは 100 万円出すわ」という話しになって、そしたら、△△さんも、「なら私も 100 万」って。結局、賃貸住まいの私たちは最初 1 万円って話にまとまっていたのだけれど、千円でいいっていうことになった。

その時に、地域住民が皆で話し合いをしたけど、ずっと農業をやってきた、ここを自分たちの土地だと思っている地域の人には、面白いことが起こるんやなと思った。そして実際、あれから 30 年以上経って、あの地域に、当時賃貸住まいだった人が引き続き住んでいるのは希。100 万円出した人達の家や畑や、家族は今もいる。地域ということを、余り今の人だけのネットワークに限ってしまうと、10 年ももたないものになる。

それと同じことが、今、自分の住んでる新興住宅で起こったときに、まったく別の話になる。同じように集会所の新築問題では、全戸平等負担で実行したのだけれど、昔ながらの氏神さん（神社）の屋根の葺き替え寄付金を町内会で出すって提案に、そんな宗教的活動に、なんで均等に町内会で金を出すのか！ってもめる。有志でやればよいと意見が出る。昔から・・・でやってきたことが、民主主義の議論で否決された。その結果、うちの町内には今、おみこしが巡回してこない。氏子の町内ではないということ。だからうちの町内の子どもたちは、お祭りって言っても御輿がかつげないし、御輿は隣の町内で U ターンしてしまう。もっとも、最近では、担ぎ手の絶対不足で、軽トラックの荷台に積んで回ったりしているけど。

鵜野：この間、イランの民俗学を研究している大阪大学の 30 代の先生が話していたことだけど、イランでは 1970 年代のイスラム革命によって、伝統的な祭りや年中行事がことごとく廃止されて、もう残っていない。それに引き替え日本では、都会でも田舎でも祭りは今も盛んだ。こんなに祭りの好きな国は珍しいんじゃないかと。

先日、奥三河の「花祭」を紹介するテレビ番組をやってたけど、都会から移り住んできた若い親子や和太鼓集団の人たちが、地元在住のお年寄りに技能を仕込まれて頑張っていた。これと同じようなことは東北の被災地でも起こっていると思う。

村本：お祭りっていうのは、地域の力を凝集させる力だよね。気仙沼かどこかで獅子舞が 50 年くらい前いったん廃れかけたんだけど、これではいけないと頑張る人たちがいて、女はダメとか子どもは入れないとい

うものだったのを、みんな入れて保存会を作った。その時の子どもたちが、今回、何とかつなごうと、みんなで移った仮設で手作りの獅子を作って祭りをしたんだって。違うところに避難した人のところにも呼ばれて行ったり。

そういう意味では、東北で訪れる町のことを院生が事前に調べるでしょ。そうすると市町村合併があって、文化圏の違うものが同じまとまりで括られる。うちの田舎でも、この前、帰ったら、これまで聞いたこともなかった祭りが地元の祭りとして宣伝されてて、へぇ知らなかったなあって驚いた。それと、ほら、昔の藩が生きてるなと思ったり。戊辰戦争の影響が語られたりって。

団：それはさっき言ってたような歴史好きのおっさんなんじゃないんか。

村本：それでも文化というのか、受け継がれて人々が共有している風土ってあるんじゃないの。私の田舎だったら、薩摩なんだけどさ、小学校でも中学校でも、先生たちからいつも「泣こかい、跳ぼかい、泣こよか、ひっ跳べ」って教育されてきて、染みついてしまったものがある。男女関係なく。目の前に大きな水たまりがあって道をふさいでいたら、泣いてないで勇気をもって跳べっていう意味で、そうやって子どもの頃から叩き込まれてるからさ。関ヶ原の合戦で敵に背を向けないで敵陣を突き抜けた勇気をたたえる祭りがあったり。

私の友人が遠く離れたところで私と同じ郷里の人と出会って、私から聞いたこの話を話題にしたところ、相手がものすごく喜んで盛り上がったって。直接会ったことがなくても、ちょっと共同体を感じるよ。

団：いつも跳んでるわ。

村本：ずっとひとつのところに暮らしている人と、転々としてきた人とでも違うよね。

団：自分の選択で飛び出した人と、せざるを得ない状況のなかで出た人とでも違うでしょ。状況によって出ざるを得なかった人っていうのは、その場所への思いが強いんじゃない。

村本：たしかに、自主避難の人たちの福島アイデンティティは強い。故郷は遠くにありて思うもの。離れることで美化される側面もあるしね。

9．記憶の継承と社会

中村：あと何年あるんだっけ。6 年目だからあと 5 年か。長いよね。

村本：そう、それでも、まだ継続のための苦労があるんだよな。

団：外から行く人間が意識的に風化させない、イベントに終わらせないという戒めをも持って十年と言っているのとは別に、それぞれの被災地にも温度差や状況差があって、時間経過とともでも違いがあって、それぞれの地域の時間経過のなかで変わっていくものがあるからさ、現地のモチベーショ

ンが変化したり、そろそろ気分展開したいっていう気持ちもあるよね。漫画展はモノやから、大きく変わるわけじゃないけど、形として見えないものとしてやっていることに、今を反映してしまおうという意見も出てくることもある。

村本：十年もやっていれば、社会変化は当然あるよね。

団：危機感が回復を促すって側面あるから、今回の震災で危機感を煽られて復活したものもあるのかっていう視点もあるんか。

村本：復活かどうかわからないけど、南三陸のホテル観洋、一年目、ただでさえ過疎化していたところに被災で、本当に町がなくなってしまうっていう危機感から必死に努力していた。老体に鞭打って、お客に来てもらおうと、語り部になって、今も毎日語り部バスが出ている。

中村：そういうナラティブを追加的に集めてみたらいいじゃない。我々の証人になるということに応答するようなナラティブを調査してみるとか。

鵜野：去年、宮古からの帰りに寄った大槌町の「風の電話」、今年２月にＮＨＫが特番で取り上げて、6 月のはじめにもその拡大版をＢＳでやっていた。その中で紹介されていたのは、「風の電話」にやってくるのは確か 6 割から 7 割が男性だと。そして訪問者の多くが、一度だけでなく何度もやってくるという。

返事がないことは分かっていても、電話ボックスの中に入って、ダイヤルを回して受話器を耳に当てながら、亡き人に向けて語りかける。そこには「人はなぜ語るのか、ナラティブとは何か」という根源的な問いに対する答えのヒントが隠されているような気がする。

村本：田老の語り部の話も面白かったよね。去年出会った女の人。義父が津波の話を繰り返しするのを、いつもまたかと思いながら聞いていたのを、義父なき今は、語り伝えなければと 180 度転換して頑張っている。

中村：大川小学校の傾いた慰霊碑とか。形としてどう残すかっていうのも語り部とともにおもしろいよね。

団：それで言えば、残したくないって強く主張する人がおるやないか、あれってなんでなんやろ。気仙沼の陸に上がったあの船。

中村：ダブリンなんて、それこそ、大飢饉の記憶を残そうとする。形がないから、再現するのよ。街中にいっぱいモニュメントがあって、死んでいく姿とか、物乞いしてる姿とか、あちこちに彫像で残ってるのよ。それはなんだろね。

村本：でも、何を残すかはきっとポリティカルだよね。

団：ポリティカルということは普遍的なことではなくて、その時の為政者というか権力者の話やんか。それとは別に、何党が勝とうが負けようが、その土地にずっと生きる人の欲望としてさ、残したいっていうのが

ないんかな。たとえば、あの陸に打ち上げられた船、あれは、被災の結果やけど、観光資源としたって、あんだけインパクトあるものないよな。絶対あの前で写真撮りたくなるよね。すごいな、自然の力ってって。あれ、買い取って、残しておきたいって発想にならへんのかな。

村本：そんな議論もいろいろあったけど、それに勝る反対があったわけだよね。見たくない、思い出したくないっていう。

中村：記憶にかかわるダークツーリズムと、このプロジェクトの証人になるということの関係でも論点はいっぱいある。たとえば水俣等の公害の歴史の記憶と現在の町の再生のバランスのこと。水俣を象徴化して記憶したり、社会運動的に扱うこともあり、地元ではしかし再生した面もあり、画一的な語りだけでみないで欲しいという地元の人もいる。ダークツーリズムという呼称も含めて議論していければいいかな。地元のレジリエンスに無関心でないほうがいいとは思う。

村本：福島第一原発観光地化計画っていうのもあったよね。

中村：それもダークツーリズムの話だけど、負のイメージだけで語られると地元の人は辛いよね。

団：それに比べると、あの船は罪がない。結構でかいし、ちゃんと船の形してたし。あれを見て、ストックホルムのヴァーサ号博物館を思い出した。まだ帆船の時代（1628 年）にものすごく豪華なフル装備の戦艦を作って、処女航海で沈んだ。豪華にしすぎて浮力不足だったのだったかな。沈んだところが北極海の深いところだったから、腐食しなかったのよ。それをずいぶん経ってから（1961 年）、見つけたのよ。

当時の人は、国王がやったことだからかん口令引いて誰も話さなかった。それでみんなで忘れてたんやったかなぁ。300 年以上経ってから見つけて、引き上げて、船をそのまますっぽり収容できる博物館を作った。そやからその博物館は、7 階建て、地下二階のフロアにして、どこからでも船体を見れる。気仙沼の地上であの船を見た時、それを思い出した。すごいなって、だからもったいないなぁと思う。

村本：何を残し、何を語るか、それはどこかでトップダウンにコントロールされていく側面もある。コミュニティの物語と記憶がボトムアップに紡がれていくプロセスにコミュニティの外側から緩やかに連なっていく、そんなことがポイントになるのかもしれませんね。結論出ませんが、今日はこのあたりで。



病児保育奮闘記

(11)

子どもサポート H&K
大石　仁美

絵本の魅力

うちの施設は、テレビは置いていません。病気の時は目も疲れていると思うので、出来ればゆっくり寝かせたい。DVD などを見せるより、膝の上で絵本を読んであげた方がお互い温かさが感じられて、双方とも満足というもの。やはり人は触れ合うのが一番の栄養であり薬だと思います。子どもの遊びは玩具以外では、うたあそび、折り紙、お絵かき等ですが、なかでも一番大切にしているのが絵本の読み聞かせなのです。

子どもサポートを立ち上げるときに賛同してくださった方から絵本の寄贈をいただきました。遠く長野県の園長さんが送って下さった絵本はシンプルな内容で、何度も繰り返し読むことで、子どもの心に自分の世界がどんどん広がっていくのだなあということを実感できるものでした。子どもに余計な言葉は要らないのですね。現場におられる方が選んでくださった絵本は、現場経験のないものにとって本当にありがたいものでした。子どもたちは何度もなんども、「もう一回！」と言って読んで欲しがりました。もうボロボロになって買い換えたものもあります。

これらの絵本を読む中で、私も絵本の選び方を学んでいくことが出来ました。



驚きと感動の絵本

人にはそれぞれ心に残る絵本があると思います。私が感動した絵本をいくつか挙げてみますと、

「もこもこ」谷川俊太郎作・元永定正　絵





この本に言葉はほとんどありません。「もこ、もこもこ」「にょきにょき」「ぷちーん」それらの短い言葉とシンプルで鮮やかな絵だけで、天地創造から、宇宙未来まで果てしなく世界が広がっていくのです。この本を見た時の感動と驚きは言葉では表現できません。これが乳児用の絵本なのか！作者は谷川俊太郎。あの有名な詩人。そして絵がなんと恐ろしくも素晴らしい！！詩の世界を形と色彩で表現する絵の持つ力に圧倒され、そしてしばらく絵本の世界のなかを浮遊してしまった私でした。

「スーホの白い馬」赤羽末吉画



これは有名なモンゴル民話ですが、他の人が描いたものと比べると、ダントツに赤羽末吉画は素晴らしいのです。モンゴルの草原は果てしなく広い。360 度草原のなかを風が走り抜けるのです。訪れた者も、まだ訪れたことがない者も、同じように絵の世界に引き込んでくれます。青い空の下を風をきって走る白馬。白馬にまたがるスーホ。愛しい白馬と心通わせるスーホに自分を重ね、思わず涙してしまいます。人と動物がこれほど心を通わせられるなんて！欲のない動物の飼い主を慕うひたむきさに、人はいつも救われてきたのですね。

まるでバックグランドミュージックのように、情景を鮮やかに映し出すこの絵の力によって、深くふかく物語の世界に入り込めることに感動です。

絵本はやはり絵が命です。じっくり吟味して選びたい。そのことを教えてくれたのがこの本です。

「チェロの木」　いせひでこ





しずかな森のなかで、重厚なチェロの音が遠く

から囁くように聞こえてくる、そんな絵本です。さすが画家の伊勢英子さん。ページをめくるごとにハッとさせられ、そしてぐいぐいと引き込まれる美しい色の世界。色と色の、色と人の、人と人の会話がからみあって美しい旋律になって流れていくのです。5歳以上の絵や音楽の好きな子には、たまらない絵本です。もちろん大人にも。



だるまさんシリーズ

この本は 2 歳までの小さな子たちに大人気。作者のかがくいひろしさんはこの 3 冊を書き終えてすぐ急逝されたので、残念ながらあとはありません。最初、なぜこんなに人気があるのか不思議でしたが、何度も子どもたちに読んでいるうちに、だんだんわかってきました。とってもシンプル。そして絵がかわいらしく、ドテッ。プシュー。などの擬音が、ことばを覚え始めた子どもの耳に刺激的で心はずむのですね。

子どもと一緒に手遊びしながら楽しめる本として良い本だなあと思います。

子どもの記憶

子どもの記憶は侮れません。幼い時の記憶は、感動した瞬間に一枚の絵となって脳裏に焼き付くようです。

「おばけのはなし」を古本屋で見つけ買って帰りました。これが思いのほか子どもたちに好評で、なんども「よんで！よんで！」と引っ張りだこになりました。40 を過ぎた我娘が、それを見て、「あら、私もこれ読んでもらったことがあるわ。」というのです。母である私はとんと覚えがありません。

「ほら、唇がびろんとむけた絵があるはず。おんぶおばけの話でしょ。私その唇が印象的で忘れられないのよ」開いてみるとあら、ほんと。確かにおんぶおばけの話でした。

その大きな唇に描かれた曲線が、怖いというより、なんともなまめかしいのです。



この本は、寺村輝夫　文
ヒサクニヒコ　絵

1977 年初版ですので、娘が 5〜6 歳の頃だったのでしょう。子どもの記憶の不思議さが少し解明されたようで、興味深いことでした。

私自身を振り返ってみますと、最初の記憶はフランダースの犬でした。ずい分昔、60 年ほど昔ですが、カバヤのキャラメルを買うと、本と交換してくれる引換券が入っていて、それを何枚か溜めて自分で自分の本を手にしたはじめての体験が、このフランダースの犬でした。なんどもなんども読み返しその度に泣きました。私の犬好きの原点はここにあるのかもしれません。

時代は変わっても、心に残る本は延々と引き継がれていくのですね。

絵本はたかが絵本ではありません。短い言葉と絵。この二つが共鳴しながら膨らみ、とてつもなく大きい世界を形成していくのです。

大人が読んでも十分楽しめる絵本。その魅力に気づいたのも、子どもとかかわる仕事に携わったおかげです。

読み方のコツ

絵本を読むときには、途中で余計な注釈は入れない方がいいようです。大人が口をはさむことで、子どもの心に広がっている世界を中断して、せっかく物語の世界に入っているのを邪魔してしまうように思います。そこに書いてある言葉だけを読めばいいのです。ただ、どのように読むか、それが大切。

知人に自宅で文庫を開いておられる K.I さんという方がおられます。この方の読み聞かせがまた素晴らしい。忙しいときはお手伝いに来て頂くのですが、近くで仕事をしていて、思わず手を止め聞き入ってしまいます。私も時々真似をしてみるのですが、なかなか彼女のようにはいきません。

絵本を読みこんで自分のものにしてから声に出す。幾通りもの声色を使い分け、子どもの反応をみながら、読み進めています。時に読み手の感性や、人間性まで問われる。さらに上を行くと、芸術の域に達するのだと思います。

このように力のある人に支えられて病児保育が営まれていることを幸運に思っています。

子ども達の心に残るよう絵本の読み聞かせはこれからも大切にしていきたいものです。

ラホヤ村通信

（9）

高垣愉佳

地図帳から地球儀へ Keep　in touch！

たった 1 年間の間に、私はアメリカで過ごさなければ一生出会わなかっただろう多くの人達と出会った。帰国してからも連絡を取り合う関係が続いている人達も何人か居る。

中華系フィリピン人からアメリカ人となった教授兼不動産屋さんのエレーナ。その後、いきさつは分からないけれど、彼女は私達が借りていたコンドミニアムの部屋を買い取ったらしい。「あなたたちの部屋は私が買い取ったから、いつでも帰っていらっしゃい。」と連絡があった。

一緒にコミュニティーカレッジに通いご近所付き合いをしていた若い中国人夫婦は、お子さんも中国から連れて来て、今は家族で暮らしている。初めての外国人の友人が私で、これまで持っていた日本への思い込みはすっかり吹き飛んだそうで、帰国する際には必ず日本でトランジットするようになる程、変わったと言っていた。

インターナショナルセンターでボランティアをしていたユダヤ系アメリカ人の画家ビバリーさんは、私が筆ペンで書いて渡したメッセージカードがきっかけで、筆と墨に興味を持ち、コミュニティーカレッジで水墨画のクラスを取っていると。

ヨガティーチャークラスの先生のクリスは、日本にアシュタンガーヨガを広めてみようと思うようになり、東京のヨガスタジオからのオファーを受けたと連絡をくれた。

1 年間英語チューターをしてくれたメキシコ系アメリカ人 2 世のマリアさんは、アジアに興味を持ち、「ゆかがアジア文化の発祥は中国だと言っていたから、まずは中国に行く事にしたわ。」と言って、Peace coops(平和部隊：日本の青年海外協力隊のようなもの)に参加して、今は中国の貧困地域で英語を教えている。

アジア、アフリカ、南米、ヨーロッパ、中東等、行った事の無い国から来た多くの人達と、日々話し助け合って何とか暮らした 1 年間。私の知らない世界の話しや知らなかった生活の話しをたくさん見聞きし、たくさんの影響を受けた。が、同様に私も出会った相手に影響を与えていたのだと、帰国してからのやり取りを通して知った。

日本で生活していると、同じような見た目の人達に囲まれ、同じ言語で話し、多くの人が似たような物を食べ、同じような新聞やニュースから情報を得る中で生活する事になる。これを長年繰り返していると、あたかもこの世界は平面であるかのように感じて来る。せいぜい感じ取れる広がりは日

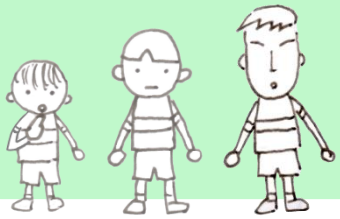
本までで、中学や高校で使っていた地図帳のように、別の国や地域は別のページに在るかのように錯覚しがちになるのではないだろうか。アメリカでの生活から受けた最も大きな影響は、世界に対する感覚が「地図帳から地球儀へ」と変化した事だったように思う。私たちが暮らすこの世界は、異なる人達が共に暮らす一続きの世界なのだという事実を、ラホヤ村という小さな地域での生活が教えてくれた。

そして、一人一人異なる私達が、常に相互に影響を及ぼし合いながら今を生き、明日を造ってゆくのだという事を、出会った人たちが教えてくれた。

「keep in touch! (繋がってようね！)」と言ってくれる人達と共に、これからもお互いの小さな蝶の羽ばたきを伝え合っていきたい。



知的発達障害の家族の日々8





大谷　多加志

口が達者？

弟についての、両親の評価の１つに「口が達者」というものがある。

なんだかんだと理屈めいたことを言われ、何となく言いくるめられてしまうことがあるからだろう。

ただ、横並びの兄弟としては全く違う感想を持っていた。

それは、「よくわかってない言葉を、都合よく使うなぁ・・・」という感想だった。一時期、弟が多用していた言葉に「平等」があった。

例えば、ポテトチップスなどおやつの袋を開けていると、そこにやってきて言うのが「平等に！」だった。弟の言う「平等に！」というのは、今あるものについて「俺にもわけろ！」という意味で用いられていた。実際、その場にいない兄の分も均等にしようとかいう、「平等」本来の意味での配慮はない。ひどい時には、私の器にはポテチが２枚だけ寂しく放られている、ということもあった。さすがに私もそれを見て自分の分のおやつだとは思わなかった（誰かの食べ残しにしか見えない）。

そしてもう１つ、同じ時期に多用していた言葉が「早いもの勝ち」だった。上記のようなおやつを自分が先に見つけた場合は、１人で独占して食べてし

まい、それを非難された時に言うのが「早いもの勝ち！」だった。ただこの「早いもの勝ち」ルールは、他者には適用されない。自分勝手にルールを解釈していたようにも見えるが、実際は「早いもの勝ち」の本来の意味（先に見つけたものが総取りする）を、よく飲み込んでいなかったように思われた。

そんな状況であるので、兄弟としては弟の発する言葉をいちいち真に受けてはおられず、「お前はさっきチョコ食べてただろ！」「この前のは、１人で全部食べただろ！」と戦い、時に弟を大泣きさせてでもおやつを勝ち取ってきた。



ただ、両親は案外と弟のこれらの言葉を真に受けるところがあった。こちらの正当性をアピールしても、どこか弟の言葉に左右されてしまう。「おいおい…」というつぶやきが、頭に浮かんでは消えていた。

いまなら、このような振る舞いは「自己中心性」や「他者視点」のなさというように理解されるのかもしれません。もちろんその要素もあるのかもしれませんが、当時の実感としては『よくわからない言葉を場面にあてはめるようにして使っているなぁ』だったように思います。

対人支援点描（６）

「福祉事業所から精神科クリニックへ」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

1. はじめに　ー近況報告.

2016年3月､これまで勤めていた主として精神障害を負った方の福祉事業所の勤務から､2016年5月より精神科クリニックの勤めに働きの場が変わった。しかし、職場が変わったといっても終日すべてが変わったわけではない。隔週の金・土曜日に自宅のある浦河から札幌にあるクリニックへ外勤に行くようになった。

余談だが、それ以外の日は、札幌とは正反対の方向にあるえりも町の幼稚園と牧師の業務に携わっている。幼稚園の業務は数年前から関わっていたのだが、福祉事業所を辞めて主たる仕事が幼稚園になったわけである。また、別の機会に幼稚園の業務やえりも町について話題にしたいと思うが､かねてより定型発達の幼児への理解と関心を持っていたので、幼稚園の仕事は子どもたちの日々の変化に楽しみながら人の育ちについて考えさせていただいている。人が成長していくということは、素晴らしいことだと感じている。

話題を戻して、その精神科のクリニックへは、私が福祉事業所に勤めていた時分から心理士がいないのと、トラウマ治療ができる人がいないので関わってくれないかという依頼を受けていたことに始まる｡私自身は､特別にトラウマ治療に長けているわけでもないが､せっかく学んだものを活かさないままにしておくのも、どこか不全感を意識していたのでお誘いの話は、大変ありがたく感じていた。ただ、前職場にいる間は、浦河から札幌まで通う余裕もなく、職場を頻繁に空けることなど到底認められなかった。しかし、前職場を辞める機会に引き受けさせていただくことになった。

医療を自分の活動の現場とするのは、浦河赤十字病院の嘱託心理士として以来となる。しかし、浦河赤十字病院の時分は、心理士の仕事といっても心理検査を主とする業務で、病院内で心理面接に携わることは求められていなかった。おまけに、精神科自体が休止状態になってから、この業務さえ無くなってしまっていた。こうしたことから、医療現場に身を置いて心理検査だけではなく心理面接も含めて多少は心理士らしい業務ができることは、自分にとって、いろいろな面で刺激を与えてくれるものだろうと期待するものがあった。

つまり、それまで地域に身を置いて支援に携わりながら、今度は連携先であった精神科医療機関の方からモノを観る立場となったわけである。これまで所属が異なっていたとしても連携する同志として精神科医療スタッフと関わりを持たせていただいていたが、外からその業務を察して共感するのと、身内として業務を共にしてモノを観立てていくのでは違うものがあると期待したのである。

また、多少なりとも“普通の”イメージの心理士らしい業務に憧れていたので素直に嬉しかったことがある。

２．“普通”であることへの憧れ

私のこれまでの心理支援の歩みを振り返れば、意図せずコミュニティ心理学、もしくは臨床心理的地域援助と呼ばれる分野を主たる活動領域にしていたことを思わされる。ボランティアによる電話相談活動や、そのことをテーマにした修論。広義の心理支援として教会に相談に来られた方の面接と地域連携。福祉事業所における心理支援と関係機関との連携。このようなことを続けてきた。

そのため、ある時期まで、私の内には「臨床心理士の意味は、Clinical Psychologistなのだから、医療現場で、特に精神科分野でしっかりとした訓練を受けたいな。」という想いがあった。精神疾患や精神医療について知識だけではなく、実際を知り、必要な知識と経験が欲しいと感じていたといえる。またもう一つ、現状の制度下では、常勤で病院に勤められる心理士の席は少ないという現実も感じていた。ましてや、兼業という立場ならば、精神科医療に携わるというのは、望みようのない希望と言えた。たぶん、一般的な感覚であれば、その仕事一本で取り組んでおられる諸先生たちから「初心者心理士が兼業という中途半端な立ち方で、この仕事に関わろうとするな。」とお叱りを受けるかもしれない。しかし、今でも思うが、現場に立てずして、どこでどのように知識と経験、訓練を受ければいいのか、このことは切実な問題であるといえる。養成機関が卒後訓練含めて、どれだけ体系的に、スーパーヴィジョン、コンサルテーションなど指導ができるのか。少なくとも、私の経験では、各自のツテと出会いといった個人に力点があり、制度や養成校といった養成システムに比重はない印象がある。

名ばかり心理士として人前に立つことへの不安や、在学中や活字になった書物で強調されるような、心理支援の“枠”のある面接と無縁な現場に立ち、資格は取ったが「これで良いのか？」「このままで良いのか？」と自問が続いた。

それだけに、“普通に”面接室で心理面接を行い、検査をとり、事例をまとめられる心理士が羨ましかった。

昔、精神科医療に携わり著作もある先輩心理士が、「精神科医療に携わる心理士は、成るべくして成るのだ。」と格好良く(?)語っていたことがあったが、自分みたいな宗教者が神秘主義みたいな言い方をするのは商業病か愛嬌だとしても、“科学的”であることを標榜する心理士がそんなこと言っていいのか、と違和感を感じたことがある（ちなみに、この先生はユング派や人間性心理学の立場の方ではない）。

けれども、卒後、大学病院で訓練を受け、精神科病院で働き、大学で後進の指導をするようになった、その先生の取り組みは、「臨床心理士＝Clinical Psychologist」の王道を行くような歩みであり、一つの理想像を体現しているといえる。（ところで、私は精神科医療に携わる心理士に成れるか成れないかは、需要と供給の問題か確率の問題である。精神科医療に携わるようになれたのは、天からの特別なお計らいやお導きであったとかは思わない（ようにしている）。そのようなことを許してしまえば、宗教家は別にしても、その先生が主義信奉する心理療法の立場を裏切ることにならないかと、私の方が心配してしまう。私の場合は、そもそもが牧師なので天の采配もありだと感じているが、それゆえに心理士として誤解を招かないように神秘主義的な物言いは避けている。諸科学が脱宗教化しても、それを扱うのが人間であれば、ときどき先祖返りしたような発言が出てしまうのも仕方ないかと思う。もちろん、自らの務めが天職であると誇れることや、誇れるような取り組み

ができていることを感謝することは大切なことであると思う。）

ある意味、輸入された学問と実践である臨床心理学と心理士が、特にアメリカの制度のように病院での訓練が“普通”のこととして組み込まれている事情とは異なり、教科書で謳われているような臨床心理の実践が望めない日本の事情を思う。多くが“普通”のことが“普通”として望めない現実がある。そして、私自身も、その望めない現実を歩んでいた。

こうした想いは、少しずつキャリアを積み、自らの取り組みが何であるかを思索しながら歩んでいく中で解消していったが、経験として得られることと得られないことがどうしてもあり、いつか何とかしたかったという願いが残っていた。

３．おわりに　ー福祉事業所から精神科クリニックへ

紆余曲折して思いがけず精神科クリニックに勤め始めたのだが、昔思い描いていた経路とは異なる歩みをすることになった。何が異なるのかというと、浦河の福祉事業所での経験は、精神疾患を抱えた方と生活を共にするような歩みであったため、その密度は大変濃いものであった。精神疾患を抱える方の診察室やデイケアなどで見せる姿と日常の姿は必ずしも同じではない。地域では症状もさることながら、症状の上に影響された生活を診て、関わることにある。病院やクリニックに行く人の姿は、ある意味余所行きの姿でしかない。このことは、本来、病気のあるなしに関係のない人の姿のはずであるが、医療現場のスタッフの多くは病院での患者の姿をその人そのままの姿と思い込んでいる節がある。浦河赤十字病院の精神科医で、現在は浦河ひがし町診療所の川村医師は、病院スタッフに地域で生活する患者の姿をもっと知るように強調している。それは、川村先生が経験してきたことでもあり、病院スタッフが、ますますと診察に来る人の病気の姿しか知らないでいるためである。

奇しくも、私は地域の福祉事業所の生活支援に携わることで、精神疾患と、その状態像について多くを得させていただけた。必ずしも、精神科医療機関に属さなければ、得られない知識と経験ではなかった。むしろ、それ以上のものを学ばせてもらったと思う。

しかし、医療現場における心理支援の役割を学ぶのは、これからである。“普通”に面談室で面接し、検査もする。その条件下で支援する取り組みについて試行錯誤する歩みが始まった。

今後、そうした取り組みの中から得られた話題もまとめていこうと考えている。

「あ！萌え」の構造：序論

（6）

応用人間科学研究科　齋藤清二

18. 「萌え」と「快感」と「プラセボ効果」

前回は、「カップ焼きそば現象」から、特に脈絡もなく「偽薬による真実の効果」（一般にはプラセボ効果と呼ばれる）へと話題がジャンプしたのであるが、この脈絡のなさが、本論考の一貫した特徴であるから、読者としてはあまり気にしないようにしてほしい。

ここまでああでもないこうでもないと考察してきたように、「萌え」という現象は、非常に様々な観点から定義したり、論じたりすることができるものであるが、その特質として、「萌え」は人間に「pleasure」をもたらすものであるということにはほぼ異論はないと思われる。「pleasure」という言葉は、一般には「快感」「快楽」「歓び」「愉快」「楽しみ」「おもしろさ」などと訳される。「快楽」と翻訳すると、これは一般に「肉体的快楽」「世俗的快楽」を意味することばとなり、良い子にとってはちょっと恥ずかしさと後めたさを感じさせる言葉となる。しかし、元来「pleasure」とはもっと一般

的で普通のことを意味する言葉である。「Thank you!」と感謝の言葉を投げかけられた時、日本語の「どういたしまして」の意味で「Not at all!」などという無粋な表現ではなく、「It's my great pleasure!」と返すのは、ちっとも変な意味ではない。そこの君、わかってるね。そこで、本論では良い子でも恥ずかしがらずに使える表現として、pleasure を「快感」と訳すことにする。

そこでもう一度「萌え」の定義について理屈をこねると、「『萌え』とは主体に『快感』をもたらす強力な作用をもつものであり、それは『性的交流』や『恋愛』と似てはいるが同じものではない」ということになる。「快感」は、通常「苦痛」とは正反対の感情・情動であるから、「萌え」に強い「苦痛抑制効果」があるということは当然であり、ここから、ストレスに対するコーピング（対処）の手段として「萌え」は極めて有効かつ（比較的）安全なものであるという結論が導かれることについてはすでに詳しく論じた。

さらに「萌え」もうひとつの特徴として、典型的な萌えの対象は「似姿（ポートレート）」や「絵」や「写真」や「動画」などの二次元画像（イメージ）であり、これは「実体を持つ＝現実（リアル）の存在」とは区別されるということが言える。もちろん、「萌え」の対象となるものは純粋な視覚的情報だけではないが、ここでは話を単純化するために、二次元画像とその関連現象に話を絞り、そのような対象への「萌え」がもたらす「快感」を例にとって話を進める。つまり、「萌え」が「快感」の惹起を通じてもたらす「苦痛抑制効果」は、物理的実体（例えば有効な成分を含む薬物）がもたらす効果と同等かそれ以上のものであるにも関わらず、「萌え」そのものには物理的実体はない（あるいはそれを必要としない）。その意味で「萌え」が「偽薬効果（プラセボ）」と呼ばれるものと同じ働きを主体に対してもたらすということはおかしなことではないのである。まわりくどい言い方になってしまったが、ここから逆に一般的に「プラセボ効果」と呼ばれている現象をさらに考察することによって、「萌え」が主体に与える効果について理解を深めることができるということになる。

19. プラセボ効果は「人を喰う」か？

「プラセボ効果」は、医療・医学領域では広く認識されている現象だが、それをどう理解するかについては甚だしい混乱が認められる。一般には「プラセボ効果」とう言葉は、「偽薬効果」というその名称が容易に示唆するように、「インチキ」「詐欺」「迷信」といった倫理的にネガティブな意味づけとともに用いられている。それは、前回紹介した「愛の妙薬」というオペラにおける偽の惚れ薬（実は安葡萄酒）の扱いにも明瞭に現れている。しかし、ここまでの「萌え」についての議論から明らかになるように、プラセボ（効果）とは「偽薬＝安葡萄酒や乳糖粉末」そのものではない。プラセボ効果は、物理的実体である偽薬に付随した作用のように一見思えるが、「偽薬」と「プラセボ効果」の間には直接の因果関係はない。これはよく考えてみれば当たり前のことであって、むしろ「偽薬」とその効果の間に因果関係がないということが「プラセ

ボ効果」と呼ばれる現象の本質であるとさえ言える。では、「プラセボ効果」とは本来は何か？と言えば、それは「非特異的な効果」のことなのである。（ちなみに、「ひとくいてき」と PC に打ち込むと、通常は「人食い」と変換される。つまり、「非特異的」な効果とはまさに「人を喰ったような」効果なのである）。

一々細かい言葉にこだわっているように聞こえるかもしれないが、「非特異的効果」というのは、実はすごいことなのである。え、意味が分からないって？　これから説明するから、少しお待ちいただきたい。

20. 特異的でないということはすごいこと

「非特異的」であるということのすごさを理解するためには、「特異的」ということがどういうことかを考えていくと分かるのである。「特異的な効果」というのは、例えば、頭痛に効く薬は「頭痛にしか効かない」という意味で「特異的な効果をもたらす薬」なのである。そんなのあたりまえだと思うだろう。風邪薬を例にとってみよう。風邪というのは極めてありふれた疾患であるが、医学的な定義は「ウイルス感染によって起こる上気道の炎症」である。風邪の症状の代表的なものは、鼻水、くしゃみ、喉の痛み（咽頭痛）、咳、痰、悪寒（いわゆる寒気）、発熱、倦怠感（いわゆるだるさ）といったものである。厳密に言うともっとたくさんあるのだが、ざっと挙げてみただけでこんなにある。これらの症状はおおざっぱに、「鼻の症状」「喉の症状」「気管支の症状」「全身症状」等にカテゴライズされる。もちろんこれらが全て揃う必要はないが、多くの場合、このうちのいくつかが揃って現れた場合、私達は「風邪をひいたらしい」と思うのである。それでは、「風邪に特異的に効く薬」はあるのか？　答えは「ありません」である。

理屈上は、上記の症状が全てウイルス感染によって引き起こされているのであれば、「ウイルスを殺す薬」があれば、それは風邪の症状全てに効くはずであるが、そんな薬は現在のところない（インフルエンザなどの特定のウイルスに対する薬は一応あるのだが、それはそれで色々問題がある）。

「おかしいなあ、薬局へ行くと、『総合感冒薬』というのがたくさん売られているよ。あれは『感冒＝風邪』に特異的に効く薬じゃないの？」とみなさんは思うだろう。しかしそうではない。総合感冒薬というのは、「鼻水に特異的に効く薬」「喉の痛みに特異的に効く薬」「咳に特異的に効く薬」「発熱に特異的に効く薬」を少しずつ混ぜ合わせたものなのである。ただし、どれもちょっぴりずつしか入っていないので、必ず効くとは限らないし、「鼻水は出るが咳は出ない」という症状の人が総合感冒薬を飲むと、一部は明らかに無駄な薬を飲んでいるということになる。

風邪を引いて病院を受診すると、街の薬局で売られているのとは全く違う薬が処方される。病院では（きちんとした医者なら）、ひとつの症状に対してひとつの「特異的に効く（はず）」の薬を処方する。ひとつの薬は、原則としてひとつの症状にしか効かない。熱を下げる薬は鼻水には効かない。鼻水の薬は咳には効かない。その代わりその

薬は十分な強さをもっており、多くの場合そのひとつの症状をしっかりと抑えてくれる（もちろん、それにもかかわらず効かない場合もある）。だから、単なる風邪で病院へ行っても、酷いときは 5 種類以上も薬を出されることがある。そしてその中には風邪の原因であるウイルスに特異的に効果のある薬は入っていない。

「え、でも風邪の時って、抗生物質をよくもらってくるじゃない。あれって風邪の原因になっている細菌を殺す薬じゃないの。だから風邪に特異的に効果があるんじゃないの？」。残念でした。何度もいうが、普通の風邪はウイルスによる感染症であり、細菌による感染症ではないので、抗生物質は効かない（風邪とよく似た特殊な感染症の場合は効くことがある）。よって、普通の風邪に抗生物質を処方するのは無意味である。このことは臨床研究の結果（いわゆるエビデンスというやつね）によって、はっきりと実証されている。それでも日本の医療機関では風邪に抗生物質が漫然と処方されており、そのために莫大な医療費が無駄遣いされており、さらには抗生物質の効かない耐性菌の発生などの問題が起こっている。これは明らかに患者の責任ではなく、医者の責任である。だか、これはここでの議論とは別の話だ。

このように、現代の医療は、「ひとつの病態」「ひとつの症状」に対して、できるだけそれに特異的な効果のある治療法（多くの場合薬物）を使用するのが原則だ。健康な人がたまたま普通の風邪をひいた時でさえそうなのだから、複数の慢性的な健康上の問題をもった高齢者が病院にかかっている時などは、この何倍もの複雑な状況になる。病院に通院している高齢者には、10 種類以上の薬を複数の診療科からもらっているような人は少なくない。これは「薬物の多剤併用問題」として、現代の医療の大きな問題になっている。もちろん色々な観点から、これに対する対策はなされつつあるが、根本には「ひとつの病態」に「ひとつの特異的治療」を対応させることを原則とする近代医療の限界と弊害が現れているといえる。

ちなみに、この「ひとつの標的に確実にひとつの弾丸を当てる」ような治療のモデルは、しばしば「魔法の弾丸」に喩えられる。ウェーバー作曲の「魔弾の射手」という有名なオペラはこのテーマを扱っているが、文字通りの「魔法の弾丸」を悪魔から手に入れるためには自分の命を引き替えにしなければならないのである。

さて、前置きが長くなったが、この「魔法の弾丸」と対極的な治療モデルが、「万能薬＝賢者の石」のモデルである。これは要するに、個々の病態や症状のひとつひとつに特異的に対応するのではなく、「何にでも効く＝非特異的に効く」ことを期待するモデルである。伝説やファンタジーや錬金術に詳しい人なら、おわかりのことと思うが、賢者の石＝エリクサーとは、どのような病いをも癒す、究極の万能薬であり、錬金術の秘法によって、鉛などの卑金属から創られる黄金と等価もものとされる。

え、それで何を言いたいのかというと…（そろそろ呆れられている汗）…。近代医学は、患者（＝苦しむ人）の問題は、何らかの特定の病態的メカニズムである「疾患」であると考えて来た。「疾患」は星の数ほどもある個別の原因によってもたらされる結果であるから、その個別の原因（あるいは

メカニズム）に対して、それぞれ対応する「疾患」を「治癒＝cure」させなければ、近代科学のモデルは成就しないのだ。ところが、このような近代医学とは全く別の医学モデルもあり、実はこちらのほうが歴史はずっと古い。このモデルでは、医学の目的は直接的に「患者の苦しみ」を和らげる（「癒やす=heal」ことであるとする。もちろんこれは可能なこともあれば可能でないこともあるが、その目的を達成するために、必ずしも星の数ほどもある多様な病態を経由する必要はない。その時に頼りになるのはむしろ「非特異的な効果」を確実に発揮する「何か」なのである。そして現代に生きる我々にとってその「何か」は，必ずしも「魔術的な」ものである必要はない。

確かに確実な再現性と客観性を求める狭隘な近代科学の観点からみれば、それはもっと主観的で、感情と共感に支えられた、あいまいで信用しがたいものであるかも知れない。しかし、苦しむものと苦しむ者の役に立ちたいと願う二人の人間によって行われる相互交流（それを私は「医療」とか「対人援助」とか呼びたいのであるが）において、私達がもっとも頼りにし、最大限に活かすことが求められるものは、この「非特異的効果」なのである。

それは非特異的なものであるから、明瞭に定義し、客観的に測定することは難しい。しかしその「効果」は確実に実感できるものであり、親密な関係性を基盤とする交流においては「言葉として表現し共有できる」ものである。そのような「賢者の石」によって象徴されるような「何か」のひとつの表現として、「非特異的効果」「プラセボ」「萌え」といったものを並べることは意味があると思われる。もちろんそれらは、それぞれが、「全く同一のものではないが全く違うものでもない」のであるが…。

＜続く＞

海の向こうにでて見れば

（５）海外の日本人“村”社会

石田 佳子

一概に「海外に住んでいる」と言っても、現地の人々に溶け込みなじんで暮らしている人だけではなく、日本人とばかり交流しながら暮らしている人、ほとんど誰とも交流せずに暮らしている人など、その暮らし方はさまざまです。とりわけ海外に住む日本人には、「日本人“村”社会」と揶揄されることがあるほど特有のコミュニティを形成する傾向があるため、今回は自分の経験も含めてマレーシアの日本人（主に退職者の）コミュニティについて考えてみました。

永住でなく長期滞在

昨年の外務省の調査によると、現在マレーシアには約２万２千人の日本人が住んでいます。そのうち永住者は約１千６百人だけですから、それ以外の約２万４百人の日本人は、一定期間（短期～長期）のみマレーシアに滞在している訳です。つまり、現在マレーシアに住んでいる日本人の約 93%がこの国に生活基盤を築いて永住するのではなく、いつかは日本やその他の国に移り住むため日本社会や日本人の動向を視野に入れて暮らしていると思われます。

私の住むクアラルンプールにも多くの日本人が滞在しています。留学や仕事（自営、駐在）などその目的がはっきりしている場合には、学校や職場との関係で住む場所が限定されることもあるでしょう。しかし、そのような制約がないはずの退職者でも、日本人の多い地域やコンドミニアムに住み、日本人との交流を主としていることが多いのです。日本人同士でつきあい、日本のテレビ番組を観て、（割高な）日本食を食べていたら、日本で暮らすのと余り変わらない気もしますが、海外でもそのような暮らし方をするのは、なぜなのでしょうか？

日本人同士でつきあうメリット

海外に住んでいる日本人同士が交流し合ったりコミュニティを形成するメリットは、言葉や立場を同じくする者同士で「わかり合える」こと、困った時に「助け合える」ことでしょう。特に移り住んだばかりの場合は、日本との違いに戸惑うことも多いため、現地の生活に慣れている日本人の隣人の存在はありがたく心強いでしょう。また、言葉の壁を乗り越えられない場合は、万一の時に頼れるセーフティネットとして、日本人の隣人を作っておきたいと考える人もいるでしょう。

私の日本人コミュニティとの関わりは、ロングステイの準備段階から始まりました。現地の情報を収集するためマレーシア関連で名高い某 SNS に参加すると、急速に「知り合い」が増えたのです。具体的には約 4 年前、下見のためクアラルンプールを訪れて在住日本人（主に退職者）グループの食事会に参加した際に、初めて出会った方から夫が「自宅のコンドを見に来ない？」と声をかけられたのが発端でした。

当時は日本国内で海外ロングステイが注目され始めていたこともあり、その SNS の活動が盛り上がっていました。それはクアラルンプールに長く住むある日本人夫婦が私財を投じて運営する SNS で、元々ごく内輪の互助会的な集まりだったものが紆余曲折を経ながら組織化され、参加者数と活動範囲を増して行ったようです。

その SNS には過去の膨大な書き込みが蓄積されていたので熟読すればそのルールなどかなりの事がわかったはずですが、その存在を知り始めたばかりでまだ内容まで把握していなかった私には、初対面の人間を自宅に招いてくれる感覚が理解できず、驚きと戸惑いを感じました。

日本人“村”社会の隆起

しかし、その後その SNS に精通するにつれて、「どうやらここはマレーシアに住む（予備軍を含む）日本人同士が、“親戚以上、家族未満”のお付き合いをする場なのだ」と理解するようになりました。

主体となるメンバーたちは、やはりクアラルンプールに住み、主催者夫婦と懇意にしている人たちでした。彼らは日本人会のサークル活動やテニスやゴルフや食事会などで常に行動を共にしているらしく、まるで疑似家族のような雰囲気を醸し出していました。また、彼らはその SNS に関する活動をすべて無償のボランティアとして行っていました。

その活動とは、SNS を介してロングステイ予備軍に現地の情報を提供したり、下見に訪れた人に自宅を見学させたり、歓迎会や食事会を催したり、日本各地で開催されるオフ会にまで遠征して体験談を披露したりといったことです。場合によっては、携帯電話の購入や契約に同行したり、不動産屋の紹介や家具の購入から空港-ホテル間の送迎まで、痒い所に手が届くようなサポートをすることもあったようです。

そこ（SNS）は初対面どころか面識のない者同士でさえ、愛称（ハンドルネーム）や「～ちゃん」付けで呼び合う独特の世界でした。メンバーの大半が 60 代～70 代であるにもかかわらず、青春時代に戻ったかのように活き活きと遊びや暮らしを謳歌していました。また、彼らは事あるごとに主催者夫婦への感謝の意を示し、いかにマレーシアが良い所か、自分たちがどれほど幸せに暮らしているかを競い合うように口にするのでした。

日本人同士でつきあうデメリット

日本人には、我欲を抑えて他に献身しようとする傾向や、細やかなおもてなしの心（ホスピタリティ）があると言われます。しかし、そのような美徳が発揮されるのは、相手が「お客様」や「目上の人」の場合であり、相手が「身内」や「目下の人」になると、その接し方は変わり得るのです。また、「世話をやく側 or やかれる側」「与える側 or 与えられる側」といった一方通行の関係は、長続きさせることが難しく、その関係性は長期化するにつれて良くも悪くも変化するのです。

また、海外の日本人コミュニティのような狭い集団では、昔の“村”社会のような閉鎖性や排他性を帯びたピラミッド型のヒエラルキーができあがりがちと言われます。私の知る限り、クアラルンプールの日本人“村”社会に組み込まれるのは簡単で、日本人の多いコンドに住みさえすれば、定期的に催される食事会に誘われたり、一時帰国する仲間を空港まで送り届けたり、帰国する時にお土産のリストを渡されて「これを買って来てね」と指示されたりといった“役割”を担わされるそうです。また、移り住む時にお世話になったことに恩義を感じて「今度は私が“お返し”をしなくては！」と頑張るうちに、ヒエラルキー内での格が上がり、気づいた時には抜けるにぬけられなくなっていたといったこともあると聞きます。さらに、そうしたヒエラルキーの中では、認められようとして頑張る格下の者が、出過ぎることなく頑張る間は格上の者のお覚えめでたく重宝されるけれど、「“役割を果たさなければいけない”」という“（暗黙の）ルール”を破って勝手な行動をとり、格上の者の機嫌を損ねると、きついしっぺ返しを受けるようです。

前述の SNS にもそのようなヒエラルキーが存在していること、その頂点に立つのが主催者夫婦であることは、周知の事実のようでした。そしてその中での上下関係は、主催者夫婦との親しさや在住期間の長さ、前職での肩書きや財力などによって決まるようでした。つまり、仕事の能力や成果などが加味される会社の上下関係とは異なり、すべてが（主に主催者夫婦との）人間関係によって決まっているように、私には見えました。

日本人“村”社会の衰退

マレーシアのロングステイヤー（すなわち、その SNS の参加者）が激増した最盛期（3 年程前、参加者が約 2000 人を超えた）頃から、その SNS には不穏な空気が漂い始めました。以前はとても親切で親しみ易かった主体となるメンバーたちが、その他のメンバーたちに厳しく接するようになったのです。

具体的には、当初は「政治と宗教に関する話題は、ご法度」だった SNS に、いつの間にか、「主催者の意に添わないであろう話題（マレーシアやロングステイの否定的な面に関する話題や、マレーシアロングステイ以外の話題）は、ご法度」という“（暗黙の）ルール”が加わりました。また、何でも質問して良い場だったはずの SNS に、素朴な質問（過去に誰かが質問して答えを

得ているため、SNS を検索すればすぐわかるような質問）を書き込むと、叱責を受けるようになりました。さらに、たびたびルールに従わない人には、SNS からの排除（促されての自主退会や除名）という厳しい処分が課せられるようになりました。

一方、主催者夫婦の権威がどんどん増して、まるで理想の父母（兄姉）か偉人でもあるかのように奉られるようになりました。また、主催者夫婦と主体となるメンバーたちの結束力がぐんぐん増して、「介護が必要になっても、仲間同士でマレーシアのコンドをシェアして住んで、面倒を見合おうね！」とか「いっそマレーシアに日本人専用の老人ホームを作ってしまおうか？」といった話題で盛り上がることもありました。

しかしながら、約 2 年前のある時を境に、その SNS 内部に亀裂が生じました。何があったのかはわかりませんが、主催者側（につく人たちのグループ）と、主体となるメンバー側（につく人たちのグループ）とに分かれて、いがみ合うようになったのです。酷い非難の応酬や怪文書の氾濫などで一時は収拾のつかない事態に陥りましたが、最終的には、主体だったメンバーたちがごっそり SNS を脱退して行きました。その後、彼らは別の新しい SNS を創り、現在は新旧それぞれのグループがそれぞれの SNS を運営しながら活動しています。

外から見ていて想うこと

私たち夫婦は、集団行動や“（暗黙の）ルール”を課せられることが苦手なので、日本人コミュニティから離れた所で暮らしています。日本人が嫌いな訳ではなく、むしろ海外に住んでからの方がその美点を再認識していますし、個人や夫婦の単位でおつき合いしている日本人の友達はいるのですが、日本人が集団になると目に見えないプレッシャー（上下関係や同調行動を当然視される圧力）を感じることが多いため、敬遠するようになったのです。

したがって、前述した SNS の件に関しても、なぜそうなってしまったのか、これからどうなりそうか、といった詳しい事情はわかりません。しかし少し遠くから見てきたからこそ、この諍いで傷ついた人たちのそれぞれが味わったであろう悔しさや憤り、悲哀などに想いを馳せることができるのかもしれません。

私見ですが、大半のメンバーたちは（少なくとも最初は）、「新しく来る人たちのお役に立てるなら」とか「よりよいコミュニティを作るために」などと考えて、純粋な善意や好意から行動していたのだろうと思います。しかし（おそらく人数が増えるにつれて）、人間ならば誰でも抱きがちな競争心や虚栄心が膨れ上がり、大きな流れを生み出して行ったのではないでしょうか。

光文社新書『ハラスメントは連鎖する－「しつけ」「教育」という呪縛－』の著者（安冨歩，本條晴一郎）は、ハラスメントの本質を、「相手の情動反応を否定すること」と「相手の情動反動

に基づかない意味づけを強制すること」の二点にあると定義しています。つまり、相手の意思や気持ちを無視して何事かを強要しておきながら、その行為を「あなたためだから」と正当化して善いもののように信じ込ませる（「嫌だ」と感じるべきところで「ありがたい」と思ってしまう）ようなコミュニケーションの過程がハラスメントであり、「魂の侵害/裏切り」だと言うのです。また、集団の中でこの加害者になるのは、”被害者故に加害者になった人”であることが多く、集団内に”被害者故に加害者になった人”が増えると、陰湿で排他的な空気（集団力動、圧力）が生まれ、（さしたる理由もなく）少数派の個人をいじめたり、弾き出したりしながら、誰も責任を取ろうとしない（自分の事として胸が痛まない）という結果を招きがちだそうです。

もしかすると、言葉や立場を同じくする日本人同士だからこそ、親しい間柄になるほど相手への期待や甘えが高まり、些細な事でも比較したり、嫉妬するようになるのかもしれません。また、日本人の作るコミュニティ（集団、組織、村、社会）というものは、常にこのようなことを繰り返しているのかもしれません。あるいはこれからは、最近の若い世代の日本人に見られるように、「個人」が群れずにそれぞれの場所でそれぞれの生き方を模索するようになって行くのかもしれません。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

∽シーズン１「SM クラブの受付」∽

エピソード６： 文化と迂回

しすてむ❤口きよたけ

僕は、変態が好きです。変態現象が好き。そこでは、人の欲求が社会と個人の間で何か起きているような気がして仕方ないから。

でも、そもそも変態が何かわからない。変態からすれば、そうでない事柄は、一般的ではないと考えられるので、一般的も変態だったりする。

この両側面がある社会そのものが変態で、面白いと思うし、「両側面」を感じる僕も、同じ社会にいるのだから、僕も紛れもなく変態だと思う。そんな自分を最近愛らしく思っています（自画自賛 www）。

さてさて、前回は、雅さんに渡された『SとM』という本を読んで感じたことや、「SM クラブ」という場を通して垣間見えた他者との関係性について綴りました。また、「SM クラブ」が「性風俗」に属しているため、「性風俗」の場から、日常生活において「性」が、どのように捉えられているのかを「性風俗」に関係ある人たちの声から僕の解釈を綴ってみました。それにより僕は、他者と性的関係を持つことについて、人によって異なる認識をしていると気づいたのでした。

また、SとMという関係性にも触れ、「SM クラブ」におけるサービスとは、何を示しているのかも綴ってみました。ここに対する答えは何も出ていません。しかし、「SM クラブ」という場においては、一般的に歪であるとされる性的嗜好でも、それは場に適した行為にすぎないので、歪だと断言できません。言い換えれば、歪だからこそ、満喫できる出会いがあると感じました。

さて！今回のエピソードは、今までの綴りっぷりに戻し、僕が体験をした「SM クラブ」の受付。とりわけ、初出勤日にフォーカスして綴ってみました。

綴りながら僕は、SM というカテゴライズされる嗜好の持ち主たちの集まりの中に入っていったのですが、僕は彼らを歪な人たちだと断定し難かった体験をしたと思っています。

いや、歪だと思っていたかもしれません。だって、何も分からないことから始まったのだから、不思議な世界だと思っていたに違いなかったのですから・・・。

今回のラインアップは、『1. 日本人の掃除の美学』、『2. 殺伐とする空気と謙虚さの倒錯』、『3. 漂う会話』、『4. お色直しされる画像』、『5. 下ネタの良し悪し』

1. 日本人の掃除の美学

初めて店に店に行った面接日、雅さんから「トイレは座ってするように」と言われた。また、トイレは、キャストと客、受付が利用するので、トイレットペーパーを使った場合は、必ず三角折りにするようにとも。

僕は、そのルールに気品を感じた。座って用をたすのは、小便で床や便器を汚さないようにするためだ。また、三角折りにするトイレットペーパーは、日常的に自ら行う行為ではない。清掃後のトイレで見受けられるよう、非日常的な行為だとも思う。

日本のトイレは、綺麗だ。「綺麗に」なんて言われなくても、自分が店の人間で、人を受け入れる立場であるという認識を持てば、了解してしまう。

僕は、綺麗なトイレを通して、日本人の日常的な行為と非日常的な行為に気づかされたのだった。次に使う人に向け考えられている日本人のマナーを垣間見たかのようだった。

トイレマナーについて、ここまで強く考えさせられたのは、主に過ごしているキャストの女性を意識したからかもしれない。男性だけが使うトイレであれば、そこまで考えなかっただろう。

2. 殺伐とする空気と謙虚さの倒錯

11 時半頃、店に到着した。ドアを開けると「カランコロン」と鈴が鳴った。ズドーンと見える狭い階段をのそのそと歩き、受付と待機室がある２階へ上がった。

その途中で、2 階入り口の引き戸が開いた。ミカサさんの顔が見えた。

受付は、1 人体制だ。この日は、初日の面接日に居たミカサさんが受付で、店長の雅さんはお休みだった。

「清武です。よろしくお願いします。」「はい。靴を脱いでこちらへ。」

ハスキーな声で、ゆっくりと返って来る言葉。僕は、ハキハキした口調で挨拶をしたものの、突如緊張感に襲われていた。

ミカサさんのハスキーな声は、狭く薄暗い空間にマッチしていて、殺伐とした雰囲気を感じたからかもしれない。雅さんの柔らかな雰囲気と違い、恐い印象を受けた。

「来たらまず、掃除をします。今日は、何もしなくていいので、私がしていることを見て覚えてください。」「あ、わかりました。」

これまでしてきたバイトでも、だいたいこんな感じで教えられてきた。だけど、奇妙だった。

一つ目は、仕事内容とファッション。受付といえば、一般的に事務仕事なので、オフィス系の服装を思い浮かべる。風俗店で

も「箱（店舗型）」だとスーツを着た男性がいる。しかし、ミカサさんの服装は、ゴスロリ系というのだろうか？アナスイが好きそうな雰囲気の人で、薄いストッキングを履いていたのだった。

二つ目は、ファッションイメージと言葉遣い。そもそも僕は、ゴスロリ系？ファッションの人から「掃除を見ておくように」と指示されたことが、これまで、一度もなかった。それだけでなく、ハスキーボイスで無表情。だけど、口頭で伝えるのではなく、見せて教えようとしてくれていた。僕は、業務を学ぶというより、彼女の仕草に引き寄せられていた。きっと僕は、何か異なった文化圏に入り、異なりに意識が向いていたのだと思う。

この違うと感じた体感は、動きから見て学ぶことも多いにあるということが、呼び起こされていた。裏を返せば、一般的に言語を使って教育されることが多いからなのではないだろうか。

3. 漂う会話

僕は、ほぼ初めて会う人と密室で二人きり。ミカサさんは、PC に座り、黙々と何かしていた。片や僕はというと、やることがなかった。

こういう時、互いに妙に居心地が悪い。ミカサさんは、PC と向き合いながらも、チラチラと僕の方に目線を向けていた。僕は、部屋の中を彷徨っていた。

僕は、「何してるんですか？」と尋ねていた。「レタッチ」、「･･･それって何ですか？」、「北海道の子の写真の修正をしてます。」、「へー。北海道ですか？」彼女と同じモードを探しているかのよう、仕事をしに来た僕も何か業務を探し、場に見合った過ごし方を探していたのだと思う。

結局僕たちは、実務についてではなく、おしゃべりを始めた。その中で、店舗がいかに展開されているのかまで垣間見ることになった。

「北海道」と違う地域のことを、彼女が、なぜこの地で行っているのか、わからなかった。

例えば、飲食業界のチェーン店のように、店舗名が違うだけだと思えば、解釈は早かっただろう。次のような解釈だ。SM クラブにも系列店舗（性風俗の母体）があり、その地の地域にも店がある。それだけだ。しかし、他の店舗の仕事を当たり前のように自店舗の業務として行っていたので、なぜ、当然のようにしているのか？納得できなかった。やらないといけないからやる、と単純に考えられなかったのだ。

解釈し納得したのはもっと先のことで、この日はそのまま話題は展開された。僕の頭は、さらに混乱した。

「北海道の店に男の子なんだけど、女装子じゃなくて、トランスでもない人がいまして。ちょっと、修正した方が可愛いと思って」、「へー・・・。見ていいですか？」、「どうぞ」。

当時の僕は、性風俗店といえば、「キャスト＝女性」思っていたため、不思議なこととして受け止めていたのだと思う。しかし、

売専があるよう、男性が男性を対象とした店舗もあるし、働いていた SM クラブは、「女性」と限定しているわけでもなかった（多くは女性であったが）。

つまり、「性風俗」で働く人のジェンダーに対する、固定観念こそが、不思議さを感じた機微だったのだ。こう思うのは、僕だけじゃないかもしれない。当たり前かのように、多くの「性風俗店のキャスト」は、「女性」であると認識されているのではないだろうか。いや、男性を対象にしている場にいるキャスト（人）は、女性という解釈がなされている可能性もあるのでは？詳しい方は、様々なセクシャリティの人がいる店があることを知っているだろう。また、「SM クラブ」のようにマニア向けと位置づけられている店があることも知っているだろう。

4. お色直しされる画像

ミカサさんは、椅子を少しずらし、PC を覗かせてくれた。「あ・・・確かに可愛いけど、どこか勿体無い感じがしますね。でも、そのままでも女の子に見えるっすねー」、「そうでしょー。でも、ちょっとメイクを入れるともう少し可愛くなるので」、「あ、ほんまや」。

レタッチとは、一般的には、画像修正・加工。最近の性風俗店の HP で見かけるのは、「写真の加工なし」だ。「加工」はしていないのだけど、修正されていないわけではない（ただ、大幅な修正が、されている写真は少ないと思われる）。

しかし、彼女の話からするとレタッチの意味は変わる。メイクアップだと思った。目元や口元にシャドウを入れる、唇の色を抑える、背景の色を濃くする・コンセントなどを消す。顔にする化粧に加え、写真全体に化粧を施し、その人の印象を表現していたのだった。

5. 下ネタの良し悪し

レタッチを見せてもらった後、その人のセクシャリティの流れで、性的嗜好の話をしていた。僕は、いろいろな性癖を持つ人がいることや性行為の相手として求める性は様々だと改めて気づいた。下世話な話に聞こえるかもしれないが、世の中にはこんな話題だってある。覚えている限り触れておきたい。

どんな AV が好きかという話から、同性との性的行為はできるのか否か、同性でも異性っぽいと思う振る舞いとはどういうものかと展開されていた記憶がある。そして、僕は、残念なことに（？）SM 嗜好じゃない人だと位置づけられた。

僕は、割と下ネタを真剣に話すことが好きだ。ただ、誰にでも、どこででもするわけではない。下手すればセクハラになりかねないし、見知らぬ人にいきなり話せば変人扱いされるのだから。

性行為の多くは、一般的に親密な関係の相手とする行為だからこそ、誰にでも開示しないという選択も必要だと思っている。

性行為は、誰にでも言う話題ではないから、行為を行う相手と創り上げていく、相

互行為であると思う。しかし、親密であるからこそ、そこでの性行為の事情を第三者に伝えることは、そう多い話ではないようだ。

しかし、性的な話をせずにいれば、性的行為にまつわる話は、いつまでもタブーな話題として扱われるか。

例えば、ネットで検索すれば無数に性的な情報は転がっているよう、誰にも言わずして性的な話題や映像に遭遇することもできる。

この情報を鵜呑みにして、性行為をする人もいる。AV を見よう見まねにやってみる人たちもいて、身体を傷つけるだけの行為になることもある。性的興奮を誘発させるために作られた過激なフィクションだと知らずして真似てしまう可能性もあるだろう。一方が現実の性行為で AV と同じことをしたいと思えば、もう一方は、相手のことが好きゆえに、断れなさが性行為に内包されてしまうだろう。並行して、真似てする方も感情を理由にして、行っていいと判断していることもあるだろう。

これらは、自分の体は自分で守らなければならないという構造になりかねない。もちろん、自分の身体を自分で守ることは大事なことだが、大事だと言われたからと言って、すぐにできるわけでもないと思う。

こんな具合で考えているから僕は、下ネタとしてちょけることもあるが、真面目な話題として解釈していたりする。

上記は、SM クラブの受付初日と関係ない話である気がするが、そうでもない気がする。ここに来る客たちは、自分の性的嗜好が、逸脱や性的倒錯と言われる行為であると分かって、これを満たし合う相手が日常におらず、たどり着いている。中には、プレイはほとんどせず、SM の話だけをして帰る客もいたようだ。

誰にでもして/されていい行為ではないという前提が社会にあることを知って、たどり着いたのだと思う。これは、キャストも同じだろう。ちゃんと「SM クラブ」にたどり着く変態を侮ってはならない。変態と自覚すると自ら動き、場を見つけていくようだから。

次回は、キャストと過ごす受付としてのしすてむ❤口きよたけについて触れていきたいと思う。初日に行った実務的なことを綴っていくのだろう。一通り 1 日の流れを見せてもらい、シフトを記入したことくらいだったと思う。次の出勤日から、身も心もてんやわんやだった。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

『清武システムズ限定コース解禁‼ロートーク about 熟女コースー』

綴り人/しすてむ・きよたけ

清武システムズという看板を引っさげ、活動中。現場に置いていただき、何かに反応し動き始め、それを通しそこで起きていることを整理して、また動き始める状況変化装置です。アイディアや意見ではなく具体的な変化のための装置。

「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋らNight！」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyo です。

今のところ不定期ながらに、水曜日の 22:00～行っています。清武システムズHP に録音のリンクを貼る予定です。

S・V 羅針盤のない航海



川﨑　二三彦

【2】最初の1か月

早くも未熟さ露呈

課長として意見を述べる場合、当たり前のことだけれど、まずは担当者本人がどうしたいのか、そこを忘れてはならないことを改めて理解した。

それはともかく、これで赴任して最初の 1 か月が終わった。この個人的業務日誌、本当はスーパーバイズはどのように行われるのがいいのか、初級スーパーバイザーとして、その経験をなるべく具体的に記すことを目的にしていたのに、ここまでを振り返ると、同じ京都府内の児童相談所を転勤しただけで、今まで自分自身が行ってきた児童福祉司活動が当たり前、これがセオリーと思っていたことが通用しないことにイライラし、不満ばかりを書き綴ってしまったように思う。

それまでの児童福祉司活動に終止符を打ち、新たに相談判定課長として赴任した最初の 1 か月の終わりに記したのが、今述べた内容である。

20 年近く前に書いた、原稿用紙 2500 枚にも及ぶと思われる日誌。この全てを一挙に読み通すことなんてとてもできることではないが、「まあ、少しずつ読み解きながら、SV について考えてみることも意味があるだろう」というのが、本連載執筆の動機であった。ところが、軽い気持ちで船出した途端、赤面することばかりだったというのが、現在の率直な感想だ。

課長となった自分の、こんな未熟な業務内容を今後も続けて開陳するなんてことは、おそらく耐えがたいので、早晩打ち切りとなるのは避けられないという予感がするのだけれど、まだ始まってもいない段階で連載を放棄するのも、あまりにお粗末というほかなく、恥さらしを覚悟で、何とか今回分だけは完成させることとしよう。

ということで、最初の 1 か月の出来事を一、二紹介する。

迷子

赴任して 1 週間あまり経過した時のことだ。午後 7 時頃のことだろうか。自宅に戻っていた私に、次長から電話が架かってきた。日誌には、ことの顛末を、次のように記載していた。

次長は電話で、「警察から、『迷子と思われる子どもを発見したが、保護者が現れない。児童相談所で一時保護してほしい』という電話があった。子どもは名前しか言わない（言えない）らしく、知的障害が考えられる」と言う。

連絡を受けて、私は発見された地域を担当するＣ福祉司の自宅に電話したが、まだ帰宅していないというので、折り返し連絡してもらうよう伝言し、警察署とやりとりした。結局午後８時を過ぎても保護者が現れないことから、一時保護することにした。

帰宅して電話してきたＣ福祉司にかいつまんで説明すると、ただちに職場に出て、当該児童の名前が相談台帳にない（すなわち、わが児童相談所が過去に関わった事例ではない）ことを確認、トンボ帰りで自宅で夕食を取り、すぐにとって返し、警察から身柄を受け取り、そのまま

宿直に入った。そのことを確認した上で、私は所長に報告、事後承諾を得た後、一時保護所の保育士にも連絡した[*1]。これで私の仕事は終了だ。

私はやってきたんだ！

さてこのケース、翌日保護者が現れて子どもは引き取られ、予想どおり管外事例だったことも判明したので、本来担当する児童相談所に引き継いで終結したのだが、それでは終わらなかった。

この週に行われた毎週1回開催の課のミーティングでのことだ。日誌には、次のようなことが書かれている。

ミーティングでのC福祉司の次の発言はショックだった。

「緊急一時保護となったケースの対応について、正直言って不満がある。自分が帰宅して再度児童相談所に出るまでに、時間もあったんだし、課長や次長にはそれまでにすることがあったはず。結果オーライで問題はなかったけれど、子どものことがよくわからず、宿直中、もしかして発作など起こらないか等々あれこれ考えているうちに夜が明けた。この日は一睡もできなかった」

というのである。

今振り返って思い出したのは、私が新任児童福祉司となって1か月にも満たない時に発生した緊急保護の事例である。深夜近くなって所長から電話が入った。実は所長も着任したばかりで大張り切りだったのだが、こんなことを言う。

「川﨑君か、君の担当地域の警察署から要保護児童通告があり、かくかくしかじかの理由で、緊急に子どもを保護することになった。実はな、連休ということもあるし、今夜はとりあえず、ワシが宿直に入っているんだ」

「？？？」

なぜ、担当者より早く所長に連絡が入ったのか、それよりも何よりも、どうして所長が自ら一時保護の宿直をするのか、さっぱりわからない。

「担当者は私なんだぜ！」

この時ふつふつと湧き上がってきたのは、「私というれっきとした担当児童福祉司を差し置いて勝手にことを運ぶとはどういうことだ」というものだったろう。そのせいかどうか、以後のケースワークにおいて、「この地域を担当しているケースワーカーは私である」「私がこの地域に責任を負っているのだ」という意識を忘れることはなく、態度・行動においても、それを貫いたはずである。

だから、課長として赴任した直後に発生したこの迷子事例にしても、夜間の出来事であり、一時保護の是非の判断は、最終責任者である所長に成り代わる現場監督として（私が）行ったにせよ、具体的な対応は担当者に任せればよいと考えたのである。それを咎められた。

「児童福祉司の時代に私がしていたことを、そのままお願いしただけなんだけど……」と口に出して言うことはできなかったものの、そんな思いがぐるぐるまわり、結果としてC福祉司の訴えをきちんと受け止めることができなかった。

*1 私が勤務していた児童相談所は小規模であり、当時は一時保護入所児童も少なく、この日は保護児童がいなかった。そのため、緊急の場合は、担当福祉司が自ら当直に入ることも珍しいことではなかった。本件もそのようにことが運んだが、翌日からの一時保護をスムーズに進めるために、ベテラン保育士に連絡しておいたのである。というのも、当時の一時保護所の職員は、児童指導員、保育士、調理員の3人だけだったからである。

ＳＶ失格

とはいえ、今になって考えれば、自分の名前しか言えない子どもである。Ｃ福祉司が心配していたように、医療面を含めた子どもの状態をどう判断するのか、障害のあると思われる子どもがどうして迷子になったのか、なぜ、迷子当日に保護者が現れなかったのか、仮に、その後も現れなかった場合にどう対応すればいいのか、検討すべきことは山ほどもあり、少なくとも担当者に任せきりにせず、当日は自らも職場に足を運んで担当福祉司と協議し、当面の方向を出すべきであっただろう。

残念ながら、この時にはそこまで思い至らず、「私なら自分独りでやって不平など言わなかったはずだ」「担当者なら、もっと頑張ってほしい」という思いにとらわれていたというしかない。

要するに SV 失格だ。

同行依頼

さて、1 か月も児童相談所にいれば、いろいろな事案が噴出するのは当然だろう。それは、児童虐待などまだ表に出てくることが少なかったこの当時でも基本的に変わりない。ベテランのＢ福祉司が、慌てた様子で相談したいことがあるという。

話は私が赴任する直前の 5 月末に遡る。両親が来所し、面談した担当のＢ福祉司に、「夏休みの間、近くにある京都市の重症心身障害児施設への入所をお願いしたい」と希望したという。この日、両親はすでに当該施設に打診しており、施設側は、短期間なら対応できないことはないといったニュアンスのことを伝えた上で、いずれにしても児童相談所への相談が必要だと説明したため、その足で管轄児童相談所である当所を訪ねてきたのであった。

両親の話から、入所は可能だろうと判断したＢ福祉司は、後は手続きだけと思ったのか、受理会議へは提出していない。

その後しばらく動きはなかったのだが、別件でやりとりした京都市児童相談所の児童福祉司から、「施設は定員いっぱいになった」と聞かされる[*1]。Ｂ福祉司は多少気がかりになったらしいが、深くは考えず、そのままにしていたというのである。

そしてこの日、母親から「あの話はどうなっていますか」との電話が入ったのだった。Ｂ福祉司が、急ぎ施設に連絡すると、「今からでは困難」との返答。保護者も困ったのか、同日、父親からも連絡があり、「今日中には何らかの返事をしてほしい」と言われたという。

「その後、何の話も届いてこないので、あの話はなくなったのかなと思っていたんだけれど、とにかく、これから施設を訪問してもう一度頼んでみるつもり。ついては課長にも同行してほしい」

こういうオーダーだった。

当時の重症心身障害児施設はいずこも満員状態で、仮に課長が頼み込んだからと言って、融通がきくとも思えなかった。事実、施設への同行訪問はしたものの、やはり結果は変わらない。

行き詰まった末に思い出したのは、保護者の居住地からはかなり遠隔地になるものの、京都府北部にあって重症心身障害の子どももしばしば受け入れていた肢体不自由児施設のことだ。「あそこに頼んでみては？」とＢ福祉司に伝え、何とかことなきを得たのだが、この件で、私の頭はまたしてもぐるぐる回り続ける。

「Ｂさんほどのベテランだから、かえって簡単に考えてしまったのだろうか」

*1 京都市は政令市であるため、京都府の児童について、直接入所等の措置を決めることができず、京都市児童相談所の了解が必要となる。

「それにしても、思い込みだけで事実確認していなかったとしたら、ソーシャルワークの基本から外れているのでは？」

などと考えているうちに、Bさんの福祉司活動について気になっていた別の問題が重なり合ってきた。

児童記録票

全員退庁して、今は職場に私1人。各児童福祉司が作成した児童記録票を読んでいて、溜息が出る。

私が福祉司をやっていた時には、言ってみれば“どこへ出しても恥ずかしくない児童記録票”を目指していたし、それよりも何より、面接を重ねていく上では、ここまで記録しておかないと以後の対応で困るということがあった。

「これで本日のケースワーク活動は終了である。だがすぐに退庁するわけにはいかないのが児童福祉司の辛いところだ。私は一時保護所の様子を横目に見ながら、まず児童記録票の整理にとりかかった。氏名、生年月日、住所、保護者名、主訴などを記載する 1 号用紙に始まって、最初の電話の内容、臨時ケース会議で出された意見、警察署訪問時の様子、福祉事務所で知り得た情報の整理などの経過記録をまとめるのである。実はこの作業をしていく中で、今後の展開の様々な可能性が浮かんできたり、次に打つべき手のいくつかが見えるようにもなるし、自分自身の混乱に整理がつくこともしばしばあるのだ」（子どものためのソーシャルワーク「虐待」から引用）

ではB福祉司の記録はどうかというと、一口で言えば、メモと変わらないというほかない。（本事例にしても）保護者がどのように訴え、それに対して福祉司がどう対応したのか、知りたい経過がさっぱりわからないのである。だが、10年もやってきた人に、今さらどう改めてもらえばいいのか、途方に暮れてしまう。

児童福祉司時代の私は、可能な限りその日のうちに面接等の記録を書いていた。（当時は IT 化もされていなかったから）膨大濃密なケース記録を書き上げるにふさわしい筆記具を探し回ったことも思い出す。人に見せるつもりもなかった個人的業務日誌に拙著の一節を引用したのは、おそらく記録に対する自負があり、また、B福祉司の記録の仕方に対する批判を、自分との対比で際立たせようとしたのだろう。

もちろん、家庭の事情等で時間外勤務もできず、後ろ髪を引かれる思いで退庁する人もいて、私の流儀を他の福祉司に押しつけることができないことは自覚していた。

また、子どもの虹情報研修センターに来て各地の様子を聞いてみると、記録の書き方についてはさまざまな考え方があり、IT 化後のシステムも、自治体によって異なっていることもわかってきた。だから私の方法が唯一のものとは言えまいが、少なくとも、B福祉司の記録は手抜きとしか考えられず、当時、自分の記録方法こそ正しいと信じていた私にとって、どうすれば彼に改めてもらえるかが、新任課長としての最初の仕事のように思われたのである。それは、大変大きなストレスだった。

＊

今思うことは、就任1か月で早くも遭遇したいくつかのエピソードとそこで感じたことが、その後の私を支配し、私の SV の通奏低音となったのではないかということだ。では、その後何が起こるのか。次号を待たれたい。

（つづく、かな？）

本稿は、「児童虐待防止法」制定、施行の前後、筆者が児童相談所の相談判定課長時代に書き付けていた個人的業務日誌を改めて繙（ひもと）き、現時点で振り返ろうとするものである。

これまでの連載
序
(1) 前史

＊題名を click すると本文へジャンプします。

精神科医の思うこと②
－医療からみた虐待－

松村　奈奈子

今回は医者っぽい話です。
先日、医療者中心の虐待の学会に参加して、いろいろ思うことがあったので。

総合病院に精神科医として勤務していた頃、関わる虐待といえば、“統合失調症の女性がある日、夫に殴られて目の周囲にアザを作ってきた”とか“「骨折で入院している高齢の認知症の女性の耳が腫れている、娘さんが殴ったみたい」と病棟の看護婦さんからの相談”など、当然ながら精神科の患者さんが虐待にあう場面が中心でした。それらは、精神科の患者さんへの福祉サービスや保健所のPSWなどへの相談などの連携で、何とか対応してきたと思います。

そんな中、今でも何とも言えない思いが残っているケースがあります。
十数年前の頃のお話です。
若い小児科の先生が話があるとやってきました。優秀で勉強熱心な良い先生でした。
生後3か月の赤ちゃんの頭部のCT画像が、どうも“揺さぶられ症候群*”の所見と思われるというのです。当時はやっと乳幼児の“揺さぶられ症候群”が新聞などで取り上げられ初めた頃でした。
お母さんと話しても特に違和感はないし“揺さぶった事は無い”とはっきり言われたので悩んでいる。
僕は初めての症例で所見にはっきりとした自信はない。上司に相談したが十分な返答はなく、児相に連絡するのもためらっている。お母さんと話してみてほしい、虐待の可能性について意見を聞きたい…という内容でした。
私も忙しくしていて、その日は1時間ほどしか時間はとれず、母親だけのたった1時間の話でははっきりとした判断はできない…といったのですが、若い先生の熱意に負けて話を聞きました。

母親からは、精神症状はないか？母親が孤立していないか？父親との関係はどうか？などを中心に聞き取りました。しかし、母親からは気になる話は語られず、祖父母も父親も忙しいので来院できない…と言われ、予想通り母親一人からの話では判断できないまま時間が来てしまいました。小児科の先生には“母親だけの話ではなんともいえない”と素直に話しました。
二人でどうしようどうしよう…と悩みましたが、結局、画像所見だけが判断基準になるので“小児科医の診断”にゆだねるという事になり、彼はもう少し考える、とその日は終わりました。
当時いた病院には、まだMSW（医療ソーシャルワーカー）の配置はなく、彼が相談できるのはよろず相談所みたいな精神科しかなかったんだと思います。
精神科の外来から帰っていく彼の背中からは無力感が伝わり、当時の私は児童の虐待対応の知識もほとんどなく、力になれずに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。
数日後、廊下ですれ違った彼に、この通告はしなかったと聞いたように思います。
この時、熱心な小児科医を孤立させない仕組みがないと、きちんと虐待通告はできないんじゃないかと思いました。

その後、児童虐待に直接関わる事はほとんどないまま、勉強もせず総合病院を数年前に退職しました。退職後、児童相談所や児童自立支援施設の嘱託医をはじめて、いわゆる“虐待”についての勉強不足を痛感し、時間を見つけては“虐待”と名の付く学会に勉強に行くようになりました。

行ってみて、H25年度から厚労省が医療機関の児童虐待対応向上を図ることを目的に“児童虐待防止医療ネットワーク事業”を進めていることを知りました。
また、いくつかの都市では拠点病院をおき、CPT**（院内虐待対応チーム）の設置が少しずつ進んできているとも聞きました。小児科医だけでなく骨折などを診る整形外科医など、看護師、MSWなど他職種でのチームでの対応を基本とするものです。
直接家族に虐待を問うたりしないしないなど、子どもや家族からの聞き取りもマニュアルができ、看護師・MSWなどのスタッフで役割分担など、具体的な家族への対応をしるしたマニュアルも目にしました。
十数年前に直面した“虐待通告”の難しさは、個々の医師が対応するのではなく、チームで対応していこうというように変化しているのが伝わりました。

対応のマニュアルには、医療機関は、加害者の告発が目的ではなく、虐待の裏側にある家族が困っている状況を察し、支援をするきっかけをつくる機関であるべき…とあります。

しかし、まだまだ医師の児童虐待に対する対応に、多くの課題が残っている現状もあります。
前出の若い小児科医の上司は“児童虐待”の通告に抵抗があったように、個別の医師自体の意識は様々でまだまだ変化が必要です。
また、地域間での意識の差も大きく、児相で仕事をしていても、すべての医師が協力的だとは言いにくい現状を目の当たりにする事もあります。

先日行った学会は、中心は小児科医です。しかし、産婦人科、整形外科、歯科、精神科などの臨床医に加え法医学者も、またMSW、看護師、保健師、児相スタッフや、さらに警察や司法からは検事や弁護士の参加もありました。他職種がお互いの“不満”や“お願い”をストレートに話す場面も多く、職種それぞれの考えが聞けて、勉強になりました。
参加者の議論からは、ほんとうに他職種との連携が重要だとあらためて教えられました。

数日前、児相のやる気のある若いスタッフにこの学会の話題をもちだす機会があったので、ぼそっと話してみました。“もっと連携必要って感じるんですけどね”“どう始めたらいいんかなぁ”といきなりそこで行き詰った会話になりました。いやいや、これではあかんと思っています。
なので、今回、私は対人援助マガジンに書いてみることから始めてみました。

＜注＞
＊揺さぶられ症候群（shaken baby syndrome）
暴力的なゆさぶり等によって脳内の血管（橋静脈）が断裂し、頭蓋内出血を認める。
3Hzの揺さぶり（1秒間に3回）が一番危険度の高い揺さぶりといわれている、と講習会で聞きました。けっこう早い速度で揺さぶらないと3Hzにはなりません。
＊＊CPT（child protection team）

おくのほそみち

～‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に～

理学療法士
奥野　景子

「けーちゃんがお休みの日は、誰か他の人が行ってくれるんじゃないの？」と聞かれた。「いや、うちがお休みの日は、日を振り替えたりお休みにすることが多いかなぁ～？まぁ、振れる人は、他の人にお願いすることもあるけどなぁ」と、私は答えた。そして、「でも、知らない人が突然‘代わりに来ました～’って来られても困るやろうし…」と付け加えると、叔母も少し納得したようだった。週末出張の都合で平日にお休みをいただいた私は、京都に住む叔母と実家から遊びに来た母親との三人でお昼ご飯を食べに行った。これは、そこでの一場面である。

「訪問リハビリという‘仕事’」を中心に置くと「‘代理の’誰か」になり、「訪問先の‘家’」を中心に置くと「‘その’誰か」になる。今思い返すと「たぶんそうゆうことやなぁ～」と、私は思う。

～　前回のおさらいと今回のこと　～

前回のマガジンでは、「リハビリテーションとは何か？」という問いを投げさせてもらいました。その語源や定義と自身が実際に行なっているリハビリテーションとの乖離について述べ、現段階での私なりの答えを述べました。そして、その答えは「生きることそのもの」です。詳しくは、前回のマガジンをご参照いただければと思います。

そして、今回は前回の予告通り「リハビリテーションが行なわれる場」について書いていこうと思っていました。ただ、色々と考え始めると、それについて書く前に考えておかなければならないこと、それについて書く前に自分の中にあるもやもやを書いておいた方が良いのではないかと思い、今回は予告したテーマの少し手前のことについて書いてみようと思います。

0.　さて、どう書き進めようか…な。。
00.　‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
000.‘家’という小石につまずく

0.　さて、どう書き進めようか…な。。

私は、2015 年 3 月に立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助学領域を修了した。その時に書いた修士論文の一部に今回書くテーマと類似したものがある。前回予告した「リハビリテーションが行なわれる場」について書くにあたっては、それを軸に話を膨らませようと思っていた。ただ、改めて読み返すと、うーーん、、、となった。修士論文では「回復期病院と訪問リハビリの違いについて」という項目で私自身の経験に基づいて各々の場所、そこで行なわれるリハビリテーションの違いなどについて書いた。修士論文の最後には、やはり「リハビリテーションとは、生きることそのものだ」と書いたのだが、リハビリテーションをそのように定めた場合、「場所」に軸を置くことは何か違うような気がしてきた(そもそも‘回復期病院ー訪問リハビリ’という対比自体が違うとも思っている)。それに修士論文に自分が書いた内容についても悩ましく、疑わしい点もいくつかあった。当時は手を付けられなかった制度に仕事を通して触れたり、訪問リハビリを行なう友人の話を聞いたりすることを通して、それだけじゃない現実や社会のありようが見えてきた部分もいくつかあった。

そんなことを考えていると「さて、どう書き進めようか…な。。」と、立ち止まってしまった。これが項目「0」で良いのかも定かではない。もしかしたら「-3」や「-206」とかなのかもしれない。でも、それなら「0」までに何をしなければ良いのかもわからない。そして、「0」から「1」に辿り着くまでの無限の点で何をすれば良いのかもよくわからなかった。よくわからないので、各項目にはなんとなくで番号を振っておいた。

少し論点が外れてしまったが(あながち外れてないと思ってもいますが)、つまり「さて、どう書き進めようか…な。。」ということである。うーーん、、、から少しも進んでいない。でも、とりあえず「今の、今までの私自身に基づいて」書き進めて行くことにした。そして、改めて自分にはそれしか出来ないとも思った。今回は、そんなことが出来るこのマガジンに出会えて良かったなと思いながら書き進めてみようと思う。

00.　‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に

「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていた時、どんな風に書き進めても納得できる気はしなかった。だから、最初に思い浮かんだようにやってみようと思い、書き進めることに決めた。

生きることに軸を置いた場合、「場所」に焦点をあてるより「当事者の生活により近いのはどこか？」もしくは「誰にとってのホームグラウンドなのか？」が大切なような気がしていた。ただ、‘患者中心の医療’などという謳い文句もある。この場合、当事者がどこにいても‘そこは当事者のホー

ムグラウンドでなければならない’もしくは‘当事者の生にこそホームはある’となるのかもしれない。でも、そうではない現実があるもの事実であり、入院中の多くの人が状況にもよると思うが「ここが自分の生きる(生きている)場所」と思っているとは考え難い。ひとまず、「リハビリテーションが行なわれる場」について書くにあたって、「誰にとってのホームグラウンドか？」ということに焦点をあてて書いてみることにしていた。

ホームとアウェイに明確に二分できる訳ではないと思うが、私のイメージでは表のようになる。サッカー日本代表が他国の代表チームと日本国内で行なう試合をホームゲーム、日本国外で行なう試合をアウェイゲームと言う。そんな感覚で、ホームとアウェイという言葉を使ってみた。本来であれば「ホームグラウンドとは？ホームとは？アウェイとは？」という定義を明確にしなければならないと思うが、実はこれを真剣にやろうと思うと、とても厄介なことになるような気がしていた。だから、「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていた時は、そこのところは完全に濁していこうと思っていた。が、書き進めているうちに濁しきることもできず、中途半端に淀んだまま書いている部分がいくつもあり、手が止まってしまった。「だったら、そのことについて書けば良いやんっ」と思い、今回は「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」というテーマで書いてみたいと思う。

	当事者	私
病院	アウェイ	ホーム
家	ホーム	アウェイ
施設	ホーム？ アウェイ？	ホーム？ アウェイ？

000.　‘家’という小石につまずく

さて、私が何を濁し、何について淀んだまま書き進めていたかと言うと「‘家’とは何か？」ということである。

ここで、家に関するいくつかの質問を考えてみる。「あなたの家はどこですか？」「あなたにとって家とは何ですか？」「あなたが住んでいるのはどこですか？」似ている部分もあるが、全く質の異なる質問でもあると思う。学生時代と就職してからを合わせるとかれこれ 10 年近く一人暮らしをしてきたことになる。そして、今も一人暮らし中である。「週末は実家に帰るの？」訪問先の方にこんなことを言われることがある。今の私にとって‘家に帰る’とは、一人暮らし先の自宅に帰ることを意味することが多い。生まれ育った家に帰ることは‘実家に帰る’と言う。実家は‘実の家’と書く。でも、今の私にとっての‘家’とは少し違う。知人の中に、一人暮らしを始めてから親が実家を引き払い、別の家に移り住んだり、別の地域に引っ越したりした人が何人かいる。その中の誰かが「実家がなくなった」と言っていた記憶が思い出される。実家とは、場所のことなのだろうか？たぶんそうだけど、そうじゃない。「あなたにとって家とは何ですか？」という質問に対してはそれなりの答えが出せそうだが「あなた

にとって実家とは何ですか？」という質問に対する答えは何となく難しい。その答えに場所の要素が含まれることは間違いないような気がするが、たぶんそれだけではない。においや風景があり、思い出がある場所であってそれがつくられた場所でもあるのだろう。それだけじゃないことやものが含まれる、含んでいる、あらわし、あらわれてくる、意味して、意味されて、なんだかんだ…。まぁ、つまり、なかなか答えに困るということである。

ここからは、いくつかの‘家’に関わるエピソードを通して、‘家’に関する疑問やそれが何なのか、私の中にあるもやもやがどのようなものなのかを表したいと思う。

●「じゃあ、やることもあるし京都に帰ろうかな！？」●

つい先日、東京での研修を終えた私は、そのまま実家に帰ろうと思っていた。ただ、職場の出張扱いで行っていた研修だったため、新幹線のチケットは京都までしかなかった。なので、京都からは在来線に乗り換えて実家に帰ろうと思っていた。でも、実家に着く時間が夜中になりそうだとわかると、母親から「荷物もあるやろうし、無理して帰ってこんでいいよ(*^_^*)」とメールが来た。‘せっかく帰ろうと思ったのに…’と少し思ったが、やらなければいけないこともやりたいこともあったため、実家に帰るのはやめることにした。そして「じゃあ、やることもあるし京都に帰ろうかな！？」と、私は返信した。

今の私にとって‘家’とは一人暮らし先の自宅を意味することが多い。ただ「じゃあ、やることもあるし家に帰ろうかな！？」とは書かなかった。たぶんそうやって送ると母親は混乱するだろうな、とも思う。‘えっ、どっち！？’と。それに、本人は忘れているかもしれないが「あんたらの家はここ(実家)なんやからな」といつか言ってくれた母親のことを思うと「私の家は京都にある」と言いたくない部分もある。し、私の‘本当の家’は実家だと思っている私もいる。

このやり取りには、母親と子どもと言う関係性の影響もあると思うが、なんだかなぁ～な感じになる。

●アジトと部屋●

東京での研修ついでに大学院の先輩が住むシェアハウスに遊びに行った。始めは、ただ会うだけの予定だったが、渡さないといけない物もあったり、このテーマについて話していたりしたこともあり、シェアハウスに遊びに行かせてもらった。知らない町の、知らない駅で、人ごみに流され、立ち止まる位置さえ見つけるのに苦労し、なぜか陽気な踊りを踊る人たちに愕然としながら、‘東京ってコワイ…’と田舎者丸出しで怯えながら、やたら距離の近い体温高めのおばちゃんに戸惑い、小さなスーツケースをゴロゴロ引いて、そこに向かった。

私の親しい人の中でシェアハウスに住む人は、その先輩くらいだ。まずは、みんなが集う台所兼ダイニングで一服させ

てもらい、それから部屋に移動してなんやかんや話した。先輩にとっての今の‘家’はこのシェアハウスだが、秘密基地のような‘アジト’のようにも思うと言われた。他の住人とも話していると、‘部屋’という境界もあると言う。‘確かにそうだな’と思った。実家の二階には部屋が三つあり、その一つ一つは姉二人と私の部屋になっていた。姉の部屋に入る時、姉が部屋にいればノックをして入った。姉が部屋にいない時は、なぜかこっそり、なんだか申し訳ない気持ちになりながら部屋に入った。

‘家’は、台所やダイニング、リビング、寝室、各々の部屋、トイレ、お風呂などによって構成されることが多い(ワンルームマンションとかは少し違う)。その一つ一つには、敷居や扉という目に見える境界があり、目に見えない境界もある。シェアハウスのことも考えると、そこに集うのは血縁者や配偶者だけでなく、もともとは他人だった人のこともある。そんなことを考えると「‘家族’って何なんだ？」という疑問も浮かんでくる。なんだかなぁ～な感じになる。

●アシナガバチ詐欺●

「そこにハチがおったやろぉ？あれが怖くて、そこの扉も開けるんが怖くてな～。新聞取るのもゴミ捨てるのも大変やわぁ…」と、おばあちゃんが言った。『確かにそうですね～。ちょっと怖いですね…』と、私は返した。確かに、私も家の中に入る時、ハチを気にしながら少し急いで家の中に入った。ほんの少しの間が空いた後「あれ、どーにかしてくれへんかぁ？」と、よくわからないことをおばあちゃんが言った。‘ん？’と思いながら『…えっ？』と返した。「あのハチは大人しいしなぁ。刺してくることなんかないし、そこの殺虫剤でプシューってやってくれへんか？」『いやいやいやいぁ……無理ですよ、そんなん、、、、』「せやけど、怖くて出るのも大変なんえぇ…刺されたら大変やろ？？」『あっ、えっ、そ、そうですけど…』と、少し心が揺らいだ。‘でも’と思う。『大人しくても攻撃したら絶対怒りますって！』「んなことあらへん。怒る前にやっつけたら良いやん♪」茶目っ気のある笑顔で言われても、私は騙されない。『この前、大工さんに来てもらってハチの巣を退治してもらったって言ってましたやんっ。大工さんにまたお願いしたら良いじゃないですか？ね？？』「んなハチごときで大工さんなんて呼んでられへんわぁ。大丈夫、大人しいから」『ぇ、でも……』「私もなぁ、昔アシナガバチに刺されたことあってなぁ…すごく痛かったんえぇ。やから、やっつけて欲しいねん」『ほら！それ、大人しくても刺してくるってことですやん！？刺されたら痛いってことですやん！？』「大丈夫だいじょーぶ、大人しいから！！」と。こんなやり取りを数分間続けて私は悟った。‘たぶんやっつけるまで帰してもらえない…’と。結局、殺虫剤片手に大声をあげ、叫びながらアシナガバチを退治した。おばあちゃんが言うように、(とりあえず)大丈夫だった。おばあちゃんは、そんな私を見て大爆笑していた。そして、「すごいすご

い！ありがとうなぁ」と言ってくれた。鼻息荒く私は『…ど、どういたしまして」と答えた。

これは、私が訪問リハビリに伺ったおばあちゃんの‘家’で起きた出来事だった。診療所に帰った後、やや興奮気味の私は勇敢にもハチを退治した伝説を先輩に話した。先輩は「うわっ、あっぶない、、、アシナガバチってやばいやつじゃなかったっけ！？」と言った。前代未聞の‘アシナガバチ、大丈夫だいじょーぶ詐欺’にあったのは、私くらいだと思う。

さて、みなさんお分かりだと思うが、ハチ退治は理学療法士の役割でも、その専門性が発揮できる分野でもなんでもない。その‘家’の主であるおばあちゃんは、理学療法士ではなく、‘この’奥野景子にハチ退治を依頼した。そして、その‘家’に招かれた私は、理学療法士としてではなく、‘私’としてハチを退治した。私は、そのおばあちゃんのことを‘患者さん’ではなく、‘〇〇さん’だと思っている。

このエピソードには、‘家’だけでなく様々なキーワードが隠れているように思う。‘専門’‘専門性’‘場所’‘関係性’‘役割’‘リハビリテーション’‘訪問リハビリ’‘訪問’などなど。そして‘アシナガバチ退治’は、何を象徴しているのか？他にどんなキーワードが隠れているのか…。なんだかなぁ～な感じになる。

●宅急便の時間指定●

仕事を終えて‘家’に帰るとポストに宅急便の不在票が入っていることがある。‘そー言えば、お母さんがなんか送ってくれるって言ってたなぁ’とか‘おっ、やっと本が届いた’と思ったりする。‘部屋’に入り(よく考えると、マンションでも‘家’と‘部屋’って使い分けているなと思う)、自分の予定を頭のなかや手帳を見ながら確認し、‘この日のこの時間やったら大丈夫やな’と再配送の手配を電話で行なう。そして、再配送の当日。時間を気にしながら仕事を切り上げ、帰路に着く。再配送の始めの時間(だいたい配送時間には、△時～◇時とか幅が持たされている)に間に合えば良いが、少し遅れた時やギリギリにマンションの入り口に辿り着いた時は‘まだ来てないやんな？’‘エレベーターに乗ってる間に来ませんよーに’と思いながら‘部屋’に向かう。再配送の終わりの時間が近づいてもチャイムが鳴らない時は‘トイレに行ってる間に来ませんよーに’と少し急いでトイレに入る。自分の‘家’なのにそわそわしてしまう。

訪問させてもらう人の中には「そんなに早く来てもらったら、準備も間に合わへんし…」と少し遅めの時間を希望する人もいれば「待ってるのもくたびれるし、出来たら早めに来て欲しいです」と朝一の訪問を希望する人もいる。「お昼食べたらゆっくりしたいし、夕方が良いです」とか「ずっと家おるし、いつでも良いよ」とかもある。中には、予定していた時間と少しでもずれると怒る人もいる。たぶん、それは単に‘時間に厳しい人’という訳ではない。医師が来る訪問診療の場合、お昼ご飯の時間にかかりそうな時は

何も食べずに待っている人やトイレも我慢して待つ人もいると聞いたこともある。

どちらも‘家’に人が来るという点では同じである。「ただいま」と言い「おかえり」と言ってもらえる‘家’があり、「おじゃまします」「おじゃましました」と言い「どうぞ」「よく来たね」と言ってもらえる‘家’がある。そこが誰の‘家’なのかによって、そこでの振る舞いは変わってくる。同じ人たちでもどこで会うのかによって、互いの関係性は変わってくる。なんだかなぁ～な感じになる。

～　終わりに　～

‘家’に関するエピソードは、書き始めたらなかなか止まらない。思いのほか、長いマガジンになってしまった。もやもやの答えは出ていないが、私の中のもやもやの少しは書き出せたような気がしています。

次回は、今回書いたことを踏まえて「リハビリテーションが行なわれる場」について書いてみようと思います。もし、他のもやもやが邪魔した場合は、それについて書くかもしれません。その時は‘なかなか辿り着かないなぁ～’と気長にお付き合いいただければ幸いです。

では、最後に。「あなたの‘家’はどこですか？」「あなたにとって‘家’とは何ですか？」

多文化共生と心理臨床

②夏休みと子どもたち

ガヴィニオ　重利子

毎年、夏休みには帰郷する。今年もおよそ１ヶ月半にわたって日本で休暇を過ごした。こちらの学校では９月が新学期となるため、夏休みは年度休みでもあり、７月初めから８月いっぱいという長い夏季休暇が存在する。学年をまたぐ（担任やクラスも変わる）という行政上の理由も手伝ってか、夏休みの宿題などは全く存在しない。塾という場所も存在せず、習い事も基本的に学校と同じカレンダー（夏休み中は休み）で提供されているこの国では、子ども達は、やるべきことも行くべき場所も与えられない２ヶ月間を過ごすことになる。

一方、帰郷して気付かされるのは日本の親戚の子ども達や友人たちが、それはもうとても忙しそうに「夏休み」を過ごしていることだった。通う学習塾にはお盆休みさえないこと、スポーツ教室や部活動も毎日朝から夕方まで（ときには夜まで）びっしりとつまっているといった話を頻繁に聞かされた。加えて、夏休みは年々短くなっており、宿題はそれに反比例するように増えていっているというのが多くの親御さんの感触として聞かれた。サラリーマン生活の苦労を聞いているかのような錯覚にさえ陥るこれらの話に、私は疑問を感じざるをえない心持ちになった。忙殺とも言えそうなこれらの経験は、子ども達にどのような幼少期を残すことになるのだろう・・・。

英国の精神分析家である Adam Philips は、その著書 *On Kissing tickling and being bored* の中で、退屈（Boredom）の重要性について書いている。彼の治療した１１歳の男児は、毎日を多くの活動で埋め尽くし忙しく過ごしていた。セラピーでは、彼にとって退屈するとはどういうことなのかということが扱われていき、「忙しくすることは good（良い子）であろうとすることであり、退屈することは彼にとって自分の存在がわからなくなる恐怖体験である」ということが理解されていくことになる。Maria Popova は、本著の書評（下記アドレス参照）の中で、退屈するということは期待や予定という未来から自らを切り離すことであり、今ここでの自分がどうなのかということに注意を向ける行為であると書いて

いて、その難しさから、現代においていかに退屈が嫌われるようになったかを論じている。(https://www.brainpickings.org/2014/06/19/adam-phillips-boredom/)

このような傾向は、子どもだけでなく私たち大人の生き方にもそのまま通ずることであり、深く考えさせられる。

また Philips は同書の中で、退屈する力は「何が待っているか分からない中で待つことに持ちこたえられるようになる力」であり、幼少期にそれを育むことはその後の豊かな人生にとってかけがえのないことであると書いている。

日本でも共働きの核家族生活がスタンダードとなり、幼い子どもを一人で家に置いておくわけにいかない両親がさまざまなアクティビティーに参加させることで子どもの安全と生活を確保しようとする「背に腹かえられぬ」事情も、この子どもの忙しさの背景には大きく存在しているのを感じる。同時に、それはまさに忙しさの連鎖のようでもあり、親子そして家族にとっての「今ここ」が、子ども達の成長の軌跡が、素通りされていってしまう危険を秘めているようにも感じられる。

じゃあどうすれば良いのさ！とお叱りを受けてしまいそうだけれど。この複雑な夏の思いを、ここに記させてください。

父の看取りと、
私への最期の宿題
「今から、ここから」2

ソーシャル
ワーカー

馬渡　徳子

前回、初回をお読み戴きました方々から、「本当にお父様のことを尊敬し、大好きだったのですね。でないと、こんなに熱く動けない。ご両親は、お幸せですね。」「きれいごとばかりでなくて、いつものように、もっと毒を吐けば。(笑)」等の反応をいただきました。 書いてみて、気付いた事なのですが、正直、日本に殆どいなかった父でしたので、かなり美化していたかもしれません。だからこそ、どうか関わる人々に、「父のプライドを傷つけないで」という思いに駆られていたのだと思います。また、仕事柄なのでしょう。「患者本人が、支援者に、暮らしぶりの一部だけを観て一面的な見方をされたり、異なる病名と診断されて、将来に不利益を被ることが本当に許せない、と感じて積極的に動くタイプなのだ」と、自分をふりかえることもできました。

さて、時は、2011 年 3 月。父にとっては初孫にあたる、私の娘の結婚式が、あと三ヶ月と迫っていました。父は、東日本大震災の直後から、「お役に立ちたい」という気持ちが逸るからか、自宅に飾ってある賞状を見ながら、「このように、政府から特命を受けて安全監視行動の任務に就いている。」と、ヘルメットを被って、高額な望遠鏡も購入し、毎日片道 7 ㌔はある米軍基地に、自転車で通うようになりました。その後も、「オスプレイ」「テポドン」などの旬のニュースに瞬時に反応して、約三年間真面目に(笑)通い続けました。

「これは、専門医の受診が必要な時期」と感じ、地域包括支援センターの保健師さんも同じ見立てをされていました。しかし、

地元に専門医がおりませんでした。隣の市に、有名な医師がおられるとの情報を戴き、これまた「認知症の人と家族の会」の石川支部代表者の後押しを戴き、出逢うことができました。先生は、地域に根ざした精力的な活動を長年されていました。

父には、自覚症状がありませんので、「どのような方法で診察につなげるか」、これが先ずはかなりハードルの高い課題でした。先生には、父の生活史の特徴や、家族の状況をお伝えするお手紙をお渡ししていました。そこで、以下のような「場面設定」を実行しました。そもそも診察には、「配偶者と子ども全員が立ち会うように」助言戴いておりましたので、①発達障害のある孫の子育てに疲れて、うつ状態になっている妻の診察と検査。→②その結果を、配偶者である父と子どもたちに、支援を訴える目的で結果報告の面接。→③配偶者の状況把握が必要なので、配偶者である父にも、検査をきっちりと受けていただく。→④二人の状況についての医師よりの結果報告と、今後についての相談。

母には、「診察予約日の一週間前ぐらいから、ちょっと大げさに情緒不安定になってね。女優になったつもりでね。」と伝え、大阪にいる弟と前日に帰省し、「お父さん、お母さんがうつで大変なんだって。心配で帰ってきたよ。悪くなる前に、一緒に病院に連れて行こう。」と誘いました。「なんで、わしが・・・」とぶつぶつ申しておりましたが、当日の朝になると、すんなりと「わしが行かんと話にならんやろう!」と、すすんで車に乗り、一同ホッとしました。

母も、「意図して演技すると、うつの役なのに、予想外にストレス解消になるわ。お父さんが、心配そうに自分を見つめて『大丈夫か?』と声をかけてくれ、そんなことは、もうずっとなかったので、嬉しくもあった。けれど、『自分はいつもこんな顔をして、心配そうに眉間に皺を寄せてお父さんを見ていたのかなと。人に心配そうにされることって、そんなに気持ちの良いものではないな』とも感じた。」とも申しておりました。

この、『母の後半の言葉』は、後に、「実は、娘である私自身へのメッセージでもある」ことにも気付きました。「私自身が、きっと無意識に、両親や現家族、そして仕事仲間や患者さん・利用者さんに向けている態度でもあるな」と反省し、母の率直な感想に、心より感謝しております。「相互援助関係の構築」というソーシャルワークの価値を、正に身をもって体験した瞬間でした。

かくして、診察が始まりました。通された部屋は、「会議室のような大きな診察室」で、大きな楕円形のテーブルや電子ピアノ、楽器、壁や窓に向かった机、移動できるパソコン、心理テストの道具などもありました。「どこでも、お好きなところにおかけください」と案内され、私の指示で(ここ、大笑。恐るべし、システム論)、めいめいが腰掛けました。

「描画法」という家族療法の面接技法を、面接者として実施する側ではなく、初めて被験者として体験しました。一番最初に「自分の首が、沢山の人や記号?に鎖で繋がれている絵」を描いた父に、本当に愕然としました。「私を先頭とする家族や周囲

の人々が、きっと父を置いてきぼりにして、急に前のめりに果敢に関わるようになり、やいのやいのと、煩かったんだろうな。」と素直に気付くことができました。

「今日いらしたあなたのご家族を、ご紹介下さい。」と先生に指示された父は、母と私と障がいのある孫しか、続柄と名前を正確に答えられませんでした。しんとした硬い雰囲気を気遣って、私が、冗談ぽく「ほら。ちゃんと関わらんと遺産相続のときに損するげんよ。」と二人の弟に向けて言うと、先生は、「いやいや、お二人は『お父様にとっては、煩いと感じないキーマン』なのかもしれないですね。ですから、息子であることを活かして、物事を動かす場面がきた時に、ご活躍いただきましょう。これから沢山ありますよ。例えばですが、『石鹸で洗わない。風呂に入らなくて困る』とのことでしたが、外国生活が長いお父さんに、シャワー以外の入浴は当然困難。だからと直ぐにデイサービスではなくて、『息子さんがスーパー銭湯にお連れしては如何』でしょうか。是非、背中を流して差し上げて下さい。最初のちょっとした動作を手伝うだけで、その後の動作が不思議とできるものです。残念ですが、混浴ではないので、息子さんの特権です。それから、お父さんは外国生活が長く、英語が堪能でいらっしゃる。私の診察の時には病気の奥さんのプライドを守るために、これからは英語で会話しましょう。厳しく教えてくださいね。」とご提案戴きました。「ザッツライト!」と父は、即答し、自ら手を差し出し、先生と握手を交わしていました。いつの間にか、妻ではなく自分の事に診察の話題が、すっかりすり変わっていることにも気付かず、なかなかのご機嫌さんでした。先生ご提案の『英語での診察』は、母ではなく、主として「父のプライドを守るため」だったのです。

その後、残念ながら先生の転勤にて、お別れをするまで、ずっと「英語での診察と、弟たちとのスーパー銭湯通い」は続きました。その中で、先生より、ご提案いただいた「外国生活が長いことを上手く活かしたご提案」をご紹介しましょう。

① 移動手段には、タクシーを使うように誘導する。「英語表記した名刺」に、複数の過去役職や自宅住所・電話も表記し、1000 枚印刷しました。

父の日に、「素敵な名刺入れ」に添えて手渡す。タクシーに乗ったら、それを渡して、自宅まで送迎して戴き、支払いは、月末まとめて支払うようにしました。

会社勤めの頃と同じようにしたので、上手くいって、バスに乗り終点まで行って保護されることがなくなりました。

② 父は外国生活が長いので、同世代の高齢者よりは、カードを使い慣れています。財布から、お金のやり取りができにくくなってからは、お札ばかり手渡すので、財布に小銭が貯まりにたまり、とうとう小銭を「チップ」と言っては、銭形平次か鼠小僧のように、ばら撒くようになりました。銀行員をしている一番下の弟の提案で、父のプライドと財産を守るために、「成年後見制度」の利用を急いで勧め、「一月の利用限度額を定めて、父専用のデビットカードを作る」ことにしました。この時に、参

考にしたのが、石川県で共に家族面接を学ぶ会の事務局をしている友人である寺本紀子さんから戴いた「失敗する権利の保障」という言葉です。そうだ、父と母が作ってきた財産。生活が破綻しない範囲で、上手く失敗をする権利もあるはず。弟が「お母さん、一月に父が失敗しても許せる限度額を決めてもらいたい。」と言うと、母は、最初、「一万円」と、すごくケチなことを言うので、「せめて昔の小遣いぐらいは」と、弟と二人で文句を言うと、なんと三倍になりました。笑

③　外国生活の長い父には、赴任地の決まり事で、常に女性のハウスキーパーさんの存在がありました。当時は、そういう仕組みで、発展途上国への社会貢献を行っていたのです。ですから、どうも女性とのつきあい場面の多くが、「主従関係」にあり、得意ではなかったようです。赴任地の特徴に気付かれた先生から、「デイサービスの見学の際には、お迎え担当のデイサービスの職員さんには、茶髪のお兄さんにカラーコンタクトを入れて戴いてはどうか。以前にそれで上手くいった方がいますよ。ケアの担当は、男性の方にお願いできたら、上手くいくかもしれませんね。」と、教えていただきました。実際の場面では、ケアマネジャーさんが「外国から研修に来ているので、お兄さんが困ったときの英語の通訳のボランティアに来て欲しい」と誘って下さいました。いよいよ見学の日は、「デイサービスのクリスマス会」を選び、私がトナカイ、父にはサンタクロースの格好をしてもらい、華々しくデイサービスデビューをしました。この日、サプライズで、バトンを渡された次の主治医の先生、ケアマネジャーさん、訪問看護師さんもいらして下さり、ケアマネジャーさんの計らいで記念写真を撮り、その後ずっと父のベットの枕元と私の家のリビングに飾らせて戴きました。デイサービスの方は、英語ゲームや脳トレーニング、父が収集していた懐かしい外国映画音楽の歌を使ったクイズなどにも取り組んで下さり、送迎、排泄、更衣、入浴のケアは、緩和ケア病棟への入院という転帰まで、ずっと男性スタッフで通して下さいました。本当に心から感謝致しております。

先生に、私は伺ったことがあります。「このようなお知恵は、どういう風に思いつかれたのでしょう?」すると、先生はきっぱりと「それは、全て患者さん・ご家族、認知症の人と家族の会で、教えていただいたことです。」とおっしゃいました。先生は、認知症の人と家族の会の会員さんと一緒に、温泉旅行にも行っておられるとのことでした。数々のご提案は、正に、当事者自身の実体験と、当事者と伴に歩まれたからこそ蓄えられた、逞しい自慢の「知恵袋」だったのです。

これらのお知恵は、その都度、私の仕事でも沢山活かさせて戴いております。

次回は、2015 年秋に、「父に末期癌が見つかった」ことで、新たに二人の素敵な先生につながり、在宅療養支援チームの輪が拡がり、どのような療養生活を送っていったのかについて、ご報告申し上げます。ここでは、「チーム自治医科大学 OB」が、大活躍下さいます。

東成区の昭和・ホイラン

絵と文：柳たかを
（マンガ家）

ぼくがものごころつく昭和 30 年頃、大阪の路地裏は土道や空き地がまだいたるところに残っていて、初夏の夕には、小川のそばでチカチカ点滅するホタルもよく見たものです。

ぼくは 4 人兄弟で歳の離れた 2 人の兄（昭和 15 年と 17 年生まれ）、3 歳上の姉がいます。年齢差があるので兄達に遊んでもらった記憶はほとんどないのですが、戦中生まれの兄達は大阪空襲を幼時に体験しています。幸い爆撃目標となる工場地でなかったためか、路地も兄達も難を逃れました。



戦後間もない頃の子供遊びは、物不足のせいもありビー玉遊びやベーゴマ遊びでも負ければ自分の持ち物を取られるのが当たり前の真剣勝負だったらしい。

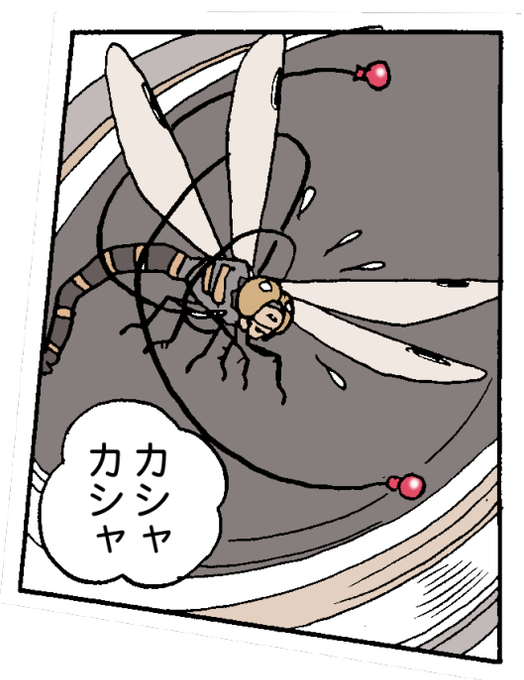
熟練した子供に大人が持ち玉をあらかた取られたり、その逆もあった。

市内に自然がまだ残っていた時代で、夏になるとオニヤンマなどトンボも飛び回っていました。

特にトンボの王さまオニヤンマは、大柄な身体と威風堂々の飛び方でトンボの王さまとして憧れでした。

トンボを捕る方法にはいくつかやり方があり、トンボ釣りという捕り方があります。

80 センチから 120 センチぐらいの綿糸の両端にセロハン紙で小石か魚釣りで使う小さな 鉛のオモリを包みくくりつけます。夏の夕方、低空を悠然と飛んでくるオニヤンマの鼻先にゆっくり回転させながら放り上げる。上手く投げるとヤンマは回転するオモリをエサの虫か雌と勘違いするのか飛びついてくるそうです。



その瞬間、別のオモリと糸がオニヤンマの身体にグルグル巻きに絡みつき一緒に空から落ちてくる。

「カシャカシャッ…」

オニヤンマの習性を利用した捕獲方法で、兄からその話を聞きながら鮎の友釣りを連想しました。かつて豊かな自然を相手にしたこんな遊び方があったことを現代の若い人々に知ってほしいと思います。


東成区の昭和
ホイラン
昔遊び
作
兄ちゃんどや？
ヨッしゃんおるおる


東成区の昭和ホイラン
昔遊び
柳たかよ作
それスルメの足やんか
スルメはザリガニの好物や
わいも好物や
ほれごちそうやで
ぜいたくなザリガニやな
ほーれ釣れたで
スルメはなしたら釣られんですむのに


東成区の昭和
ホイラン
昔遊び
ホリたかお作
兄ちゃんヤンマや
あがろはよあがろ

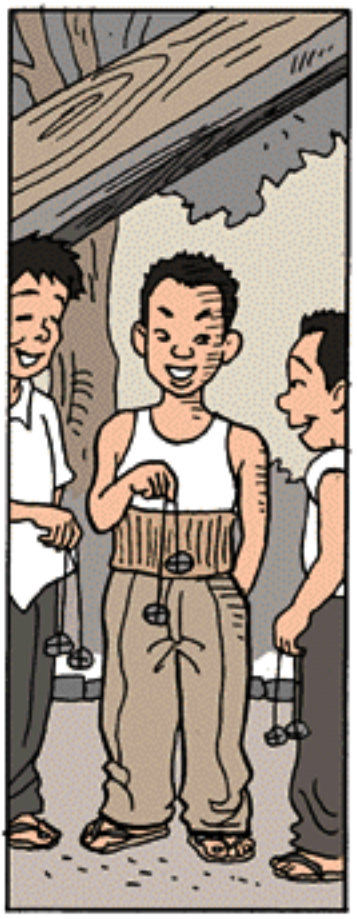
東成区の昭和ホイラン 昔遊び

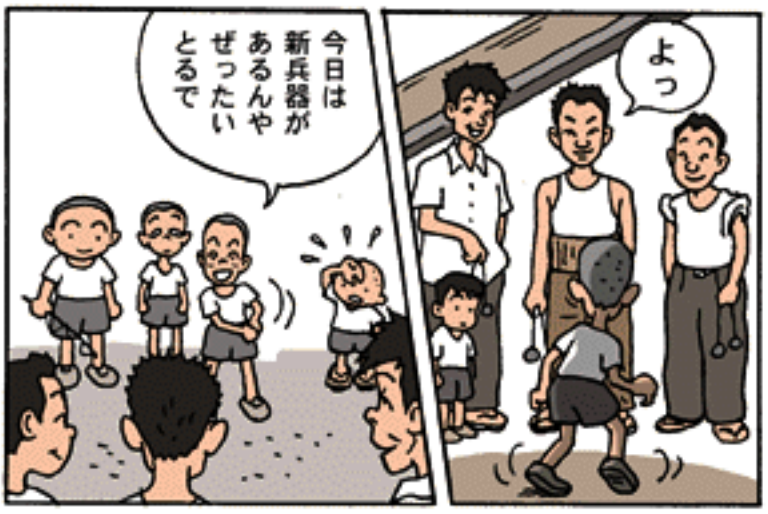
柳たかお 作












東成区の昭和ホイラン
昔遊び
ホイ・たかお作
来た
清水学園の屋根の上
第一発見者やじゃますなや
わかってるでがんばれや
ダッ

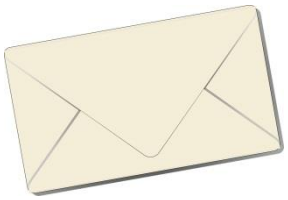

ホーイー
ラァーン
シュッ!
ヒュンヒュン
あー
とどかん
おしい


東成区の昭和ホイラン
昔遊び
柳たかお作
来たあそこ
よーしこんどはワイの番や
キリキリ
ビュッ
そりゃあ
ポトッ
うへー
力がはいりすぎや
ちぇっ

書簡型連載　１　出会いとご縁



お坊さんとケアマネさん





竹中　尚文　様

差出人　木村　晃子

はじめに

本連載は、平成２７年１２月発行の対人援助学マガジン、大谷編集員の編集後記を読んだ私（木村）が、リレー連載という言葉から、書簡型連載ができないものか？と考え、大谷編集員に相談したのが始まりでした。手紙を差し出す相手は、同じくマガジンで連載をされている竹中尚文さんでした。北海道と兵庫県という全く異なる地で人生を歩んでいる私と竹中さんは、これまで接点などはありませんでした。あるとすれば、団編集長を共通に知っている、ということ位でした。では、何故？

お坊さんとケアマネさん！訪問仕事は、似ている？！

私の仕事は、高齢者支援の分野、介護保険制度におけるケアマネジャーです。業務の主体は相談援助です。介護が必要になった人の暮らしを支えるために、相談に応じたり、手立てを考えたり、地域の関係機関や住民の方々とのネットワークを構築するなどしながら、援助対象者を支える「チーム」を作って行きます。ケアマネジャー（以下ケアマネ）は、そのような援助のために、最低、月に一度は援助対象者の自宅に訪問し面談、状況を把握していく、という業務上のルールがあります。毎月毎月、高齢者の方に、変化があってもなくても訪問をします。支援期間が長くなると、かなりその家庭の事情に詳しくなっていきます。訪問日を調整するにあたっては、「その日はお坊さんが来るからダメ。○時以降にして。」などと言われることもあります。ですから、訪問先のご家族の月命日を確認し、お坊さんの訪問と重ならないように調整することもあります。月に１回お坊さんが来る。月に１回ケアマネが来る。私たちケアマネは訪問すると、高齢者の方から、「そろそろお迎えにきてもらいたいのだけど・・・」などど、命の終わりに関する話題が出されることが珍しくありません。「死」とう話題を避けることが出来ない仕事でもあります。なんだか、お

坊さんとケアマネの仕事は、似ているかもしれない？と感じます。

エピソード　仏壇を破壊する！

ある時、様々な事情から、自宅にある仏壇を処分しなければならないという人の話しを聞いたことがあります。事情を伺うと、その人が仏壇を所有していることの意義を感じられないのも仕方ないことかもしれない、と共感してしまいました。どのように処分したらよいか、が相談のテーマになりました。よく聞く「お焚き上げ」などという方法も、ある程度経済的な負担が伴います。経済状況が厳しいご家庭でしたので、その方法は採用されませんでした。では、仏壇を壊して、自治体の指定のゴミ分別に従って、ゴミ袋に入れて処分しよう、という話になりました。「たたりなど、悪いことは起きないでしょうか？」と心配の言葉もありました。キリスト教を信仰している私は、「たたり」などは全く考えることはありませんでした。結局、仏壇を壊すと言っても、それなりの力が必要で、様々な道具を使って、仏壇を壊して処分したのです。このエピソードについて、「もしも、お坊さんなら、何というのだろう？やはり罰当たりなのだろうか。」と考えたこともありました。そして、いつか同じマガジンを連載している竹中さんとお話する機会があったら面白いだろうと考えた最初でした。もう２、３年前の出来事です。

出会い

書簡型連載をしてみたい、ということを大谷編集員に相談したところ、私の思いは編集部に伝えられました。編集部の許可が出た後に、大谷編集員が、竹中さんへ私の希望を伝えてくださいました。竹中さんから書簡型連載について、お受けしていただける旨のお返事がきました。いつからスタートするにしても、一度会ってから・・・ということになり、この件に関して、竹中さんが兵庫県から北海道に足を運んでくださることになりました。６月中旬、初夏の北海道でお迎えし、一日中、様々なお話をしました。連載に向けた一歩が具体的になった善き日でした。

往復書簡　１　　「生と死」　見えぬものを見る・伝える

竹中　尚文さま

拝啓

八月に入り、ようやく遅すぎる夏がやってきた感じがした初旬でしたが、お盆を迎え、窓から侵入してくる風は、肌にささるようになりました。もう秋を感じてしまいます。短い北海道の夏です。

竹中さんと北海道でお会いしてから、もう二ヶ月になろうとしています。代わり映えのない表現になりますが、月日の経つのは早いものです。

この度の原稿を意識し始めた７月、この書簡型連載のテーマを考えていました。お坊さんとケアマネ仕事の共通点を探して書いてみようと思いました。すると、真っ先に浮かんだテーマが、「死」でした。私の仕事は、高齢者支援の現場ですから、どうしても人の「死」と向き合うことが多くなります。支援の終結は、入院や「死」ということが多いのです。入院の先には当然「死」が待っていたりするのです。支援対象者の年齢を考えると、それは珍しいことではありません。けれども、最近は、「死」を語る時の文脈が変化してきています。人は、どこで死ぬのか？ということを考えなくてはならない時代になりました。

かつては、人が老い、人生の最期の時を迎える場所は、自宅、そして家族の中で、ということだったと思います。私が子どもの頃は、自宅で人が亡くなる（看取る）というのは、珍しくなっていた時期でした。大抵、一度は病院に入院して、そこで最期を迎えるという形が主流になっていました。今でも、高齢者を在宅介護している子世代の方々は、「何かあれば病院のお世話に・・・」ということを話されます。けれども、私たち専門職からは、「もう病院で死ねる時代ではない。」ということを話さなくてはならないのです。忌み嫌われる話題です。けれども、ケアマネは「死」の話しをしているのではなく、人として避けて通ることのできない「死」について、どのように向き合い生きていくのか、という、「生きる」ことを話題としているのです。

私のような若輩者が、人生の先輩方に対して、「生きる」を問うなど、１００年早いことを仕事にしています。でも、１００年たったら、私自身が生きているかわからないので、若輩ながらも、この「生と死」の話題を扱いながら日々仕事をしているのです。

人体（生物学的な命として）の衰えを自覚してきた時に、どのような最期を迎えたいかは、本人だけではなく、関わる周辺の人たちの意向が強く影響します。例え本人が、「何も治療は望まない。」と言ったとしても、周りの家族がそれに同意するとは限らないのです。大抵は、「死」の話題は避けているものですから、「さて、どうしよう。」という段階で本人が意思表示できることは少ないのです。

最近では、終末期の自分の希望を事前に記しておくことで、望まない治療をさけること、人としての尊厳ある最期を迎えられるための準備をしておくことなど勧められています。とは言っても、なかなか浸透しているものではありません。人が、自分の「死」を、或いは家族の「死」を考え準備していくためには、自分とつながりのある様々な「縁」を知っ

ておくことが必要かもしれないと感じます。

お坊さんのお仕事は、亡くなった誰かをご縁としながら、家庭に関わることが多いのではないでしょうか。今を生きているその家族に、どのように、「生や死」を伝えているのですか？または、どのように、「生や死」の話題を取り扱うのでしょうか。

詩人谷川俊太郎さんの著書「ひとりぐらし」の中で、谷川さんは、「死生観」よりも、「死生術」もしくは「死生技」を持ちたい、と記されていました。どう死んでいくかの技術のことだそうです。当然ですが、人は死ぬ瞬間まで生きる。生きている間は、様々なしがらみの中にいるということ。そう考えると、やはり、自分だけの意思で死ねるわけではないことを想像します。そもそも、生きていること自体が、様々な関係性の中で成り立っている訳ですし、「生きている。」などと能動的な表現よりも、「生かされている。」と言った方が現実的なのかもしれません。

とりとめなくなってしまいました。話題は「死」でした。始まりの話題が「死」だなんて、この手紙をのぞき見している読者の方は、どのようにお感じになるのでしょうね。

いつの間にか、外は台風接近の影響で、大雨になっています。あまり経験のない大雨。生かされていることを感じながら・・・

敬具

木村　晃子

2016年8月24日

木村晃子さま

竹中尚文

拝復

北海道では、秋の風が吹き始めようとしているのですか。連続台風の被害も心配です。関西では、まだまだ暑い、というより熱い日々が続きます。私が暮らすところは田園地帯です。まだ黄色くなれない薄緑色の稲の田圃、深い緑色の山、青い空、白い雲、私は夏のこの景色が好きです。

今回のテーマは「死」ですか。いきなり50回忌の法事の話ですが、クリスチャンの木村さんには年忌の法事と言っても、遠い話だろうと思います。仏教徒の方でも「50回忌の法事なんて、そんな昔の事は知らない」と言われることもあります。50回忌というと49年前です。49年前、私は11歳でした。50回忌の法事を勤めながら、ご当人を覚えていることも多いです。当時、亡くなる方の中心世代が60代だったように思います。少年だった私には、60代は末期が間近の世代に見えました。当時は、脳溢血や中風で寝たきりの老人達があちらこちらの家で見られたように思います。私は、今年60歳になりました。まだ死ぬ準備ができていません。

「もう病院で死ねる時代ではない」という言葉にはハッとしました。かつて病院で末期を迎える時代に入った頃、「自宅で死にたい」という人達がずいぶんといたように思います。今、自宅で家族に看取られて臨終をむかえると、直ぐにはお葬式と言うことになりません。死亡診断書が出ないのです。死亡診断書がなければ、葬儀屋さんも坊さんも遺体に触れることはできません。死亡診断書を書けるのはお医者さんです。家族に看取られて安らかに息を引き取った場合、検死官による検視を待たねばなりません。その間、看取った家族は聴取を受けることになるのが通常です。

お葬式といっても最近はずいぶんといろんな形があるようです。宗教家の介在しないことも増えてきました。しかし、葬儀屋さんが介在しないことはありません。50年ほど前は、私が育ったところでは、村人が薪を準備し、棺をその上に置き、火葬したものでした。そこには一寸した技もあったのですが、伝承されていません。湯潅もできなくなりました。近年、経済的事情で葬儀費用をかけられないケースで、私が湯潅をしたこともあります。私たち夫婦がよくお世話になった老僧のお葬式では、私の妻が湯潅をしていました。お世話になった感謝の気持ちです。湯潅はさておき、まれに「アレッ？」と思うことがあります。家族が遺体に触れられないことがあります。生きている時は手を握ったりしていたのに、死んでしまうと触れるのを避ける人たちがいることがあります。「死」が明確に分かつのです。まさしくDEADLINEです。

お葬式とその後の七日参りに関わると、この家族は故人をこんなふうに思っていたのかと感じることがあります。また、故人はこんな人だったのかと感じたり、今はきっとこんなふうに思っているのかなあと想像したりします。つまり、故人と遺族の関係を想像でき

ます。故人は臨終の時にこの人たちのことを思っただろう、と想像します。臨終に至ってまだ自分のことしか考えなかったかもしれない人もいます。そんな場合は、お葬式も七日参りも単なる儀式になってしまいます。

私は「生と死」の関係をこのようにとらえています。生者と生者の関係性が「死」によって断たれるのではないと思います。私が教えたり説明をしたりすることはありません。死者を中心に生者が繋がっていると思える場に、私が居あわせるのです。そして、私が教わったのです。確かに人間は死ぬまで生きるのですが、生きることは死によって終わるのでしょうか。私たちが生きるのは他者との関係性によって生かされていると思います。独力で生きることなど至難の業です。他者によって支えられて生きています。その関係性は死によって断たれる訳ではないと思います。死者に支えられた人生をいくつも見せて頂きました。私はそこにいるだけの坊さんです。

今月はお盆の月でした。忙しいお盆でした。昨年のお盆参りの途中、生まれて初めて稲の開花を見ました。感動的でした。ひとりで見入ってしまいました。写真を撮ることもなく、しばらく静かに見ていました。そして、また次の家に走りました。待たれているところに訪ねて行くのはありがたいことです。

合掌

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

第7巻第二号（通巻26号）をお届けする。新しい顔ぶれ、創刊時からの息長い連載者、20代から間もなく70才までと、多様さに充ちた執筆陣は、対人援助という概念を幅広くとらえているからだ。

事情でパスの方、いただいたモノがマガジンの枠内で対応できず掲載できなかった方もあるが、とにかく継続は力なりで、又一冊だ。

連載中の複数の方達が、お店で言うならリニューアルオープンを摸索されている。かくいう私も、「蟷螂の斧」とタイトルした大枠の中で、（1）続・家族理解入門（2）トークライヴ2001（3）次の一歩　と並行形式を採用している。連載において、どれも未完結のまま、新しいモノが開始されるなど許されなさそうだが、こんな書き方もこのマガジンならではである。

だが、考えていただきたい。人生はそういうものではないか？一つが終わって、次のことが始まってきたか？前のことが終わってから、新しい何かが生まれたか？

つまり、そういうことである。このマガジンは、通常の雑誌概念寄りではなく、人生寄りなのだ。煩雑、複雑かもしれない。しかし、新しい。

この新しさも又、対人援助学マガジンだからこそ許される、豊かさの一端だと考えるのだが、いかがなものだろう。

編集員（チバ　アキオ）

山形県酒田市の土門拳記念館に足を運んだ。私はオリンパスのTG3というタフネスカメラをゲットしてから、普段から持ち歩くことが増えた。この機種に関連のある会社にゆかりのある小学校の同級生、橋本総子さんにカメラの楽しみ方を教えてもらった。私の連載も数回前まで、橋本さんの作品を提供していただいていた。数ある橋本さんの作品を見て、掲載をお願いする写真を見つけるなかで、いろんなことをさらに自然と知るようになったように思う。それから写真を撮るのが面白くなった。橋本さんにこの場を借りて、心から御礼申し上げます。

土門拳記念館は日本で初めての写真家の記念館ときいていた。写真家、土門拳に関する事前の知識はほとんどなく記念館を訪れた。ここで不思議な経験をした。写真は常に社会的弱者を映し出すのである。それが被写体を浮浪児、決して豊かとはいえない人々の日常の場面、ヒロシマ・ナガサキの被爆者としたときはもちろん、被写体が仏像や文楽にまつわるものになっても変わらなかったのである。仏像も文楽も多くの職人の手によってつくりあげられている。その歴史をかえりみれば、決して豊かだったとは言えない（ストイックも含めて）職人、多くは名もない職人を感じずにはいられなかった。仏像を彫るにしても、その道具がいるしそれを作る人がいる。溶かして鉄から形成し、刃を打つ。それをモノによっては1000年以上前の職人たちが可能にさせたのである。彼らの仕事、つまり「技」を写すことで、彼らが現代に写しだされているのである。それを可能にしたのは土門拳というまた一職人である。フイルム、手巻きの時代にこれだけの作品を残す偉業に感嘆した。社会主義カメラマンを晩年自称したときくが、写真の持つ影響力と思想性を再確認する機会となった。

この対人援助学マガジンも現代の対人援助学領域の職人をうつし出す媒体でありたいと思っている。

編集員（オオタニ　タカシ）

対人援助学マガジン25号の発行から3ヵ月。私が所属する障害福祉に携わる職場は、多かれ少なかれ相模原市の事件の影響を受けた。私自身も色々と気持ちが揺れることが続いた日々だった。連載に登場する私の弟は、現在生活型の施設にいる。そのため、私自身や家族の心中について人から気遣われることもあったが、今のところ私も家族も目立った変化はない。私自身は、まだ色々もやっとしたものを感じながら、うまく語ることができないままでいる。

この件に限らず、日常の中に「排他」の空気を強く感じるようになってきた気がしている。そこから改めて考えると対人援助学マガジンには「排他」がないなぁと思う。テーマも切り口も用いる手段も様々で、全てがつながっていて、意味がある。そんな多様性、可能性を感じさせてもらえることが、どこかで気持ちの支えになっている。

先日、マガジンで「養育里親」について執筆しておられる坂口伊都さんが、私の職場が主催する研修会で講師を務めてくださった。自分自身は別の研修の現場担当者であったため直接お話は聞けなかったが、資料を読んだだけでも十分面白く、考えることも多かった。養育里親をされる方にも、色々な考えやスタンスを持った方がおられるのだと思うが、坂口さんの姿勢は「排他」とは真逆のものでした。

また、今号から、マガジン執筆者の竹中尚文さんと木村晃子さんによる書簡型連載がスタートします。これは私がマガジンの純粋な読者であった時代にこんなことができたら面白そうだなぁ・・・と思っていたことを、おふたりが時間をかけ、ゆっくりと温めながら形にしてくださいました。普段の執筆とはまた違う、「手紙」の中で交わされる言葉が、私にはとても近く、あたたかく、そして重みをもって感じられました。ぜひ、読んでみてください。

マガジンで執筆し、編集に関わる機会をもらい、そこから展開されていることが、自分にたくさんのことを与えてくれているように感じています。他の執筆者や、読者の皆さんは、どうでしょうか？

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻26号

第7巻　第二号

２０１６年９月１５日発行

http://humanservices.jp/

第27号は2016年12月15日
発刊の予定です。
原稿締切2016年11月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。多くの方達が連載 7 年目を迎えています）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

映画「道」を観たのがいつ頃のことであったか記憶にない。覚えているのは、主演女優のジュリエッタ・マシーナが監督フェデリコ・フェリーニの妻であること。アンソニー・クインの役名がザンパーノという無教養な男であること。彼は「その男ゾルバ」での名演や、「アラビアのロレンス」での存在感で忘れられない役者であること。

F・フェリーニの映画からは、いろいろなインスピレーションを貰った。「アマルコルド」のノスタルジックな映像から、イタリアの田舎町への関心が喚起された。監督の故郷リミニの沖合、アドリア海クルーズの大型客船が行くのを見上げる住民目線は、幼い頃の琵琶湖で観光船を見上げた記憶と重なる。

こんなにたくさんの記憶や連想ががそらで出てくる映画がある一方、最近観た映画のことは、時には、観たことすら記憶していない。映画の質が落ちたのか、私の記憶力が落ちたのか。言わずもがなか・・・

2016/09/25　団士郎